おまけのおまけ

晴野春人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
おまけのおまけ

【Ｎコード】
Ｎ６３８３Ｊ

【作者名】
晴野春人

【あらすじ】
彼氏いない暦を更新中の２３歳の高木（たかぎ）　明音（あきね）は親友の神武（かみたけ）　香奈（かな）恵（え）と共に異世界へと飛んでしまった。彼女たちを探しに来た青年の言葉によると探しているのは親友のかなだけ。んじゃ、なんだ？私はおまけか？！という、心境など無視してかなと騎士、半ば無理やり同行した私の旅が始まる。
※少々読みやすくなるように改稿中。内容は部分的に増やしたりも少ししてますが、本筋は変更してません。

第一話

女の子なら誰しも一度は夢見たことがあるはず。
白雪姫やシンデレラのように白馬に乗った王子様が自分を迎えに来る。
そんな、自分だけの王子様を夢見たことがきっとあるはず。
きっと、あるはず……。

といっても、そんな夢物語などに浸るような乙女な年齢などとっくにすぎ、そろそろ彼氏の一人もいないことに焦燥感が出てきた年頃。
私、高木　明音（たかぎ　あきね）は彼氏のいない暦を更新し続けている、情けないかな２３歳。
趣味は……最近は少しは増えてはきたけど、女子としては少数派のゲーム好き。楽しいんだから仕方ない。女子が好きな恋愛ゲームやパズルゲームはもちろん、シューティングゲームやＲＰＧやＳＬＧなどにも手を出し、果てには格闘ゲームにも手を出しちゃってたりする。
ゲームセンターなどに行って遊ぶこともしばしばある。
そんなところに行くんだ、男性との出会いも……ないわけではない。
が、どうも興味が持てず友達止まり。
いや、むしろ良き対戦相手（格闘ゲームやパズルゲームの）だったりする。
どうも、世間の女子とは趣味が違う。
別に悪いとは思ってはない。

自分は胸を張ってゲームが好きだと言えるし。
ゲームを通じて出来た色々な友達がいる。
恋人が……出来ていないのは縁がなかったからだと思いたい。
それに、ゲームセンターに遊びに行っていたことで、私にとって親友と呼べるような友達に出会うことができた。

私の親友。私がそう思っているだけなのかもしれないが、それでも私は彼女が私の一番の理解者だと思っている。
神武　香奈恵（かみたけ　かなえ）。
彼女との出会いはゲームセンターだった。ある男子の恋人（といっても付き合いだしてすぐだったらしいが）で、ゲームに興味はないけど彼氏に誘われたので連れられて来た。
その男子は友達で、初めて会う子の紹介をしてもらった。
全然趣味は合わないけれど、彼女といると何故か楽しかったし、心安らいだ。
彼女がその男子と不仲になり別れてしまった後も、私と彼女はとても良い友人関係だった。
今も、一緒に遊んだりしている。

彼女―かなとは高校二年生からの付き合いだった。
かなの家と私の家はそんなに遠くもない距離だったし、何度か泊まりに行ったりもしていた。
大学は志望が違うから別々にはなったけど、在学中もそれなりの頻度で会っていた。
私は大学を卒業後、なんとか就職の決まった調剤薬局で働いている。
かなは専門学校を卒業後、洋裁工場に勤めていた。
高校や大学生のときに比べると休みをあわせることが難しくはな

ったが、それでも月に一回くらいのペースで遊んでいる。

今日は土曜日。日曜休みなので、これからかなの家に泊まって明日は二人ではショッピングと予定を組んでいる。

かなは今日のために、レンタルショップからＤＶＤを借りてきているらしい。

かなは私と違って芸能人に興味がある。

若手の実力俳優の伊勢　武（いせ　たける）。かなが今一押しの芸能人である。そんなわけで、かなは伊勢君の出る映画のＤＶＤを借りてきた。

かなはその映画が上映されている時に観に行っていて、その後に会ったときのかなの話題は伊勢君の話題ばかりだった。

内容は伊勢君がある魔法の本を開いて異世界に行くといく物語。

そこで、伊勢君は勇者となり仲間とともに困難に立ち向かう様が描かれた映画。

昔の映画のリメイクだが、伊勢君の演技力もさることながら、ド迫力のＣＧなどを使って描かれたモンスター、今までになかった手法での撮影シーンなど、とても高い評価を受け何かの賞も受賞していた。

上映している間はそんなに興味がなく観に行くことはなかったが、かなの話やニュースで流れたりする話を聞いていたら、レンタルが出たら観たいなと思っていた。

それをかなに言ったら喜んで、借りて一緒に観るという話になった。

お泊り道具をバッグにいれ、手土産にお酒とおつまみを持参。

かなの携帯に電話をいれて、家を出る。

両親には泊まってくるとは伝えてある。

私には姉が一人と妹が一人いる。姉は去年結婚して近々子供を出産予定で、病院に通院するときはいつも母が車を出し、付き添っている。

家族とはどちらかといえば、仲がいいだろう。だから、外泊するときは事前に連絡をいれている。二十歳も過ぎちゃんと働いているが、そうしないと心配をかけるかもしれないし、習慣にもなっているから。

「それじゃ、行ってきます」

玄関を出る前に一言だけ言うと。

「かなちゃんによろしく言っておいてね～」

「たまには、こっちにも泊まりにおいでよと伝えておいてくれ」

中から妹と父親の声が返ってきた。

「伝えとくー」

そう言って、母と兼用している軽自動車に乗り込む。

車で15分くらいの位置にかなの実家がある。

かなの母親はかなが専門学生となった年に事故で亡くなった。

もちろん、かなは落ち込んだけれども、かな以上にかなの父親は落ち込んでいた。そのため、かなは父親を支えるのに必死だった。

母親が亡くなった後、父親がかなに対する心配のかけかたは異常なくらいだった。

かなの母親が亡くなる前までは、かなも私の家に泊まりに来たことも何度かあったが、亡くなってからは一度もない。

父親が許さなかったからだ。帰ってくるのが遅くなることも許さなかった。

最近では、仕事以外で遅くなることも許してもらえるようになったらしい。

それとは関係なしに、一応今から行くよって連絡はいると思うので電話をして出てきたわけですが。

明日はどんな服を買うかなとかあの店に行きたいなとか考えながら、かなの家まで運転をした。どこにでもあるような一軒家。かなの実家。

インターホンをならすと、しばらくしてかなが出てきた。

かなの作った夜ご飯を食べ、後片付けをし、かなの部屋へといく。

かなの部屋は落ち着きのある壁紙に、ベッドは白を基調とした薄っすらと花柄の描かれたベッドカバー。枕元にはちっこい犬のぬいぐるみ。棚には女性雑誌や少女漫画。机の卓上カレンダーは今一押しの伊勢君のカレンダー。

そして、借りてきたというＤＶＤ。

このＤＶＤのせいで明日が変わるなど夢にも思わなかった。

第一話（後書き）

初投稿。誤字脱字大歓迎です。
読みにくいところもあるかもしれませんが、お付き合いお願いします。

第二話

「ねえ、あきちゃん。そろそろ観ない？」
私とかなはご飯を食べて、かなの部屋に戻ってくつろいでいた。
「そうだね、んじゃ入れ替えるよ」
「お願い」
そう言って、私はかなの部屋にあるＤＶＤデッキから録画用のＤＶＤを取り出し、借りてきたＤＶＤを入れ替えた。

ＴＶの画面をＤＶＤに切り替え、再生をスタートする。

他の映画のＣＭが流れる。
ＣＭを見ながら、かながこの映画はどこが見所だとか教えてくれたりした。
そしてやっとＣＭが終わり本編再生が始まった。

このとき私は、かながお勧めする伊勢君の映画の展開に期待しているだけだった。
ありきたりな物語をどんな心躍る映画に撮ってあるのか、それが楽しみだった。
リメイクの元になった映画を昔、父と一緒に見た記憶がある。
楽しみなだけだった。
ただ、それだけだった。
それが、あんなことになるなど思わなかった。

本編が再生されている。

伊勢君が演じるのは現代の高校三年生。最後の部活動を終え、帰宅途中の道に知らない老人が苦しそうに蹲っているのを好青年が助けるという場面。

「伊勢君格好いいでしょー。ね！　あきちゃんもそう思わない？」

かなはお気に入りの犬のぬいぐるみをクッション代わりに抱きしめてはしゃいでいた。

「うん、まあ確かに格好いいかな。でも、かなはしゃぎすぎ」

「いいじゃない、映画館では静かに観たんだから。家で観る時くらい」

ちょっと拗ねたように言う、かな。

伊勢君が格好いいとかよりは、私はかなのが可愛いとか思ってたりした。

映画の場面は進み、伊勢君は助けた老人からお礼として「魔法の本」をもらっていた。

「ねえ、かなは伊勢君のどこらへんが好きなの？」

「全部！」

即答されてしまった。

「あれ？」

「おや……かな、こんな場面なの？」

二人して困惑してしまった。

伊勢君が老人から貰った「魔法の本」を開く場面になって、画面が真っ暗になったからだ。

「ううん。この後ね、本を開いて本に書かれてる文字を読む場面があるんだけど……」

かなはそう言うが、画面は以前真っ暗だった。

「ＴＶ……故障しちゃったのかな？　でも、音も聞こえないし……」

一年前に私の家にあったブラウン管のＴＶが壊れたとき、画面は真っ暗だけど音だけは流れてたから、私はそう疑問を口に出した。

もっとも、かなの部屋のＴＶは液晶だったけど。

「え？　あきちゃん聞こえないの？」

「うん？　ＴＶから何か音してるの？私には聞こえないけど…」

かなは、私とＴＶを見比べながら言った。

「うん……。『開いた』とか『見つけた』とか同じような言葉が繰り返して聞こえるんだけど……」

「音量……上げて……も、聞こえないよ？」

私はそう言いながら、ＴＶのリモコンで音量を上げた。

だんだんかなの顔色が悪くなっていく。

「あきちゃん……これって……呪いのビデオとかかな……？」

「そんなの存在しないって。早送りしても映らないようなら、明日レンタルショップに抗議しに行こうよ？　ね！」

「う、うん。そうだね」

ああ、よかった。

かなが少しでも笑ってくれて。

ってか、呪いとかありえないから。

そんな目に見えないものなど、信じないからね。

無宗教、無神論者だ、私は！

かなが少し笑ってくれたとほっとしたのもつかの間、いきなり聞こえてきた。
私の耳にもはっきりと。

『道は開かれた。神銀（しんぎん）の乙女よ。我が世界へ！』

「「　！！？　」」
二人して、画面を睨みつけるように見た。

真っ暗なＴＶ画面からいきなり、スポットライトのような強烈な光が放たれた。

瞼の裏にまで差し込んでくる光。
映画に使われる光とかにしては、あまりに眩しい。

すべてが真っ白に。
光に埋め尽くされる。

……ゃん……あきちゃん……あきちゃん！」
ああ、かなが呼んでる。起きないと。
「ぅ……んー……ねむぃ……」

「あきちゃん！　起きて！　お願い！　あきちゃん！！」

あまりに悲痛な、初めて聞くようなかなの呼び声に意識が覚醒する。

そして唖然とした。

「……！？」

見覚えなど一切ない。

こんな場所に来た記憶もない。

居たとしても、かなの部屋だ。

まかり間違えてもこんな、場所じゃない。

私とかなが居る場所は小高い丘の、漫画などに出てきそうな石で作られた祭壇の上だった。

かなの部屋なんかじゃない。

石造りの祭壇の上。

ああ、かながなんであんなに呼んでいたのかわかった。

そりゃ、あんな痛々しい声も出てしまうさ。

目が覚めたらこんな知らない場所じゃ。

日本っぽくない場所じゃ。

かなの部屋じゃない場所じゃ。

このとき私は周りの景色にばかり吃驚していた。

気がついてから、かなを見ていなかった。

だから、驚いた。

かなを見て、私は驚くしかなかった。

第二話（後書き）

二話目です。
勢いです。がんばっていきます。

第三話（前書き）

若干グロテスクな表現があります。ご注意下さい。

第三話

かな様子に私は驚いた。
大きな変化ではない。
でも、驚くような変化。

ぶっちゃけありえないでしょ？

かなも私も日本人だし、かなの両親も私の両親もまぎれもなく日本人だ。
そんなかなの目の色が変わっていた。

日本人にはありえない色に。
かながカラーコンタクトを買ったという話も、使っているという話も聞いていない。
何より、瞼の裏を指すほどの光が溢れ気絶する前のかなは、こげ茶の瞳だったし。

そのこげ茶の瞳が銀色に変化していた。

「か、かな……？　その目、どうしたの？」
「え？　何？　目が……何？」
「えっと、鏡、鏡は」

もちろん、周りを見回してもかなの部屋じゃないので鏡などない。
「でも……鏡になるようなものはなさそうだし……」
石造りの祭壇は雨風にさらされてるせいか、ところどころに苔や草が生えていて、鏡になるようなものは見当たらなかった。

見回していて、祭壇の周りにある茂みがふと目に入った。気のせいかもしれないが、その茂みが動いているような気がした。
「ねえ、かな」
「なに？　あきちゃん。鏡、見つかったの？」
動いたような気がする茂みに注意を払いながら、さっと回りも警戒してみる。素人の私が解るかは甚だ疑問だが、警戒しないよりはいいかと言う程度に。

ああ、べただけど、とても嫌な予感。
問題は、この後もべたな展開に期待するしかないのですが。
世の中そう、上手くいくといいんだけど、とか思ってみる。

「あそこ……何か……居そうじゃない？」
「え？」
そう言って、私が指差している茂みをかなが見る。

ガサッ

どうか、小さい子猫とかでありますように。

「な、何か……いるね……あきちゃん」
「うん……こ、子猫かな……？」
「だ、だったらいいよね……？」

ああ、神様。どうか、子猫をお願いします。
どうか、子猫でお願いします。
化物以外をお願いします。

ガササッ

「「　！！　」」

かなと身を寄せ合い、茂みから出てくるだろう何かに恐怖を抱く。
恐怖を抱きながら見ていた先から出てきたのは、子猫っぽい小さな可愛い生き物だった。

「ぇ……？　子猫？」
「うわ、可愛い～」
ちょっと猫よりかは耳が長く、兎ほど長くもない程度の耳。
あまり、猫に詳しくはないけど、こんな種類の猫はＴＶでも見たことがない気がする。

「あきちゃん、子猫、可愛いよー」
そう言いながら、かなは子猫を触りに行こうとしていた。

気づいてしまった。

それが子猫みたいでも、子猫ではないこと。

子猫から少し視線を上にあげた先。茂みの奥に先ほどまでいなかった、子猫を凶暴にしたような、大型犬くらいのサイズの生き物がそこに居た。

「かな！　駄目！！」
叫ぶと同時に、大型犬サイズの生き物が動いた気がした。

漫画や小説でゆっくりに見えるというのは、こういうことだろうか？

かなに襲いかかってくる大型犬サイズの生き物の動きが、スローモーションのように見える。

無我夢中で、私はかなの手を力の限り引っ張る。
かなは呆然として、よろける様に私に引っ張られるままに、後退りした。

神様、神様、神様。
助けてください。
私たちを、助けてください。
かなを、助けてください。
神様!!

何も考えられなかった。
ただ、引き寄せたかなを守るように腕に抱きこんだ。

スローモーションのように見える。
大型犬サイズの凶暴な生き物の、鋭利な牙。大きな顎。
それが私たちに向かって、開かれる。

恐いんだから、目を閉じればよかった。
そうすれば、見なくてすんだのに。

自分の腕に噛み付かれたところを。
見なくてすんだのに。
怖いのは嫌い。
痛いのは、もっと嫌い。

「いやあああああ！　あきちゃん!!」

かなの叫び声がした。
引いたら喰い千切られる。
私は反射的に、化け物に体当たりをかましていた。
化け物は予想外の反撃に、噛み付いた腕を離してしまった。

牙が外れると、勢い良く血が吹き出る。
ぼたぼたと零れる。
体当たりをしたときに崩れた体勢を立て直し、化け物を見ると。

化け物は首がなく、首があった場所からぼたぼたとどす黒い血を辺りに撒き散らしていた。

「なんとか間に合ったようだな」

そんな声が後ろから聞こえた気がする。
噛み付かれた腕からは、血がどくどく流れ出る。
徐々に私の腕の下に、血溜まりができ始めていた。

「あきちゃん！　あきちゃん！！」
かなは泣き声のような、叫び声をあげている。

でも、それすら耳に届かない。
あまりに痛いと、痛いと認識することすら困難なんだろう。
頭が真っ白で、何も考えられない。

後ろから声をかけてきた人物が近づいてくる。
でも、視界に入っても何もわからない。

「あきちゃんを！　あきちゃを助けて！！　助けてください！！」

かなが化け物を倒したであろう人物に向かって、泣き叫ぶ。
かなは、血をぼたぼた流す私に触れていいのか解らず、駆け寄っても手を出せずにいた。

直ぐ近くで、かなが泣いている。叫んでいるのに。
私は何も答えられない。考えられないでいる。

「これは……腕を。すぐに止血を」
化け物を倒したであろう人物は、男性のようだった。

助かったの……？
ああ、もう……大丈夫なんだ……？

そう思った瞬間、世界が暗転した。
地面が無くなったような、浮遊感。
暗転していく世界の中で、かなの声だけが響く。
かなの、悲痛な叫びが響く。

神様、神様、神様。
助けてくれてありがとう。
でも、もっと早く助けてください。

暗転した世界で私は、神様に抗議する夢を見ていた。

第三話（後書き）

ちょっとスプラッタ。
主人公が百合になりかけ。でもノーマルです。

第四話

「どう？　面白かったでしょ、あきちゃん。伊勢君すっごい格好良かったでしょ！」

そう言って、笑うかな。

かなの部屋にある折り畳み式のテーブルの上には、空っぽになったお酒の缶。おつまみも食べ終わって、開いた袋が三つほどある。

私はかなの部屋にある、大きめサイズのくまのぬいぐるみをクッション代わりに抱いている。

「うん。やっぱり、演技力すごいねー。格好良かったよね」

「でしょー」

かなはとても嬉しそうに、相槌をうつ。

明日は、かなと一緒に街に出て靴を買うんだ。

今履いている靴もだいぶくたびれてきたし、歩きやすい靴も欲しいし。

それから……。

薄っすら瞼をあけると、薄暗かった。

やわらかい橙色の光が、揺らめいている。

夜中に、起きちゃったのかな。

明日は早めに出る予定なのにな。

起き上がろうと体を動かした瞬間、右腕に激痛が走った。

「っ～～～～！！」
痛みに涙が浮かぶ。
なんで、痛いのんだろうか？
そう思い、記憶をたどってみる。
そして、思い至る。
化け物に噛まれたのだと。

「夢落ちじゃないのか……」
痛みを我慢しながら、指先を動かしてみる。
動くようだし、まあ、しばらく支障があるけど治ると思いたい。

「そういえば、かなは？」
右腕に負担をかけないように、左腕の力だけで起き上がる。

起き上がって、自分が居るところが何処なのかを考える。

私はどうも医療関係のような部屋に居るようだ。
ベッドも壁紙も、清潔感あふれる白みたいだ。
外は夜なのか、部屋は暗く少し離れたところにある、机の上の燭台の蝋燭の炎が揺れている。
ベッドを見たとき、ちょうど私の手があった場所にかなが寝ていた。
椅子に座り、ベッドにもたれかかるようにして寝ていた。

ああ、心配をかけたんだ。
そりゃそうか。
……心配かけてるのに、なんだか嬉しいぞ、こら。

なんて不謹慎なことを思いながら、もう一度考える。
化け物に噛まれた後のことが、思い出せない。

「どうやって助かったんだろ？」
独り言は勝手に零れた。
「それは私たちが助けたからだよ」
部屋の窓のほうから、人の声が聞こえた。声からすれば男性のようだった。

ってか、居るなら起きたとき言え！　独り言って聞かれると恥ずかしいのに！　と、心の中で悪態をついてみる。

窓の外は夜。半月が見える。
でも、半月にしてはえらく明るい気がする……？
男性は窓際の机の上にあった燭台を片手に、こちらへと近づいてきた。

「指は動くかい？」
「ええ、まあ、一応動きます」
「そうか。腕が喰いちぎられなくて良かったね」
「……あははは、そうですね」
男性はなんでもないように、言ってくる。私は愛想笑いで答えてみた。
そんな、恐ろしいこと想像もしたくないし。

彼は私が寝ていたベッドの近くにある机の上に、燭台を置いた。
「失礼するよ」
そう言って男性は立ったまま私の手を、というか手首を取り、脈

を計る。
「脈も落ち着いてるみたいだし、もう大丈夫みたいだね」
「あ、はい。……あの、かなは大丈夫なんでしょうか？」
何も聞かないより、何か知ってそうな人に聞く。当たり前のこと。

「もちろん、彼女は無事だよ。泣き疲れて寝ているだけだね」
蝋燭に照らされた男性の顔は、目鼻立ちが凄く整っている美人さんでした。
シャンプーのＣＭに出れそうなほど、さらさらの綺麗な金髪。日本人だと染めないといけないのに。暗がりに見える、美人さんの髪は染めたような気がしない。
暗いから、はっきりとしたことはわからないが、男性の目の色が銀色のように見えた。

うむ、べだすぎるが眼福です。

「あの、良かったら全部説明して欲しいんですけど、構いませんか？」
この質問に、男性は少し驚いたようだった。
驚いたのは一瞬で、すぐ穏やかそうな笑顔になった。
きっと、この笑顔で何人もの女性を虜にしてそうだなーとか、私は頭の隅で思ったり。
「構わないよ」

「ああ、その前に」
私は再度部屋を見回す。確か、横にもう二組ほどベッドがあったはずだし。
「かなをベッドに運んで頂けますか？　このままだと、明日きついだろうから」
「これはこれは、失礼を」

そう言うと男性はかなを軽々と抱え、隣のベッドに寝かせてくれた。
きちんと毛布もかけてくれていた。どこか手馴れてる気がしないでもない。
かなの頬には、うっすらと泣いた痕が残っていた。
なんだか、すごく申し訳ない気持ちになると同時に、嬉しさもこみあげてきた。

「ありがとうございます」
「どういたしまして」
そう言うと男性は、先ほどまでかなが座っていた椅子に腰掛ける。

「そうだね。まずは自己紹介から。私はリディル・リグルド・エステリカ、宜しく」
女性を虜にしそうな笑顔で、椅子に座ったまま彼は自己紹介をした。
「私は、高木　明音です、宜しくお願いします」
なんとなく、日本人の性なのか、自己紹介をするとき私は軽く会釈をした。
「カナエ様から聞いていた名前と同じだね」
自己紹介をして貰っておいてですが、覚えにくい名前ってのが感想だった。

「えっと……」
はい、一回であの長ったらしい名前を覚えきれませんでした。
「リディルでいいよ」
「リディルさん。カナエ様って……かなのことですか？」
満面の笑顔でリディルは答える。呼び方に迷っていると勘違いしてくれた。
ああ、助かった。

リディルさんは凄い美人さんだし、物腰も柔らかだから確実に人気がある人なんだろうなとか思った。いや、絶対そうだ。きっと、モテモテだ。

「そうだよ。カミタケ・カナエ様。そうだね。まずはそこのあたりからの説明がいいかな」

「そうですね。あの時、えっと……リディルさん……たち？　が助けてくれたんですよね。ありがとうございます。……でも、何故あそこまでタイミングよく、あの場に居合わせたのか教えてください」

いや、あまりにも都合良すぎて、気になります。

でも、何度も人の名前を間違えそうになって、ごめんなさい。

怒らないでください。

美人さんが怒ると恐いって、聞きます。

滅多に怒らないかなも、怒ると凄い怖いし……。

「私たちはカナエ様、『神銀（しんぎん）の乙女』を迎えにあの場所に向かっていたんですよ。間に合ったようで、本当によかった」

ああ、嫌な単語を聞いた。

光が、ＴＶから強烈な光があふれる前に聞こえた単語。

『神銀（しんぎん）の乙女』

かなが『神銀（しんぎん）の乙女』

だから、助かった。
だから、今ここに居る。
だから、かなの部屋に居ない。
夢ならどうか醒めてください。

ああ、でも右腕がこれだけ痛むんだ。
現実なんだ。
認めたくない、現実なんだ。

うあああ。現実逃避したい！！

第四話（後書き）

主人公が大分こわれ・・・こんな素っ頓狂な性格です。嫌わないでやってください。ぼけ突っ込み、乗り突っ込みするだけです！

第五話

現実逃避がしたい。
現実逃避がしたいけど、状況把握もしたい。
なんとも、矛盾している。

「それで、その……『神銀の乙女』ってなんですか？」
「ああ、カナエ様も同じことを聞いてきたね。『神銀の乙女』はこの世界を救った女神の御使いとされているんだ」

なんて、ゲームにありがちな話だ。
世界を救うために呼びましたーって落ちなら、こう言おう。
（娘っ子、一人に頼らなければ救えない世界なら、滅んでしまえーーー！！）
と、口が裂けても本音は暴露できません。
命は惜しいのです。

「それで、この世界って？」
「今、私たちが居るこの世界ですよ。名前なんてないですけど、この世界は女神が作りました。女神イシュタリア様がこの世界を作り、育み、慈しみ、支え、そして救ってくださるのですよ」
リディルの口調は何処か、尊敬通り越して神聖視してるような……。って女神様の事なのだから、神聖視をしている、で合ってるんだよ。

「救う……ですか……。えらく、はっきりと言うんですね」
たぶん自分は今きっと、すごく怪訝な表情をしていることだろう。
だって、信じられない。
神様も、女神様も存在してるとは思ってないから。

会ったことも、見たこともないものを、どう信じろと？

リディルはそんなの当たり前のように、満面の笑顔で続ける。

「もちろんです。女神イシュタリア様はこの世界を守り、導いてくださいますからね」

「……この世界には、女神が実在するのですか？」

思ったままを疑問として聞いてみた。

そうすると、リディルはきょとんとした表情になった。

変なこと聞いたかな？

「あなた方の世界では、実在しないのですか？」

「してない……と思う。神様とか女神様とかの話は、宗教や神話、御伽噺の中にしか出てこないもの。実在するって証拠がないの。もっとも、実在しないって証拠もないけど……」

私の話を聞いてリディルは少しして、笑顔で言った。

「この世界には実在しますよ。稀にではありますが、女神が大衆の前に姿を現すことも、聞き及んでおりますし。そして、『神銀の乙女』はその女神の御使いなんですよ」

「なんですよって、笑顔で言われても……第一、かながその『神銀の乙女』って確証はどこにあるんですか？　それに、もしも仮にかなが『神銀の乙女』なら、なんであんな危ない目にあわないといけなかったんですか？　女神の力でかなを助けることはできなかったんですか？」

食ってかかる私に、リディルは少し困ったような表情になった。

「それを言われると痛いんですけどね。女神にも何かお考えがあるんですよ。それと、カナエ様が『神銀の乙女』という確証ならございますよ」

一度リディルは言葉を切り、私をじっと見て言った。

「カナエ様は銀の瞳をお持ちですから」

ああ、そういえば、化け物騒動で忘れてたけど、かなの瞳の色が違っていたな。こげ茶色だったのに、気がついたら銀色になってた。

でも、どうしてかなの瞳の色変わってたんだろうか。

「どうして、それが確証になるんですか？」

未だ納得のいかない私は、さらに疑問をぶつける。

リディルの顔から笑顔がなくなり、真剣な表情だけになる。

少し、背筋に寒気が走った気がしないでもない。寒いのかな？

と思いたい。

「女神イシュタリア様は銀の瞳に銀の髪。女神に愛されたものは、生まれたときにその色を頂きます。女性も男性も髪の色が寵愛の印とされております。だが、瞳の色は違う」

そういうと、リディルは自分の目を指しながら言った。

「男性の場合、銀の瞳を授かったものは女神と、いつか現れる『神銀の乙女』に剣を捧げる。女性の場合、銀の瞳を持つものは女神の御使いである『神銀の乙女』だけなのです」

そう言ったリディルの瞳は、きっと銀色なんだろう。

部屋は暗く確認はできなかったが、そう直感した。

沈黙が流れる。

私はリディルの言った言葉を、意味を理解しようとする。

あまり、おつむの出来が良くないけれども、たぶんこういうことだろう。

銀の髪の色は女神の寵愛。

銀の瞳は女神の御使い。

うん、たぶんこんな感じ。
でも、何故かななんだろうか？
そこが理解できない。

「あの」
「明日、『神銀の乙女』の役割などをカナエ様を交えて話そうね。今日はもうお休み。まだ、疲れているはずだよ」
リディルは質問をさせないように、口を挟んできた。笑顔の気がするが、どことなく背筋が寒い。
「知らない人が居ると、眠りにくいだろ？　でも、護衛しないといけないからね。悪いけど、部屋に居させてもらうよ」
そう言って、リディルは立ち上がって窓際の椅子に移動した。

これ以上は何も答える気はないと、リディルの雰囲気がいっていた。
まあ、一度にたくさんのことを理解しようとしても、おつむの弱い私には難しいだろうし。
リディルの言う通り、体が怠く疲れているとは思うので、大人しく寝ることにする。

大雑把だけど、今現在の状況は理解したつもりではいる。
この世界には女神が実在する。
女神の持つ、銀の色を持っているという選民意識が、リディルの様子からもきっとあると思う。
そして、女神の御使いである『神銀の乙女』が、かな。
リディル……たち。「私たちが助けた」と言っていたから複数人。
リディルとリディルの仲間の人のおかげで、私とかなは助かった。
助けたことには、意味がある。
『神銀の乙女』は何らかの役割があって、この世界に呼ばれたは

ずだから。
そして、その役割は明日かなと一緒に話を聞くと。

ところで、かなが『神銀の乙女』として呼ばれたのはわかったけど、私は？その場に居合わせただけで、一緒にきちゃったとかいう落ちだったらどうしよう……。
何かあるのも嫌だけど、何もないのも嫌だな。
我侭だな、自分。

足りない脳みそで、色々考えているうちに私はいつの間にか眠っていた。

神様。
神様、神様。
実在するなら、悪態ついてすみませんでした。
ですから、どうか。
私とかなを元の世界に戻してください。
どうか、元の世界に戻してください。

第五話（後書き）

主人公と色男の二人のシーンですが、まったく色っぽい関係にありません。むしろ、殺伐。
主人公がヒーローで、かなちゃんがヒロインになりそうな勢いです。

第六話

部屋は明るく窓から日が差し込み、光の強さが人が動き出す時間を教えていた。

バンッ！

勢い良く開いた扉の音は、夢の世界で遊んでいた私を現実の世界に突き落としてくれた。

「ぅあ？　……？　……ここどこ？」

あれ、さっきまでゲームセンター居て、ファーストフード食べに行こうかーって話をしてたんじゃ……？

「あきちゃん！」

「……かな？」

先に起きていたかなが、私が起きたことに気付き近寄ってくる。

心配そうに覗き込んでくる、かな。

「あきちゃん、大丈夫？」

「かな、おはよー。……ここ……どこだっけ？」

学校の保健室……にしては、大きいし。それ以前にもう学生じゃないし。

起き上がってきょろきょろと周りを見回す私。その様子を見て、かなは安堵した表情になった。

「おはよう、あきちゃん。大丈夫そうで、ホント良かった」

「大丈夫……？　大丈夫って私が……？？　……ぁ！」

ああ、やっと思い出した。

私とかなは異世界？　に来ちゃったんだ！？
そして、着いた早々凶暴な化け物に襲われ、かなを庇って右腕を負傷したんだった。

「あ～～うん。まあ、たぶん大丈夫。利き腕なのがつらいけど、かなが無事でよかったよ」
昨日よりかは、右腕痛まないし。起きるとき痛くなかったから、すっかり忘れてた。

「あきちゃん！　私があきちゃんの右腕になる！」
うん、かなはかなだ。
何事にも精一杯で、こっちまで頑張らないとって思うわ。
「そりゃまた無理な。でも、ありがと。難しいときは頼ませてね」
「任せてよ！」

かなの笑顔につられて笑う。
ああ、平穏っていいな。平穏だといいな！

「おはようございます。カナエ様。アキネさん。昨晩は良く眠れましたか？」
「おはようございます」
「おはようございます、リディルさん」
はい、名前を忘れてたのは秘密です。かなはえらいね、ちゃんと名前覚えてるよ。
リディルは丁寧にお辞儀をして、笑顔を振りまいた。
昨日の暗い部屋の中で見たときより、明るい部屋で見たときのほうが、リディルはとても美人さんに見えました。今日も眼福であります。
昨日は暗くてはっきりとはわからなかったが、やはりリディルの瞳の色はかなと同じ銀色だった。

「リディル！　『神銀の乙女』が来たって聞いたぞ！」
扉を勢い良く開けたであろう人物が、そう叫んだ。
あの人が、私の安眠を妨害した人か。
返せ、私の照り焼きバーガーを！（まだ、頼む前だったけど）
「カナエ様の御前ですよ。カナエ様、五月蝿くして申し訳ありません。彼は、一応この国の王子です」
リディルは扉を開けた人物に向かって叱り付け、かなのほうを向いて笑顔で教えた。
かなも私も、扉を開けた人物を見る。

彼は年のころ十代後半といったところ。
背丈は私より１０ｃｍくらい高い程度。リディルよりかは背が低い。
顔のつくりは、どちらかというと中華系に近いんじゃないんだろうか。
高校に三人か四人くらいいそうな程度の美形くん。
髪の色は奇天烈な、深い緑色。目の色も、髪の色と同じ深緑。
なんてファンタジーな色合いの人だ。天然物だからなのか、違和感がないのがすごい。

そういえば、リディルはヨーロッパ系にいそうな顔のつくりだけど、このファンタジーな世界は人種とかあるのだろうか？

「ああ、これは失礼した。『神銀の乙女』は……こちらの方か」
そう言って、彼はかなのほうへと向き直り、お辞儀をして言った。
「私は、スニクス国の王子、エルサレム・レン・クルースと申します。エルとお呼び下さい」

爽やかに微笑んだエルは、すごく幼く見えた。
「あ、はい。ご丁寧にありがとうございます。私は、神武　香奈恵です。こっちは、親友の高木　明音ちゃんです。宜しくお願いします」
そう言って、かなは私を紹介した後、お辞儀をした。
あ！　かなも私のこと「親友」って……。
すっごい、嬉しいんだけど！

ご丁寧に、かなに紹介されました。
親友です。ふふふ、羨ましいだろう。って、誰に向かって思ってるんだか。
「あ、高木　明音です。宜しくお願いします」
まだ、ベッドの上だったので深々とはできないので、会釈程度。

「親友……ですか。宜しくお願いします」
エルは意外そうな顔で、私を見る。
ええい、悪かったな。平々凡々な一般庶民的な顔で！
かなは私と違って、どちらかと言えば可愛い系の美少女の部類に入るだろうし。高校のときは男友達から、かなを紹介してくれと言われたこともある。

エルは私を少し見た後、視線を少し下へと下げた。
「腕は……？」
「名誉の負傷ですよ」
即座に横から答えが飛んできた。リディルが答えました。
ってか、名誉ってなんだ？名誉って！

エルは不思議そうな表情をした。そりゃそうだ。
あれだけで、判るわけないでしょ！

「あの、私を庇って……あきちゃんが……」
「かなのせいじゃないよ！私が勝手にした。ってか勝手に動いちゃったんだから。かなが悪いわけじゃないから、気にしないの。いい？」
かなは昨日のことを思い出し、痛々しいような泣きそうな表情に変わった。
私が必死に弁明していると、かなは少しだけ笑ってくれた。
その様子を見ていたエルは、一人納得したようだった。

コンコンッ

開けっ放しにされたドアを、律儀にノックする人がいた。
ドアをノックしたのは二人の男性だった。
「お話中のところを失礼致します。『神銀の乙女』カナエ様。王が謁見を申し入れております。つきましては、朝食を済ませた後、王との謁見をして頂きたいのですが。宜しいでしょうか？」
ドアをノックした男性は、片膝を床につけ騎士のように頭を垂れた後、顔を上げ一気に言った。

「クラウ。せめて、自己紹介してからにしなさい」
リディルはため息をつき、片膝をついた男性に向かって言った。
「申し遅れました。私はクラウ・ソラス・アガートと申します。クラウと呼び捨てになさってください」
ドアをノックした男性はクラウと名乗った。その後ろにいた男性も名乗りを上げた。
「フーガ・レギン・ラグムート。フーガと」
口数少ないな後ろの男性。

クラウは私たちと同じ日系にいそうな顔のつくりで、どちらかというと年下だけど格好良いねって感じの美男子さん。

年のころは二十歳くらいだろうか？
髪の色は、これまたファンタジーな色合いかと思いきや、茶色でした。それでも、瞳の色はリディルやかなと同じ銀色。
だけど、なんかどこかで見たことあるような感じだ。どこだっけか？

フーガはこの場に居る誰よりも背が高かった。
背丈の順だと、かな＜私＜エル＜クラウ＜リディル＜フーガっぽい。この中に猫背が居る場合、実際の身長よりも低く見えるから、まあ見た感じの背丈順。
フーガは褐色の肌に、ファンタジーな色合いのなんと青色の髪！
アジア系の顔のつくりは、渋いけど格好いい感じ。彼もどちらかと言えば美形ですね。
そして、瞳の色は銀色。

昨日、リディルに聞いた話を思い出す。
男性の場合、銀の瞳を持つものは女神と『神銀の乙女』に剣を捧げると。
剣を捧げるってことは、騎士なんだろう。
ということはだ、リディル、クラウ、フーガのこの三人は女神とかなの騎士ってことか。

しかしだ。
なんとも居づらい。
美男美少女の中に、平々凡々な一般庶民な顔のつくりの私じゃ。
ですが、まあ眼福です。

「さて、王が謁見を申し入れてるわけですが。カナエ様。クラウの申した通り、朝食をとることにいたしませんか？　お腹もすいてきているでしょう？　ですが、その前にしていただきたいことがある

のですが、宜しいですよね？」

そう言って、リディルはにっこりと微笑んだ。

若干、笑顔が怖く感じます。断ることなんて許しませんよって感じだ。

こいつ、地味に腹黒なんじゃとか思ってません。

まあ、別に今拒否する理由などないから問題なんてないのですけどね。

でも、まあ。お腹すきました。

第六話（後書き）

騎士が3人出ました。王子まで出ました。イケメンばっかりです。腹黒い人が一人居るだけで、物語って動かしやすいです。お付き合い願います。

普通に間違えてた不等号。ご指摘ありがとうございます！

第七話

リディルの言った朝食の前にしてほしいことは、着替えだった。

確かに、王に謁見するにあたって、この格好で会うのは良くないだろう。

かなはかなの部屋に居たときの格好で、部屋着のままだし。私は怪我をしていたためか、かなの部屋に居たときの安っぽい私服から、病人服に着替えさせられている。

この際、誰が着替えさせたかとか考えないでおく。

それが、精神安定のためだ。まあ、多分女性の看護師さんあたりとは思うけど。

リディルは部屋に備え付けてあった呼び鈴を鳴らす。

しばらくすると、四十台くらいの少しふくよかそうな体型のメイドさんが部屋に来た。

健康そうに焼けた小麦色の肌に、堀の深そうな顔の作り。ゲームや漫画などにしか出てこないような、空を連想させるような淡い青い髪に青い瞳。

なんだか、優しそうなおばちゃんです。

「彼女に色々聞くといいよ。彼女はサティ・ラシーヌ」

そう言って、リディルは呼び鈴で呼んだメイドを紹介した。

紹介されたメイドは、まるでマニュアルビデオにでも出てきそうな、とても綺麗なお辞儀をしてくれました。

「サティ・ラシーヌと申します。サティとお呼び付けください。困ったことがあったら、何でも聞いてください！」

サティは人懐っこい、柔らかい微笑をくれました。

なんだか癒されます。お母さんな雰囲気の人です。

「神武　香奈恵です。宜しくお願いします」
「高木　明音です。お願いします」
「こちらこそ、宜しくお願い致します」
こちらも、自己紹介をする。サティはすごく嬉しそうな笑顔で応えてくれました。

「まあ、まずはお着替えですね。カナエ様、アキネ様。申し訳ありませんが、部屋を移動いたします。私についてきてください。ここは広いので迷ったら大変ですので、気をつけてください！」
サティは私の右腕の様子を察したのか、私の様子を確認しながら聞いてきた。
「あ、たぶん歩くのに問題はないと思います。かなも一緒ですし、大丈夫です」
そう言うと、サティはにっこりと微笑んで、残った男性陣に挨拶をして部屋の外へと出た。

「あの、それじゃ、失礼します」
かなはそう言って、部屋に残った男性陣に挨拶をした。
私もならって、会釈をしてかなとサティの後を追った。

かなと私が案内されたのは、一つの部屋だった。
これがまた、唖然とするような部屋でした。
余裕で三十畳くらいあるんじゃないだろうかという、大きな部屋。
そこにずらっと並んでいる服、服、服。ついでにアクセサリーなどの小物の棚も。
どこの洋服店ですか？

並んでいる服、そのほとんどはコルセットとかをつけたりしそうな、お高そうなドレスが主でした。
「す、すごいですね……」
「ホント、すごいわ……」
私もかなも、呆然と部屋を見渡すしかできずにいた。
だが、そこはメイドさん。流石です。
サティは私やかなに似合いそうなドレスをチョイスして、持ってきてくれました。

続きの部屋にある、更衣室みたいな部屋（こっちは十畳くらい）で着付けてもらいました。
「そういえば、かな」
着付けをしてもらっている最中の、かなに話しかける。
「何？　あきちゃん」
私はというと、思ったよりも簡単な構造だったので、サティに助言を貰いながらなんとか一人で着ることができた。
だが、かなのは色々細かい部分も多いため、どうしてもサティに着付けをしてもらわなければならなかった。
「あのさ、あの茶髪の子……誰かに似てない？　かな、わかる？」

そう聞くと、かなの頬は少しだけ朱に染まった。
「ああ、クラウさん？　なんだか、伊勢君に似てない？　ね、あきちゃんもそう思わない！」
ああ、どうりで誰かに似てる気がしたんだ。
しかし、かなえらいね。茶髪の子ークラウの名前も覚えてるんだね。
「伊勢君に似てるのか。誰かに似てると思ったら……」
「でしょ～。似てるのー」
かなは、なんだかすごく楽しそうです。

「さて、これで終わりですよ。着心地はいかがでしょうか？」
着付けを終えて、サティがにこやかな笑顔で聞いてくる。
「着るの大変でしたけど、思っていたよりも動きやすいです。ありがとうございます」
「かな～！　すっごく可愛いよー！」
サティが選んできたドレスは、かなの雰囲気にぴったりな、白い布地に淡いピンクのグラデーション。袖は先の方がひらひらしていて、確かあれは姫袖とかいうやつだったかな？
ドレスのスカート部分はふんわりして、丈は膝くらいまでだった。確か、ドレスの下に薄手のスカートのようなのを履いてたような？
ドレスには所々に綺麗な花の模様。控えめながらも存在感をあらわす、美しい模様のレース。
そして、いかにサティが凄いか、ここに現れている。

かなは着痩せするタイプである。
脱ぐともろわかりですが、かなはお胸がでっかいのです。羨ましい。
時折、自分のサイズにあう可愛いブラが無いって嘆いているくらいだ。
平均サイズの胸の私には、嬉しそうな愚痴にしか聞こえなかったとか言えません。羨ましい。

サティの選んできたかなのドレスは、着痩せするかなの胸元をはっきりと強調するように、それでいて上品さを損なわない程度に開いてました。
開いた胸元に、一輪の大きめの花を飾っていて、可愛いなかにセクシーさが！
サティさん、ぐっじょぶすぎます。

「ありがとう。でも、これ。胸のところ開きすぎじゃない？　可笑

しくない？」
「全然！　セクシーよ、かな」
「カナエ様、大変良くお似合いでございます！」
大きく開いた胸元に恥ずかしいのか、かなは頬を赤らめた。
「可愛いんよ、かな！　もし、私が男ならすぐにお付き合いを申し入れるよ！」
「あきちゃんだって、すっごく可愛いよ！」
「アキネ様も良くお似合いです」
「あ、ありがとうございます」

お世辞だろうと、やはり嬉しいものです。
サティのチョイスはなんというか、良く私の性格をわかっていらっしゃる。
露出の低く、尚且つ体のラインのわかりにくいふんわりしたドレスです。色も落ち着いた白を貴重とした青だし。派手じゃなく清楚な感じです。
まあ、この際私のことはおいといて。

「でも、ドレスで食事だと、こぼしちゃわないか不安になります。こんな、高価なドレス汚したら……」
「もし、お汚しになりましたら、またお着替えになります。ちゃんと、ナプキンがございますから、大丈夫ですよ」
サティがにこにこと答える。それに反して、かなは困った表情になる。
「でも、私、テーブルマナーとか知らないんです。あきちゃんは知ってる？」
「知るわけないよ。そんなところに食べに行ったことはないし……」
私とかなの会話を聞いていたサティは、こんな提案をしてくれました。

「カナエ様、アキネ様。テーブルマナーを問われるような豪華絢爛なお食事より、気軽に食べられる街中の食堂のようなお食事。どちらが、お好みでしょうか？」

サティはにっこりと微笑みながら、好みの食事を用意してくれると申してでくれた。

私とかなは顔を見合わせ、気軽に食べられる食事を頼むことにした。

どうか、出される食事に変なものなど出てきませんように……。

第七話（後書き）

主人公は自分の容姿をあまり好きではない様子。かなのが可愛いとわりきってます。いつのまにかサティは有能になってしまいました。いや、メイドだからイイんだ。きっと！

男性陣は着替えの話なので、撤収していただいてます。

第八話

街中で食べるような簡素な食事を頼むと、サティは少しここ（衣装部屋）で待っていてほしいと言って、部屋を後にした。サティは暇ならば部屋の中を見て回っていて下さいと、部屋の外へは出ないでくださいと言い残して、行った。

五分位した後、サティは戻ってきた。

サティに言われるままに、衣装部屋を見回って時間を潰していたため、そんなに暇に感じなかった。

律儀にノックをして、部屋に入ってきたサティが笑顔で言った。

「お待たせ致しました、カナエ様、アキネ様。こちらでございます」

サティに案内され、食事をする場所へと移動する。

さっき衣装部屋に来るときも思ったが、えらく無駄に広い建物だ。

これが、お城というものなのか！？

西洋風のお城のようで、まるで映画の中に迷い込んだような感じだった。

似たりよったりな風景の通路を何度か曲がった後、離れの建物に通じる渡り廊下のような場所に出た。

入り組んだ通路は侵入者除けという話を聞いたことがあるが、一人だと確実に迷うだろう。

逸れないように気をつけないと。

サティに離れの建物へと歩いて行ったので、私とかなはその後を追った。

案内された場所は、離れの建物の中にある共同食堂みたいな場所を通り抜けた、一つの小部屋だった。

「先ほどの食堂は、私たち城で働くものたち用の食堂です」

そう言いながらサティは部屋のドアを開ける。

「カナエ様にあの場所で、お食事をして頂くわけには参りませんので、こちらの部屋でのお食事となります。狭い部屋ですが、ご容赦下さい」

サティの言う通り、少し手狭な部屋だった。といっても、十畳くらいはありそうだったが。

置いてある調度品などは、どれも高価そうだった。きっとこの部屋は来客用なんだろう。

「カナエ様、アキネ様。すぐにお食事をお持ちいたしますので、おかけになってお待ちください」

そう言って、サティは部屋から出て行った。

部屋の中心にある、少し大きめのテーブルとセットの四脚の椅子。このテーブルと椅子で食事をするのだろう。そう思い、椅子に私とかなは対面で座ってサティを待つことにした。

窓には、青地に銀の刺繍の入ったカーテン。戸棚に飾られた、綺麗な花と花瓶。

花瓶も家具も調度品にはすべて、どこかに銀の刺繍や模様が細工されていた。

「ところで、かな」

「何？あきちゃん」

今、この部屋には私とかなしかいない。

さっきは、色々な衣装に少し興奮していたけれども、こうして考える時間ができると思ってしまう。

帰れるのだろうか？

そして、それをかなに聞く。
答えなんてわからないだろうけど、聞く。
「その、かなは……帰れると思う？」
「帰りたい。帰らないと……お父さん心配してるだろうし……」
そう言って俯いたかなを見て、私は少し後悔した。
それでも、止まらなかった。
「そう、だよね……。私も、帰りたい。でも、帰れるのかな？」
言っちゃいけない気がするけど、私はつい口に出してしまった。

かなを不安にさせるのはわかっていたけど、口に出てしまった。
私の不安。

よく、異世界に飛ばされてーとか小説や漫画、ゲームでもあるシチュエーション。
それを見てるたびに思ったこと。
『その世界を楽しめばいいのに』
現実に起きてわかる。
そんな余裕なんてない。
ただ、自分が自分の世界に戻れないことが、こんなにも不安に感じるとは思ってもみなかった。

少しも、楽しみじゃないわけでもない。
でも、それ以上に不安が勝る。
訳の解らない世界に対しての恐怖が勝る。

それでも、少しでも前向きでいられるのはかなが一緒だからと思う。

もし、これが一人で、言葉も通じなかったらと思うと……。
きっと、恐ろしくて、狂っちゃうんじゃないだろうか……？
怖くて、苦しくて、恐ろしくて……死んだほうがまし、とかいう思考になっちゃいそうだ。
私は、そんなに強い人じゃない。そう思うから。

だから、かなと……一緒で本当に良かった。

「きっと、大丈夫だよ。あきちゃん。だって、この世界には神様が存在するんだから。もしかしたら、頼んだら帰してくれるよ！　きっと！」
落ち込んでる私を勇気付けるように、自分自身に言い聞かせるかのようにかなは言った。
その肩は少し震えてるように見えた。
「……うん。そうだね。そうだね！　帰してくれるように頼まないとね！」
「そうだよ！　きっと大丈夫だよ！」

私もかなも顔を見合わせ、二人で笑いあう。
本当にかなと一緒でよかった。

コンコンッ

ノックと共に、ドアの向こうから声が聞こえてきた。
「入っても、いいかしら？」
女性の声。サティの声とは違う声。
「カナエ様、アキネ様。失礼します」
今度はサティの声。声がかけられて、一拍おいてドアが開かれた。

ドアを開いたのはサティで、その後ろに知らない女性が控えていた。
サティはドアを開けると、道を譲り女性が先に部屋へと入ってきた。

「……えっと……」
困惑している私の口から、言葉が滑った。
ちゃんとしゃべれよ、自分！

「こんにちは。カミタケ　カナエ様と、タカギ　アキネ様でよかったかしらね」
「あ、はい」
私たち二人を見比べながら、女性はそう言って微笑んだ。
「私はエリーディーン・フォン・クルースと申します。長いだろうからエリーで構わないわ」

にっこりと微笑む女性は、とても綺麗に見えました。
ぱっと見た感じでは、二十後半か三十前半くらいかな？
背丈はサティと同じか少し高感じ。髪の色は黒と見間違えるほど濃い緑色。瞳も髪と同じ黒に近いほどの濃い緑。相反するようにその肌の色は白く、雪のような肌ってこんな感じなんだろうかと思いたくなるくらい。肌理も細かそうだ、羨ましい。
十人中五人くらいは綺麗と言ってくれそうな、顔の造形。目鼻立ちの彫りの深さは、ＴＶなどで映る白人女性を思い出した。
堂々としていて、でもその仕草は優雅で、ぱっと見た目の顔の作り以上に、美しさを感じます。
なんて言えばいいのか……貴族的な美しさ？　（いや、貴族とか会ったことないけど）
きっと、これが上品な美しさとかいうものだろうか？

そういえば、ミドルネームなんだか聞き覚えがあるような、無いような？

「あ、の……クルースってことは……エル、エルサレム様の姉とか親戚か何かですか？」

はい、聞き覚えありました。

あの王子です。あの王子のミドルネームです。

この後、この女性の言葉に耳を疑い、目を疑った。

「私は、エルの母です」

そう言って微笑む目の前の女性は、二十代後半か三十代前半に見えるのに……。

高校生くらいの子を持つお母さんらしいです。

綺麗な人って得です。羨ましい。

「え！　ってことは……王妃様ですか！？」

「お、王妃様？！」

私とかなが驚いていると、さらに驚くこと言われました。

これこそ仰天。

「いいえ。私がスニクス国の王です」

そう言って、目の前の綺麗な女性は微笑みましたと。

王様と謁見って話だった気がするけど……。
こんなんでいいのか?!
しかも、女王様ですか!?
なんだか、想像していたのとかなり違って仰天もいいところです。

神様へ
日ごろの行いがあまり良いとも言えないから、こんな意地悪ばかりするのでしょうか?
できることなら虐めやめてください。虐めよくない。
と、ありがちなこと言います。

第八話（後書き）

あまり、物語が進んでない気がしないでもない。
更新速度も低下してます。頑張りますので、あたたかい目で見守ってやってください！

第九話

仰天です。
目の前の綺麗な、二十代後半から三十代前半の女性はお母さんで、女王様！

「王様……なんですか……？」
驚愕の表情のまま、かなはエリーと名乗った女性ー女王に聞いた。
「ええ。私がこの国の王です。あなた方に謁見を申し入れた王は、私です」
そう言って、男性ならきっところっと騙されそうな神々しい微笑みをくださいました。
サティが椅子を引き、女王は優雅な仕草で私とかなとの間の席に座った。

思考は仰天した状態から、少しずつ元に戻ってきたみたいなので、女王に質問してみた。
「あ、あの。失礼ですが、女王様がどうしてかなと私に謁見の申し入れを？　女王様なら謁見される側じゃないのですか？」
「あなた方はこの世界の者ではないでしょう？　だからですよ」
微笑みながら女王はそう答えた。これに、私とかなは顔を見合わせた。
かなも私と同じようで、その表情は疑問で溢れていた。
確かに、私とかなはこの世界の者ではないが、立場上は一般庶民のはずだし。そう考えると、やっぱり女王は謁見される側じゃないのかなと思ってしまう。

「あなた方の居た世界と、この世界は違います。王にはあなた方にこの世界の事を教えることが、義務として備わっています。それはこの国だけじゃなく、この世界の全ての国の王にです」
私もかなも女王の話を黙って聞いていた。
女王は一度、言葉を区切り微笑みながら言った。
「それと、この世界の王は今現在は全員女性だけです」

女王様だらけの世界ですか！？

「リディルから聞いてるとは思いますが、この世界は女神イシュタリア様が御創りになられました。ですから、女神と同じ女性が国の王になるのが習わしです。尤も、子供が男の子一人だけの場合は別ですけれど」
そう言って女王は微笑む。先ほどからずっとにこにこと。優しそうな方です。
そして、この世界の王は女王の言い方から察するに、世襲制の様子。
「あの、それじゃあ、この世界は女性が政治の中心なんですか？」
「もちろんです。男性も居ますけれど、女性の方が比率としては多いです。そう聞かれるということは、あなた方の世界は違うのですね」
かなの質問に答えた女王は、少し寂しそうに微笑んだ。

「この世界にお見えになられた『神銀の乙女』の事を綴った過去の文書によると、男尊女卑の世界からお見えになられた方々が多かったそうで……そうではないかと思いましたが。さぞ、お辛い事でしたでしょう？」
女王はそう言って、少しだけ目を細め、なんだか哀れむようなそんな感じの表情に見える。

でも、そんなのどうでもいい。
それよりも、大事な発言が聞こえた気がする。
「他にも、この世界に来た人がいるんですか？　今その人達は？」
女王の言った内容に、私は質問をする。
もし、他にも居るなら……。
「今までこの世界に来た全ての『神銀の乙女』は、その役目が終わると元の世界に戻られたそうです。今現在他の世界からお見えになられた『神銀の乙女』はカナエ様、あなた一人です。また、『神銀の乙女』以外でこの世界にお見えになられた人物はアキネ様、過去の事例は無くあなただけです」
「元の世界に戻った……。帰ったってことですか？　その方法を教えてください！」
私ってば、女王の話で自分が重要だと思う部分しか、聞いていない気がする。
でも、今は私たちの居た世界に帰る手段が知りたい。
役目を終えて元の世界に戻った、過去の『神銀の乙女』。
今はその戻るための手段が知りたい。

女王はこの部屋で会ってから微笑を絶やさなかったのに、今は真剣そのものの表情だった。
何故か、私は背筋が寒い気がした。……まあ、気のせいだろう。
真剣なままの表情の女王が、帰る手段を語った。
「過去の文書にある『神銀の乙女』は、元の世界に戻るのに女神のお力を借りたとあります。また、他の方法は無いと記されてありました」
ということは、私たちの居た世界に戻るためには、女神の力を借りるしかないということ。
……女神とかが居るとか、未だに信じられないのに。
でも、それしか方法が無いと女王は断言してるし……。

正面に座るかなを見ると、俯いていた。
かな、泣いてるの？
「それに、男尊女卑の世界より、この世界のほうが楽しいと思いますよ」
にっこりと気遣うように笑う女王。きっと、かなと私を励まそうとしてくれているんだとは思う。
思うんだけど、なんだか女王ってば変な誤解してない？
「でも、父を心配させてると思うと……。父にはもう、私しかいないんです」
かなは俯いたまま、震えるような声音で言った。
その言葉を聞いた女王は、酷く悲しそうな表情になった。

かなの気持ちは痛いほどわかる。
私にも家族はいるし、家族仲だって良い。
家族の誰かが何も連絡せずに家に帰ってこない日があれば、私だって心配する。
ましてや、かなの家族は母親は死去してるし、兄弟姉妹はいない一人っ子。肉親は父親一人。
かなの母親が事故で亡くなった後の、父親のかなへの心配の仕方は異常なくらいだった。
最近やっと落ち着いてきたのに。

時間の流れなどが、この世界と元の世界で同じなのかはわからないが、もし同じだと考えるならあれから一日二日くらいは経過しているはず。
なんの言伝もなく居なくなった、かなと私。
朝起きてくるはずだった、可愛い娘とその友人。

でも、起きてくるはずの可愛い娘とその友人は起きてくるはずもなく、部屋には誰も居ず、言伝すらもない。
それが一日二日と続いてると思うと……。
かなの父親は、今どんな状態なんだろう。
きっと、警察に捜索届けを出して、私の家族やご近所に聞き込んだりしてるんだろうな。
会社を休んで、駅前とかでビラ配り……は、まだ早いかな。
でも、帰れないで時間が経てば、ビラ配りもきっとし始めるだろう。

かなの父親だけじゃない。
私の家族だって同じようにするかもしれない。
私も妹や姉がいきなり失踪したら、同じようにすると思うし。
仕事だって、就職が困難な中なんとか就業できたのに。
無断欠席が続けば、すぐにリストラされるに決まっている。
今の職場、やっと色々勝手が解ってきて、出来る事が増えてきたのに。

やっぱりどう考えても、帰れなと困る。
出来るだけ早く、帰りたい。
むしろ、あの日から私たちの居た世界では、一分一秒足りとも進んでいて欲しくない！　ってのが本音。
今直ぐ帰れたとしても、この世界と私たちの居た世界とでは時間の流れが違うとかだったらと考えると……ちょっと、怖いし。
帰ったら浦島太郎な状態って……考えるだけで恐ろしい。
でも、帰りたい。

「それじゃあ……女神様に会うことはできますか？」

俯いたままのかなが、呟くように言った。
かなの小さな声は女王にも聞こえたようだ。
「今直ぐに……は難しいかもしれないけれど、女神にお会いすることは出来ます」
女王は穏やかな笑みを浮かべながら、教えてくれた。
それは希望につながる道。
でも、それは一歩間違えれば絶望へと落ちるかもしれない道。
「いつ……ですか？　いつなら会えますか？」
かなは必死な表情のまま聞く。
私も、かなと女王のやり取りを食い入るように聞く。

女王が教える、希望の日。

「明後日の聖帝（せいてい）の祭日」

かなと私を、この世界に呼んだと思われる女神に会える日。
それが、明後日。

第九話（後書き）

女王様～女王様～。王様なんていないぜー。最初はただの王様だったのに、いつの間にか女王に変更。そして、初老からぎりぎり三十路に若返り！

結構改稿しちゃいました。女王との会話が変だったので。

第十話

女神イシュタリアに会うことができる日が、聖帝の祭日。
その聖帝の祭日は、明後日になるらしい。

女王と小部屋で謁見の後、朝食を食べ、改めて王座での謁見となった。
謁見の場で、女王からこの世界の国の王として今後女神に会うまでの過ごし方を指示された。

聖帝の祭日までの間、私とかなはこの世界の常識などを身につけてもらうため、一日五時間の口頭授業を受けることになった。
なぜ、口頭かというと残念ながら文字は読めなかったからだ。
文字に関しては『女神の祝福』を受ければいいだけらしいので、この世界の一般常識を覚えなければいけなくなった。

この授業に関して、
「この世界に居続ける気はありませんから、必要ないです」
と反論すると、女王は
「居続けなくとも、女神に会うまで他人に迷惑をかけて生きていく気ですか？」
と、穏やかに諭されてしまいました。
そういわれると、受けざるを得ないわけで……。

午前中に三時間、午後に二時間。その後は自由時間。

といっても、かなと私の行動できる範囲も制限されているし。
何より、『神銀の騎士』（リディルやクラウ、フーガなど銀の瞳を持つ男性）が、かなを四六時中ずっと護衛する事とされた。
私に至っても、未だにこの世界に呼ばれた理由も、立場もわからないため、一応護衛の対象となった。もっとも、弄れた見方をすれば監視とも呼べそうだが。

日夜、護衛がいるという事は、どこに行くにも誰かと一緒というのは、絶対息が詰まる。
それが見ず知らずの、ましてや異世界の人間であればよけいに。
考えただけでも、疲れる。
さっさと元の世界に帰して。

玉座での女王との謁見が終わり、かなと二人少し呆けていたところにリディルが来訪した。

「こんにちは。どうでしたか、王との謁見は。疲れましたか？」
リディルはいつものように、にこやかな笑顔で聞いてくる。
玉座での謁見のとき、『神銀の騎士』たちとかな以外の『神銀の乙女』もその場に居合わせた。
あのときの謁見では、私と王であるエリーと王子のエル以外は皆、銀の瞳の人でした。
なんて居心地の悪いことでしたか。

「リディルさん……。こんにちは。そうですね。やっぱり、緊張してたんだと思います。疲れました」

かなからは疲労感と焦燥感が見て取れた。
「かな……大丈夫？」
私も多少なりとは疲労しているとは思う。それでも、かなよりはましかもしれない。
私とかなの様子をみて、リディルは困ったような表情になった。
「どうしようかな……。昨日言った、『神銀の乙女』について説明しに来たんだけれども。それよりも、どこかに気分転換でもしに行くほうが良さそうだね。どうだい、行ってみないかい？」
リディルは伺うように首を傾げながら、聞いてきた。
首を傾げた時、リディルの肩くらいまである綺麗な金髪が、さらさらと零れ落ちる。どこのＣＭのワンシーンですか。
眼福ですけど、でも今はそんな心境でもないし……。
「かな、行ってみない？　もしかしたら、少しは気が晴れると思うし」
「あきちゃん……。うん、そうだね。リディルさん、お願いします」
たぶん、落ち込んだままだと前向きに考えられないし。

かなにはいつも笑っていて欲しいと思う、私の我侭。
こんな状況で、酷い我侭だとは思う。
それでも、いつも前向きなかなには笑顔で居て欲しい。
かなの笑顔にどれだけ私が救われたことか。どれだけ、前向きになれたことか。
だから、我侭だとは思うけれども、かなには笑っていてほしい。

「それでは、私のとっておきの場所に案内しますね」
にっこりと微笑むリディル。
「お二人は馬には乗れますか？」
私は無い、ので首を横に振る。

かなもあったとしても、動物園などの乗馬体験とかくらいだろう。
かなから、乗馬が趣味だとか聞いたこともないし。
かなも横に首を振っていたので、それもないらしい。
二人が首を振ったのを確認すると、リディルは呼び鈴を鳴らしサティを呼んだ。

呼び鈴がなってすぐに、サティはノックをして部屋に入ってきた。
「馬にはその格好じゃ、乗りにくいからね。サティお二人にお着替えを」
「畏まりました。カナエ様、アキネ様、お着替えに参りましょう」
気のせいだとは思うが、サティが何故かとても嬉しそうだ。
「着替えが終わったら、南の厩に案内してね。それまでにこちらも準備を終わらせておくから。それじゃ、後でね。楽しみにしてるよ」
そう言って笑いながら、リディルは一足先に部屋を出て行った。

私とかなもサティに案内されながら、先ほど使った衣装部屋へと向かう。
移動の途中、サティが話しかけてきた。サティは私たちの前を歩いて案内をしていたので、表情は見れないが真剣な声色に感じた。
「カナエ様、アキネ様。いきなり違う世界に来て戸惑っているとは思いますが、どうか、この世界を憎まないで下さい。……この世界を愛せとは申しません、ただ憎まないで下さい」
それは、嘆願に聞こえた。
サティはこの世界が好きなんだ。胸を張って好きだと言えるのだろう。
それは、なんだか羨ましい気がした。
「……」
かなは答えない、ただ俯いただけだった。
だから、私は聞いてみた。

案内をしていたサティは立ち止まって、私たちに振り返り嬉しそうに微笑んだ。
「サティさんは、この世界が好きなんですね」
「はい。この世界には大切なものが、沢山ございますから」
嬉しそうな声音で言うサティ。それを聞いたかなが、顔を上げて叫んだ。
「私だって、私の世界には大切なものがたくさんあったのよ！！」
初めて聞いた。
「誰が好きで、こんな世界に来たりするもんですか！」
かながこんな風に声を荒げて叫ぶところ。
怒ったりすることも、滅多にないかななのに。
「それなのに！　どうして、この世界を憎んじゃいけないの！？」
かなは喜んだり、嬉しいなどの表現は周りがストップをかけるほど大袈裟に言うけれども、怒ったり悲しんだりといった表現はあまり表に出さない。
かなとも長い付き合いになるが、怒るように叫ぶかなを、私は初めて見た。

かなは、泣き叫んでいた。

何故だろうか、それが無性に羨ましくて、そして悲しくなった。
私も、自分たちが居た世界に大切なものがたくさんある。
だけど、かなのように泣き叫ぶほど、私が自分たちの居た世界に執着している気がしない。
ただ、心を占めているのは空虚感。
大切なものといっても、家族や友人。
彼らに会えないと思うと寂しくて、ホームシックになりそうだけど。でも、それだけ。

わからない。
何も、わからない。
どうして、怒りも憤りも、悲しみも沸いてこないのか。
ただ、何かぽっかりと穴の開いたような感情しか沸かないのか。

どうして良いかも、わからない。
だから、かなに笑っていて欲しい。
そうしたら、少しは何かがわかる気がするから。
でも、それは私の我侭。

「……申し訳ありません。ただ、『神銀の乙女』であるカナエ様にこの世界を憎んでほしくなくて……」
泣き叫ぶかなの様子に、サティも泣きそうだった。
「カナエ様とアキネ様のために、少しでもこの世界でお過ごし易いように全力でサポートさせてい頂きます！　何でもお申し付けて下さい。カナエ様……本当に申し訳ありません。カナエ様のお気持ちを汲む事が出来ず、カナエ様を悲しませるようなことを申してしまって」
サティは酷く済まなさそうな表情だった。
サティのその様子に、かなはサティから視線を外し、どこか済まなさそうな表情になった。
「……ごめん……なさい。サティさんが悪いわけじゃないのに……当たるようなこと言って」
「いいえ、こちらこそ。カナエ様たちのお心をお察しできずに、申し訳ありません。……さあ、あまりお待たせしてもよくありません。お着替えに参りましょうか」

サティは笑顔を作り、この会話を終わらせるように言った。
かなもそれに頷き、サティの案内のもと着替え部屋へと歩き出した。

そして、着替えをして、南の厩へと案内された。

一つ、どうしてもわからない。
私は、なんでこの世界に呼ばれたんだろうか……？

第十話（後書き）

主人公、主人公の癖に鬱になりかけてます！？大変じゃ……。かなちゃん頑張ってーあなたが明るくしてーーー！

のろのろと更新遅くなっていって申し訳ないです。

第十一話

サティに見立ててもらった、乗馬に問題なさそうな動き易い洋服へと着替えた。
模様がモンゴルとかの民族衣装みたいなジャンパースカートに、下にズボン。腰のところをベルトでとめて。私が普段着ている服に比べると、少し飾り気の多い感じではある。
飾り気といっても刺繍だから、アクセサリーがジャラジャラと鳴ったりはしない。
まあ、着心地としては動き易い感じ。

見立ての上手なサティも凄かったのですが、かなはとても良く似合って可愛かった。
流石私の親友です。可愛いんだよ。

着替えが終わり、南の厩へと案内される。
再度認識した。
この建物、一人だと絶対迷う。

建物の外、少し離れたところに厩はあった（そりゃそうだ）。
厩に案内される最中にサティから聞いた話では、この世界には御伽噺に出てくるようなドラゴンとかユニコーンなどのモンスターも存在するらしい。その中でも、騎獣用は少なく高価と聞いた。
このスニクス国にも少数だが居るとのこと。
ドラゴンとかユニコーンが居るのか、誰かに同伴して乗せてもらいたいかも……。

厩に近づくと、独特の動物の臭いがした。
思っていたよりも厩はでかく、立派でした。
その厩の大きな扉の前に、リディルとフーガに白毛の馬と黒毛の馬がいた。
「カナエ様、アキネさん。待っていたよ」
笑顔のリディルと、感情の読み取れない（これが無表情ってやつか？）フーガ。
「お待たせしました。宜しくお願いします、リディルさん、フーガさん」
「宜しくお願いします」
かなは礼儀正しく挨拶をしたので、私もそれに習う。
「こちらこそ、宜しくお願いします」
リディルは丁寧に返してくれたが、フーガは頭を下げる一礼だけだった。
喋るのが嫌いなのだろうか……。寡黙な奴め。
「その洋服も、とても良くお似合いですよ」
リディルは律儀に褒めてました。どうだ、かなは可愛いだろう！
「この子は私の愛馬で、ルーといいます。女の子なので、優しくしてあげてくださいね」
そう言って、リディルは黒毛の馬を紹介した。
馬はどことなく誇らしげ（？）にブルルと鼻息を吐いた。
この馬ってば、主人のリディルが言ってること理解してるんだろうか。
もしそうだとすると、頭の良い子だろう。
「こっちの子はフーガの愛馬で、シロです。この子も女の子です」
今度は白毛の馬の紹介だった。

白毛の馬だから『シロ』って、ネーミングセンスのかけらもねえ！

覚え易くていいけど。

「シロ・・・ですか。二頭とも大きな馬ですね」

「いい馬だ」

「！」

かながおっかなびっくり馬に近づいていると、フーガがいきなりぼそっと言った。

無表情に見えるのだけど……なんだかこっちも若干誇らしげに言ってる気がする。

喋ったことに吃驚するという、大変失礼な真似をして申し訳ありません、と私は心の中で謝罪をする。

馬など触ったこともないので、一応聞いてみる。この間のこともあるので。

「か、噛んだりはしませんか……？」

「悪戯などしなければ、大丈夫ですよ。好意的に接してあげれば馬もわかってくれますからね」

まあ、好意的だから触ってみたいわけで。

黒毛の馬ルーちゃんもわかってくれたみたいで、大人しく触らせてくれました。

しかし、この世界の馬って自分たちの居た世界の馬とあまり変わりないようだ。

「さて、慣れてきたようだし、乗ってみるかい？」

リディルがいつもの笑顔で聞いてくる。その顔には乗れって書いてある気がする。

「はい。お願いします」

リディルの黒毛の馬ルーちゃんにはかなが、フーガの白毛の馬シロちゃんに私が乗ることになった。

手伝ってもらって、何とか乗馬することができました。
訓練しないと一人で乗るのは難しい。
だが問題はこの後だ。良く筋肉痛になるって聞くし……。
「私やフーガがきちんと支えますので、安心して下さいね」
ルーちゃんに先に乗っていたかなの後ろに、リディルが乗った。
ひらりという表現が似合いそうな、上手な乗りっぷりです。
かなにリディル。なんというか眼福度アップです。
「乗るぞ」
いきなり後ろから声をかけられて、吃驚しました。
フーガが一応程度に、乗る前に声をかけてきました。
「あ、はい」
こっちも上手に乗馬しました。さすが騎士です。

どちらも二人乗りで準備が完了した。
乗ってるだけなら、なんとかなりそうです。
でも、これで移動なんだよなー。
バランスとるのに普段使わない筋肉を使いそうなので、明日はきっと筋肉痛。

そういえば、寝起き以降あまり右腕が痛まない。
普通なら、もっと痛むだろうに……。
これはどういうことか？

ぽっからぽっからと、ゆっくり私たちを乗せた二頭の馬たちは歩き出した。
厩から少し歩くと、整備された城内の通路にでた。
その通路沿いに行くと、お城の正面玄関のような場所に出てきた。
その先に通じるのは城門。
その城門の近くで衛兵みたいな人に一言断ってから、城の外へと出た。

城は森を切り開いて建てたようで、城の周辺は森に囲まれており、城から続く道は森を切り開いて石畳で整備されていた。
自分たちの居た街はどちらかといえば都会で、公園ですら森林の独特の匂いは薄かった。
少しだけ周りを見る余裕ができたのか、それとも現実逃避なだけなのかはわからないが、森林独特の匂いを感じることができた。

しばらく行くと、整備された石畳の街道と整備されていない道の二つに分かれていた。
先行していたリディルは整備されてない道へと進む。
フーガが操る私の乗っているシロちゃんも後へと続く。

厩から、城。城から整備されてない道へと。ここまで、フーガと私は無言だった。
リディルとかなは時々何かを話している様子ではあったが、こっちまでは聞こえなかった。
特に何かを話すことがあるわけでもないし、フーガの様子からも喋るのが嫌いなようだし、無理に話しかけることも無いだろうというのが結論。

というのは建前で、あまり、その、男性とここまで密着したことないわけで……。

心頭滅却すれば火もまた涼、じゃないけど。あまり、考えないようにしているわけです。

だから、話しかけたりもしない。

一人で考えているとネガティブな思想になりそうなので、元の世界に戻れるかどうかというのも考えていない。周りに流れる風景ばかりを見て現実逃避をしているわけで。

でも、それはそれで楽しい。

やっぱり見慣れない景色というのは楽しいものだ。

流れる雲も、漂っている空気の感じもそんなに大差があるような気がしない。

漫画などによっては、異世界に飛ばされて精霊などの存在を感じることが出来るようになったりするとかあるけど、そんな特殊なことなんて一切無い感じだし。

まあ、右腕が痛まないのを除けば特に何も変化は無い。

かなの瞳の色以外は。

でも、どうしてかななんだろう？

どうして、私も一緒に来てしまったんだろう？

まあ、考えたって始まらないし、後ろ向きにしかならないからここで考えるのをやめよう。うん。

「君は、何故冷静だ？」

いきなり、フーガに話しかけられた。

「え？」

随分と間抜けな返事だとは思った。
まあ、仕方ない。何も考えたくなくて、風景を見てたし。
私はバランス取るのに必死。
という心の中で建前を立てて、後ろなど振り向けないわけで。
この状態でも、ドキドキしてるわけで。失礼ですが、後ろなど振り向きません。
だから、前を向いたまま、後ろに乗るフーガと私の会話が始まった。
しかし、冷静？　私がか？　んな、馬鹿な。
脳内では突っ込みやらボケやら、仰天しすぎてついていけないだけです。
「冷静なんかじゃないです」
「君は、カナエ様みたいに帰りたいとは言わないのか？」
そんなに私は他の人から見て、帰りたくないような感じに見えるのか？
「帰りたいですよ。ただ、言葉に出してないだけです」
「そうか」
フーガと私の会話はそれで終わった。

うむ、やはり寡黙な人との会話は続きません。
元々私も話術が上手なわけでもないので、当然といえば当然。
まあ、ずっと後ろから話しかけられるのも、勘弁だけど。
ある意味、助かった。

それっきり、フーガから話しかけてくることはなかった。

整備されていない道から三十分か一時間かくらいして、眼前の森が開けた。
それまで、ずっと森を切り開いた道（街道よりは小さいけれども馬車が通れそうな大きさだろう）だった。森林浴と言えば聞こえがいいが、いい加減森ばかりの風景に飽きかけていたときだった。

森が開けた先、道の続いている方向には、この世界で唯一見覚えのある場所。
あまり、思い出したくも無い痛い記憶しかない場所。
この世界に来て、最初に来た場所。

石造りの祭壇。

あそこが、リディルの取って置きの場所？

あの場所に連れて来るって……。
本当に元気付けたいのだろうか？　それとも、嫌がらせだろうか？
リディルさんのあふぉんだらー。

私の心の阿保な罵倒など、口に出さないので意味は無い。
心を読まれたりするわけじゃないだろうし……。
されたらされたで、すっごい嫌だな。今思いっきり罵倒しまくってるわけだし。
そんな私などさておき、馬の歩みは止まらない。

先行するリディルの馬は、そのまま祭壇へと続く道を進んでいった。

第十一話（後書き）

馬です。馬の体のつくりはバランスよくて綺麗だと思います。
どうも、主人公はかなを褒められると嬉しいらしい。自分などおいといて。
でも、褒められると人の子なので喜びます。でも、それ以上に恥ずかしがります。

第十二話

この世界で最初に来た場所。
教科書やＴＶでしか見たことのなかった、石造りの祭壇。

この世界で最初の思い出。
見たことも無い不思議生命体（凶暴）に襲われ、右腕を負傷した。

そんな場所。
そんな場所にリディルは私たちを案内しようとしているのだろうか？

馬で行けるよう舗装された石畳の道は、祭壇に通じる道と、祭壇の周りを迂回するように伸びる道の二手に別れていた。
私とかなが最初に居たのは、嫌な思いでしか無い祭壇。
そのまま、祭壇に進むとしたら、リディルに幻滅してやろうかな？　とか思ってました。

どうやら、幻滅することはなさそうです。
リディルは祭壇の周りの道へ行くと言った。

祭壇がある場所は小さめの山（小高い丘というべきか？）の中腹あたりにあり、周りの道は祭壇を迂回して山の頂へと、登り道が続いていた。

遠めにだが、祭壇辺りから見える頂上付近は綺麗な彩りだった。
白い色と緑に、青が混じり、黄色まで色があるように見えた。
私はそんなに目が良い訳じゃないので、その色とりどりの物が何なのかは、はっきりとは見えなかった。だが、推測することはできる。だからあれはお花畑……と考えたい。
取って置きの場所と言ったから、きっと変な場所ではないはずだし。

「ああ、そうだ。そろそろこれを」
前を行くリディルがそう言って（私にも聞こえる声で）、祭壇との別れ道の真ん中で愛馬ルーちゃんの歩みを止めた。
ルーちゃんに括りつけていた鞄から、布のようなものを取り出した。
「これを羽織ってください。多分、寒いでしょうからね。フーガもアキネさんに外套を」
そう言いながらリディルはかなに、布一外套をかけた。
その外套のセンスの良いことで。デザインは女の子用みたいでポンチョに似ていた。
外套は機能的な中にも可愛らしさがあり、色もかなの洋服の色に似合っている。
リディルってばセンス良いね。

リディルに促され、フーガも自分の愛馬シロちゃんに括りつけていた鞄から外套を取り出した。
「これを」
フーガはリディルとは違い、外套を渡すだけだった。

ただ、身振りで羽織り方を教えてくれた。
上から羽織った後、落ちないように木製のボタンで止めるようだ。
フーガは口下手なのか、言葉は少なく比較的無口な方だった。
根本は良い人そうだけど。
「ありがとうございます。これで……いいですかね？」
私はフーガから渡された外套を、フーガが身振りで教えてくれた羽織り方をして、間違ってないか聞いてみた。
「ああ」
たった、それだけの言葉だったが、なんだか嬉しくなった。
特別、フーガが笑顔を見せたわけでもないのに。

外套は思っていたよりか肌触りも良く、とても暖かかった。
デザインもかなのと同じものだった。色は違っていたが。
高度が上がっているのか、だんだん寒く感じていたから丁度良かった。
というか、そもそも目的地がこの先だから寒いのを見越して用意していたのだろう。
確かに、お城周辺と比べると温度差があるから、お城から外套を羽織ってたら間違いなく汗をかいただろう。季節で言えば、お城周辺が春の日差しの良い日。今いる祭壇近くが初冬くらいの寒さ。

外套を羽織り終わって、祭壇の周りの道を進み始めた。
道を登っていくにつれ、色とりどりの物の正体がはっきり見えてきた。
白い色は雪、他の色は草花の色だった。

温度的に考えれば、何故雪が？　と思わないでもない温度だったし、雪が降るような場所で春並みの色とりどりの草花も謎だった。
頂に登りきった所でルーちゃんの歩みが止まり、リディルは馬から降りた。
後ろに続いていたシロちゃんも止まり、フーガも降りた。
かなや私も手伝って貰いながら、馬から降りた。

「到着したよ。ここが私の取って置きの場所だよ」
リディルがそう言いながら、軽くお辞儀をした。

眼前に広がる世界は、雪と草木に彩られた石畳の道。
なだらかに続く山（丘？）の中腹に、石造りの祭壇。
その下に見えるのは森と、森の中にある御伽噺に出てきそうなお城。
お城の麓には、城下街の広がり。
城下街の色とりどりの屋根が、大きな一つの模様みたいだった。
街と街を繋ぐ道が見え、広い緑豊かな大地に模様を描いたように見える。
緑の大地の地平線。その先には青い空の色。

とても、とても綺麗で。
一枚の写真のようで。
感動なのか、胸が締め付けられる。
言葉もでない。
ただ、その景色に魅入っていた。

「あきちゃん・・・？」

不安そうなかなの声。
口にしょっぱい水が入ってきた。

ああ、私……泣いてるのか？

初めての体験だった。
感動で涙を流すなんて。
そりゃ、感動映画とかで感情移入して引っ張られて泣くことはあったけど。
自分が感動しているのかどうかも、わからないのに、泣くなんて。
漫画みたいな体験だ。
年をとったから涙腺が弱くなったんだろうか？

自分の心がわからない。
ただ、眼前に広がる世界に、考えが追いつかない。

どのくらいの時間、その景色を眺めていたのだろうか。
かなも、リディルもフーガも黙っていた。
どこかで鳴いた鳥の声に、私は景色を眺めることを止めた。

「……かな……」
かなは無言で私の横に居てくれた。
私はかなのほうを向き、手を握る。
かなはそっと握られた手を、握り返してくれた。
「……帰り……たい……」
このときの私の声は、搾り出すような震える声だったと、後日かなが言っていた。

ただ、帰りたい。
その想いだけで、胸がいっぱいだった。

かなに縋るようにして、私は泣いた。
ただ、帰りたくて。
切なくて、哀しくて。

少しだけして、かなも一緒に泣いてくれた。

それだけで、気持ちが軽くなっていくようだった。

泣き声しか、周りには響いていない。
リディルもフーガも何も言わない。
慰めの言葉も、何も言わない。
ただ、私とかなを見守っていた。

どれくらい、二人で泣いただろうか。
空は橙に染まってきた。この世界も太陽のようなものがあるんだな。

とても、たくさん泣いたから、頭が痛かった。
でも、気持ちはすっきりした。
少し、前向きになれそうだ。
本当に、かなが居てくれてよかった。一緒に泣いてくれてよかった。
自分の気持ちが安定したのがわかる。

生きて、いけそうだ。

そんな気がした。

第十二話（後書き）

ようやく主人公少し前向きになりそうです。ちょっと重い気もしないでもないけれど、悲観しないわけが無いと、どうしても書きたかった。

やっぱし、思いっきり泣くとすっきりするけど、頭痛くなるわけで。

これから、主人公。おた・・・聡明になれるといいね！

第十三話

たくさん、かなと一緒に泣いた。
帰りたいという想い。
泣いている時は、帰りたい以外にも色々な感情が湧き出てきてた。
暗い気持ちのものばかり。
どろどろのぐちゃぐちゃした思い。
そのなかに、かなを憎む気持ちもあった。
でも、それ以上にかなは一緒に泣いてくれた。
それが嬉しかった。
一人じゃない気がした。

生きていける気がした。

「どうも、ご迷惑をおかけしました」
そう言って私は、リディルとフーガに頭を下げた。かなも一緒に頭を下げた。
リディルはにっこりと微笑み、フーガは無表情だった。
「すっきり……したかい？」
「はい。お蔭様で」
この世界に来て、初めて心がすっきりしている気がする。
清清しい気分だ。

「かな、ごめんね。泣いちゃったりして」

私がかなのほうを向いてそう言うと、かなは首を振って言った。
「ううん。あきちゃんが泣いてくれたから、私も思いっきり泣けたの。一緒に泣いてくれてありがとう」
「それ、私の台詞だよ」
笑いあう。かなも泣きたかったんだ。
「……すっきりしたね」
「……うん」
赤色に染まる空を見ながら、泣きながら繋いだ手をそろりと離した。
とても、幻想的で綺麗で、この景色だけで少しはこの世界に愛着が持てそうな気もしてくるから不思議だ。

ふと、お城がある方向とは反対の方向を見てみた。
ずっとお城の方向ばかり見ていたが、後ろは見ていなかった。

「線……？」
お城と反対の方向には、石畳が続き、坂を下った先には森になり、その先はさらに険しそうな山がたっていた。その山の頂から、空へと伸びる線みたいなのが見えた。
線は雲に隠れて、どこで途切れているのかわからなかった。
「あの線のように見えるのはね、『神代の塔』だよ」
「神代の塔？」
私の見ている方向、こぼした疑問にここに案内してくれたリディルが答えた。
「そう、『神代の塔』。私たち人間がこの世界に生まれる前に、神が命を創る時、世界を見渡すために作ったとされている塔だよ。あの塔に女神がいらっしゃるって話だよ」
自然とかなやフーガの目線も、『神代の塔』と呼ばれる、ここからじゃ線にしか見えないものに注がれる。

あの場所に行けば、女神に合えるかもしれないと……？

「あの、明後日の『聖帝の祭日』は『神代の塔』で行われるのですか？」

「そういえば、色々なことの説明がまだだったね。『聖帝の祭日』はスニクス国建国祝いの日なんだよ。だから、国をあげての祭りだから、スニクス国で行うんだ。それに……」

私のほうを見ながら説明をしていたリディルは、視線を『神代の塔』へと移した。

「残念だけど、近寄ることはできないんだ。女神イシュタリア様のお力で『神代の塔』周辺は何者も立ち入ることが出来ないんだよ」

独り言のように呟いた後、かなと私のほうをリディルは見た。

その表情はどこか哀愁が漂っている気がした。

こう、失礼な話だけどリディルって女神に恋でもしてるのかな？

「夕食の後にでも、『神銀の乙女』についての説明を聞く気はないかな？」

リディルは今日、『神銀の乙女』について説明をする為に会いに来た。

でも、私たちの様子を見て、気晴らしにここに連れて来てくれた。

夕食の後ででも説明をしてくれるというならば、聞くのがいいはず。

自分自身、心の整理がついたのかはわからないけれども、すっきりはしているから少しは前向きに考えられそうだし。

「説明……。聞きたいです。かなも……それでいい？」

「うん。リディルさん、お願いします」

とりあえず、最低限確認をかなにする。
かなは頷き、丁寧にリディルにお願いをする。
リディルはさっきの哀愁の漂う表情はどこへやら、満面の笑顔答えた。
「承りました。それじゃ、まずはお城に戻らないとね」

馬に跨り（乗馬は手伝って貰いました）、来た道を帰る途中ふと疑問になった。
「ところで……どうしてかなと私が、ここにいることを知っていたんですか？」
この世界で最初に着いた場所。石造りの祭壇。その方向を見ながらリディルたちに問いかけた。
先を行っていたリディルの愛馬ルーちゃんの足が止まる。
同じようにフーガの愛馬シロちゃんの足も止まる。馬の歩みを止め、皆で祭壇を見る。

何故、タイミングよくあの場に居合わせたのか？
いくらかなが『神銀の乙女』といえども、どこに現れるかわからないんじゃないのだろうか？
話から察すると、かなはこの世界の誰かに召喚されたと考えるべきだ。
そして、それが誰なのか。
推測の域を出ないが。
『神銀の乙女』は神の御使いとされている、そしてかなはその『神銀の乙女』の証である銀の瞳を手に入れた。この世界に来て。
もし、魔法などがあるとしても、髪や目の色を変えれるなら選民意識的なものはないだろう。
ならば、そんなことができるのは……と考えると、件の女神イシ

ユタリアじゃないか思う。
かなを召喚したのは女神じゃないのだろうかと。
推測だが、当たってるんじゃないのだろうか。
過去の文書にも、返還の術は女神の力だけしか見つかってないらしいし。

「今日の謁見で、カナエ様以外の『神銀の乙女』に会いましたよね。彼女たちが女神から承った神託で、この祭壇に現れると出てたんですよ。だから、お迎えにあがりました」

女神。
女神が、かながこの世界に現れる場所を告げた……。
やっぱり、女神が犯人か!?

「それじゃあ、タイミングが良かったのは偶然……だったんですね」
「ええ、本当に良かった。少しでも遅かったらと考えると……」
「恐ろしすぎますね」
あまり思い出したくないことです。
かなも思い出したのか、少し顔色が悪い。
「でも、今は私たちがいますから安心してくださいね」
かなの様子を察したのか、リディルが慰めとも取れる発言をする。
女性を陥落させそうな笑顔で。
あんな笑顔を間近くで見たら、誰だって赤面するだろう。かなも赤面してます。

私たちは城へと帰ってった。

『神銀の乙女』かな。

その、かなが現れる場所を告げた女神。

……女神様ねぇ……実感わかないですよ。

でも、会ったら一発ぶん殴りたい気がするが、女神ってことは女性だろうから……殴ったまずいよね？

第十三話（後書き）

異世界系のは世界構造を考えるのが楽しいですね。

第十四話

「シロちゃん、ルーちゃん。ありがとうございました」
城に戻って厩まで到着すると、馬から下りたかなが馬の首を撫でながら言った。
「ありがとうね」
私も感謝の意味を込めて、馬の首を優しく撫でてみた。
彼女たち（馬だけど）もお礼を言われて喜ぶように、鼻を鳴らした。

「おかえりなさいませ、カナエ様、アキネ様。湯浴みの用意ができております。慣れない馬での移動の後です、疲れを癒していただくためハーブの薬湯にしております」
厩にはいつの間にかサティがお迎えに来ていて、満面の笑みをくれた。
凄腕メイド、ここに見参。
メイドのサティは、私たちの帰りをお待ちしていたようです。
でも、私たちが帰ってくる時間なんて、解ったものじゃないはずなのに。
湯浴みの用意が整っているとは?!
……恐るべし、凄腕メイド。
「それでは、リディル様、フーガ様失礼しますね。さあ、こちらです」
騎士二人に簡潔な挨拶を済ませ、サティはずんずんと進んでいった。
「え?　あの……。えっと、リディルさん、フーガさん。大変お世

話になりました。すいません、これで失礼します」
「うん、またね。カナエ様、アキネさん。ゆっくりしてくるといいよ」
「すみません、失礼します」
こちらも簡潔に挨拶をして、サラを追いかけることにした。
リディルは会った時からの口調で、フーガは無言ながらも軽く会釈をくれました。

「さ、サティさん、待って下さい」
少し距離の開いたサティの背中を、かなが小走りで追う。
私はかなの後を追って、こちらも小走りになる。
かなの声が聞こえたのか颯爽と歩くサティの速度が緩み、こちらを振り向いた。
「あら、申し訳ありません。気が急いて、少し早く歩きすぎました」
「何か……あるんですか？　急ぎの用事とか」
私の質問にサティはにっこりと微笑み、断言されました。
「いいえ。カナエ様たちがお戻りになられるのを、今か今かと待ちわびていましたので」

それから、歩調も落ち着いたサティに案内されて、浴場へと着きました。
浴場に着くまでの間に、サティにどうして自分たちが戻ってくるのがわかったのか尋ねた。
まあ、答えは単純で。見張り台の方に私たちが戻ってくるのが見

えたら呼び鈴を鳴らしてもらったらしい。
もっとも、見張り台に呼び鈴は何種類かあるらしい。
敵襲を伝えるための城下町にまで音が届きそうな警鐘や、他国からの来賓が見えたときに場内に知らせる呼び鈴など色々。
話を聞いてると、見張り台というよりかは会社などの受付窓口みたいだった。一方的なだけど。

「到着しました。さあ、どうぞお入りになってください」
サティは大きめの片開きのドアを開け、部屋に入ると部屋の入り口で靴を脱ぎました。
目下に見えるのは、見たことのあるもの。
これは、よく小学校や中学校の下駄箱にありました簀！
異世界にもありました。
「かな……すのこがある」
「すのこだね。……というか、なんか温泉の脱衣所みたいな感じだね」
かなの表現するとおり、この部屋は脱衣所みたいな感じでした。
入り口は床に簀があり、その先は一段高くなっている。
一段高い床の素材は絨毯よりかは水捌けの良さそうな素材で、素足でも気持ち良さそうでした。
サティは靴を脱ぎ終えると簀に上がり、靴を床の端によけてました。
「カナエ様、アキネ様。どうかなさいましたか？」
部屋を見て、呆然としている私たちにサティが首をかしげた。
「あ、いえ。なんでもありません。行こう、あきちゃん」
「うん。そうだね。お風呂冷めちゃうしね」
サティに促されて部屋に入った。

部屋は大きさは衣装部屋ほど大きくは無いが、二～三十人くらい一気に着替えることができそうな広さで、これで籠をおいた棚やロッカーなんかがあると完璧に温泉の脱衣所だった。

入り口の正面は壁だが、左はどでっかい鏡があったりバスタオルのようなものが用意されている棚などがあった。

反対に右側は全面スライド式の窓ガラスになってて、奥には温泉だろこれ、と突っ込みたくなるような露天風呂が見えた。

「えっと、かなさん。ここは、異世界でしたよねぇ……？」

「ええ、あきねさん。日本じゃなかったかと思いますよ……？」

驚愕のあまり、言葉遣いが変になりました。

きっとかなも同じことを思ったのだろう。乗ってくれてます。

「ここは十代前の『神銀の乙女』に伝授された、お風呂という機能でございます。時代に伴い、今の形に落ち着きました」

サティは説明をしながら、入り口に衝立を置いていました。

入り口からドアを開けても、直には見えないように。

こんなところも、日本と良く似ています。

「お風呂は……一般家庭にも普及してるのでしょうか？」

素朴な疑問をかながサラに聞いた。

お城の造りは西洋風なのに、中にあるのは和風のお風呂。ギャップがあります。

これで一般家庭の建物も、ヨーロッパなどにありそうな古風な西洋洋館に和風のお風呂だと思うと突っ込みを入れたくなりますね。

「あいにく、この世界にはお風呂の機能は一般家庭に普及するほどの建築技術はありません。カナエ様たちの世界では一般家庭にもお風呂があるのでしょうか？」

どうやらこの世界には普及はしてないらしい。突っ込みは入れなくて済みました。

「あ、はい。私たちが居た世界では……というか、日本では一般家庭に古くから普及していましたし、温泉も昔からありました。だから……その……」

かなは一度言葉を区切り、少し迷った末言った。
なんとなくわかる。かなが何を考えているのか。
私たちが居た世界のことを言って良いものなのか、かなは戸惑っている。
「……今この場所を見て驚いています。私たちが居た世界の施設にとても似ているので」
「そうでしたか。……なんだか、カナエ様たちの世界とこの世界が繋がっている様で嬉しいものですね。ゆっくりと疲れを癒して下さい」
「はい。ありがとうございます」
かなは元気に返事をし、それを聞いてサティは少しほっとしたように微笑んだ。
きっと、出かける前にあんなこと言った手前、サティはサティでかなり気になっていたんだと思う。

脱衣も終わり、スライド式の窓ガラスを開けて部屋の外へと出てみる。
しかし、良く見れば見るほど、似ている。
脱衣所の換気口が部屋の上の辺りについているところだって似ているし、何より露天風呂の造りが似ている。
石で浴槽を造り、その中にお湯が張ってある。
周りには枯山水のような庭がある。
ここに植えられている植物は、日本に馴染み深い松や椿のような植物だった。
名前まで同じかはわからないが。
どうやらお風呂のある場所は建物の外側になるようで、庭は囲いのような板で外からは見えない構造になっている。

でも、奥に囲いのような物の先に城の壁のようなものが見えるので、完全に外側ではないのかもしれない。
まあ、覗かれなければそれでいいけど。

なんだか、自分が異世界に居るという実感が薄れる時でした。
神様の居る世界で神様へ、って言うのもなんだけれども、今だけ感謝します。
実はお風呂、というか温泉好きなんです。しかもかなと一緒に貸切とか……。
万歳、異世界。

第十五話

「うわー、すっごーい！」
かなが叫んだ先を見てみる。
先ほどは湯気であまりよく見ていなかったが、お湯には所々に綺麗な花が浮かべてあった。
「綺麗……。素敵だね、かな」
「うん、早く入ろうよって……先に、体洗わないとね」
「お背中流しますよ」
いつの間にか腕まくりの袖まくりしたサティが、側に控えていた。
しかも、にこにこと笑顔で。
「ささささサティさん！？　ど、どうしてここに！？」
かな、動揺しまくり。
メイドと聞いた時点で少しだけ、ほんの少しだけ予測はしてましたが。
本当にするとは思っては無かったから、こっちも驚いていますけれども。
「サティさん。ご好意だけ受け取ります。かなも私も自分で体を洗えますから。石鹸やタオルとか借りてもいいでしょうか？」
「そうですか。それは残念です。石鹸とタオルですね。こちらをお使いくださいませ」
動揺するのは内心で、表面には出さずに丁寧に断る。
サティが大人しく引き下がって下さいました。
よかった。食い下がられたら、どうしようかと。

サティが持ってきてくれたものは、目の粗い感じのタオル。
それと見慣れた感じの石鹸とは違う、まさに石。
どこをどう触っても石の感触しかない、手に収まるサイズの楕円

形の石鹸と呼んだ石を渡されました。
これが本当の石鹸！　いや、違うか……。
普通の石鹸と同じように、タオルを水を付け軽く絞り、タオルと石鹸とをこすり合わせてみた。
かなも同じようにしてみるが、泡が立たない。
「……？　あのサティさん、これはどう使えば？」
私もかなも、わからないから聞いてみた。
どうやら使い方が、私たちの世界と違うのかもしれないし。
「石鹸は手桶に汲んだお湯に浸すのですよ。浸して少し混ぜて、そこにタオルをつけてください」
言われた通りにしてみた。
手桶にお湯を入れ、そこに石鹸を入れて混ぜタオルを浸す。
「そうしたら、そのタオルを少し揉んでください。そうすると、泡が立ちますので」
浸したタオルを軽く絞って揉んでみる。
すると、ミルキーなきめの細かそうな泡がどんどんたった。
私とかなはそれで体を洗うことにした。
きめの細かい泡に、かなは喜んでいた。
私も肌の曲がり角になりそうな年齢です。このきめの細かい泡は嬉しい。
シャンプーとリンスみたいなものも、サティに借りて全身をしっかりと洗った。

「うーーー。極楽～～」
「ほんと。気持ちいいねー」
全身を洗って、湯船に浸かる。
強烈にではなく、ほのかに香る花の香り。

「そういえば、サティさん。ハーブの薬湯って言ってた気がするけど……。この浮いてる花がハーブですか？」
脱衣室の出入り口で待機しているサティに聞いてみた。
かなもサティのほうを一緒に見ている。
「左様でございます。その花はハーブの一種で、薬湯に良く使われる種類です。効用は疲労回復と美容によかったかと記憶しておりますが……」
かなと二人でまじまじと花を見る。
浮かんでいる小さく花は控えめだけれども、可愛らしい花。
お湯から一枚掬って、手にとってみた。

「カナエ様、アキネ様。湯加減はいかがでしょうか？」
湯気は出ているが、思ったよりも熱くはない。
どちらかと言えば、私は熱めが好みだ。
「もう少し熱いほうが好きかな。……かなはどう？」
「私も、もう少し熱いほうが好き」
二人の意見を聞いていたサティは、にっこりと微笑んで言った。
「少しだけピリっとくるかもしれませんが、何も問題はありませんので。少しだけ我慢して下さいね」
そう言うとサティは、露天風呂の天蓋になっている屋根の柱に近づき、何かを探し始めたようだった。
すぐに目的のものが見つかったのか、柱の電気のスイッチがありそうな位置に蓋のような小さな窓が現れた。
サティはその窓を開け、中にあったスイッチに触れるた。
「っきゃ」
「いたっ」
サティがスイッチに触れるとすぐに、静電気のようなピリっとしたものが体に走った。
「……？　今の何？」

ほんの一瞬だけだったが、サティの言った通りピリっとしたものがきた。
それに気をとられていたが、少しするとお湯の温度が上がり、ぬるい温度からちょっとだけ熱めの温度へと変化した。
「暖かくなってる……」
熱くなった露天風呂に浸かりながら、疑問が胸を締める。

「サティさん、今のは？」
気になったんだろう、かながサティに聞いてみる。私も聞いてみたい。
二人の視線がサティに集中する。サティはおどけた様にして、言った。

そう、ここは異なる世界と書いて『異世界』。
何があっても不思議じゃないんだ……。
ちょっとだけ胸が躍る。
今のが、科学なんかとかじゃなく、魔法とかだったらと。

「ふふふ、今の何だと思いますか？」
「わからないから聞いてるんです。もったいぶらずに、教えてください」
サティとかなが言い合う。
それを聞きながら、私の手は湯船に浮かぶ花を弄っている。

ああ、どうか予想が当たってると嬉しいな。面白そうだし。
サティさん、どうか裏切らないで、欲しい答えをください！

「今のはですね、魔法ですよ」

今のこの瞬間、サティが女神に見えました。

異なる世界、異世界万歳。

「魔法……ですか？　さっきのピリってきたのが魔法？」

「はい、そうです。先ほどのは、魔法です」

驚いているかなに面白そうに説明を始めるサティ。

それを私は嬉しいと思いながら聞いている。

だって、異世界だもん。

やっぱり魔法とかあってなんぼでしょ！

これで、亜人種とかいたらなぁ……。

獣耳とかリアルで見てみたい気がする。後、尻尾。

犬の尻尾とか猫の尻尾とか、ぱたぱた振られてるの見ると掴みたくて仕方ないけど。

「ここにスイッチがあって、微弱な魔力を流すことで、中にある増幅機により魔法による加熱でお湯の温度が上がったのです。魔力を流したので、ピリッときたはずですが人体に影響はございません。だからご安心くださいませ」

サティは先ほど探し当てた、柱の蓋の部分を指しながら言った。

電気じゃないけどスイッチがあったそうです。

「……魔法……」

驚きというより、呆れ顔にも見える、かな。

「あの……この世界の人は皆魔法が使えるのですか？」

使えたらいいな。

もしかして、私やかなも使えるかもと、淡い期待。

「はい。この世界は大人も子供も、老人も。誰でも使えます。過去の文献に『神銀の乙女』も使っていたとありますから、きっとカナエ様やアキネ様も使えるはずです」

うん、都合のいいときだけだが、こう言おう。

神様ありがとう！

魔法万歳！

やっぱり、ゲーム好きは一度は思う。

魔法を使ってみたい！　と。

やはり、人間一度は思う。

魔法を使ってみたい！　と。

異世界に来たという状況は悲観すべきだが、私たちの世界では決して叶えることのできない夢が叶うかもしれない。

魔法を使ってみたいが、過去の事例にも無い異端な存在の私には使えるのだろうか？

サティは『神銀の乙女』と言った。

私はそれに該当しない。

もしかすると、私は使えないかもしれない。だが、かなは使えるかもしれない。

もし私だけ使えなかったら、私グレてもいいですか？

第十五話（後書き）

やっとで魔法の存在が出てきました。大分悩んだ。
魔法の有る世界にするかどうか。
でも、やっぱし異世界物なんだし、魔法があったほうが面白いかなって思ったのでつい・・・。

第十六話

「そういえば、あきちゃんの腕の傷……治ってるね？」
そう、かなが言っている通り、私の右腕の傷はどこに傷があったのかもわからないほどに完治していた。
乗馬しているときもあまり、痛まなかったから少し変だとは思っていた。

変だと思っていたことは、確信に変わる。

お風呂に入るため、脱衣所で着替えをしているときだった。
サティに選んでもらった服の下には、丁寧に巻かれた包帯。
お風呂に浸かるからと思い、包帯を取る。包帯の下にはガーゼ、それも剥がす。
剥がして気づく。
傷跡が無いと。
騒ぎ立てたりはしなかった。
だが、内心は驚きで一杯だった。

あれだけ鮮明に、見てしまったのに。
自分が化け物に噛まれるところを。
自分の腕に化け物の鋭い牙が食い込むのを。

けれども、傷は半日程しか痛まず、今では治っている。
時間の感覚がいまいち怪しいが、負傷してから丸一日程度しか経っていないと思う。
それなのに、傷はもう完治して傷跡すらない。

「うん、治ってるっぽい……。全然痛くないの。しみたりもしないし……」

騒いだところで何も始まりはしないと、驚きを内心だけに留める。

いや、まあ完治の理由は知りたいけれども。

私の腕の傷に関して、私とかなの会話を聞いていたサティが教えてくれた。

「アキネ様の傷は、『神銀の乙女』の神魔術によって完治なされたんだと思います」

「「しんまじゅつ？」」

見事にかなとはもりました。

「神魔術は女神の寵愛を受けているものだけが使用できる魔法で、少しの魔力で大きな効果が期待できる魔法です。治療や回復、結界などの魔法に優れております」

神魔術＝回復系魔法。

そして、それが気絶していた私に掛けられたってことか。

「それで、完治がこんなに早かったんですか？」

「はい、その通りです。即座に回復させる魔法もあるのですが、そちらは術者にもかけられる側の体にも負担が多少なりとも発生いたしますので。今回は自然治癒力を高める方をかけられたとお聞きしております。ですから、朝方はまだ痛まれたはずです」

確かにサティの言う通り、夜中辺りに起きた時は腕の痛みで現実を知ったから。

朝起きた時は、そこまで痛くなかったけど。

自然治癒力を高める魔法でしたか。

それでも、この回復速度はすさまじいです。

「やっぱり、漫画とかでしか出たことなかったけど、魔法って便利ね」

「便利だね……。私にも……使えるのかな？」

かなは私の傷跡のない腕を見ながら、そう呟いた。
先ほどのサティの話しぶりだと、『神銀の乙女』は女神の寵愛を受けているため神魔術というのが使えるらしい。
もしかしたら、かなも使えるのかもしれない。

サティの耳って地獄耳なんだろうか。隣でかなが呟いた言葉を聞き取っていました。
私の耳が遠いのか、それともサティの耳が凄いのか。後者だと思いたい。
かなの呟きは、結構小さかったんですけどね。
「それでしたら、お風呂からあがりましたら、魔力鑑定をしてみますか？」
「魔力鑑定？」
かなは聞いたままを問う。
私はゲームとかで培った偏った知識で考えて、予想した答えを言ってみる。
「魔力の有り無しとか、使える魔法が何なのかとかを調べるようなものですか？」
少しだけだがサティが驚いたような表情になった後、すぐに嬉しそうな笑顔になった。
「アキネ様、正解でございます。魔力鑑定はその人が何の魔法と相性が良いのかや魔力量などを調べることができます」

ぐぎゅるる……
……はい。お腹すきました。
私のお腹の虫がわんさと暴れております。なんとも恥ずかしいこ

とで。
サティが説明をする為に、言葉を切った直後に鳴り響きました。
それはもう、沈黙した瞬間だったから盛大に。
これでもか！　ってくらい。
腹の虫が、鳴いた。
「お、お腹すいたね」
かな、ありがとう。気遣ってくれて。
顔が熱いです。お風呂のせいにしたいです。
「お腹すいた……ね」
「あら、私としたことが。急いで食事の準備を致しますね。おそばを離れますが、何か困ったことがございましたら脱衣所にあるベルを鳴らしてください。急いで駆けつけますので」
「あ、はい。わかりました。どうも、すみません」
サティはお辞儀をして、お風呂場から脱衣所の出入り口に小さな机とバスタオルのようなもの、そしてベルを配置して出て行った。
あんな呼び鈴のベルの音で、この広大な城の何処か（多分食堂に行ったと思うが）に居て聞こえるのだろうか？
疑問は残るが、ご飯を催促したみたいで悪い気がするので、呼び鈴は使わずに済みたいと思います。

「二人になっちゃったね」
「うん、そうだね。かな」
二人でのんびりと、暖かくなった露天風呂に浸かりながら話ははじめた。
露天風呂から見える空は、目の痛くなるような赤い夕焼けが青に侵食されていっていた。
穏やかな時間が、私とかなの間に流れている。

「ねえ、かなはこの先どうなると思う？」
昼間に泣いて、今度こそきちんと前を見据えて考えられる状態になったから、かなに聞いてみた。
「……わからないけど、すんなり帰して貰えるとは思えない……かな？」
「私もそう思う。私ね、かなは……この世界に、多分だけど女神に召喚されたんじゃないかと思うの」
そう、今までの話を聞いていて、私の中での推測で一番有力なのは『女神による召喚』説だった。
というか、ここまで女神がうんちく言われて、異世界に落っこちてきたとかだったら、逆に嫌だな。
「女神が……私を、召喚……？」
「うん、そう思うの。だって『神銀の乙女』は女神の御使いなんでしょ？　で、かなはその『神銀の乙女』だって話になってるし。目の色も……鏡で確認したでしょ。銀色になってるのよ」
かなはそれを聞くと、俯き目の付近に手を当てた。
「……うん。色が……目の色が変わってた。カラーコンタクトなんて使ってないのに……ね」
最後の方は、なんだか自嘲気味なかなの言葉。
沈んだ様子のかなに追い討ちをかけたくはなかったけれども、私は私の考えを告げることにした。
ごめんね、かな。

「もしかしたら酷いことを言うかもしれないのだけど、私の考えを聞いてもらってもいい？」
「うん。教えて。あきちゃんの考え、聞かせて欲しい」
かなは私の方に向き直り、真剣そうな表情で聞く体制に入った。
私もかなと向き合い、「推測だけど」と一言断りを入れた後、話し始めた。

「女神に呼ばれたのなら、何か目的があると思うの。だから、戻れるとしても目的を果たした後になると思う。問題はどのくらいの期間、この世界に拘束されるか。この世界と私たちの居た世界の時間の流れが同じなのか。女神の力で本当に元の世界に戻れるのか。色々な問題があると思うのだけど……」

かなは頷きながら聞いてくれている。

「その、女神って良い神様なのかなって、結構問題じゃない？」

第十六話（後書き）

世界観を伝えるって順番を踏んだ説明をしないといけないです。地味に頭の弱い子には大変です。頑張ってみます。
主人公は感情の起伏が外に出にくい子みたいになってきてます。

第十七話

私の言ったことをかなは理解してはいなかったようで、首をかしげていた。
「えっとね、だからさ。もし、もしよ、例えばの話なんだけど、考えすぎかもしれないけどさ、この国が崇めてる女神がね、邪神とかだったらどうする？」
「じゃしん・・・？悪い神様だったらどうするかってこと？」
かなはきょとんとしている。その頬は少し赤くなり始めていた。私もあまり肩まで浸かっているとのぼせそうなので、湯から上がり足だけ浸すことにした。
私ってば、考えすぎなのかな・・・？
「うん、そう。もしこの国の崇めてる女神が悪い神様だったらさ、それに加担するってことになるじゃない。流石に、人に危害を加えるようなことになったりとかは嫌でしょ？」
言いたいことが伝わったのか、かなはこくんと頷いてくれた。
こそっと、かなも足湯になってたりするが。
「だから、問題の一つとして女神が良い神様であるって証拠みたいなのが欲しいわけよね。で、次がこの世界に居るに当たっての基本的な常識とか。これについては女王の命令が役に立つってわけ」
「そうだよね・・・一般常識がなかったら、何こいつ変なやつって思われるし・・・」
「それに・・・月のものの処理の仕方とかも教えてもらわないと・・・かなは予定だと後どのくらい？私はまだしばらく猶予あるけど」
そう、度々思うこと昔の人とか異世界の住人とか女性の月のってどうしてるんだろうと。
そこのあたりも含めてしっかり覚えないといけない。
「実は・・・あと何日かで始まるはず・・・しっかり覚えないと」

「それで他にも問題があるとは思うんだけど、何分持ってる情報が少ないと思うのよね。今のところってさ、女神にやこの世界についての大まかなことだけじゃない。問題提起にしても情報がないと何が問題なのかすらも解らないと思うのよね」
「それじゃあ、当面の目的は情報集めってこと？」
かなの答えに対して私はうなずく。
「そう。これは予測でしかないけど、多分かなは私より行動が制限されると思うの。かなは内部の人から、私は接触できるようなら外部から情報を集める。こんな感じだけど、どう？」
「うん！わかった。頑張ろうね、あきちゃん！」
かなはぐっと両手で拳を作り、気合を入れてるようだった。

「それじゃ、腹が減っては戦はできぬ、ですね」
「ですね」
談笑しながら、サティが用意してくれた衣服に袖を通す。
用意してくれた衣服は、昼に比べると控えめな飾りで彩りも控えめだった。
下着の上に着るような襦袢があり、上着を脱げばその襦袢がパジャマになりそうだった。

ゆったりと湯船に浸かり、体も温まり、衣服を着たまでは良かった。
問題が発生した。

そう、ここはお城。
あの迷路のようにだだっ広い絶対迷うであろう広さのお城。
そして今ここには、私とかなだけ。

ここまで案内してくれたサティは居ません。
もう一度言います。私とかなだけ！

どうやって移動しようか・・・。
「か、かな・・・どうしようかね・・・？」
「うーん・・・私は道覚えてないから・・・もし、あきちゃんも覚えてないなら、二人で出歩くときっと迷うよね？」
「覚えてないから、二人で行くと迷子決定だね」
洋服を着替えて、脱衣室の外の廊下で二人で立ち往生。
「どうしよ・・・」
「どうしようか・・・」

途方に暮れている私とかな。廊下で二人して突っ立て居るだけ。
どのくらいの時間が流れたように感じたのだろうか。
「ベル・・・サティさんを呼ぶためのベルがあったよね？」
かなが思い出したように、私に聞いてきた。その表情は少し晴れやかだった。
「ああ・・・。そういえばそんなこと言ってたね。ベルどこにあったっけ？」
「部屋の中じゃ・・・」
「カナエ様！」
そう言って部屋に入ろうとするかなを、止める声が廊下に響いた。

「えっと・・・」
「クラウさん！」
はい。一回しか会ってないし、ほとんど話もしてない相手の名前を覚えてるほど頭のいい子じゃありませんよ、私。

かなを呼び止めたのは、かなが懸想してるアイドル伊勢君似のクラウ・・・なんだっけ。
とにかく、彼がかなを呼び止めた。そして、そのまま私たちのそばへと近づいてきました。
「どうしてここに？」
かなはお決まりな台詞を言います。
まあ、城内だから会うこともあるでしょ、とか私は思ってたりする。
近づいてきたクラウは物語の騎士がお姫様にするように、かなの前で片膝を床につきかなを見ながら言った。
「カナエ様。お待たせいたしました」
俄かにかなの頬が赤くなってる気がする。のぼせたとしておこう。
「サティに言われ、私がお迎えに参りました。どうやら、少々遅かったようで。申し訳ありません」
「い、いえ。そんな。ありがとうございます」
クラウはリディルと違い、爽やかな笑顔がとても良く似合っております。
とても、紳士な対応でかなは戸惑ってるようでした。

ちなみにですが・・・私は思いっきり無視されてる気がしないでもない。
まあ、口を挟むことはないから問題はないのですが・・・。

「さあ、夕餉のご用意が済んでおります。私が案内しますのでどうぞ」
といって、クラウは立ち上がって腕をさし出した。
映画とかで見る、パーティとかで男性が女性をエスコートするときのあの格好。
かなは戸惑いながら、どうすればいいの？って表情で私を見てきた。
私は頷くだけにしてみた。

エスコートされてきなさい。
私は少し離れて、見失わない程度についてくるから。

と目だけで訴える。かなに伝わると嬉しいなーとか思いながら。
かなは戸惑いつつも、クラウの腕をとった。クラウは嬉しそうに微笑んだ。
クラウの頬が赤いのも、気のせいだと思おう。それか夜のせいで見間違えたと。

クラウにエスコートされるかなを、十歩くらい距離をあけて追いかける。
二人仲良く歩く様は、物語に出てくる騎士とお姫様そのものみたいで・・・。
それ以上深く考えないように、暗くなった城内を二人を見失わない程度に見回してついていった。

そう、あまり深く考えないように。
そうしないと、自分が情けなくなりそうで。
やっぱり最初に思うことは。

神様の馬鹿やろうがー！！

第十七話（後書き）

前半と後半の文字のつめ具合が違うけど、だらだらと会話したりもするってことで。

どうも、主人公は人見知りしてる気がしないでもない。

第十八話

クラウにエスコートされるかなを追いかけるて、着いた先は大きな両開きの扉。
「『神銀の乙女』カナエ様をお連れ致しました！」
大きな両開きの扉の前に着いたクラウは、エスコートしていたかなの手を少しの間離した後、離した手を胸に当て大きな声で扉に向かって言った。というか、叫んだ。
声が浸透した後、扉がゴゴゴって音を立てながら開いていくような錯覚に陥った。
実際はギィという程度の音だけでしたが。
扉が開くと、再びクラウはかなをエスコートする体勢に入り、かなの手を取る。

部屋は・・・部屋というより、大広間というべきか。
開かれた扉の先はとても広く、中央にお決まりの長ったらしい机。
その上には豪華そうな食事。
かなはかなり戸惑い気味で、それでもクラウに手を取られているので促されるまま広間へと入っていった。
広間の中に居るのは、女王と王子、それからリディルやフーガ。謁見のときに見たかな以外の『神銀の乙女』たちだった。ついでにメイドさんたちも。
皆がみんな、私とかなが着ている様な飾りや彩りの抑えられた質素な洋服だった。そうは言っても、女王様の洋服とかは見た目にも生地はとても上質のように見えました。

「カナエ様、どうぞ今夜はお好きなものをお食べください」
女王がかなに向かって、良く通る声でしゃべる。

かなはエスコートしているクラウを見上げる。まるで、恋人同士みたいに。
クラウはにっこりと笑顔でかなの座る椅子を引き、そこにかなを座らせる。そして、クラウはかなのためにちょこっとずつ色々な食べ物を皿に取ってくる。
私はそれを、開いた扉から広間に入れないまま廊下で見ていた。

広間に入る勇気が出なかった。
私はあそこに行っても、きっといい顔はされないだろう。
かなと私とでは立場が違うから・・・。
かなはこの世界に望まれて、求められて、今この世界居る。
私は・・・自分で言うのも虚しくなるが、立場で言うならかなのおまけなんじゃないんだろうか?
さらに悪く考えるなら、不穏分子。
いかん、暗い方向にばかり考えてしまう・・・。

私が広間に入れずに、廊下で立ち往生している間に中では楽しそうな談笑の声が聞こえてきた。
その声の中に、かなの声も混じっていることに私の足はその場を去らせた。

「はぁ。何やってるんだろ・・・私」
お腹は食事を要求するように、くるくると鳴く。
自分がどこをどう歩いたのか解らないが、どこかの中庭に出たようです。
ここに辿り着くまでの間、誰にも会わなかったのは良いことなんだ

か、悪いことなんだか。多分、前者。
誰かに会っても、自分をなんて説明すれば良いかもわからないし、あの場所に連れて行かれるのも嫌だった。今は・・・なんとなく一人になりたくなった。
きっとこの世界で私の居ていい場所は、あるとしたらかなの隣なんだろうと思う。
流石に、後ろってのは嫌だな・・・。

「この世界にも星があるんだ・・・。星座とかもあるのかな・・・？」
中庭にあるベンチに腰をかけて、空をぼけっと見上げてみる。
あの場所から立ち去って、半時くらいは過ぎたかもしれない。かなは・・・心配してくれてるのかな？
心配してくれてるなら嬉しいなぁ・・・。
ってか、心配させてるかもって思うなら戻ればいいのに。お腹もすいてるんだし・・・。
戻らないとと思うが、戻りたくない。
何より、戻り道を知らない。
早まったかなぁ。
これ以上ここに居ても何もならなし、何よりここで寝るってのは控えたい。絶対風邪を引く。
さて、どうしようか・・・。

「ここに居たのか」
夜空ばかり見ていた私は、声のするほうを見た。
中庭の噴水を挟んで正面に見える廊下に、フーガだろう人が立っていた。
暗がりといえ、廊下には所々明かりがある。どんな原理で点いているのかは解らないが、足元がおぼつかなくならない程度には明るい。

とはいえども、現代っ子な私。尚且つゲームとか好きで、そこまで目が良い訳ではないし。
暗がりに見える体格や自分としゃべったことのある人物、そう考えるとフーガが妥当な気がした。
しかし、吃驚した。

中庭のベンチに腰掛けていた私の近くまで、呼びかけた人物はは近寄ってきた。
予想の通り、フーガでした。
一度声をかけた後は、無言で近づいてくるから、その雰囲気に圧されます。
「さ、探してたんですか・・・？」
「ああ。カナエ様がご心配なさっている。王やリディルも心配していた。クラウには言い聞かせておく。君も護衛の対象なんだ」
フーガにしては珍しく饒舌です。
『フーガにしては』って言うほど彼のことを知っているわけではないけれども、今日一日の経験から彼が比較的口数の少ない人だとは思う。

「そう・・・ですね。勝手に出歩いてすみません」
私も護衛の対象。クラウには言い聞かせておくということは、彼の中で私は対象外だったんだろう。
勝手に出歩く、しかも何の言伝もなしに目的地もわからないままふらふらと出歩いた護衛対象。
怒られるんだろうな・・・私。
「いや。こちらもすまなかった」
素直に謝罪を述べてくるフーガに、私は面食らってしまった。てっきり怒られるかと。
「え、いえ。こちらこそ、本当にすみません」

沈黙が流れる。
幸いなのは、お腹の虫が鳴かないこと。
こんな静かな状態で鳴かれた日には、穴を掘って入りたくなる。
「戻ろう」
フーガがそう言った。
ここは、戻るべきなんだろう、自分自身もそう思う。
でも、私の口は反乱した。

「嫌です」

言った私自身も、驚いた。
言われたフーガも、目に見えるほど驚いた表情をしている。
ああ、無表情が簡単に崩れた。これにも驚きですね。

私とフーガの間に、沈黙の時間が流れる。
無言の圧迫に、私はフーガから視線を外す。
フーガの視線は外されていない。視線が痛い。

かなのもとに戻りたくないわけでは、ない。
でも、今は行きたくない。

私は・・・かなが好きだけど。
今会うと、きっとくだらない八つ当たりをしそうで怖い。
かなを傷つけたいわけじゃない。
自分でもどうしたいのか、わからない。

第十八話（後書き）

主人公逃亡。それ以前に、護衛が彼女らを真面目に護衛していない。なんて職務怠慢だ！

感想など頂けると、参考になります。これからも、頑張っていきます。

第十九話

「戻りたくないのか？」
頭の上から降ってくる声。
中庭にあるベンチに座ったままの私。その正面に立っているフーガ。
だから、声は上から聞こえてくる。
フーガから視線を外したままの私に、彼は言った。
私の口から出た『嫌です』という言葉に、『戻りたくないのか？』
と聞いてくる。
「・・・いいえ。戻ります」
これ以上フーガに迷惑をかけるわけにもいかない。それに、かなも
心配してるらしいし。
『戻りたくないのか？』と聞かれて、素直に『はい』と答えれるほ
ど彼のことを信用しているわけではない。そして、自分がそんなこ
とを言える立場にないことも、わかってはいるつもり。

『戻ります』と言った私の言葉に納得していないのか、フーガが再
び黙った。
沈黙に耐えかね、外していた視線を上げ恐る恐る、フーガを見上げ
てみる。
フーガはその場で立ち尽くして、何かを考えているようだった。
「あ・・・あの？」
さっき言ってしまった『嫌です』に怒ってるのかな？
でも、怒っているなら『戻りたくないのか？』と聞いてくるのも変
だし・・・。
「まだ、寝るまで時間がある。リディルの説明も明日に持ち越しに
なった。・・・君の世界とこの世界とでは・・・夜空は違って見え
るのか？」
夜空・・・？そういえば、私はフーガに声をかけられるまでぼけっ

と見上げてたけど・・・。
「えっと・・・私はそんなに詳しくはないから・・・その・・・わかりません」
フーガの顔色を伺いながら、私は当たり障りのないように質問に答える。
「星は好きなのか？」
フーガは私の答えに、間髪いれずに次の質問をした。
無表情なのにどこか真剣な感じで聞いてくるフーガ。何故、今星の話なんだろうか？
「・・・え？あの？」
私は彼の質問の意図を計りかね、答えに窮しているとフーガ遮った。
「まだ、ここに居るなら、伝えてくる」
フーガはそう言った。

やっと彼が何を考えていたのか、わかった。
彼は彼なりに、私を気遣っていてくれたんだ。
私が『嫌です』と言ってしまったから・・・。
フーガはよく『不器用な人』と言われるような性格なんだろう。
気遣いの仕方が、こんなにもわかりやすい。
今はそれが嬉しい。

「必ずここに居るんだ、いいな」
私が頷くのを見て、フーガはここから最も近い連絡所へ行くと言った。
何故近くの連絡所なのかと私が質問すると、かなたちの居る大広間に戻るには、片道十分少々かかる程度には遠いからと教えてくれた。
流石はお城！
近くの連絡所なら、往復で五分もあれば大丈夫とのこと。

少しすまなさそうな声色で、すぐに戻ってくるから気をつけてくれと彼は言って立ち去った。

しかし、中庭から大広間まで片道十分少々の移動距離って・・・やっぱりすごく広い。

フーガに言われたとおり、中庭のベンチから動かず、さっきと同じように夜空を見上げてみる。

彼の不器用な気遣いのおかげで、少しだけ心が温かくなった気がした。

夜空を見上げていて、改めてこの世界が異世界だと、地球以外の場所なんだと認識した。

地球というか、日本で見上げていた夜空には月が一つと無数の星星が賑わっていた。

だが、今自分が見上げている夜空には大と小の二つの月のようなものがある。

星のような光もたくさんきらきらと瞬いている。

大きな月と小さな月。

肉眼で見える星にあんなに大きなものは、地球だと月くらいしか思い当たらない。

それが今見上げている夜空には二つ見える。

とても綺麗だけれども、それを見ていると自分とかなが日本じゃない場所に居るんだと思い知らされる。

「・・・はぁ」

なんとも、夜空に対して失礼な。

とても綺麗な景色を見ているのに、溜め息が出ました。

「まあ、溜め息も出るよね」

どこかで聞いた気がするような声。でも、この世界に知り合いなんてそんなに居ないだろうし・・・。

声がどこから聞こえてきたのか、ぼんやり夜空を見ながら溜め息ついていたからわからなかった。

視線を夜空から中庭へと向け、人の姿を探してみる。

声をかけてきたであろう、人物の姿はすぐに見つかった。

その人物は、闇夜にとても目立つ色だった。

目が離せない、というような存在感があった。

夜の暗闇にも映える、金色の髪に瞳。

着ている洋服は形は、ゲームとかで出てくるような高位の神官が着ている様な足元まであるローブ。白を基調とした上質そうな布地に、金色の刺繍。全体的に金色のイメージな人物。

髪は傍目から見ても、とても艶やかで緩やかにウェーブをかき肩甲骨くらいまで伸びていた。

顔の造りはリディルなどの美形さんですら、霞むんじゃないかってほど整っていて、整いすぎていて人に思えないくらいだった。

とても、人離れした美人さん。それでも性別は、はっきりと男だと思えた。

いくら、夜だからってここまで人の姿を判別できるとは思えないほど、その人物の姿ははっきりと見えた。

別に、その人がほのかに燐光を纏っているわけでもないのに、良く判別できました。

「あ・・・あの・・・どなた・・・でしょうか？」

その人物の雰囲気に推されてしまい、敬語になってしまいました。

声をかけてきた人物は、中庭の噴水を挟み私の正面に立っていた。

先ほど、私を探していたフーガの立っていた場所だった。
彼は近づいてきて、話しやすいくらいの位置で止まり微笑みかけてきた。
人離れした美貌で微笑まれたら、きっと誰だって舞い上がる。頬だって赤くなるさ。
「こんばんは。あきちゃん」
頬に上がった熱が、一気に醒める。

私を『あきちゃん』と呼ぶのはかなだけだ。
父と母、姉は私のことは『あき』。妹は『あき姉』。友達は『あきね』と呼び捨てがほとんどだ。
今、私を『あきちゃん』と呼ぶのはかなだけしかいない。
まして、ここは異世界である。
私はここに来てから、愛称や略称などで呼ばれたこともないし、呼んで欲しいといった覚えもない。

人離れした美貌を持つこの人物とはあった記憶などない。
いくら頭が若干弱いかもしれない私でも、ここまで印象的な人物にあったことを忘れるはずはない。
そして、ここは異世界。この世界での知り合いなど今日会った人物くらいしか該当しない。（異世界に来たその日は、不思議生命体からの負傷で寝込んでたし）
今日会った人物の中に彼はいない。
今はじめて、人離れした美貌を持つ彼と対峙している。

それなのに、目の前に立ち微笑を浮かべた彼は私を『あきちゃん』と言った。

第十九話（後書き）

す、少しは恋愛色がでて・・・きてないな。
主人公は警戒心があるんだかないんだか・・・。ヒロインのかなちゃんが活躍してません。決して百合にするつもりは毛頭ございません。

更新遅くなったりもしますが、頑張って続けていくのでお付き合い願います。読み手様が増えるのってこの上なく嬉しいです。お暇がございましたら感想などもらえると狂喜乱舞します。

第二十話

「私はあなたに・・・お会いしたことなんてないのですが・・・」
もしかしたら、私が負傷して寝込んでいるときにでもお世話になったのかもしれないと思い、聞いてみた。そのときにでも、かなから私の愛称を聞いていたのかもしれないし・・・。
恐る恐る聞いた私の質問に、目の前の人離れした美貌を持つ彼は笑った後で言った。

「別に、会ったことなんてないよ。君と会ったのはこれが初めてだ」
なるべくなら、良い方向へとの考えは一瞬で砕かれました。
人離れした美貌の彼の笑顔はどことなく、企んでいるような感じがしました。

「でも、お会いしたこともないのに名前を・・・」
「そのくらい知っているよ。それで、君はどうしてここへ？」
納得のいかない私の質問に、『知っている』と答えた彼。追い討ちをかける様に言った言葉。
「かなちゃんを置いて、どうして君はここにいるのかな？」

私のことも、かなのことも知っている。
そして、私が今かなから逃げ出してここに居ることも、知っているのかもしれない。
でも、彼の質問に今の私は彼から視線を外してからしか、答えきれなかった。

「そ・・・それは・・・。別に、置いてきたわけじゃ・・・」
「まあ、大体は知ってるけどね。でも、まだ君は・・・かなちゃんの傍を離れるべきじゃない」

予想外の言葉に、私は顔を上げて彼を見た。
てっきり、『神銀の乙女』を置いてきてと責められると思っていたから。
人離れした美貌の彼は先ほどの、企みそうな笑顔ではなく無表情のような感じだった。
でも、その金色の瞳は真剣な眼差しのような気がした。
そんな気がした。

目の前の彼にしても、フーガにしても私を責めているようではなかった。

「あきちゃん。君は・・・この世界に望まれて来たわけじゃない。だから、かなちゃんの傍で自分の居場所を持たないと・・・つらいと思うよ」
目の前に立つ人離れした美貌の彼は、また私を『あきちゃん』と呼ぶ。
「・・・あの、どうして私を『あきちゃん』と呼ぶのですか?それと、あなたのお名前は?」
彼は、少年にも青年にも、壮年にも見えた。年齢がわからない。
自然と言葉は畏怖を含めて、敬語口調になる。

「嫌だった?」
首を少しだけ傾げるしぐさ。男の人なのに、全然違和感がありません。
「いえ・・・。ただ、知りたかっただけです」
最初はすごく驚いたけど、なんだか話していてこの人はこんな人なんだと納得し始めてる自分が居る。
「名前は・・・。今は教えてあげない」
今度は、悪戯を思いついたように楽しそうに笑った。彼は私が思ってたよりも、表情豊かだった。

「そう・・・ですか。わかりました」

そう長くは無い時間だけれども、名前も知らない彼と私との間に沈黙がおりた。

「私は・・・望まれて来たわけでは、ないのですね」

先ほど彼が言った言葉。

自分でも薄々勘付いてはいたが、いざ言葉にされると思った以上にショックだった。

何が原因なのかは私にはわからないが、私はかなのおまけのようにこの世界に来てしまったらしい。

誰しもが少なからず持っているだろう、特別な何かになりたいという気持ち。

大多数の人間が、現実と向き合い平凡な人生を歩む。

極極一部の人だけが、特別な何かになれる。

ただでさえ、違う世界に飛ばされるという稀有な体験。

自覚はしていた。異世界に来た事。そこには何か目的があって呼ばれたんだ。自分は特別な何かになれるのかもしれない、という期待をしていたことを。

現実なんてこんなものだ。

私はおまけ。

「そう・・・だね。かなちゃんのように、確かな目的があって呼ばれたわけじゃないけど・・・」

聞いてしまった。

彼の言葉が信じられるのか今はわからないけれども、私は聞いてしまった。

「生け贄になるよりかは、良いんじゃないのかな?」

『生け贄』。

生け贄となるということは、死ぬということ。

かなはこの世界に『生け贄』として呼ばれた?

「生け贄って・・・どういうことですか・・・?」

驚きのあまり、私は立ち上がり目の前の彼に食ってかかった。

「生け贄ってなによ!?かなは生け贄としてこの世界に呼ばれたの!?」

勢いのまま、私は彼の胸ぐらを掴み揺さぶった。

「ねえ!答えて!!」

揺さぶられるまま、彼は悲しそうな表情で言った。

「・・・君たちを・・・元の世界に戻す力を持つものは居ないから。

・・・異世界から来た『神銀の乙女』がどうなったかを調べてみるといいよ?」

かなが・・・この世界のために命を落とす。

それが、かながこの世界に呼ばれた理由。

もし、生け贄として呼ばれたということが本当なら・・・。

どうすれば・・・いいんだろうか?

かなに死んで欲しくなんてない。

一緒に、元の世界に戻りたい。

どうすれば、生け贄とならずに済むのだろうか?

「・・・どうすれば・・・いいの?どうすれば、かなを助けられるの?」

きっと今私は、悲壮感の漂う表情なんだろう。

昼間、あれだけ泣いたのに、また泣いてしまいそうだ。

「・・・・」

「お願い！教えて！かなが死ぬなんて嫌！！」
目の前の人離れした美貌の彼も、とても悲しそうな泣き出しそうな表情に見えた。

「どうした？」

後ろからフーガの声が聞こえた。
視線を目の前に居る彼から外し、フーガの声のした方向を見る。
目を逸らしたその一瞬、目の前に居る彼の胸ぐらを掴んでいた手から、布の感触が消えた。

慌てて視線を戻すと、つい先ほどまで目の前に居た彼は、そこには居なかった。
掻き消えたように、その場には誰も居なくなっていた。
私がただ一人で立っていた。

すぐ周りを見回しても、あれほど存在感を放つ人はどこにも居なかった。
周りには、誰も居なかった。
誰も、居なかった。
私は一人だけで、中庭に立っていた。

第二十話（後書き）

逃亡中の主人公に話しかけてきた金色の人。でも、あんまり金色を強調し損ねた気がする。

ものすごく遅い更新となってしまいました。申し訳ありません。遅くなっても頑張って更新していきますのでお付き合い願います！

第二十一話

「何を一人で騒いでいる？」
呆然と、先ほどまで金色の人離れをした美貌を持つ彼が居た場所を見ているままの私に、フーガは近寄りながら話しかけてきた。
「あ・・・え・・・？あの、一人じゃ・・・なかったんですけど・・・」
「？」
要領を得ない発言に、フーガは少し首をかしげた。無表情だけど、なんとなくその仕草だけで彼が何を言っているんだ？って思ってるのが伝わってきた。
「今は、話さない方がいいよ」
しどろもどろに答えようとする私の耳に、先ほどの彼の声が聞こえてきた。
まだ近くに居るんじゃないかと、つい周りを見回してみたが、やはり居なかった。

姿は見えないが、声が聞こえてきた。もしかしたら、フーガにも聞こえたんじゃと思い聞いてみる。
「今の声・・・聞こえました？」
「声？君の声か？」
フーガの答えに、理解した。
漫画とかや小説などである、個人にしか聞こえない声。きっと先ほどの彼の声は、それと同じ類だったんだろう。
ならば、それを説明するのは難しい。下手な説明のしかたをすると、頭の変な人という印象しか与えない。今私にその印象がつくのは、まずい気がする。
「いえ、空耳だったようです」
そう言って、フーガを見上げる。

自分じゃ上手く出来ているかわからないが、笑顔を浮かべたつもりだった。作り笑顔を。

先ほどの金色の彼と話して得たことは、私がこの世界に望まれていないこととかなが『生け贄』にされるかもしれないという二つの情報。

この情報を信じることができる根拠は何もない。

根拠は何もないが、頭から信じないこともできない。

今の私には、信憑性の高くないこの二つの情報を忘れないことが大事なんだと思うことにする。

「あの、思ったよりも遅かったですね」

体感として半時くらいに感じていた。実際もっと短かったとは思う。

あの金色の人のせいだ。

「ああ、すまなかった。これを持って行けと怒られた」

そう言いながら、フーガは左手を差し出した。

差し出した左手に持っていたのは、布を被せたバスケットだった。

「これ、何ですか？」

差し出されたバスケットを受け取り、フーガに聞いてみる。勝手に開けていいものか、差し出されたんだから開けても良いとは思ったが聞いてみた。

フーガが答えるより前に、受け取ったバスケットが主張していた。

ぐぎゅるるる・・・

わ、私は悪くない！と思いたい。

受け取ったバスケットが悪いんだ！

ものすごく美味しそうな臭いをさせてるんだもん！

夜ご飯だって食べてないんだし、お腹が鳴いたって仕方ないじゃないか。と、自分に言い訳をしてみる。
先ほどまでフーガを見上げていた顔を下げ、縮こまるしかなかった。

「本当に待たせてしまったようだな」
「これ、ご飯なんですね・・・？」
「ああ、そうだ。広間にあるような豪華なのではないがな」
私は恥ずかしいやら情けないやらで頬を高潮させながらフーガを見上げると、彼は少し目を細めていた。多分、今彼は笑っているのだろう。
私は第一印象でフーガは無表情なんだとばかり思っていた。
でも、彼はただ感情を表に出して表現するのが下手なだけなんだと、思い始めた。
よくよく気をつけて、彼を観察していればその表情の変化はわかりやすかったからだ。
フーガは中庭にある私が最初に座っていたベンチに腰掛け、こちらに座るように促した。
「食べるといい」

大人しくフーガの隣に座り、渡されたバケットからご飯を頂く。
中に入っていたのはサンドイッチのようなものだった。というか、サンドイッチ。
見た目も、味も、食感も変わりないし。何より、料理の名前を聞いたらサンドイッチだと教えられた。
一年に一度ある『女神の祭典』で行われる大会で優勝した国がその年女神からの祝福として、様々な技術や新しい作物または一年災厄に見舞われないといったような恩恵が受けられるらしい。
サンドイッチなどに使うパンは、どこかの国が女神の恩恵として頂いた料理の技術の一つだったそうだ。今ではそれが世界中に広まり、

一般的な食事として食卓に並ぶまでになった。
そして、明後日にある『聖帝の祭日』で行われる祭りの一部に、『女神の祭典』にスニクス国として出展する物を決定する大会も行われるらしい。

なんだか思ったよりも、身近に感じる女神のようです。

食事をしながら、夜空を見ていたので大きな月と小さな月について聞いてみた。
「大きな月を銀月と呼ぶ。夜の闇に怯える我々人間のために、女神のその深き慈愛の心によって空に浮かべられた。小さな月は金月と呼ぶ。女神の弟神が銀月を支えるためにと浮かべたと言われている」
そう説明された。フーガもバスケットの中からサンドイッチを食べている。
彼は食事をせずに私を探していたのかなと思うと、とても悪いことをした気がしてきた。
しかし、銀月と金月か。
今の私は金月と聞いて、金色の先ほどの人を思い出していた。

せっかくなので、少しだけ私たちの世界のことをしゃべってみた。
私たちの居た世界では、月は一つだけだということ。
月の光が霞むほど、強い光を使っているということ。
昼も夜も関係なく、家族のためとずっと働く人が居るということ。
そして、かなの家族のことと私の家族のこと。

家族の話を聞いている間、フーガは少し辛そうな感じに見えた。もしかしたら、自分に置き換えて考え、哀れんだのかもしれない？
その証拠に、『辛いだろうな』と聞かれた。
これに私は苦笑いするしかなかった。
かなの家族の話をした今だからきっとわかってもらえると思い、私

よりもかなの方が立場的に辛いと思うんです、と言った。
そうしたら、フーガは『そうか』と言っただけで、それ以上は聞いてこなかった。

少しだけ、それを安堵した。
あまり、聞いてきて欲しくなんてない。
フーガに胸のうちをすべて吐露できるほど、まだ彼のことが信じられなし、迷惑をかけたいわけじゃない。
まだしばらく、この世界に厄介になりそうな気がするから。
今はまだ、耐えられる。
耐えられなくなったら、そのときにでも考えればいい。
もし、そのとき感情をすべてぶつけれる様な相手が居なければ考えよう。

食事も終わり、時間的に戻るようにと催促された。
人の気配とかが解るわけじゃないが、遠くで聞こえていたような喧騒とかは聞こえなくなっていた。
広間に向かうまでの通った廊下に似た場所も、明かりが所々消えてさらに暗くなっていた。
フーガは最初、クラウがかなにしたように腕を差し出してきたが、私はそれを首を振るだけで拒否した。
後ろだと何かあったとき対応が遅れるからと諭され、フーガの隣を歩くことになった。
部屋に戻るまでの間、フーガとの間に会話らしい会話というのはなかった。
それでも、乗馬のときに比べると幾分気が楽な沈黙だった。

第二十一話（後書き）

主人公人間不信ってわけじゃないよ？多分。素直じゃないだけです。
そして、フーガの性格は不器用と完全に固定になりました。後はこれを頑張って表現していくだけ。
かなちゃんが全然出てきません・・・。次しっかり出てくる予定！

第二十二話

見覚えが少しだけある場所まで、戻ってきた。
「ここだ」
そう言って、フーガは一つのドアの前で止まった。
片開きの扉。装飾もささやかなドアで、大きさも普通だった。

コンコン

夜の静かな廊下に、ドアノックの音が響く。

「クラウさんですか？」
「フーガです。アキネさんをお連れしました」

中から、かなの声が聞こえ、ついでに走ってくる音も聞こえた。
ドアの前で足音は一度止まり、鍵を外すような音が聞こえる。

バンッ

勢い良く扉が開き、廊下に音が反響する。
「あきちゃん！！」
かなは私の名前を大きな声で叫んで、抱きついてきた。
泣いているようじゃないので、少しだけ背中を撫でた後で、かなと話がしやすい距離に体を離す。
「かな？どうしたの？」
「ごめんね、ごめんね。あきちゃん」
かなの様子に私は困惑した。かなが『心配したんだから』と怒ったりするのなら、解る気がするが、かなは『ごめんね』と謝罪を口にしている。謝るのなら、私の方なのに。

「かな、私の方こそごめんね。心配かけて」
そう言った私の言葉に、かなはぶんぶんと首を振る。何か、かなが思っていたことと違ったようだ。
「私、あきちゃんを気遣ってあげられなくて・・・。あきちゃんに一人で寂しい思いを・・・」
「違うよ、かな。私が一人になりたかったの。かなは何も悪くないんだから謝らないで。謝られると、困るよ」
冗談めかしに笑いながら言ったのだが、『困る』という言葉にかなは敏感に反応した。
あー・・・言葉間違えちゃったかな・・・。
「私の方こそ、かなを一人にさせてごめんね。心配もかけちゃったみたいだし」
「ううん」

少しだけ、沈黙が流れた。
なんだか、気まずい。かなは何も悪くないのに。どんな言葉をかければいいか・・・。
「・・・あきちゃん、おかえりなさい」
かなの言った言葉に、私は止まった。
かなの言った『おかえりなさい』その言葉が、頭の中で反芻される。
なんだか、嬉しい。
「ただいま、かな。遅くなってごめんね」
嬉しさからか、笑みがこぼれた。かなも、嬉しそうに笑ってくれた。
・・・やっぱり、かなはすごいな。

私たちが部屋にも入らずに廊下で話しているのを、私の後ろでフーガはただ黙って見ていた。
私はフーガの方に向き直って、礼言った。
「フーガさん、今日は本当に色々ありがとうございました」

私を探しに来てくれたことや不器用な気遣いなど色々な感謝の思いを乗せ礼を述べ、フーガに頭を下げた。
顔を上げると、ゆっくりを首を振るフーガがいた。
「ゆっくり休むといい」
そう言って、フーガは後ろを向き部屋を去ろうとしてた。
「ああ。鍵はちゃんとかけるんだぞ」
フーガは一度思い出したように振り返って、施錠を促し背中を向け歩き出した。
ついその背中に向かって。
「おやすみなさい」
と言ってしまいました。いや、ほら、タイミング的に言わないといけない気がしない？
そう思って言ったのに、フーガは振り向き、目を大きく開いて驚いたような感じでこっちを見た。
「おやすみなさい、フーガさん」
かなも一緒に言ってくれました。それで、折れたのかフーガも返してくれました。
「おやすみ」
どうも、彼は私から『おやすみなさい』と声をかけられると思っていなかったらしい。
彼は短く返事をすると、今度こそ部屋の前から去りました。

部屋は朝起きた部屋と同じ場所だった。見覚えがあるはずだ。
今朝自分が寝ていたベッドに横になる前に、上着を脱ぐ。これのおかげで、思ったよりも夜だけど寒さは感じなかった。
「あきちゃん、はい、これ」
そう言ってかなが差し出したのは、洋服だった。広げてみるとネグリジェのような感じの薄手の洋服だった。これに着替えて寝なさいってことか。

「これね、サティさんが用意してくれたの。色違いだけど、おそろいなんだよ」
嬉しそうに教えてくれる、かな。
その様子が、なんだか心が温かくなるようで自然と笑っていた。

うん、もう大丈夫。

「そういえば、どうしてクラウさんだと思ったの？」
ドアをノックした時、中から聞こえてきかなの声は『誰ですか？』ではなく『クラウさんですか？』だったことに、気になったので聞いてみた。
「ああ、それね。食事終わった後、クラウさんがあきちゃんを探してきてくれるって。だから、部屋で待っていて下さいって言われたから」
「え・・・？フーガさんからの連絡は届いてないの？」
フーガは私を探しに来てくれた後で、一度かなたちに連絡をするため近くの連絡所に出向いたはずなんだけど。そこから、夜ご飯なるものも貰って持って帰ってきてくれたんだけど。
「私が広間に居る間には連絡は来てないみたいだったけど・・・？」
メイドさんたちが仕事をさぼるなんて思えないし（勝手な先入観だけど、お城で働けるってすごいことなんじゃないかと思うし）。
どこかで連絡が行き違ったのかな？
「おかしいなぁ・・・？・・・まあ、いいか？」
「うん、そうだね」

「あ。私・・・クラウさんとの約束、破っちゃった・・・」
かなと私が着替え始めて、かなは思い出したように呟いた。というか言った。
「約束・・・？どんな？」
着替えながら聞いてみる。

「誰が来ても、絶対に中からドアを開けるなって・・・。トイレとかは続きの部屋にあるから、部屋からは絶対に出ないでって言われてたんだけど・・・」
「そうなんだ・・・？」
何か、出られたら不都合でも・・・ってか、何で誰も護衛しなきゃいけないのに近くにいないんだろうか・・・？部屋に何か仕掛けでもしてるんだろうか？
明日にでも聞いてみるかな？

着替えが終わる頃、ドアをノックする音が聞こえた。
「カナエ様、クラウです」
「あ、今開けま」
「いえ、どうぞそのままで。部屋には結界が張ってありますから、朝になってサティが来るまで誰も入れないで下さい」
かなはドアに駆け寄り、鍵を外そうと手を動かしていた。それを、クラウの声が静止した。
「え？でも・・・」
ドアの前でかなは困惑していた。それを、ドアの向こうで感じ取ったのかクラウの声が聞こえる。
「ドアを開けなくて大丈夫です。そちらにアキネさんはお戻りだとお聞きしました。連絡が遅くなり申し訳ありません」
「いえ、そんな。フーガさんがあきちゃんを送って来てくれました。クラウさんもありがとうございます」
なんだか、ドア越しの二人の会話を聞いていると騎士と姫様みたいだ。
実際クラウにとってかなとの関係は、そんな感じの関係なのかもしれない。
もっとも、私は二人の会話に参加せず、ただその様子をじっと観察してたりします。

「いえ、自分は何も。確認をしに来ただけですから・・・」
「クラウさん、色々ありがとうございました。おやすみなさい」
「いえ、こちらこそ。カナエ様、この世界に来てくださってありがとうございます。おやすみなさいませ、また明日」
ドア越しだから気づかない。
『この世界に来てくださって』と、それ聞いたかなの表情を。
ドア越しのクラウは気づかない。
でも、私は、同じ部屋に居る私は気づいた。

かなの、今にも泣き出しそうな表情を。

第二十二話（後書き）

かなちゃん登場ー。思ったよりもだらだらと長くなってる。かなちゃんは明るく、表情もころころと変わる可愛い子のつもりです。表現できてるといいんだけど・・・。

少々更新が遅れました。次もちょっと色々と遅れそうで、遅れないように頑張っていきたいです。だらだらしすぎて、話が進んでない気がしないでもない。

第二十三話

「かな、大丈夫？」
ドアの前で立ったまま、泣きそうなかなに声をかけてみた。
かなはびくっと反応して、こっちを振り向いた。
「・・・大丈夫・・・。うん、大丈夫」
かなは自分自身に言い聞かせるように言った後、窓辺へと近づき夜空を見た。窓を開けないまま。

「ねえ、あきちゃん。『この世界に来てくれて、ありがとう』とか言われても、困ると思わない？」
かなは窓を開けないまま、窓の外を見続けた。かなは私の方を向くことはなかった。

私には、わからない。
私は、この世界に望まれて来たわけじゃないらしいし。
そんなこと、言われたこともないから。
想像する程度でしかないけど。
そんなことを言われても、困ると思う。好き好んでこの世界に来たわけじゃないんだし。
かなには、家で今か今かとかなの帰りを待ちわびてるだろう父親もいる。
かなの父親には、もう、かなしかいないから。
かなもそれを解っているから、仕事が終わった後の飲み会など一切断って律儀に家に帰っていた。
最近は仕事以外で遅くなることも許して貰い始めた矢先だったのに。

何も言わないでいると、かなは独白のように続けた。
「・・・好意を持って接して貰えるのは、すごく嬉しいの。・・・

でも、何で私がって思わずにはいられないの・・・。こんな世界、来たかった訳じゃないのに！」
離れて見ている私にも解るほど、かなはゆっくりと深呼吸をして、自分を落ち着かせてるようだった。
「でも・・・それを言ったら・・・またサティさんみたいに・・・。人を傷つけたいわけじゃないの・・・。だから、言えない」
「かな・・・」

何も、言えない。
かける言葉がわからない、見つからない。
ただ、かながこれ以上苦しまなければいいのにと思う。かながこれ以上傷つかないようにと祈る。

「あきちゃんが一緒でよかった。私一人だったらきっと、ヒステリーばっかり起こしてたと思う」
かなは私の方を振り向き、笑ったような気がした。
「かな・・・。私もかなと一緒でよかったよ」
「同じだね」
「うん、同じ」
私はかなに近づき、一緒に窓の外を見てみた。二人で小さく笑いあう。

私は・・・この他愛もな時間が好きだ。
かなと、他愛もないことを喋って笑いあうような、こんな時間が。
本当なら、ＤＶＤを見ながらあーだこーだ言って笑って寝てたはずなのに。

部屋の中から見る夜空。さっきも見えた、大きな月と小さな月。
「・・・ここ、地球じゃないんだね」
「うん。そうみたい。さっきね、フーガさんに聞いたの。あの大き

な月が銀月。小さな月が金月だって」
「銀月と金月か。綺麗だね」
「うん、綺麗」
夜空に浮かぶ二つの月。
二人でそれを見ていた。

小さな溜め息を、かなが吐いた。
「よし、寝ようか。あきちゃん」
そう言いながら、かなはベッドへと潜り込んだ。
私もかなに習って隣にある、今朝私が寝ていたベッドへと足を運ぶ。
柔らかなベッドに入り、かなの方を見る。かなも私の方を見ていた。
「じゃあ、明かり、消すね」
そう言って、かなはベッドの脇にある棚の上の燭台の蝋燭の火を消した。
「お休み、かな」
「お休みなさ、あきちゃん」

しばらくして、部屋の暗さに目が慣れてきた。
布団を肩までかけ、寝ようとするけれども睡魔は訪れそうになかった。
今日あったことを思い出すべきか、と一瞬だけ悩み思い出すのをやめることにした。
やり掛けのゲームなどや、今度の週末までに仕上げないといけない仕事を思い出して、やめた。
戻る方法のわからない今は、無駄な気がした。

「かな・・・起きてる?」
小さく、でも聞こえる程度に呟いてみる。
「・・・うん、あきちゃんも寝付けない?」

もぞもぞと隣のベッドで寝返りを打ったかなは、私の方をみた。
「まあね・・・」
ＴＶも漫画もゲームもお酒も何もない。
いや、まあ多分この世界の人は早寝早起きなんだろうとは思う。多分。
しかし、こう・・・寝付けないと厳しいものがある。今まで、物が溢れかえっていた日常に居たから。
ぶっちゃけちゃと、眠くないので暇。

ＴＶ・・・そういえば、ＤＶＤあれの続きってなんだったんだろう・・・？
「ねえ、かな。あのＤＶＤの続きってどうなってたの？」
かなの方を向き、聞いてみる。かなは驚いたような感じだった。そりゃそうか、いきなりのＤＶＤの話題だし。
「え？ＤＶＤって、借りてきてた伊勢君のやつ？」
「うん、そう。私、大分昔に見たリメイク前のしか知らなくてさ」
かなは少し考え込むようにして教えてくれた。

伊勢君の演じる青年は、老人から不思議な『魔法の本』を受け取り、それを開き文字を読んだことでファンタジーの世界へと旅立っていく。そして、その先で目的を同じとする仲間と共に力を合わせて世界を救うというの王道のようなストーリー。
かなが言うには見所は演技はもちろんのこと、殺陣もかなり練習したってＴＶで言ってた通り、その出来具合はスタントマンなんて顔負けよ、だそうだ。
エンディングは最後に倒した魔王の城の地下にあった蔵書庫で、『魔法の本』を見つけ、それを開くことで元の世界へと戻ってくる。
戻ってきたその手に残ったのは、役目を終えた『魔法の本』。開いて読んでも中にある文字は輝かず、そこに書かれているのは伊勢君が先ほどまで旅してきた冒険譚だった、という終わり方らしい。

一時間くらいは二人でお喋りをしていたんだと思う。
先にかなが脱落した。
お休みと言って、今度こそ本当に寝た。しばらくすると、かなの寝息が聞こえてきた。
それにつられるように、私も徐々に眠くなっていった。

うとうととしながら、少しだけＤＶＤを見始めてこの世界に来てからの今までことを振り返る。
化け物に噛まれて、ベッドで起き、『神銀の騎士』や王子に会い、サティに世話され、若く綺麗な女王様と朝食の後、玉座の間での謁見。
それから、遠乗りをして、かなと一緒にいっぱい泣いて、日本式な露天風呂に入って、魔法と言うものが存在すると教えられ、夕餉というか晩餐会というような会場である大広間に・・・入らずに逃げ出した。
逃げた先は城内のどこかの中庭で、フーガが探しに来てくれた。フーガはかなたちに連絡を入れると言って近くの連絡所に出向いた。
その間に、名前も教えてもらえなかった金色の人に会った。
フーガが声をかけたときには、居なくなってた謎の人。案内され部屋へと戻り、今に至ると。
明後日には、女神に会える『聖帝の祭日』が来るという話。

うとうとしながら思うこと。

神様なんて、信じない。

早く、家に帰りたい・・・。

第二十三話（後書き）

かなちゃんとのフリートークな時間。主人公にとっては癒しの時間ですね。かなちゃんにとっても、癒しの時間。

書くペースがばらばらだけど、頑張っていきます。文法とかおかしくなければいいんですが・・・。ご指摘があれば良ければ御教え願います。

第二十四話

特に夢を見ることもなく、ドアをノックの音で朝を迎えた。
かなはノックの音よりも前に起きていたらしい。私が起きたときには身なりが整っていて、自分が寝ていたベッドを整えていた。

ドアをノックしたのはサティとリディルに、見知らぬ兵士の人の三人だった。
私とかなはサティが持ってきてくれた洋服に着替え身なりを整えて、朝食を食べに移動することになった。
リディルとは朝の挨拶をして、着替えるまでの間部屋の外に居てもらうことにした。流石に着替え中はねぇ。
朝食を食べる場所は昨日と同じ、共同食堂の奥の部屋だった。リディルは一緒に朝食に同席したが、まだ名前を聞いていない兵士さんは部屋の外で待機していた。サティは昨日と同じように給仕にあたっていた。

朝食が終わり、会議室のような広さの部屋へと案内された。案内が終わるとサティは「別の仕事がありますが、入用があれば御呼びください」と、かなと私に断りを入れて別れた。
部屋の中は片側の壁に、ホワイトボードのような真っ白な板が貼り付けてあった。中央には、長方形の木製のテーブルが二つあり、白い板に向かって椅子が並んでいた。
リディルに促されてかなと席に座る。先ほど朝食のときは部屋の外にいた兵士さんは、今度は部屋の中で、窓際に立っていた。

「さて、今日から王のご命令で五時間、この世界についての常識などの口頭授業を受けてもらうよ」
リディルはどこかの講師のように、白い板の前で立って宣言した。

まあ、こんな講師がいたら女生徒がきゃーきゃーと人気な先生間違いない気がします。

「今日の午前中はどうしても講師の都合がつかなくてね、私が変わりをする事になったんだよ。二人とも、解らないことはちゃんと質問していいからね。宜しく」

リディルはにっこりと微笑んだ。かなも私もそれに釣られるようにして、笑みが浮かんだ。

「「 宜しくお願いします 」」

椅子に座ったまま、お辞儀をする。リディルもそれに返すように、軽くお辞儀をした。

「さて、最初はこの世界がどのようにして出来たか、ってところからかな。創生神話だね」

創生神話のお時間です。

「最初世界は女神イシュタリアとそれを支える数人の神々だけで、他には何も無い世界でした。女神は、自分たち以外には一つの命も存在しない世界に寂しさを覚え、自分たちを模した人型の生命を御創りになられました」

聞いてて、思うこと。どこの世界の神話も同じような感じなんだろうなと。

神様が居て、神様が自分たちに似た生命体を創る。

一番オーソドックスな創世神話。まあ、飲み込みやすい。

「ですが、何もない世界ではせっかく創った人型は女神の御心に反し、すぐに死んでしまいました。それを見た女神を支える神々が人型が生きていけるような環境を、女神と共に創っていきました。やがて、世界は色々な命で溢れかえりました。人型が生きていけるような環境が整い、女神は再び人型の生命を創られました。それが、私たち人間の誕生です」

リディルは一つ一つ聞き取りやすい速度で話してくれました。かなはそれにこくこくと相槌を打っていた。
私といえば・・・心の中で突っ込んでました。なんで、環境整えずに創るんだよ!?とか。
まあ、私たちの住んでいた地球も、奇跡みたいな確率で人類が誕生するような環境になったとか昔聞いたような気がするけど・・・。
うろ覚えだわ。
そういえば昨日二つの月の説明で、弟神とか言われたっけ。弟神も数人の神様の中に含まれるんだろうな。
やっぱり神様は主神とそれを支える他の神々ってのが主流なんだろうな。

「本当は他の神々についても話したいところだけど、それは追々で。創世神話、ここまでで質問とかはあるかな?」
リディルのその問いに、かなは首を振ってないと答える。
私も、今のところはいいかなーと思い、首を振る。
「今のところまでは、小さな子供でも知っているようなことなんだ。じゃあ、次は今現在の世界についてだ」
そう言うとリディルは、部屋にあった本棚から一枚の厚手の紙を取り出してた。その厚紙を広げて。白い板に貼り付けた。
厚紙はどうやらこの世界の地図のようだった。陸地の大きさから、多分だけど世界地図じゃないかと思う。

地図に書かれていたこの世界の大陸は、勾玉みたいな形に見えた。
北西のあたりは大きな穴が空いていて、東のほうは大陸!って感じに広がっていた。
逆に南西のほうには大陸の面積は狭く、海を挟んで島が乱立してるようだった。

「今私たちがいる、スニクス国はここになりますね」

地理のお時間です。若干地理は苦手です。地図は読めるんだけど、地名が覚えにくい。

リディルは中央より若干右上に書かれてる文字を指した。多分そこに書いてある文字は「スニクス国」で、それがこの世界の文字だろう。

読めないけどね…。

女王の話だと女神の祝福を受けることで解読も出来るようになるとか…。

「そして、昨日見た『神代の塔』がここ」

今度は地図の中央を指し示した。その周囲には青い線で囲いが記されてあった。

思ってたよりかは『神代の塔』はスニクス国の近くだった。もっとも、移動手段によっては図面で見るほど近いわけではないだろうけど。

広げられた地図を見ていると、文字の色が何種類かあった。

『神代の塔』は青い文字、スニクス国は黒い文字。ほとんどが黒い文字だったが、何箇所かは青い文字があり、さらにそれよりも少ない数の赤い文字があった。

リディルの話だと黒い文字はこの世界に現存している国の名前で、青い文字は女神などの神々に関わりある土地や建物の名前らしい。

『神代の塔』など大きな建物はこの地図には書かれているが、この世界に来たときに最初にいた場所のような石造りの祭壇など小さなものは各地の詳細な地図にしか載っていないらしい。

石造りの祭壇で遭遇したあの不思議生命体をこの世界では魔物と呼び、赤い文字で書かれている場所はその魔物の縄張りとされている場所らしい。そのため、基本的には立ち入り禁止区域とされている。

この時私は、この赤い文字は立ち入り禁止区域だから、赤い文字で注意を促しているんだな程度にしか思っていなかった。

赤い文字がどんな意味を持つのか、気にもしなかった。

リディルは地図の説明のついでに、昨日説明をすると言っていた『神銀の乙女』についての簡単な説明を交えた。
地図に書いてある青い文字、そこは女神に関わりある土地や建物。
異世界より来訪した『神銀の乙女』の大半は各地に赴き、最後に『神代の塔』へと登って元の世界に戻ったという記述が残されているらしい。
途中の行き先は少しずつ違うけれども、最終的な目的地は記録にある限りは全て同じだったらしい。
おそらく、今回も似た様な巡礼の旅をすることになるだろうと思い、世界地図の説明をしたそうだ。
巡礼の旅の目的を聞いたら、「それは、調べてきてませんでしたね」と目的は教えてもらえなかった。
・・・知ってそうな気がしたんだけどなぁ。
もしかしたら、はぐらかしてるのかもしれない。答え難いことなのだろうか？

私はすっかりこのとき忘れていた。
金色の人に言われた、「『生贄』となる」といった言葉を。

第二十四話（後書き）

説明ばかりで途中から会話がなくなりました。今回文章力のなさがはっきり出てるような気がします。
読み易ければいいのですが。間違ってるような部分や、なんじゃこりゃ的なワケの分からない説明になってない文などございましたらご指摘願います。
あまり更新速度が早くはありませんが、頑張っていこうと思っています！

第二十五話

遠くでガランゴロンと鐘の音が聞こえてきた。
そういえば、昨日も聞いた気がするような…？
「ああ、もうそんな時間ですか。私が出来る講義はここまでですね」
そう言って、リディルは広げた地図や過去の『神銀の乙女』に関する絵付きの資料を直し始めた。
リディルが見せてくれた『神銀の乙女』の絵付きの資料には、過去の彼女たちの肖像画などもあった。その瞳の色はどれも銀色だった。肌の色や髪の色は十人十色だったけど。
資料を手早く片付け終えたリディルは、いつもの笑顔で軽くお辞儀をしながら言った。
「長々お付き合いくださり、ありがとうございました」
「こちらこそ、ありがとうございました」
「ありがとうございました」
かなも私もリディルにお辞儀をし返す。
「では、食事に行きましょうかね。サティが今かと待ちわびているはずですからね」
リディルはそそくさと、先に部屋を出た。
…レディファーストじゃなのか？！と思ったが、部屋の外の安全を確認のためだったようです。確かにこの部屋のドアは、普通の木製のドアだったから外の様子はわからい。
「さあ、行きましょうか」
かな、私、兵士さんの順で部屋を出て、リディルの後に続き廊下を歩いていった。
リディルの足は複雑に入り組む城の構造など知り尽くしてるかのよ

うな、しっかりとした足取りで進んでいった。いや、まあ騎士ってくらいだから城に勤務してそうだから、知ってるんだろうけど…。
昨日通った記憶のない道（といってもうろ覚えですが）をリディルは進んでいく。
しばらく進むとリディルは城外へと足を進めた。
少しだけ行くと、花園だろう色とりどりの花や草木が生い茂った庭に到着した。

庭の中を少し進むと、拓けた場所に昼食の用意をしたサティと名前も聞いていない兵士さんと同じ格好をした兵士が居た。
名前も聞いていない兵士さんは一例をすると、その場を去って行きました。多分、サティと一緒にいる兵士が交代の人なんだろう。彼もお腹減ってるだろうしね。
サティは私たちの姿を視界に収めるなり、お辞儀をして柔らかい笑みをくれました。
「サティさん」
「カナエ様、アキネ様！お待ち致しておりましたよ。今日の昼食は、リディル様の提案でここ花園での食事となります」
「リディルさんの？」
そう言われて、私もかなもリディルを見た。
二人に見られたリディルは、とても解り易い照れ方をしていた。
「カナエ様もアキネさんも、この世界に来たばかりですからね。綺麗な花などを見ながらの食事ならば、少しは心が晴れるかと思いまして。お気に召しませんでしたか？」
あからさま過ぎて嘘くさいけれども、言っていることはもっともだと思った。
あからさまだろうと、美形の男性に正面から見据えられて微笑まれたら、解っていても赤面するのが年頃の女性です。かなにリディルの笑顔が炸裂しました。
「いえ、そんなとんでもな。こんな場所で食べるのなんて、私初め

てです。ありがとうございます」
かなは赤面しながら、慌てたように言った。
「お気に召していただけましたか。カナエ様に喜んでいただけて私も嬉しいですよ」
まあ、私もかなが喜んでくれるなら嬉しし、綺麗な花を見ながらの食事もいいかなと。
かなの様子を見ていて自然に笑顔になってたらしく、リディルは私の様子も見て満足そうだった。

この世界の料理は私たちの世界とそう大差がないようで、並べられた料理はどことなく見たことのあるようなものが多かった。
これには、心底安心した。
見も知らない異世界で、ゲテモノ料理や元の世界じゃ考えられないような彩りの料理など出された日には…。異世界だから、それを食べるより他に手段がなかっただろうから、だから見た目だけでも似てる料理に安心感を持って食べれた。味もそう変じゃなかったし。
というか、すごい美味しいし。
ただし、使う食器に箸はなくナイフやフォーク、スプーンだった。
いつも家で食べるときは箸だったから、ナイフやフォークは使い慣れずに大変です。こぼしてないけど。

「食事の後も勉強になるけど、今度はサティの娘のマリーン・ラシーヌが講師として来るんだよ」
リディルは優雅に食事をしながら言った。
サティの娘と聞いて私もかなも、食事の手が止まった。食事の手を止めたかながリディルに質問をした。
「サティさんの娘さんが講師ですか?どんな人なんですか?」
「マリーン・ラシーヌは君たちと同じくらいの年頃だが優秀な魔術研究員だから、心配することはないよ?ああ・・・いや、性格とい

うことならば…。そうだね、良くも悪くも研究員って感じの子かな？」

良くも悪くも研究員ですか…。実験させてとか言われなければ、問題はないんだろうけど。

かなは首を少し傾げていた。どうも今の説明だと分かり難かったらしい。私もいまいちわからないし。

「…そう、なんですか・・・？」

「大丈夫だよ。根はいい子だから。きっと良い友達あたりにでもなれるんじゃないかな？」

どうやら、かなは納得したようです。ほっとした表情になったし。

リディルもそれを見て、もし味があるなら甘い微笑って感じの笑みを浮かべてました。

食事も終わりゆっくりと寛いでいた所で、また遠くで鐘の音が鳴りました。

「それじゃ、次の勉強部屋へ行こうか」

そう言ってリディルは椅子から立ち、さあ行こうと目線で訴えてきた。

「それでは、私は片付け等がありますので。何か御座いましたら御呼び下さい」

サティはそう言うと、綺麗なお辞儀をくれました。

「あの、サティさん」

「はい？」

サティと別れる前に、どうしても気になったことを聞くことにした。

かなもリディルもついでに兵士さんも、私を待っていてくれている様子。

「その、呼ぶって…どうやって呼べばいいんですか？」

そういえば、って感じの表情をかなはしていた。

リディルはおや？という表情で、サティはあらまあという言葉が似合いそうなちょっと驚いた表情だった。交代した兵士さんは…残念ながら後ろにいるので見えません。

「あら、私としたことが説明をしていませんでしたわ。このお城には各部屋の出入口の横に呼び鈴がおいてあります。そちらを鳴らすときに、私の名前を呼んでください。声に出さなくても構いません。そうすれば、私の方に直接連絡が来ますから。呼び鈴を鳴らすときに、特に誰かという指定がなければ、詰所の方で待機しているものが駆け付けますから」

リディルが昨日鳴らして居た呼び鈴にそんな機能があったとは…。不思議だわ。

「ありがとうございます。それじゃあ、もし何かありましたらお願い致します」

「こちらこそ、呼ばれるのを楽しみにしていますね」

サティは優しそうな笑顔で私たちを見送ってくれました。

リディルの案内で次の勉強部屋へと移動することになった。

そういえば、結局交代した兵士さんからも名前も聞いてないや。

花園を突き抜けて、城壁内の城とは別の建物にリディルは私たちを案内した。

建物内部ですれ違う人は、いかにも魔術師ですよ！って感じのローブを着ている人も居れば、研究者っぽい白衣をきている人も居た。

「この棟は魔術関係の施設や研究所など、魔術に関する様々な設備が詰まっているんですよ」

「それじゃあ・・・午後の勉強って魔術に関する勉強なんですか？」

つい、魔法に対しての好奇心に駆られて聞いてしまった。

聞かなくても相手が魔術研究員だって時点で、魔術関係の勉強だとは思うのですがね。

「ええ、そうですよ。楽しみですか？」

「…ええ。楽しみです」
なんだか、明日の遠足楽しみかいと聞かれた子供の心境だ。若干気恥ずかしさで、頬が熱い。
でも、実際かなり楽しみだし。魔法なんて…心踊るじゃないか！
「私も楽しみ。ねえ、あきちゃは魔法が使えたらどんなの使ってみたいの？」
と、どんなのが使えるかわからないのに私はかなと、こんな魔法が使ってみたいとかくだらないことを言いながらリディルに付いて行った。リディルは時々肩が震えているようだった。

「ここです。入りますよ」
リディルは中に聞こえそうな声量で言った後、一度ノックをしてから部屋のドアを開いた。
部屋の中はまるで図書館にいるかのような、四方の壁には膨大な書物。
それでも、本は全てきちんと壁の本棚に収められており、部屋は整然とされていた。
絨毯には紋章か魔法陣なのか判別のつきにくい、幾何学的な模様が描かれていた。
木製の立派な造りの机と柔らかそうな布地が貼ってある椅子。その椅子に座っていた女性が立ち上がって私たちを出迎えた。
「お待ちしておりました。私はマリーン・ラシーヌです。未熟者ですがよろしくお願いします」
サティに良く似た優しそうな人懐っこい笑顔。薄い褐色の肌に、淡い水色のようなの髪。肌も髪の色も似ているが、その眼の色だけは濃紺色だった。
彼女に近づいてわかったのだが、かなより身長が低かった。
印象としては可愛い子、でした。言葉の使い方もサティに良く似ているようで、丁寧な言葉使いだし。

「私がカナエ様とアキネ様にお教えすることは、魔法に関してですね。未熟者の私が講師で申し訳ないです。明日の準備で上役の人たちは都合がつかなくて…。申し訳ありません」
「いえ、そんな。こちらこそお世話ります。私は神武　香奈恵。よろしくお願いします」
「私は高木　明音です。よろしくお願いします」
かなと一緒に丁寧にお辞儀をする。マリーンは「こちらこそ」とお辞儀をし返してくれました。
マリーンの用意していてくれた椅子に、私とかなは進められてから腰をかけた。
リディルは私たちと共に、与えられた椅子に腰掛けていた。兵士は部屋に窓がないため、ドア側で待機してた。

こうして、マリーンによる午後の魔法の授業が始まった。

第二十五話（後書き）

今回は文字ばかり結構びっしりって感じで読みにくかったら申し訳ないです。

未だに主人公はどのくらいの魔法能力にするか迷ってます。かなちゃんは決定済みなんですけどねー。チート能力か無能力か、それとも平々凡々な一般的な能力か…みなさんはどのようなのが良いと思われます？

第二十六話

「では、魔法についてですが…まずカナエ様とアキネ様がどの魔法を使えるか調べてみましょうか。確か…まだ魔力鑑定は済んでいらっしゃらないんでしたよね？」

魔力鑑定とは、その人が持つ魔法との相性や魔力量を調べることができるらしい。

ＣＴ検査みたいな機械でもあるのかな？それとも、ファンタジーちっくにどこかの占い師が使っているような水晶とかで調べたりするのかな？調べ方については聞いていない気がする。

「えっとその…ごめんなさい。まだ、調べてもらってません」

「そうですか。わかりました」

かなの返事にマリーンは追求などする事もせず、机の引き出しから何かを探していた。

・・・ごめんなさい、かな！私が悪かった。

昨日の夜、私があの場を逃げ出さなければ食事の後にでも調べれたかもしれないのに…。

「・・・ご、ごめん」

かなに聞こえる程度の小さな声で、謝罪してみた。

かなは予想通り、ふるふると小さくだけどはっきりと首を振って否定した。

「あきちゃんのせいじゃないよ。それに、昨日は遅かったしね」

かなも私と同じように小声で返してくれました。

かなの心遣いが身に染みる。

マリーンは目的のものを発見したのか、引き出しの中からファイルケースくらいのサイズの木箱を取り出した。

「じゃあ、まずは魔力鑑定をいたしましょう。これを三分ほど持っ

ていてください」
にっこりと笑顔でマリーンが差し出してきたのは、木箱の中から取り出した真っ白なはがきサイズの紙を一人に一枚ずつ渡してきた。
私とかなに紙を渡し終えるとマリーンは木箱の中に一緒に入っていた砂時計を引っくり返し、机に立てた。
「「？」」
これを三分ほど持っててお嬢さん…何そのカップ麺みたいな待ち時間。
渡された紙を手に取る。私もかなもなにこれ？って感じで首をかしげながら、紙を眺めた。
引っくり返したりしても、それは真っ白のはがきサイズの紙だった。

しばらくすると、手に持った真っ白な紙は色を帯び始めた。
青と緑が波線のようにじわじわと白い紙を染めていく。
白い紙に踊る、青と緑の波線。線が太くなり紙の白が見えなくなったりもしたが、線が細くなったりもした。太くなったり、細くなったりと生きてるみたいだ。
色も濃くなったり、薄くなったりと見ていて面白い変化ではある。
どんな構造でこんなことになってるのかな？
かなの持っている白い紙も色を帯びている。かなのは私の持ってる紙と違って、一面の黄色一色だった。
黄色なんだけど、濃いと表現したくなるような深い黄色だった。
「真っ黄色だね…」
「うん。凄い黄色。…あきちゃんのは、なんだか面白いね」
横からかなの黄色に染まった紙を見て発言した私に、かなは私の紙と自分のとを見比べた。
確かに私のはかなのと違って、未だに太さや色が定まらない。
青と緑の波線なのは変わらないけれど、変動を続けていた。

「時間ですね。見せて頂いても宜しいですか？」
マリーンが木箱から取り出した砂時計を戻しながら、笑顔で言ってきた。
彼女は時間と言った。かなの紙は色が固定化しているが、私の方は未だに変動を続けている。だが、時間らしい。
かなは迷わず真っ白から真っ黄色に色付いた紙を、マリーンに渡した。
時間と言われたので、大人しく私も色の定まらない紙を渡した。
かなから渡された紙を見て、マリーンは驚いたような表情を浮かべ、嬉しそうな笑顔に変化した。
「・・・こんな見事な黄色は初めて見ました…。流石、女神に呼ばれた『神銀の乙女』…。今この国を含め各国に居る『神銀の乙女』も『神銀の騎士』もカナエ様のようにこれほど見事な黄色を出した者はおりません」
今度は私が渡した紙を見て、マリーンは少し苦笑いするような微妙な笑顔になった。
「アキネ様も珍しいと言えば、珍しいです。まだ色が変わり続けているのですね。私は話でしか聞いたことありませんでしたが、極稀に魔力量が一定じゃない人が居るそうです。どのような条件で変動するのかは解ってはおりませんが…」
珍しいのか…嬉しいような微妙なような。
だが、それ以上に、この世界に呼んだのは女神っぽい言い方だ。
…待て。自分今まで、きちんと召喚されたのかどうなのかということを、しっかり聞いた記憶はない気がする。
今のところ、人の話から推測しかしてないし…。
「あの、マリーンさん。もしかして…かなや私をこの世界に呼んだのは女神…様なのですか？」
「…リディル様たちからお聞きじゃなかったのですか？」
マリーンは少し驚いた表情の後、眉をひそめ怪訝そうな表情でかな

の横に座っているリディルを見た。
「そういえば、聞かれてないのですっかり言いそびれてましたね…すみません」
リディルは謝罪の言葉を言っているけれど、謝罪をしているようで悪びれた様子が全くない気がする。
その様子があからさまだったのだろう。マリーンも溜め息を吐いた。
「はぁ…。リディル様たちって、どこか抜けていらっしゃるのでしょうか。私でよければ説明をさせて頂きます」
「あ、お願いします」

「『神銀の乙女』は女神の御使です。別の世界からお見えになられた『神銀の乙女』は女神自身が御呼びになったと記述されております。女神の御力が弱まったとき、女神の御力で呼ばれると書かれてありました」
「弱まったときに呼ばれれるの・・・？」
「はい。そして、女神自身が御呼びになった『神銀の乙女』に女神の力の断片を集めてもらうそうです。集め終えた力の断片を持って『神代の塔』へ向かうので、『神銀の乙女』の巡礼のような旅の最後の目的地が全部同じ『神代の塔』なのはそういった理由だと」
おい、さっきのリディルの講義ではそんなこと教えてくれなかったぞ…？
とか思い、リディルの方を見ると、ものすっごくいい笑顔でした。
漫画とかで何かを誤魔化す人が凄いイイ笑顔な、あれによく似ている。よもや、リアルでそんなのを見れるとは・・・。
「リディル様からお聞きじゃ・・・なかったようですね」
マリーンは少しリディルの方をじっと見つめて・・・というか、睨みつけているようだった。
「…リディル様、貴方はカナエ様とアキネ様のこれからの不安を煽らないために、と言ってなかったのですか？」

リディルが言わなかったのは私たちの為だったのかと問うマリーンの発言に対してリディルは、凄いイイ笑顔で答えた。
「言いそびれていただけだよ」
「・・・わかりました」
それ以上追求しても無駄だと判断したのか、マリーンは再び私たちの方を向いて説明を続けた。
「えっと…どこまで説明しましたか…。ああ、巡回の旅をするという説明までででしたね。明日の『聖帝の祭日』で女神にお会いすることが可能なはずです。きっと、その時に女神からカナエ様へ説明をされるんじゃないかと思われます…。多分ですけど」
最後の方は自信なさ気に、マリーンは苦笑いをしているようだった。
「さて、大分話が逸れてしまいましたが、魔法に関しての講義を続けても宜しいでしょうか？」
サティ譲りだろう人懐っこい笑顔でマリーンが聞いてきた。
「あ、はい。すみません、違うことを質問して…。お願いします」
「はい。魔法のない世界からお見えになられていた場合は少々解りにくい説明かもしれませが、お付き合いくださませ」
私が少し焦ったようにすると、マリーンがくすりと笑った。なんだかその様子が凄く大人の女性の仕草に見えてしまいました・・・。同じ位の年頃だって聞いてた気がするんだけどなぁ…。私がガキっぽいだけなのか…なぁ？
「この世界には大きく分けて二種類の魔法があります。神々の寵愛を受けてる者だけが使える『神魔術』と、人が己の魔力だけで発動させる『人魔術』があります」
昨日、お風呂で少しだけ説明をしてもらったのは神魔術で、私が腕に追った傷はその神魔術によって治してもらったらし。
「先程神魔術は神々の寵愛と言いましたが、一般的には女神の寵愛

と認識されています。ですので、神魔術といったら女神の魔法と思って下さって構いません。他の神々の魔法もありますが、その殆どは人魔術との区別が付き難く、本人も知らずに使っているようなケースもあるくらいす。そのため、女神イシュタリア様以外の神魔術はあまり知られておりません」

マリーンは一度言葉を区切り、先程かなが魔力鑑定に使った真っ黄色に染まった紙を見て、かなを見て言った。

「神魔術は使える者が極一部で、その大半は『神銀の乙女』や『神銀の騎士』の方々です。カナエ様、これは先程魔力鑑定で使った紙です。真っ黄色に染まっていますね」

そう言いながら、マリーンは真っ黄色に染まった紙を私やかなの見える位置に置いた。

「カナエ様、魔力鑑定の紙の色で黄色は神の色とされております。何故銀色に染まらないのかは解りませんが…。兎に角、黄色に染まったということは、神魔術が使えるということです」

机の見える位置に置かれた、魔力鑑定に使った紙は真っ黄色に染まっている。一部分ではなく、全部が真っ黄色に染まってる。

「これ程見事な濃い黄色を出した者は、今現在いません。カナエ様以外。カナエ様は神魔術の使い手で、それもかなり高位の使い手です」

かなは・・・女神の寵愛を凄い受けているって事なんだろう…。少し羨ましい気がする。

ほら、だって魔法とか使えるなら高度なのだって使えると楽しそうじゃない？

誰に言い訳みたいなこと言ってるんだか・・・。

そう思うと…私のあの変動しっぱなしだった青と緑の波線の紙。

結果を聞くのが、ちょっと聞くのが怖いです。

第二十六話（後書き）

説明ばかり続いてます。会話が多いから一行にびっしり文字が詰まっちゃいました。上手く説明出来ていると良いのですが。

今回は絡みは薄いですね。説明ですから。

でも、友達とか良いとか誉められてるの聞いたら喜ばしいけど、その後の自分の発表とかって怖くなりません？ドキドキっというか。

そこら辺、頑張って次か次の次くらいにでも表現したいと思ってます！

第二十七話

「カナエ様は確かに高位の新魔術の使い手にはなれますが、それには魔法の練習が必要だということを忘れないで下さい」
さくっとマリーンが浮かれたかもしれなところに釘を刺す。
かなが浮かれてるかどうかは、わからないけど…。浮かれてない気はするが。
「次は人魔術に関してですが、一般的に使われているはこちらのほうで、大体魔法と言ったら人魔術を指します。一番身近なもので人魔術は、調理台や風呂場など様々なところにある設備などに使われていますね」
ああ、昨日お風呂でピリっと電流が走った後、お湯が温かくなったあれだろう。きっと。
「人魔術は人が考え編み出した魔法ですので、かなり多方面に及びます。世界で共有されているものもあれば、その国特有のものまで様々です。お風呂のお湯の温度を調節できる機能は、実はスニクス国特有のものなんですよ」
「え!?そうなんですか!?」
かなは驚いて聞き返していた。
いや、まあ私も驚いたけど間髪入れずにかなが聞き返したから、何も言わなかっただけで。
実は、かなのこの言葉に衣を着せな物言いはかなり好きだったりする。
「はい。スニクス国特有なんです。お風呂という施設が『神銀の乙女』からもたらされた国ですから。術師たちが研究を重ねて編み出した機能なんです。他国だと、沸かしたお湯を張るのが精一杯なんですよ」
かなはなるほどと頷いていた。
マリーンは凄く嬉しそうに、お国自慢を語った。きっと、自国であ

るスニクス国が好きなのだろう。
私も、日本が好きかと聞かれると・・・好きではある。が、一部の自分の意見をはっきり言わないで内心では愚痴ばかりだとか、責任の擦り付け合いのような部分はすっごい嫌い。
…この世界にもやっぱり汚職とかあるのかな・・・？
「少々話がずれました。説明を戻します」
私の思考もずれていた。今は魔法の講義中だっての。

「人魔術は大きく四種類に分けることが可能です。攻撃魔術、身体魔術、錬金魔術、特殊魔術。攻撃魔術は名前の通りで、攻撃手段となる魔法です。魔物討伐者が好んで使う魔法ですね」
異世界に召喚された直後に会ったあの凶暴な不思議生命体、あれが魔物。
魔物討伐者ってのはやっぱり、魔物を討伐したりする仕事を職業にしている人なだろうか？
午前中の講義で魔物に縄張りがあると教えられたくらいだから…魔物の縄張り付近の街村とかだと、魔物の襲撃とかあるのかもしれない。
…魔物討伐者ってゲームとかで言うところの冒険者みたいなものなのかな？
「身体魔術は、魔法をかけられた相手の身体機能を向上させる魔法や、神魔術には劣りますが回復や結界魔法なども含まれます。錬金魔術は…そうですね、これは見てもらうほうが早いかもしれませんね」
マリーンは机の引き出しから、今度はハンカチのようなものとペーパーナイフを取り出した。
「これは普通のハンカチです。確認してください」
そう言って私とかなにハンカチを渡して、確認させた。
ちょっと上質そうな素材のハンカチのようで、肌触りが良かった。

確認が済むとハンカチをマリーンに返した。
「見ていてください」
マリーンは返却されたハンカチを片手に、もう片手にペーパーナイフを持ち、瞑想をするように目を閉じた。
少しすると握っていた手を開き、手に乗せている感じで持ってたハンカチとペーパーナイフがふわふわと宙に浮き上がった。
浮かび上がったハンカチとペーパーナイフが淡い光を放ちながら、互いに近づき、一つになった。
一つになった後、光は少しだけ強くなり、消えてその浮力を失ったように落ちた。
落ちていくところを丁度マリーンがキャッチした。
ハンカチは先程と違って、どこか硬質感があるような気がする。
別に、色が変わったわけでもないのだけど。
見た目の柔らかさが違う気がする…。
「触ってみて下さい。先ほどとは違う肌触りになっていますから」
マリーンは一つになった物体を私とかなに渡す。
触ってみて驚いた。
硬質感が増したというよりかは、編まれている糸が変わったんじゃないのかと思うくらい肌触りが違う。
さっきまでは、絹のような上質な肌触りの良いハンカチだった。
それが、今では金属質な糸で編まれたような肌触りになってる気がする。下手に使うと手を痛めてしまいそうな、そんな肌触り。
「これは・・・？これが錬金魔術ですか？」
かなも驚きながらマリーンに質問する。
私も言いたいことは同じだったので、マリーンがしゃべるのを待った。
「そうです。これが錬金魔術です。複数の物体を合成し、その特性を上げる魔術です。複数の物体を一つに合わせるため、合成魔術と呼ぶ人もいます」
マリーンは穏やかそうな微笑から、どこか悪戯しそうな笑顔になっ

た。
「コツとか掴めれば色々なものが作れます。私もこれで小さい頃小遣い稼ぎをしましたから」
悪戯しそうな楽しそうな笑顔に釣られ、私もかなもクスクスと笑い出したら止まらず、いつしか女性三人で大笑いしていた。

「錬金魔術は理解していただけたでしょうか？」
ひとしきり笑い終わって、マリーンが聞いてきた。
私はゲームとかしてるから、なんとなく理解できた。
「…大雑把になら…」
「ぅ…。ご、ごめんなさい・・・。よく、解らないです…」
かなはゲームとかはあまりしないので理解しにくかったらしい。
「んー…なんて言えばいいのかな…。身も蓋もない言い方をすると、料理みたいなもの？」
「料理？」
あまりにも身も蓋もない言い方だったかな・・・。例え方が下手だわ、私。
「料理は複数の材料を調理して、一つの料理を完成させるでしょ？錬金魔術も同じように複数の素材を合成させて、一つの物体を作るの。料理もコツを掴まないと失敗するし、錬金魔術もコツを掴まないと失敗するってこと。…変な喩えだけど、かな解った？」
かなは私の下手な説明を聞きながら想像してたのか、相槌を打ちながら若干手が物を掴む動作をしていた。
「うん。ありがとう、あきちゃん。なんとなくだけど解った気がする」
「ありがとう・・・。変な例えでごめんね？」
かなは首を振って笑顔をくれた。
「変な例えになったのって、私の身近にあるものでーって考えたからでしょ？」
「バレてましたか。まあ、かなにとって一番身近なのはーって思っ

たのは確か」
二人の世界…ってわけじゃなけど、私とかなの間に和やかな雰囲気が流れた気がする。
「料理…ですか。面白い例えです。間違ってもいませんし、確かに身近ですからね」
マリーンが少し関心するように言っていた、と思う。決して馬鹿にしてはいないと思いたい！

「最後は特殊魔術ですが…これは、攻撃魔術、身体魔術、錬金魔術のどれにも属さないものを指します。以上が人魔術の分類です」
…特殊魔術＝その他・・・ってことなのか。
「はい。質問です」
私は特殊魔術について、気になったことを聞いてみることにした。
「はい？どうぞ」
「特殊魔術にテレポート…転送魔法というか…えっと、遠距離を一瞬で移動するような魔法とかあるのですか？」
夢はやっぱりどこで○ドア！
一度でいいから体験してみたい！移動に時間のかからない楽さを！体験すると、その後が凄く大変そうだけど・・・。
「残念ながら、転移魔法は開発されておりません。…いえ、過去に開発を着手した結果として人魔法では無理だという判断になったそうです。神魔術なら可能かもしれませんが、かなり大量の魔力を消耗するものだと思われます」
なんだ…ないのか。至極残念です。

「お二人の魔力鑑定の結果ですが、カナエ様は先程説明の中でも言いましたが、神魔術との相性はとても良く、高位の担い手になれるほどです。また、魔力量は紙を色がどのくらい染めたのかと言うこ

とになりますが、見ての通り全部くまなく染まっていますね」
そう、かなの紙は真っ白な紙を真っ黄色に、白い隙間など無いほど染めている。
「ですから、カナエ様の魔力量もかなりのものです。高度な魔法を使うためには魔力量も高くなければいけませんが、カナエ様は両方の条件を満たしております。練習さえなされば、極めて高位の神魔術の使い手に慣れると思います。…ただ、紙の色から見て分かります通り…神魔術意外との相性はないようです」
紙の色の種類で魔法の相性。紙の色の染まり具合で魔力量なのか…。思ったより大雑把な魔力鑑定な気もするけど…こんなもんなのか。
かなは説明をふむふむ聞きながら、それ以上は何も言わなかった。
「次にアキネ様ですが…色を見ていただければわかると思いますが、神魔術は使えませんが人魔術の攻撃魔術と錬金魔術と相性が良いようです。また、魔力量は珍しですが一定ではありません。どのような状況下で変動するのかは判明しておりませんが、弱い時はとても弱く、強い時はかなり強いものだと思われます。これは、予測でしかありませんけれども…。もしかしたら、練習で調節できるかもしれません」
攻撃魔術と錬金魔術か…。
しかし、魔力量は一定ではないって…なんだかお前は不安定な子だって言われている気分だ。なんでだろ?

「お二人共、魔法とは一朝一夕で身に付くわけではありません。魔法を使えるようになるためには練習が必要で有り、その後の鍛錬も欠かせません。魔法とは便利だというのは確かです。ですが、未熟な状態で自身の力以上の魔法を使おうとしたら、その未熟な力は己に返ってくる、そんな危険なものでもあります。魔法とは便利であり同時に危険なものでもあると、常々心に留めておいて下さい」
マリーンってば自身のことを未熟者ですがって言ってたけど、教師とか教える側も結構向いてるんじゃないのだろうか?ちゃんと、良

い点と悪い点を解りやすく説明してくれたし。
かなも、同じ気持なのかもしれない。
マリーンの最後の釘刺し発言に、真剣な表情で話を聞いていたようだったし。

「では、次の鐘が鳴る迄の間、魔法の練習でもしてみましょうか！」

マリーンはにこやかに宣言した。

第二十七話（後書き）

魔法の説明終わった！説明文、解り易かったらよいのですが。
ここはどうなの？ってのありましたらどうぞご質問下さい！

更新ペースが１０日前後になってる…。これ以上遅くならないように頑張っていかないと！引き続きお付き合いお願いします！

第二十八話

夕方の鐘が鳴るまで、マリーンの宣言通り私とかなは魔法の練習を行った。

魔法の練習と言っても、想像していたような派手なのではなく、かと言って座学な勉強ではなかった。

怪しげな、どこかの占い師が使ってそうなバレーボールサイズの水晶球に向かって手を翳し、水晶球の中央に光を灯すという謎作業だった。

手を翳しただけで水晶球の中に光が灯るかっての…。

かなも同じ気持だったのか、練習の説明を受けているとき「は？」って感じの顔してたし。

マリーンからの魔法の練習の説明を終えて、リディルがお手本を披露したのを目の当たりにし、私とかなはこの謎作業を行うことになった。

この謎作業、もとい魔法の練習はイメージが大事らし。水晶球に手を翳し、光が灯るイメージを。

私とかなに同じサイズの水晶球が渡され、練習に入った。

かなはゲームや漫画などファンタジーなどの摩訶不思議な物語などには疎く、イメージがいまいち弱く練習に手間取っていた。

逆に私はゲームや漫画などファンタジーを好む方だったので、なんとなくイメージがし易く、練習もスムーズに行っていた。

練習して解ったことは、魔力とかはよく解らないが、使いすぎると命が危ないってのはよく実感できた。

水晶球に光が灯った数秒後、短距離ダッシュをした時のように全身の血がドクドクと滾るように駆け巡った。その後で凄く疲労感を覚

えた。
私がそれを言ったらかなは、冷水を浴びせられたようにゾッとした寒気が全身を支配して、鳥肌がたったとのこと。かなも酷く疲れたと言っていた。
マリーンの説明だと、使った後の状態に個人差はあるけれどもその疲れが魔力の放出によるものだと、自身の魔力量以上の力を出そうとすると命を削られると教えられた。
この魔力の放出を、効率よく少ない魔力で大きな力を発揮出来るようになるために行うのが魔法の練習。
何も水晶球に光を灯すのが当たり前のやり方という訳ではないらしい。
水晶球に光を灯すといった練習法は、自分の魔力量すら把握出来ていない初期だけに使用するようなものらしい。
各人が何度も練習を重ねて、自分のやり方を身につけていくもので、決まった練習法はないとのこと。
まあ、しばらくは私もかなも水晶球に光を灯す練習をしていくらし。

そんなこんなで、今日の講義は終了した。
昨日、エリー女王が言っていた時間数より多い気はしたので理由を聞いてみたら、今日は『聖帝の祭日』の前夜祭のためお城の外へはいけないし、城内でも行ける場所は決まっているからとのこと。
また、メイドさん達もかなり忙しいため何もすることがないーってぼけっとお茶などをするよりかは時間を有効にと思い、講義の時間をリディルの判断で勝手に増加させたそうだ。

おのれ、リディルめ。
まあ、魔法の練習は少し楽しかったからいいか。

夕方の鐘が鳴り、夜ご飯の用意にメイドさんが廊下を帆走する。
昨日の事があるため、今日の夜ご飯はテラスでかなと護衛の少数で取ることになった。
護衛の兵士は再度交代していた。また、準備が終わったとかでクラウも食事に参加しに来ていた。
夜ご飯もサティが給仕をしてくれていた。毎度助かります。
食事の時にクラウに明日の予定を教えられた。

「明日は『聖帝の祭日』になりますが、午前中のうちに女神イシュタリア様とお会いして頂くことになります」
魔法のことで浮かれてちょっとばかり忘れてましたが、明日の『聖帝の祭日』でこの世界に私とかなを呼んだ張本人の女神に会える日。
会ってどうするって、そりゃもちろん「家に返してください」って頼むしかないでしょう。
もっとも、直ぐに元の世界に戻してもらえる気がしないけど…。
「午後は城内に居て頂くことになります。人の出入りが激しく、欲望のために『神銀の乙女』に危害を加えるものがいないとは言い切れませんので…。残念ですが、城下町の祭りに行くことお控えください」
城下町でお祭りがあるのか…まあ、そりゃそうか。
国を挙げてのお祭りだから、城では儀式的なものがあって城下町で夏祭りみたいな祭りがあるのだろう。多分。
「あの…かなに…『神銀の乙女』に害する者が居るかもしれないのですか…？」
クラウは苦々しいような表情で教えてくれた。
「…この世界にも、愚か者というものはいます。『神銀の乙女』に言えば自分の望みを女神に聞いてもらえると考える者や、全ての創

造主である女神に反旗を翻す者など…嘆かわしい限りです」
この世界にも、宗教戦争みたいなのあるのか。
「ですが、ご安心下さい。このクラウが必ずお守り致します」
なんて歯の浮くようなセリフを素で言えるのか…。
かなは乙女だから頬をほんのり染めてました。私はまあ…バレてなければいいのですが、寒イボでそうです。

他には、明日の午後『聖帝の祭日』で行われる『女神の祭典』に出品する物を決める出展会。
これに、かなは『神銀の乙女』として参加して頂かなければいけないということ。
この出展会に関して、私がどうするかは未だに決まってないそうで、明日女神に会ってからどうするか女王が判断するそうです。
まあ、確かに立場としては不確定な立場だから…仕方ないけど。
説明や談笑などを交わしながらの夜ご飯はあっという間に過ぎていくようでした。

今日の夜ご飯とても美味しかったけれど、昨日の夜のご飯も凄く美味しかった気がする。
でも、例え美味しいご飯でも…家のご飯が…食卓懐かしい。
時々味付けを間違えるお母さんのご飯が懐かしい…。
…この世界に慣れたらかなと一緒に郷土料理をつくろう！

そんなこそっと小さな野望を抱きながら夜ご飯は終わり、サティに案内してもらい風呂に入って、明日に備えることになった。

明日、会えることの出来る女神がどんなものかと期待と不安を胸に抱えながら、私とかなは就寝した。

第二十八話（後書き）

書こうと思ってた予定の内容。書いてたら変わっちゃった…あれ？

更新ペースを落とさないように頑張っていきます！

物語の進行速度が遅い気がしますが、お付き合い願います！

第二十九話

よもや…ここまで体が年を取っているとは…。
日頃の運動って大切ですね。

一作日にした馬での遠乗り。あれの筋肉痛が来ました！
来て欲しくはなかったんだけどなぁ…。

歩けないほどでもなので、サティにお願いしてこの世界の湿布みたいなものを処方してもらいました。
流石に、今日は『聖帝の祭日』のため城中の人が朝からずっとてんてこ舞いの様子。それに、この程度なら魔法に頼らずに治すのが普通らしいので。
まあ、筋肉痛は私たちの世界でも湿布などを貼って凌ぐのが普通だし問題はない。
もし、問題があるとしたら今日は一日痛みのせいで走れそうにないということ。
うん。まあ、問題はないだろう。

かなは・・・普段休みの日にスポーツクラブとかに行ってたらしく、筋肉痛にはなってないそうで。
羨ましい。

薬を処方してもらい、朝食も済ませ、衣服も女神にお会いする上で失礼のないような上質なこの国の正装のようなものに着替え、後は女神との会合の時間を待つだけになった。
女神との会合の場所は、城の一番上に位置するゲームなどに出てき

そうな神殿のような荘厳な雰囲気の広間だった。天井近くのステンドガラスがとても綺麗です。
とは言えども、さすがに厳粛な雰囲気に雑談をするのは気が引けて、黙っているとじわじわと緊張が登ってくる感じだった。
かなも少し強張った表情だった。きっと、かなも緊張しているんだろう。
何事も無く、平穏無事に家に返して貰えれば良いのだが・・・そうはならないだろう。
昨日の講義で勉強した通りに、巡礼の旅みたいなのをしないといけないのだろう。多分。

広間には私とかなの他に、『神銀の乙女』が四人『神銀の騎士』が六人、スニクス国の騎士の多分将軍あたりの人が三人に王子エルサレムが居た。
この場に全員が集まったのだろう、エリーディーン女王が広間に入って来ると小声で交わされていた会話は無くなり、広間は沈黙に包まれた。
広間の最奥にある少し変わった十字架のようなオブジェクトの前で、女王が『聖帝の祭日』の口上を述べ、締めくくりに女神への感謝の言葉を言った。
最後の女神への感謝の言葉には、私とかな以外の全員が復唱した。
復唱が終わると、女王の手から光の玉が生まれた。
光の玉は天井に向かって浮上し、天井を突き抜けて私たちの視界から消えていった。
少しして鐘の音がガランゴロンと響いてきた。
きっと、この鐘の音が祭りの始まりなのだろう。

鐘が響き終わると、女王とリディルとフーガ、クラウ以外は広間から出て行き、私とかなを含める6人が広間に残った。
私とかなが所在なさ気にしていると、リディルがいつもの笑顔で教えてくれた。
「今から、待望の女神イシュタリア様と会合になります」
うう…緊張します…。どうなるんだか…。
「…ところで、どうして他の人達は出ていかれたんですか？」
かながリディルに質問をした。
確かに、女神との会合なら他の『神銀の乙女』や『神銀の騎士』が残ってもいいはず。
だが、この場には『神銀の騎士』であるリディルとフーガ、クラウの三人だけしか残らなかった。また、王子も広間から出て行ったし…。
「『神銀の乙女』も『神銀の騎士』も女神との会合に立ち会うことは許されてないのですよ。女神が直接国王に命令を下したその時にだけ、会合の場に立ち会える」
そう言ったリディルの表情はなにかこう、憂いを帯びてるとでも言うような感じだった。
…でも女神から神託が降りるとか…なんとか言ってませんでした？
私とかながリディルの説明に不思議そうに首を傾げていると、女王が教えてくれた。
「国王とは女神からの命令を賜る者。『神銀の乙女』は女神の声を聴く者。『神銀の騎士』は女神の剣となり盾となる者」
「じゃあ、それ以外の人は？」
今の説明でつい、疑問になったことを聞いてしまった。
一瞬だけ女王は目を大きく開いたように、でも直ぐ微笑を浮かべた。
「民は女神の手足となりこの世界を潤す者」
「・・・そう・・・なんですか」
私はそれを聞いて、何も言えなくなった。
何も言えなくなり、視線自然と下を向いた。

…なんでだろか、私って穿った見方をし過ぎなのかな…。
女王はこんなに誇らしく、女神のことを教えてくれる。
リディルだって…女神に関しては全てが真剣だし。
クラウもフーガも、サティやマリーンも…皆女神を敬愛しているような感じだし。
話だけを聞いてると、女神は良い神にしか聞こえない。
まあ、寧ろかなと私を召喚した神が邪神様とか考えるのが、どうかしてるのかもしれない…。
…多分、邪神だと思って女神を悪者にしたかっただけなんだろう・・・私は。
なんて、浅ましい人間・・・なんだろか、私は。

私は内心だけで苦笑する。
顔に出てなければいいのだが。
「どうしたの？」とか聞かれたところで、答えられるはずもないから…。

「御見えになられた」
フーガが十字架のようなオブジェクトの方を向いて言った後、オブジェクトに向かって騎士の礼をとった。
リディルもクラウも同じように騎士の礼を。
女王は頭を下げる会釈に留まった。
私もかなもどうすればいいのか解らず、棒立ちしていた。
「待たせてしまいましたね、エリーディーンも騎士たちも面をあげて頂戴」
ふんわりとした、というような表現が合いそうな綺麗な声が聞こえ

てきた。
綺麗な声は、直接頭に響いてるような錯覚を起こすような声だった。
オブジェクトが光ったのか、眩い光が広間を照らした。
かなも私もそれを直接見てしまったせいで、暫く目が霞んだ。

視界が元に戻った頃、オブジェクトの前にホログラム映像のような
半透明の女性の姿があった。
私は唖然とその女性を見ていた。
女性は半透明だけど、その色彩はよく解った。
形容すべき色は銀色。
彼女が女神イシュタリアなのだろう。
「あながたカナエですね」
半透明の女性はふわりとかなの直ぐ目の前まで近寄ってきた。
幽霊と言ったら失礼だけれども、でも彼女は宙に浮いているようだ
った。

目の前まで来た女性を、かなはずっと見ていた。
その様子はどこか変だった。
唖然としているように見ているわけじゃない。
かなのその表情がなんなのか、かなが発した一言で理解した。

「お母さん…？」

かなは、女神だと思われる半透明の女性を見ながら、そう呟いた。

かなは「お母さん」と呟いた。

でも、かなのお母さんは・・・。

かなのお母さんはかなが専門学生になった年に亡くなった。
私も通夜には参加したし、その後のかなやかなの父親の様子もみている。

なのに、かなは今、目の前の女性に向かって「お母さん」と言ったのだ。

かなの目の前に居る半透明の女性は、かなのお母さんに似てなどいないのに。

第二十九話（後書き）

やっとで女神様が出てきました。主人公、緊張のあまりマイナス思考に突入です。
自分に言い訳をしながら、精神的なものの安定をはかる子ですね。

拙い文章で長くなると思いますが、宜しければお付き合い下さい！

第三十話

（かな…？）

かなに「お母さん」と呟かれた女神は、かなの母親とは似ても似つかないそんな容姿だった。

ホログラム映像のような女神は人間と同じ形だが、人間とは思えないほどの美しい美貌で…あまりにも美しすぎて彼女が人間などではない女神なのだと感じる。

彼女はとても綺麗で、とても綺麗で綺麗すぎて、怖い。

『神銀の乙女』や『神銀の騎士』などの職業？があるように女神は銀色だった。銀の髪に銀の瞳。服は真っ白なふわふわのドレスのような服に、そのドレスの細部に銀色の刺繍があり、艶やかだった。

雰囲気も神秘的な感じのなかに、全てを包み込むような母のような優しさが溢れていた。

全身で女神と言っているといっても過言でない気がした。

私は彼女もとい女神を観察するようにじっと見ていた。

いきなり女神はこちらを向き、視線がぶつかった。

「あなたが…アキネですね」

にこりと微笑を浮かべた女神。

女神。

女の神。

この世界の神々の一柱。

目の前に、神様がいる。

でも、実感が沸かない。

「あ、はい。そうです」

なんとも間抜けな返答をしたものだと、後で思うような返事をしてしまった。

私は今、思いっきり緊張しているのだろう。

そうでなければ、平常であれば、気づけたかもしれないものに、今の私は気づけなかった。
「私はイシュタリア。カナエ、アキネ。良く来てくれました。歓迎します」
女神は微笑を浮かべたまま、私とかなを歓迎した。
「あ、あの女神様。私たちを元の世界に戻してください！」
「お願いです！元の世界に帰してください！」
建前も何も無い。ただ、私もかなも思っていることを女神にぶつけた。
「カナエ様！！」
女神の後ろにいるクラウが声を荒らげた。直ぐ様、横に居たリディルに制されて、次の言葉を発せられずにいた。終わったら…もしかしたら説教でもされるかもしれないな。
本音をぶつけられた当の女神は、ただただ哀しそうに顔が歪んだ。
折角の綺麗な顔が台なし…と思ったけれど、それすらも美しい。
麗しい美貌は哀しい表情すら魅力とするようだ。
「ごめんなさい。カナエ、アキネ。今の私には二人を元の世界に戻すための力がありません」
ああ、やっぱり思った通り…教えてもらった通りに女神の力の断片集めの旅になるのか…？
私は視線を女神から下げた。視線を上げる前に少しだけ、かなを見た。
かなの表情は沈んだような、落ち込んだような表情に見えた。
「カナエ、貴方を呼んだのはそのためです。この世界に散らばる私の力の断片を集めて来て欲しいのです」
・・・あれ？私の名前は呼ばれなかったし…お二人とかも言われてない…。
それよりも、昨日から少し気になったことが一つ。
この世界に来て直ぐに疑問になったことが一つ。
私は女神に聞いてみることにした。答えてくれるといいんだけど…。

「あのすみませんが、二つほどお伺いしても宜しいでしょうか？」
「私に答えられることなら」
緊張で、手が震える。
欲しい答え…。それはきっと貰えないんだと思う。それでも、聞かずにはいられない。
「一つは、力の断片を集めるのに何故この世界の『神銀の乙女』じゃ駄目なのですか？」
女神は一度目を瞑り、軽く頷くような仕草の後、答えをくれた。
きっと、過去に聞かれたことがあるのかもしれない。
「貴方の言う通り、この世界の人で済めば私もそうします。ですが、この世界の人には私の力の断片を受け入れる事ができません。だからと言って、何もしないままこの世界を、私の愛しい子供たちを殺してしまうような真似もできません」
女神は一度言葉を区切り、痛々しそうな表情になった。
「私は…この世界に生きる愛しい子供たちを守りたい…。勝手に呼ばれた貴方たちの気持ちも、少しは解るつもりです。それでも、私は私の愛しい子供たちを守るために、私の力の断片を集めることが出来る人をこの世界に呼びました」
「そう・・・ですか。分かりました」
なんだろう…女神というより、誰かの母親と話してる気分だ。
いや、実際そうなんだろう。
この世界の住人にとっては女神は偉大な母親なのだ。
そして、女神にとってもこの世界の住人は愛すべき子供なんだ。

「アキネ、二つ伺いたいと言いましたね。もう一つはなんですか？」
「あの・・・私はどうして呼ばれたのでしょうか？」
その質問には、女神の奥にいる女王や騎士たち、きっと隣にいるかなも驚いたような表情になった。
「『神銀の乙女』以外がこの世界に召喚されたことは過去の事例に

はないと教えてもらいました。でも、私は『神銀の乙女』ではありません。『神銀の乙女』はかなであって、私は違うみたいだし。じゃあ、どうして私は呼ばれたのでしょうか？女神様、教えて下さい？」

私は一気に捲し立てるように言った。

この世界に来て、教えてもらってからずっと疑問だった。

女神は少しだけ目を伏せ、少し悲しそうな表情をした。

もう、それだけで十分理解してしまった。

私は呼ばれてなんていないんだと。

表情に出てないといいな。

女神の後ろにいる人達に、情け無いような顔なんて見られたくないや。

「私は探し出して、呼びかけ、道を示すのが力。弟の力で、道を開きます。・・・今まで、こんなことは無かった。私にも、アキネ貴方が何故この世界にいるのか解りません。・・・弟が呼んだのか、それとも事故だったのか…解らないのです。ごめんなさい」

・・・まあ、なんだ・・・今更落ち込むのもあれだけど、やっぱり直接聞くと落ち込みますね。

弟に呼ばれたのかもと言ったが、そんな気がしない。

きっと私は・・・かなのおまけのようにこの世界に来ちゃったんだ。

・・・おまけのようにだ。

「・・・あきちゃん・・・」

私を気遣ってだろう、かなが心配そうな声色で呼びかけてくれた。

「かな・・・。大丈夫」

そう、大丈夫。

おまけだろうとなんだろうと、来ちゃったからには仕方ないさ。前向きに考えようって、この間決めたばかりだし。そう、前向きに！

かなを心配させたくなくて、頑張って笑顔を作ったつもり。

上手く笑えた自信は無いけど、伝わってくれるといいな。

「女神様。かなと私が自分たちの世界に戻るためには、貴方の力の断片を集めれば、帰れるのですか？」
かなも作り笑顔だと解っただろうが、それでも察してくれたのかそれ以上は何も言わないでくれた。
私の発言にかなの視線は女神へと移動した。
「ええ。力さえ戻れば、貴方たちの居た世界を探し、道を示すことができます。道を開く力を持つ弟も、その場に居させます。そうすれば、貴方たちを元の世界に戻すことは可能です」
かなのほっとしたように小さく「よかった」と呟いた。

「では、リディル、クラウ、フーガ。貴方達三人がカナエの護衛として旅の共をしなさい。アキネ貴方は危ないので、スニクス国でカナエが力の断片を集め終わるのを待っていると良いでしょう」
「私も行きます！」
考えたりする前に、口から言葉が出た。
きっと、考えても同じ言葉しか出なかった気はするけれど。
「あきちゃん」
かなが少し嬉しそうに呼んでくれた。
目の前に居る、女神は少しだけ目を細めて言った。なんだか威圧感があります。
「危険な旅になります。それに、護衛対象が増えれば騎士の負担も増えることになります。ですから貴方はこの国に」
「待ってるだけなんて嫌です！お願いです。かなと一緒に居させてください！私にはかなが必要なんです。それに、私にも関係してることです。女神の力の断片が集まらなかったら帰れない…」

女神の言葉を遮るようにして、叫ぶ一歩手前のような声量で言った。
最後の方は徐々に小さくなって声が震えていた気がするが、私の頭の中は混乱していたから気づかない。
この時私は何を言っていたのか、よく理解していなかった気がする。
ただ、置いて行かれたくないとだけ。その気持だけが、今私の口から言葉を紡いでいた。
「危険な旅なのに、自分だけ安全なところで待っているなんて出来ない。かなと一緒に行かせてください！」
少しだけ、沈黙が降りた。
女神が何かを言おうとする前に、聞き慣れたかなの声が広間に響いた。
「私からもお願いします。私もあきちゃんが一緒のほうが心強いです。騎士の方々には負担になるかもしれませんが・・・お願いします」

再び、沈黙が訪れた。
「危険な旅ですよ？命の保証など出来ません。騎士にはカナエの護衛を第一と優先させますが、それでも旅に着いて行きますか？」
女神は、ゆっくりと事実だけを淡々と述べた。
「はい」
ホログラム映像でも解るような溜め息を、女神がついた。
そして、至上の笑顔を浮かべて言った。
「カナエと共に私のところまで来て下さい」

これが、私とかなの旅の始まりの言葉となった。

第三十話（後書き）

やっと、あらすじで書いた部分までたどり着いた。めっちゃ遅い気がしますが許してください。書きたいと思ったこと書き連ねてたら…気づいたらこんな遅いところに…。会話ばかりで不明瞭な部分があるかもしれません。解りにくい部分がありましたら指摘でもしてください。頑張ってみます。

引き続き宜しくお願いします。

第三十一話

『女神の祝福』を受け、女神との会合は終了した。
女神は最後に「カナエを宜しくお願いしますね」と言って、そのホログラム映像のような姿は霧散して消えていった。

出発までの日程などは後日追って通知すると、女王に教えられた。
今日の午後は『女神の祭典』に出品する物を決める出展会。
そして、かなはそれに出席しなければいけない。
私は、これには参加しなくても良いと言われた。
暗に参加するなと言われてる気がするけど、そこは気にしない。

出展会までの時間に昼食を摂ることとなった。
食事するところは、以前私が逃げ出した大広間。
でも、人数は女神との会合に立ち会った人と、始まりの挨拶の時に居た将軍の三人と王子。それに、給仕メイドがサティを含める三人。
合計十三名。
大広間はもっともっと大人数が入れるような場所だから、十三人だとかなり広々と空間が余った。
さすがに今度は逃げ出すことはなかった。

「さて、この後の出展会ですが、カナエ様には出席していただくことになります」
「はい」
食事をしながら、女王が今日の午後からの日程を説明した。
出展会の後、夜は『神銀の乙女』や『神銀の騎士』がメインとなる舞踏会があるとのこと。
舞踏会にはスニクス国の者だけではなく、他国からの来客も参加するとの話。

そして、『神銀の乙女』としてこの世界に呼ばれたかなもそれに参加しなければいけないと言われた。
問題の私に至っては、女王も少しどう扱おうか困ってるような気がした。
だって、何も言われていないから…。
どうせよとも、どうするなとも。何も。
ずっと説明を聞いていて、私のことは何も触れられずにいたため、かなが女王に質問をした。
「あの、あきちゃんは…私と一緒に参加することになるのでしょうか？」
これには少し困ったように、女王は私へと視線を向けた。
「…もし大丈夫でしたら、城下町でお祭りをしていると聞きましたので、それを見に行ってみたいのですが…」
私のこの発言に、女王は少し何かを考えた後、命令を下した。
「アウグスト将軍。そちらの部下から護衛を一人つけよ」
「承知いたしました」
いかにも中世騎士の将軍！って感じの顎髭を蓄えたおっちゃんが、女王の言葉に応じた。
多分、ここで護衛を断るのは無粋と判断。大人しく言うことを聞きます。
というか、断ろうにもきっと女王との口論で負けるのは眼に見えている。

「…かな、ごめんね？」
「へ？何が？」
食事を終え、かなは次の出展会に参加するためのお着替え中。
私は女神様との会合用のご立派なドレスから、用意された動きやすそうな普段着？にお着替え中。
主語も述語も吹き飛ばして、いきなり「ごめんね」じゃかなには伝わらなかったらしい。

「いや…なんて言えばいいのかな…。その、一緒にいて欲しいとかいいながら一人で街に遊びに行くようなこと言って…ごめんね」
「ううん。大丈夫。だって、あきちゃん居づらいんでしょ？女王様だって、どうするべきか困ってたみたいだから…。だからでしょ？」
かなは、優しい。
こんな時、かなの気遣いに心底癒される。
「ありがとう。…もし、面白いものがあったらお土産でも…ってお金ないか…」
「土産話で十分だよ。楽しみにしてるね」
「あ、あんまり期待しないでよ…？私も、かなの話聞かせてね」
「うん！」
かなと二人で笑いあう。
私はこの瞬間が好き。

あの広い衣装部屋を出ると、そこにはクラウと兵士よりも随分立派な鎧を着けた青年が一人立っていた。
「お待たせいたしました、クラウ様」
「いいえ、そのようなことは。カナエ様。お綺麗でございます」
クラウはいつものように、かなの前で一度跪き、立ち上がった後は「お手を」とばかりに腕を差し出しエスコートの体勢を取った。
「では、カナエ様。参りましょうか」
かなはほんのり頬を染めながら、クラウの腕をとった。
「じゃあ、かな。また夜にでもね」
「うん、それじゃあ行ってきます。あきちゃん」
そう言うと、かなはクラウにエスコートされながら出展会の会場へと向かっていった。

衣装部屋の前にサティと多分騎士だろう青年と私の三人が残った。
「私がアキネ様、貴方様の護衛を担当させていただくことになりました。フィンマクヴェル・ラシーヌと申します。呼びにくいようでしたら、フィンと」
ご立派だけど綺麗な鎧を着た、青年は人懐っこい笑顔で言った。
「フィン…さんですね…。えっと…ラシーヌって…その…サティさんの？」
「ふふふ。そうです。私の息子ですよ」
人懐っこい笑顔でサティが答えてくれた。
フィンマクヴェル・ラシーヌはサティ・ラシーヌの息子。
サティもその娘のマリーンも、そして目の前のフィン青年も人懐っこい笑顔。
この笑顔はサティの血筋というわけか！？
「自慢の息子です。…きっとアウグスト将軍もアキネ様を気遣って、私の息子のフィンを護衛にしたのだと思います」
「…そうですね。全くの身知らずの相手より、サティさんの息子さんって方がなんだか嬉しいですね」
こっちの世界に来てしまってから、ずっとお世話になってる相手だし。
私ってば単純だから、もうサティのこと信用しちゃってますし。
それに、共通の会話としてサティの話を上げることができる！
「大変だとは思いますが、護衛宜しくお願い致します」
そう言って、私はフィンに頭を下げた。
「こちらこそ、宜しくお願い致します」
フィンも丁寧に頭を下げ、こちらに合わせてくれた。
サティは他の仕事があるらしいので、衣装部屋で別れ、私はフィン

と一緒に厩へと行き馬に乗って城下町に行くことになった。
…歩くのも大変だけど、馬も厳しいかも…。おのれ、憎いぞ筋肉痛め！

「ああ、そういえば。これを渡し忘れるところでした」
そう言いながら、フィンは腰のベルトポーチから紐のついた小さな革袋を取り出した。
「王よりの賜り物です。それと伝言です。“楽しんできてください”と」
フィンは小さな革袋を私に渡した。
私はそれを遠慮無く開けてみた。
中には金貨が数枚と銀貨が一枚入っていた。
「お金…ですか…」
「そうです。お祭りに行くのですからね。欲しいものがあってもお金がなければ、買えませんから」
フィンはサティ譲りの人懐っこい笑顔で説明してくれた。
「さあ、それは首に下げて衣服の中にしまっておいて下さい。今日は祭りですので、きっと人混みですから。盗まれたりなどしたら、お土産も買えませんよ」
「そうですね。わかりました。そうします」
フィンの笑顔に釣られるように、私も笑いながら小さな革袋を衣服の中に入れ込んだ。

なんだか、嬉しい。
例え、望まれてこの世界に来た訳でも無いが、それでも立場を思い気遣ってくれる優しい人がいる。
それだけ、私は…この世界を少しだけ好きになれそうな気がする。

今はまだ、私は知らない。
あの時の言葉の意味を。

第三十一話（後書き）

少々今回は（も？）読みにくいかもしれません。少し急いでしまって、文法がめちゃくちゃになってそうな…。問題は指摘されないと本人だけだと気付けないこと。

主人公は決して空気が読めない子ではないと思いたい…多分、きっと。

しかし、恋愛とキーワードに入れてるのに恋愛してるのは主人公じゃなく親友のかなちゃんだけって…あれ？

宜しければ感想などあると励みになります。参考にもなります。拙い文章ですがどうぞよろしくお願いします。

第三十二話

栗毛の馬に揺られながら、城下町へと続く道をフィンと一緒に行っている。
ぱっからぱっからっと、フィンの話だと馬車と同じ程度の速度で行っているそうだ。
ほどほどの速度で（自転車くらい？）行ってくれるのですが、正直なところ、それでも振動が筋肉痛に響きます。
ついでに、馬車は城と城下町を一日三回往復するらしい。
今日は聖帝の祭日のため、城への出入は制限され、朝と夜の二回だけのため、馬車ではなく馬で城下町に行くことになった。

「街に到着したらアキネ様に術をかけます。ずっとお側に居るつもりですが、お祭りですので人がごった返しています。ですので、逸れないように術をかけさせて頂きます」
そう言って、フィンは後ろから説明をしてくれている。
そして、その説明はいい具合で男性と密着しているという事から気を逸らしてくれるかと思いきや…逆効果です。
「危害などは加えませんが、アキネ様にかける術は一応攻撃魔術の一種になります」
フィンがしてくれている魔法の説明は全く頭に入りそうにありません。
真後ろから聞こえる男性の声が、自分が男性と密着して馬に乗っているという事実を叩きつけます。
くそう…こんなことなら寡黙なフーガとの同乗の方がましだった…。
「は…はぁ…」
そんな気の抜けた返事しか出来ないじゃないか！

筋肉痛も響くのだが、フィンの後ろから聞こえる声も何かに効きます（何にだ）。
考えないように考えないようにと思えば思うほど、考えてしまうわけで…。
ドキドキはしますよ。そりゃフィンはどちらかと言えばイケメンだろうし。格好は良いと思う。
でもだからって、男性経験なんてないさ！って誰に逆ギレしてるんだ私。
もう、頭真っ白。いや、寧ろ暴走？かなちゃん、助けてください。
「…馬乗りは緊張しますか？大丈夫です。私が居ますから落馬など致しません。ご安心ください」
いや、だからフィン。あんたが後ろにいるからすっごい緊張するんだよ！
とは言えども、乗馬なんて一作日したのが初めてだから一人じゃ乗れないから、城下町に到着するまでこの苦行に耐えねばならんのか…結構、辛いかもしれない。

私は返事も言えずに黙していると、何かを察したのかフィンが聞いてきました。
「…その、失礼ですが…私自身に緊張してたり…しますか？」
ズバリ、言い当てられました…。図星です。
「…ご、ごめんなさい。その、あまり男性の方と接する機会がなかったもので…」
どうせ、私は彼氏いない歴＝年齢の人です。
男友達がいたところで、こんな風に密着することはなかったし。免疫なんて皆無です。
きっと今自分は真っ赤になっているのだろう。顔がすごく暑い。
「それでは、アキネ様。私が説明をしていることの意味を理解する

ことだけに、集中してください」
いや、フィン先生。それができたら苦労してない…。
「が、頑張ってみます…その、申し訳ないです」
「いいえ。こちらこそ配慮が足りませんでした。城下町に着くまで今暫くご辛抱下さい」
そして、それからフィンによる魔法の説明が再開されました。

結論。
集中できませんでした…。
フィン先生。不出来な生徒でごめんなさい（いつ先生生徒になったんだ）。

城下町の城門をくぐって、少し行ったところに兵士の詰所のような大きな建物。
そこにフィンは馬を進めた。
道中出来る限り気をつけながらフィンは魔法の説明をしてくれたのですが、あまり理解できませんでした。大雑把にならなんとか…理解したようなしてないような。
詰所で厩にフィンの栗毛の馬を預け、フィンは私の両手を握った。
「少しだけ、我慢してくださいね」
人懐っこい笑みを浮かべながら、フィンに握られた私の両手。顔から火が出るぞコラ。
私の手より、若干温度の高い温かい大きな手。

って…温かい通り越して熱いわ！
「あつっ」
「もう少しだけ、我慢してください。今、術をかけてますので」
そう言って、フィンは握っている両手の力を強くして、振りほどかせてくれませんでした。
ものすっごい熱いのですけど！
火傷まではいかないけど…何と言えば良いんだろう。熱いお風呂に両手だけ突っ込んでいる感じ？
「終わりました。熱かったでしょう。すみません」
フィンは私の両手を離し、腰のベルトポーチから綺麗なハンカチを取り出した。
ボソボソと何か呟くと一瞬だけハンカチが淡く光り、そのハンカチを私の両手に握らせた。
「冷たい…」
ハンカチは乾いた状態のように柔らかいのに、水を湿らせて凍らせたように冷たかった。
フィンはその様子を見て、楽しそうに笑顔で言った。
「まず詰所で町の地図を見ながら説明をしましょうか。それなりに大きい街ですので、場所を絞って観に行かないと、朝になってしまいますからね」
そんなわけで、私はフィンに案内されるまま詰所の建物に足を運んだ。

街の説明を受けて、何処に行くかをフィンと決めました。
まず中央通りにある夕方の市（というか出店？）とそれが終わる頃に開催されるパレードを観に行くことにした。パレードを観たら晩ご飯を食べるという予定。

パレードから二時間くらいしたら、城へ往復する馬車の夜の便が出るそうだから、帰りは馬車に乗って帰ろうという案で決定した。はい、栗毛ちゃんの馬には失礼ですが、筋肉痛が辛いです。

そうそう、フィンが私にかけた術ってのは、攻撃魔術の一種で捕縛術。それの派生らしい。
なんでも対象者の魔力と術者の魔力。それを目視できない魔力の糸で繋ぐというもの。
もっとも、術者から対象者にらしいので、対象者からは術者が何処に居るというのは把握できないらしい。
フィンの話だと、今回かけたのは半径一キロメートル位の範囲にしか効果がないとか。それ以上の距離になると、魔力の糸が切れてしまうらしい。
この街の大きさからそれだけあれば、十分だろうと判断したからしい。
一応、常時術者の魔力を微々たるものだが削る、持続系の魔法らしいのです。
効果範囲が広ければ広いほど、削られる魔力も大きくなっていくとのこと。そりゃそうか。
説明を受けて思ったこと。

犬のリード？

いや、まあ、知らない場所で迷子になったりするよりは遥かにましです。
熱かったけど…。
術をかけるときだけ、だからよかったけどね。

でも、私はあとで後悔することになった。
対象者である自分からフィンが何処に居るか、把握できない事を。

そう。私は…。

迷子になりました。

第三十二話（後書き）

今更ながらに、登場人物の背格好などあまり突っ込んで書いてません。
そのうち、どのような格好してるかなど登場人物紹介などで書くべきなのかな？

突っ込んで欠かない理由は、主人公であるあきちゃんが男性経験ナッシングだからと言い訳してみます。いや、私の力量不足なだけですけど。
そのうち、頑張って書いてみたいと思います！

第三十三話

私はスニクス国の（多分首都になる）城下町にいる。
城下町は想像していた通り、ファンタジーによく出てくるような中世ヨーロッパのような街並みだった。
殆どが木造のようだったが、中にはレンガ造りのような家もあった。
壁も全部同じように真っ白というわけではなく、所々に凝った模様が彫られてたり描かれてたりして、見る者の目を楽しませるような綺麗な街並みだった。
窓はガラスが嵌めてあり、その上に雨戸のような木の扉がついていた。殆どの建物に窓ガラスが嵌められているところを見ると、ガラスの普及率は高いようだ。
城下町だからなのか、大通りには石畳がしっかりと敷かれていた。轍の後もそんなに凹んで無いところ見ると、結構手入れがされているんだろうなとか思う。
印象としては、とても綺麗な街並み。
ヨーロッパなどに旅行に行った気分になれるな、これ。

その街を今、私はこの街を一人で歩いている。
担当護衛となったフィンは居ない。

逸れました。
迷子になってしまいました。

……どうしてこうなったんだか……。

時間は少し遡って、行き先を決めた後、詰所を出て夕方の市が開催されている中央通りに向かった。

今日はお祭りのため、中央通りの石畳の上をいつもであれば馬車が通っているらしいが、今日は通れる時間が決められている。そのため、中央通りは歩行者天国状態になっていた。

そして、歩行者天国状態になった石畳の上に、露天がずらっと並んでいるとのこと。それが夕方の市らしい。

その夕方の市を目指して、フィンと一緒に歩いていたその途中のことだった。

中央通りに近くなる程人が多くなり、その中でかなの声を聞いた。

「あきちゃん」と聞こえた声を頼りに人の合間を縫って歩いていると、どうやら裏通りに出てしまった様子。もちろん、来た道も判らないわけで……。

裏通りは表通りの綺麗さとは比べものにならないほど、薄汚れていて、所々にゴミが落ちている始末。

勝手にポイ捨てしちゃいけませんよーって、心のなかで言ってみる。虚しい。

逸れないようにと術を掛けてくれたフィンを、その場で待つこと十数分くらい。

フィンらしき人物は通りかかりもしません。

それどころか、裏通り特有のあからさまに柄の悪いお前はヤンキーか！　とツッコミを入れたくなるような青少年や酔っ払いのおっさん。果てはホームレスのような小汚い人物。

そんな人しか通りかかりませんでした。

おのれ、フィンめ…。私の場所が解るなら早く迎えに来てくださ

いよ！

迷子になったらその場を動くなが定番だろうと思ってましたが、流石にそのまま一人裏通りに居ることが心細くなり、移動したのが運のつき。

どんどんと表通りから遠のいてる気がする！

誰だ、この街を設計したやつ！　もっと迷わないような造りにしとけよ！

脳内で愚痴を吐きながら、黙々と表通りを目指して歩いていたが、進んだ道は行き止まりになっていた。

今、こうして一人迷子になって思うと、あれは空耳だった気もする。

でも、何回も聞こえたしなぁ……。

そんなことを考えるが、今更遅い。私はフィンと逸れ、現在進行形で迷子だから。

行き止まりだから、引き返すしか選択肢はないので戻ろうと踵を返し歩こうとした。

なんとなく、行き止まりの道に振り返って視線を向けてみた。

「やあ、あきちゃん。こんにちは」

先程まで誰も居なかったそこに、一昨日の夜会った金色の人が片手を上げて挨拶をしていた。

……さっきまで、誰も居ませんでしたよねー……？

「こんにちは？」

昼間だからだろうか、この間の夜のような目が離せないような存在感はない気がする。
まあ、それでもすっごい人離れした美貌に違いはないのですが。
「祝福は…きちんと受けたようだね」
祝福……『女神の祝福』のことを言っているのだろうか。それなら受けたと、頷いた。
『女神の祝福』を受けた後、全然読めなかったこの世界の文字が何故か読めるようになった。文字を見て、言葉の意味を理解できるという。学んでないのに読めるという不思議現象。まあ、文字が読めない不便さに比べると、物凄く便利で助かりますけれどね。
でも、なんで解るんだろうか……。別にどこかに受けましたってマークがあるわけじゃない……と思いたい。
「そのくらい解るよ。マークなんてないから安心していいよ」
……今、私口に出したっけ？
「出してないよ。解るだけ」
……人の心が読めるとかあれな人か！？
「あれな人ってのはよく解らないけど、人の心なら解るよ」
……このことについて、これ以上考えるのは止めておいたほうがいい気がする。
解らないが、なんとなくそんな気がする。
というわけで、ここはかなに習って前向きに！
「いきなりですが、質問をして貴方は答えをくれるのでしょうか？」
いきなりすぎたのか、彼は少し目を開いて驚いたって表情をした。
その後、ふんわり微笑んで言った。
「内容によりけり…だね。答えれることには答えよう」
この間と違い、今日の彼はなんだか頼れるお兄ちゃんみたいな雰囲気だった。
もっとも、お兄ちゃん居ないけど…。こんな人離れした美貌のお兄ちゃんなんて欲しくはないけど。
まあ、兎に角。なんだか優しい、話しかけやすい雰囲気に感じた

ので聞いてみるわけで。
「ありがとうございます。それじゃあ、まず名前を教えて欲しいのですが」
「それはダメ」
間髪入れずに却下されました。名前を教えるのは、彼の中では駄目らしい。
呼びにくいな……くそぅ。……迷子のせいでヤサグレてる自分がいる。
「よく、自分の心境解ってるんだね。落ち着いて。フィンを遠ざけたのは君と二人っきりで話すためだよ」
……今聞き捨てならない言葉が……？
遠ざけたって……それじゃ……逸れてフィンと合流出来ないでいるのは……？
「あんたが犯人か……」
「そうだよ」
目の前の人離れした美貌の彼は、「あははは」と豪快に笑いました。
すっごいムカつく。

「でも、大丈夫だよ。ちゃんと会えるからね」

なんだかなぁ。溜め息がでますよ。
「それじゃあ、次の質問です」
「その前に、もう少し砕けた言い方でいいよ」
なんだか、本当に目の前の彼は一昨日の夜と同じ人物なのだろうか？
「そうかな……？　ああ、でもあの時は少し見極めていたからね。今日は違うよ。君の力になりにきたんだからね」
そう言って、十人見たら十人共に蕩けそうな、とても優しい微笑を浮かべた。

私は思考が停止する前に、視線をずらす。
それでも、頬が熱くなったする気がする。美人って得だな。
「……善処します。どうも、貴方相手に普段通りに話しかけるのが難しい気がしますので」
私は一度言葉を切って、相手の目を見て話を続ける。
彼は、私の答えに納得したような感じで、にこにことしながら相槌をうっていた。

「次の質問は、この間貴方が言ったかなが『生贄』になるために呼ばれたと。まず、これが本当なら阻止したいし、これを裏付ける証拠などを探したいのですが、どうすればいいですか？」
この質問には、先程の彼は少し黙り込んだ。
何かを考えるように手を顎に当てる。それすらも、一枚の絵画になりそうだった。
「そうだね。具体的に言うことは駄目だから、これだけかな。君は先入観を持たないでである部族と接して欲しい。そうすれば真実に近づけるから」
また、なんか難しそうな……。
先入観ってことは、前情報など気にせずに個人として関わり合えってこと？
「まあ、そう取ってもらっても構わない」
考えが駄々漏れって嫌だね、これ。
「あははは、ごめんね。こればっかりはどうしようもないって思ってくれると、嬉しいかな」

「それじゃあ、最後の質問です」
「どうぞ」
これは、重要な質問な気がするので、自分を奮起するためにも深呼吸をして言った。

「私とかなは、女神イシュタリアの力で自分たちの世界に戻ることが出来ますか？」

この人が誰だかは知らない。
女神の力が解るとは限らない。
それでも、縋るような気持ちで、欲しい答えを誰かの口から聞きたかった。
淡い期待はあっけなく砕けたけれども。
小さな希望もまた、生まれた。

「女神イシュタリアは見つけるだけ。弟が道を開いて引っ張り込む。でも、今まで送り返したことはない。異なる世界の架け橋となるべき神は、今は行方不明。あきちゃん、君がどうしても、かなちゃんと一緒に自分たちの世界に戻りたいと願うなら、一番確実なのは行方不明となった神を探すことだ」

……あれ？　そうなると、変だよね？
女神との会合の時、女神は『元の世界に戻すことは可能』と言ってたけど……？　しかし、『戻せます』とは言わなかった。
でも、リディルからは過去の『神銀の乙女』は元の世界に戻ったって聞いたけど？
どういったことで？

「……女神様は元の世界に戻すことが可能って……言ってたけど…

…出来ないの？」
「神々は嘘をつけない。……何を信じるかは、あきちゃん自身が決めること」
頭から教えられたことを信じ込まないで、情報を収集して照らし合わせて自分で決めろってこと？
……それでいいのか？
「いいんだよ、それで。真実なんてのは、人それぞれなんだから」
彼はそう言って、微笑むだけ。
「……じゃあ、自分たちの世界に戻るためにも私は……私の真実を探して見つければ良いのですか？」
「そうなるね」
なんというか……脳内で「アキネはクエストを手に入れた！」と、出てきたとか言えません。
とは言えども、少しだけどうするべきか道が見えてきた気がする。
かなの側を離れたくはない一心で、かなの旅に同行するけれど。
もし、目の前の彼の行っている言葉が真実だとして、かなの旅が終わっても帰れないとすれば……？
私は、かなと一緒に自分たちの世界に戻りたい。
そのためには、彼が言うには行方不明の神を探したほうが良いとのこと。

……行方不明の神って……なんで行方不明なんだろうか……？

誰か、捜索届けだしてあげようよ？

第三十三話（後書き）

金色の人再登場！でも、名前は出てこないから、呼びにくいこと。ようやく、主人公の旅の目的が確定しました。目的をはっきりさせとかないと、単独行動が取りにくいからねぇ。これから、主人公頑張って苦手な情報集収集だ！

第三十四話

「ところで…どうして、私の力になろうと思ったんですか？　私…一昨日貴方に会ったばかりですし、あの時くらいしか話してもないし……協力してくれる理由がわかりません」

目の前の彼は私の質問に答えてくれる。

私がこの世界で何をするべきかは、目の前の彼の話を聞いて決めたようなもの。

目の前の人離れした美貌を持つ彼は、神出鬼没。

一昨日は話をしている途中で、少し視線を外しただけでその場から消えるようにして居なくなった。

先程は、誰も居なかった行き止まりとなっている場所に突如現れた。

それに、こちらの……人の心が解ると言うし。

私が心の中で思ったことに、そのまま受け答えしているような会話もされてしまったし。

そんな彼は、私の力になりにきたと言って、二人っきりで話すため私をフィンと逸れさせたらしい。

街を観光する前に、フィンに術を掛けてもらったから場所は解るはずなのに、フィンは未だに現れないから、何らかの力が働いているのか、術が解けたか。

その原因を作った犯人が目の前の彼なのかという、その発言には肯定の意を示したし。

兎に角、目の前の彼は謎過ぎる。

そんな、目の前の人離れをした美貌を持つ謎過ぎる彼が、私に協力する理由が全然思い当たらない。

別段、私はずば抜けて可愛いわけでも、綺麗なわけでもない。極

々ありふれたような顔だし。かなみたいに『神銀の乙女』などという、役割も力もない。

何も無い。

ただの異世界に迷い込んだ一般人。

そんな、何の力もない特別魅力的でもない私に、なんでこんな高嶺の花のような人物が協力したがるのか。その理由が知りたい。

……もっとも、知ったところで何も出来ないだろうけど。

それでも彼が協力したがる理由が解れば、彼から教えられる情報の信頼度が違う気がする。

だから、聞いてみた。これを聞く前に、さっき最後の質問とか言っちゃったけど……。

「……そうだね、単純に興味がある。この世界にとって君は異分子だ。かなちゃんはこの世界の女神に呼ばれたから、異分子じゃない。でも、君は違う。異分子となった、たった一人の人間に何か出来るのか。興味が湧いたから、協力してみるのも一興かなって」

ああ、彼が私に協力するのは暇つぶし……なのか？

そう思って、彼の真意を探ろうと相手の目を見ていると、先程まで笑顔だった表情が凍てつくような無表情に変化した。

私はそれを見た瞬間、一瞬だが背筋が凍るような錯覚に陥る。

「こう答えれば、君は満足するのかな？」

私はその言葉を聞いて、どんな表情をしていたのだろうか？

「……わ、私は……」

上手く頭が回らず（まあ、元々賢いほうじゃないし）、彼が最後に言った言葉を何度も考えてみた。

私が考えている間、彼は黙って無表情のまま、そこに立っていた。

考えるのを待っていてくれるように。

数分くらい時間が経ったような気がする。

その間も、彼は黙って私がしゃべりだすのを待っていてくれた。

「そうかもしれない。私は善意で協力してるって言われるよりも、個人的な思惑で、個人的な利益の上で私に協力しているって……そう言われたほうが、納得出来たんだと思う。そう言われたほうが、安心できたんだろうと思う」

高嶺の花のような、人離れした美貌の彼が私に好意を持って接するなんて、無い。

自分を卑下しているわけじゃないけれども、どう考えても目の前の彼が私に惚れるなどという要素が思い浮かばない。

だから、彼は彼自身の利益のために、私に協力しているんだと言われたほうが、私も遠慮なく彼の力を借りることが出来る。

もし私が彼を利用するようなことになっても、お互い様だと言い訳が立つからだと思い至った。

「安心していいよ。こっちにも目的があるわけだから。慰めとかじゃないからね」

彼はそう言って、慈しむような優しい微笑を浮かべた。その笑顔は、私が姉妹とはしゃいでたときの父の笑顔に似ているな、と思った。

慰めじゃないと言った彼の言葉。それでも、なんだか癒された。

「もうそろそろ……時間かな?」

彼はそう言いながら、狭い裏路地から空を見上げた。その顔からは先程までの慈しむような微笑は消え失せ、何も感じてないような無表情だった。

私も彼と同じように空を見上げてみた。

裏路地から見える空は、心なしかどんよりしているように感じる。例え、青空だったとしても。

少しだけ眺めた後、彼に視線を戻し聞いてみた。
「さっき大丈夫って言ったけど、何処に行けばフィンと会えるの？」
話の途中で、彼は何でもないように「大丈夫だよ。ちゃんと会える」と私に言った。きっとあれはフィンと会えると言っていたんだと思う。
その時は深く突っ込んで聞いたりしなかったけれども、会えると言われても、何処に行けばいいのだか。だって、私ってば迷いこんで裏路地に来ちゃったんだし。戻り道など解らないわけで。
「大丈夫。君は人の好意に甘えればいいんだ」
彼は時々何が何だかさっぱりなことを言う。……時々ではなく、度々の気もするが。
「……まあ、会えるってことね。会えなかったら、今度会ったとき覚悟しておいてね」
「分かった。覚悟しておこう。それじゃあ」
そう言って彼は空を見上げていた視線を私に移し、近づいてきた。
彼は先程立っていた場所よりも、少し距離を詰め、右手を差し出してきた。
それは握手を求めるような感じだったので、別れの挨拶だろうと思い、私も片手を伸ばした。
あんまり、握手なんてしたことないけど、とか思いながら。

この後の彼の行動は、後で思い出しても全く理解し難い行動だった。

彼は私の手を握ると、強めの力で引っ張ってきた。
私は握手をするだけだろうと全くの無警戒だったため、力に逆らうこともなく引っ張られた方向によろけた。引っ張ったのは彼で、引っ張られた方向も彼の方だった。そのため、倒れ込むような姿勢

になった。
自分の意志よりも早く、体は勝手に反応した。倒れ込んだりする前に、足を一歩だし踏ん張る。手もバランスを取るために反射的に少し上がる。
彼に倒れ込むことはなく、彼と私の距離がさらに詰まっただけに留まった。
バランスの崩れた姿勢を戻し、私は少しほっとして思い出したように反論のため、顔を上げた。
「ちょっとな……」
私はそれ以上言葉を続けることが、出来なかった。

顔を上げた私の頬に、彼の握手をしていない左手が添えられ、反対の頬に何かが触れた。
頬に何か触れた側の目には物凄く整った顔が見え、反対の左手が添えられた側の目には緩やかなウェーブを描いた金色の髪が揺れた。
頬に添えられた左手も、頬に触れた何かも、直ぐに離れていった。
それと同時に、抱き合える程近距離になった彼が、私から体を離すように握手していた手を離し一歩後退した。
握手をするように手を伸ばしてきた時と同じような距離となった、私と彼。

目の前の御仁は何をしやがった。
今のは何だ……。
状況的に考えると……頬に……キスをした？

私は驚愕するような、呆然とするようなきっとなんとも間抜けな表情だったんだと思う。
「そうだよ。これは僕からの祝福だよ」
彼は、名前も教えてくれない彼はそう言って、どこか面白そうに笑顔を私に向けてきた。

とたんに頬に、顔に、頭に血が上るようにカッと熱くなった。

反論したいのに、声は言葉にならず、口をパクパクさせるだけだった。

「それじゃあ、またね」

驚愕したままの私を置いて、彼は私の横を通って行き止まりの場所から居なくなった。

一人残された私は、混乱していた。

そりゃそうでしょ。

人離れしたような美貌を持ってる人がよ、平々凡々な私に、なんで頬にキスなど……。

別に……ファーストキスがどうこう言うような年代は過ぎたつもりだ（したことはないけど）。だけども、今のは何だ……？

嬉しいとかや恥ずかしいなどといったそんな感情は一切沸かなかったが、代わりに沸いたものがある。

「してやられた」

なんだか、凄い敗北感のようなものが沸いた。

彼のことは今後、セクハラと呼ぶことにするか……？

怒られそうな気がする。止めておこう。

私は一人裏路地に残されたまま、深々と溜め息を吐いた。

第三十四話（後書き）

恋愛…恋愛？金色の人動かしやすいですが、一人称をどうするかかなり迷いました。「僕」も「私」もありだと思うとどっちがいいかなって、迷いますよね。

少し、小説の書き方に習って空白や「…」の使い方を修正してみました。他の各話も修正中です。改稿多くてすみません。

第三十五話（前書き）

後半、若干暴力表現がございます。苦手な方はご注意下さい。

第三十五話

人離れをした美貌を持つ彼は、私を置いてその場から居なくなった。
彼は去り際に、物凄く理解し難い行動と、言動をした気がするけど……。

なんだか……とてもとても疲れた。
何故とか自問自答しなくても、解っているつもり。

彼のせいで、疲れた。

何で疲れたって、彼が去り際に取った行動のせいで疲れたとしか言いようがない。去り際に何してくれてるんだよ、あのお人は。
彼が何故あんな行動をしたのか、謎だけど、「挨拶だよ」とか言われた日には納得するしか無さそうな気がする。外国とかじゃ頬にキスとか挨拶になるし。

私は彼が去って何度目かの深い溜息を吐いた。
「流石に……このまま此処にいるわけにもいかないだろうしなぁ」
彼は私と二人っきりで話をしたいから、私とフィンを何らかの力で逸れさせたらしい。そうでなければ、私は直ぐにフィンと合流出

来てたはずだし。
フィンと再び合流するためには、どうすればいいのか？
彼に聞いたとき、返ってきた答えは「人の好意に甘えればいい」だったけど……。
こんな裏通り、そんな善人が通るとも思えない。
まずは何とかして、この裏通りから抜けだして表通りに行かなければならないだろう。
そう思い、私は彼と会話した、行き止まりの場所から移動することにした。

踵を返した私の目に見えたのは、流れるような赤い何か。続いて体に何か当たる衝撃。
「っ！！」
「っきゃ！」
……決して、決して言っておく。私が可愛らしく「っきゃ！」なんて言うはずはない。
体に何か当たった衝撃は、どうやら人とぶつかってしまったらしいから。
私はなんとか立っていられた。流石にこんな汚い裏通りで尻餅なんてつきたくない。裏通りは薄暗いからはっきりと解らないが、何かの臭いが少々鼻につく。
「だ、大丈夫ですか？」
お決まりの台詞ですね。
別に、お人好しってわけじゃないが、聞かないといけない気がするから。
だって、ねえ。ぶつかったときに「っきゃ！」ですよ？
すっごい可愛い感じの声だった気がするし。

この世界は美男美女が多いのだろうか……。
目の前のぶつかった人物は……すっごい綺麗なんだけど、可愛い

女の人でした。ちょっと、私より身長高いけど。いや、まあ日本人の平均身長は低いけどさ……。

雪のように真っ白な肌って、彼女のような事を言うのだろう。凄く白いのに、病的には見えない。

さっき、私の視界に入った流れるような赤い何かは、彼女の髪の毛だった。彼女の髪は、薔薇のように綺麗な赤い髪。さらさらと流れるさまを見ると、彼女もシャンプーのCMに出れそうな気がした。

真っ白な肌に、赤い髪。そして、瞳は綺麗な翡翠色。その綺麗な翡翠色の瞳を見て、私は場違いにも姉が持っていた翡翠の腕輪を思い出した。

美男美女が多くて、平々凡々一般庶民顔の私は居辛い気もするけど、同時に眼福だわ。

「あ……お、お願いです！　助けてください！！」

……はぃ？

美少女と美女の間な年頃の女性から、詰め寄られるよう助けを乞われたよ。

「えっと……何かあったんですか？」

そう聞きくと、助けを乞うた彼女は一瞬だけ驚いたように目を開き、ついで泣きそうな表情になった。

美人さんって、どんな表情でも絵になりますね。とか、私は呑気に考えていた。

「見つけたぞ！！」

「！！」

裏路地のそこら辺でよく聞こえてそうな、ドスの利いた声。

その声に、びくっと反応したのは目の前の彼女だった。彼女は声の方を振り返り、苦々しい表情になった。

行き止まりと解っているのに、それでも声の主から逃げようと彼女は奥へと後退った。

それでも、私を盾にするようにはしなかった。さっきの話の流れだと、盾にされるかと思ったけれども。

私は彼女から視線を外し、声の主を見る。

先程、彼女の来ただろう方向から男性が三名ほど歩いて近づいてきていた。声の主は多分真ん中の男性だろう。

しかし、見た目があからさまなチンピラさん。一人は細いのに目付きだけはギラギラで、一人はメタボチックな太りっぷりでなんだか体臭がキツそう。

真ん中の男はリーダー格なんだろうか、一番体格がまともで、筋肉もしっかり付いているようだった。でも、頭はスキンヘッド。モヒカンじゃないのが救いだ。

偏見だろうけど、某漫画の影響でモヒカン＝あべしとか言って散っていく雑魚というイメージが強い。

「よう、姉ちゃん。えらく逃げてくれたよなぁ。だけど、もう逃げられねえよ」

うーむ、台詞を聞いても、こいつらチンピラにしか見えない。

行き止まりに追い詰めたと言う気持ちが、バシバシ伝わるような台詞。彼女もそれを分かってか、顔色がかなり蒼白になっている。

構図として、追われる美人さん、それを悪意で追い回して善からぬことをしようとするチンピラ。これしか無いだろうなぁ。

「……わ、私は……貴方がたに用などありません。お願いですから、追いかけてこないで下さい」

彼女は震えるような声で、チンピラたちに言った。

チンピラたちはそんなの知ったことじゃ無いと言ったような人を馬鹿にした感じの表情だし、「はぁ？」とか目付きギラギラのガリが言う始末。

なんだろう、これ。彼女凄い可哀想じゃないか……って追われてるんだから当たり前か。

行き止まりの通路の奥側に彼女がいて、彼女とチンピラ三人との間に私が立っている感じ。

しかし、よ？

私ってば、別に何の武術の心得なんてないし、魔法とかも使える程でもない。きっと、チンピラたちのほうが確実に力は上だ。魔法だって使えるのかもしれないし。

ぶっちゃけ、私に太刀打ちとか出来そうに無い。

とは言えども、黙って見ている事も……できそうにないんだよなぁ……。

ちくしょう、どうすればいいんだよぅ……？

美少女とか美女のピンチには、ヒーローがつきものだろうがぁ！

！　さっさと、現れんか！

明らかに、力量不足の私じゃ彼女を助けることなんて出来やしないさ！

フィンさん、タイミングよく現れてヒーローになってくださいよ！

「きゃあ！！　離してください！！」

私が他力本願な事を考えをしていた間に、彼女に近寄っていた太っちょが彼女の腕を掴んでいた。

「ちょっ！　離しなさいよ！　嫌がっているでしょ！」

私は無理やり彼女と太っちょとの間に割り込み、太っちょが掴んでいた彼女の腕を剥がしにかかった。

「てめぇ、何しやがる！　離しやがれ！！」

「っ！」

「きゃあああああ！！」

頬が熱い。

頭を中心に何かの力が加わったように、私はバランスを崩し狭い裏路地の壁に倒れかかった。

何をされたのか、頭で理解するのに暫く時間がかかった。
「何て事を!!　貴方がたはそれでも男ですか!?」
彼女が叫ぶ。さっきのような、震えるような声じゃなく、明らかに相手を批難する声。怒気を含んでいるような気もする。
頭の隅の方で、美人さんは怒ったら怖いとか怒ったら花の顔が台なしだとか、どうでも良い事が浮かんだ気がする。
しかし、頬が熱い。痛い気もする。というか、痛い。どんどん痛くなる。

「……っ!」
口の中に何か、鉄みたいな味がする……。
これってば血?　口の中、切っちゃった?
頬も痛いわ、口の中切っちゃったみたいだわ。
私ってば……太っちょに殴られた……?
男のくせに、女に手を上げるったぁ、どういった了見で。
怖い。痛い。
でも、それ以上に。
こいつ、頭にくる!

「大丈夫ですか?」
鬱々と、どす黒い感情に沈みかけた私に、彼女が心配そうに覗き込んできた。
チンピラたちはというと、リーダー格の男が太っちょを叱りつけていた。
……何故?
その、なんとも言えない光景に私は一瞬唖然とした。
「あ……え、ええ。大丈夫……です。ちょっと口の中を切っただけです」
心配そうに覗き込む彼女に、大丈夫だと言うのが伝わるように笑顔を作って言ってみた。上手く笑顔になってるかは解らないけど。

それを見た彼女は、今にも泣きそうな表情になった。
「ごめんなさい……私のせいで……」
いや、まあ。気持ちは理解できないでもないが、今はそれどころじゃないんじゃ？
私は彼女から視線を外し、再度チンピラたちの様子を見た。

リーダー格の男が真剣そうな表情で、こっちを見ていた。
まるで、私と彼女のやり取りが終わるのを待っているようだった。
このまま、彼女を無理やり連れて行きそうな気がして警戒していたが、私の考えは裏切られ、リーダー格の男が私たちに話しかけてきた。

第三十五話（後書き）

最初は、あきちゃんが追われるシーンを考えたのですが、なかなかに話が組みにくかったため、可愛い娘さんを用意したらあら不思議。すっごい、組みやすい。迷ったところとしては、あきちゃんがチンピラと彼女との間に割り込むタイミングですかね。

若干、更新が遅くなりました。月末は脳みその回転が遅いです。おまたせして、ごめんなさい。

第三十六話

「悪かったな」
リーダー格の男が発した言葉。リーダー格の男が太っちょを叱りつけてた時点で困惑していた私の思考は、さらに困惑した。
今、謝罪した……？　実はこそっと、紳士……？　なわけないか。紳士だったら、女性を追いかけたりしないだろうし……。んじゃ、何故？
「こっちとしても、女に手を上げるのは不本意だったんだがな……あんたがそいつを庇うのが悪いんだ」
なんじゃそりゃ、責任転嫁か！？
結局は、手を上げたけど俺たちゃ悪くないぜーってか！？
「どうして彼女を追いかけるの？　まあ、こんなに綺麗で可愛いんだもん、わからないでも無いけど……。でも、彼女嫌がってるんだから止めなさいよね」
私を心配そうに覗き込む彼女は、オロオロするだけで手は貸してはくれなかった。どうすればいいのか、戸惑っているようにも見える。
「あんたには関係ない。これ以上、痛い目にあいたくなければ引っ込んでな」
交渉の余地ってあるのかな……これ。
私は一瞬だけ、視線を彼女に移した後リーダー格の男に戻した。
バランスを崩しもたれ掛かっていた壁から背を離し、まるで彼女を庇うように私はチンピラたちとの間に立ち塞がってみた。
痛いのなんて、嫌い。

「関係はないけど。でも、彼女嫌がってるでしょ。それを見て見ぬ振りしろって……」
「……何なんだ、あんた。こいつを庇い立てするのかよ？」

目付きギラギラのガリが威嚇するように、しかめっ面で迫ってくる。語尾に「あぁん？」とか言いそうな勢いだ。舌打ちもしそうだな。

先程彼女の手を無理やり掴んでいた太っちょは、今はリーダー格の男の後ろまで下がっている。リーダー格の男が勝手に手出しをするなと、釘を指しているようにも見える。

だが、目の前に迫ってきた目付きギラギラのガリに対しては信頼しているのか、そのままにしている。

目付きギラギラのガリが、彼女を庇い立てするのかと聞いてきた。

私が自分たちの世界に居た頃は、こんなヤンキーなど好んで関わり合いにならなかったし、絡まれているのを見ても間に入って仲裁するような勇気も持っていなかった。

下手にそんな奴らに目をつけられたら、何をされるか解らないという恐怖があったからだ。

あの頃は、見て見ぬ振りをしていた。

なのに、どうして今目の前で起こっていることに見て見ぬ振りを出来ないか。

なんとなく解っている。

言われてしまったから。

彼女に「助けて」と。

何の力もないの私に、助けを求めた彼女。

例えそれが、期待の籠ったものじゃなくても。

「……そ、そうよ！　助けてって言われたから、庇うの！　悪い？！」

「……！」

私は精一杯の虚勢を張りながら、チンピラたちに向けて言った。

後ろにいる彼女が、驚いている気がする。
きっと彼女も、自分を庇ってくれるとは思っていなかったのだろう。
実際、私自身も吃驚しているし。
「……そうか」
リーダー格の男は思案するように、目を閉じた。
再度開いたその目には、猛禽類のような鋭さが宿っているような気がした。
「なら、あんたもこいつと同じだな」
「！！」
リーダー格の男がそう言うと、ガリがさらに近寄ってきた。
私も後ろにいる彼女も、気圧されて後退った。もっとも、後ろは行き止まりに壁しかないから、逃げ場なんてない。
行き止まりに追い詰められた私と彼女。
チンピラから庇うように私の後ろに居る彼女が、前へと進みでた。
「彼女は関係ありません。私は……ちゃんと行きます。ですから、彼女は見逃してください」
彼女はそう言って、今度は私を庇うようにチンピラたちとの間に立つ。
「だ、駄目だよ！　そんな事したら貴方が！」
この状況で彼女を引き止めたところで事態が好転するとは思えないが、それでも引き止めたかった。
だが、同時に私は心のどこかでそう言われることを期待していたと思う。
だって、私は自分勝手な人間だもの。
「いいんです。貴方は身知らずの私のことを、庇うと言って下さった。こんな私を庇うと……凄く嬉しくて……。だからこそ、貴方を巻き込むわけにはいきません」
私の前に出て、チンピラたちとの間に立つ彼女。振り返った彼女

の表情は、凄く嬉しそうな笑顔だった。でも、その翡翠色の瞳には譲らない意思がはっきりと浮かんでいた。
「彼女には手を出さないと、約束して下さい」
「……あんたが大人しく付いて来るなら、そっちには手を出さない。約束しよう」
リーダー格の男がそう言うと、彼女を連れて、来た道を歩き始めた。
太っちょやガリが彼女の脇を固め、逃げられないようにしていた。
私は彼女の赤い綺麗な髪が揺れる後ろ姿を、見ていた。

「ま、待って！」
離れていく後ろ姿に、私は衝動的に叫んでしまった。
「まだ、何か用か？」
リーダー格の男が歩みを止めて、振り返って聞いてくる。他のチンピラ二人も歩みを止めて、私を見た。赤い髪の彼女は、歩みは止めたものの振り返ったりしなかった。
「彼女は、あんたたちに何をしたの？」
「それを聞いてどうする？」
呼び止めて、聞いて。でも、その先を私は考えていたわけじゃない。
ただ、どうにかして彼女を助けたいと思ってたら、つい叫んでいた。
精一杯、私はあまり良くない頭をフル回転させて考えた。
「と、取引をしたいの。彼女から手を引いて」
「取引か……いいだろう。金貨五枚だ。それで手を打とう」
言われて、胸元を探ってみる。フィンからお金を受け取った時に、盗難に遭わないよう服の中に隠しておくようにと言われたから、首に下げて服の中に仕舞っていた。

取り出した革袋を開いて中を見て、少しだけ安堵した。
金貨五枚。リーダー格の男が示した枚数が、革袋の中に丁度あった。
この金貨五枚を渡すと、残りが銀貨一枚となる。お金の単位の説明も、買い物もしてないので金貨がどのくらいの価値があるか、私には解らない。
これを渡したら、城に残っているかなへのお土産が買えないかもしれない。
でも、渡せば目の前の彼女を助けることが出来る。
かなら、きっと理解してくれる。
「はい。金貨五枚。これでいいわよね？　これで、彼女から手を引いて下さい」
私は革袋から取り出した金貨五枚を、リーダー格の男に渡した。
五百円玉くらいのサイズの金貨を五枚。リーダー格の男は角張った手で受け取った。
「……ここで、取引を反故したら男が廃るってもんだ。いいな、兄弟」
リーダー格の男がチンピラの二人に言って聞かせる。
「ほら、姉ちゃん。そこの奇特な娘さんに感謝しな」
いつの間にか私の方を振り向いていた彼女の背を、リーダーの男が押して彼女と私を近づけた。
彼女が近づいてから、私は自分がした行動に気づいた。
私が彼女を助けたいと思う一心でやった行動は、人を買収するような行為だったと気づき、後ろめたさから私は彼女を正面から見ることが出来なかった。
彼女も気まずいのか、何も喋ってこない。
そうしている間に、チンピラたちは今日は何処に食べに行くだの言いながら去っていった。

「ご、ごめんなさい」
気まずい空気に耐えきれず、私は彼女に謝罪した。
いくら助けるためとはいえ、人を売買するような行為。怒られても仕方ないかもしれないし。誉められたような行動ではないと思うので。
もっと私の頭がよかったら、彼らを説き伏せて彼女を助けることが出来たかもしれないのに。
頭があまり良くない私の考えついた結果が、これだったから。
「何故、貴方が謝るのですか。私の方こそ、貴方に謝らなければならないのに……」
私の口に出した謝罪の言葉に、彼女は悲しそうに顔を歪めて言った。
でも、私はまだ彼女を正面から見ることが出来なかった。だから、その表情を見ることはなかった。
「だって……私、お金で解決するしか思いつかなくて……。ごめんなさい」
私は俯いたまま、再度謝罪の言葉を口にした。
そんな私の手を、彼女が両手で包むようにして握った。私は驚いて、つい顔を上げて彼女を正面から見てしまった。
私より少しだけ背の高い彼女。そのため、ほんの少しだけ目線は上を向く。
薔薇のように赤い綺麗な髪に、翡翠色の瞳がとても良く似合ってる。

顔の造形は、綺麗なんだけど可愛いという、とても得のしそうな顔。

その表情は、悲しそうな笑顔だった。

「身知らずの私を庇い、助けて頂いて、本当にありがとうございます。こんな私を助けるために、貴方のお金を出させてしまって……本当にごめんなさい。私の手持ちのお金じゃ、先程の金額には届きません」

彼女は凄く悲しそうに顔を歪め、それでも笑顔を浮かべながら続けた。

「ですが、どうかお礼をさせて下さい。お願いします」

「……怒ってないの？」

私が恐る恐る聞いた言葉に、彼女はきょとんとした表情に変わった。彼女のその表情は、なんだかとても可愛らしかった。

「だって、私……貴方を助けるためとはいえ……人をお金で買うような真似を」

「私なんかのために、あんなに多額のお金を出していただき、感謝することはあっても、怒るなどということはありません。……貴方が出して下さった金額には及びませんが、どうかお礼をさせて下さい」

彼女に先程までの悲しそうな表情は無くなり、ただ相手に感謝を伝えるような心温まる笑顔だけがそこにあった。

彼女のその笑顔に釣られ、私も少しだけ笑顔になることが出来た。

彼女はお礼をしたいと、言った。金色の人に言われた、「人の好意に甘える」もしこれがそうなら、彼女にフィンを探すのを手伝ってもらえるかもしれない！

そう思ってしまった私は、やっぱり自分勝手なんだろう。

街の地理などさっぱりだし、フィンに説明してもらった街の地図

はうろ覚えだし、自分が今何処にいるのかすらも解らない。
ならば、少しでもこの街を知っている人に手伝ってもらえたら、きっとフィンと合流することも出来るだろ。もっとも、彼女が街の住人かどうかは怪しいけれども。
それでも、一人で探すよりもいいだろうし……。彼女の都合が悪くなければだけど。
「あ、あの。それじゃあお願いが……」
「おい！」

私が彼女にしようとしたフィン捜索願は、男の人の声に遮られることになった。
チンピラたちが去っていった方向に、少し高めの人影があった。

第三十六話（後書き）

予定より遅くなってしまったこと、申し訳ありませんでした。

なかなか、纏まらず、文章もなかり拙い感じで……解りにくい部分があればご指摘下さい。

次回で赤毛の彼女の名前が判明します。

主人公がどんどん衝動的に行動する人間になっていく。

第三十七話

「何処にいたんだ、探したぞ」
男性はそう言いながら、私と彼女に近づいてきた。
まだ距離があるため、誰なのかは解らないが聞いたことのない声だった。低めでちょっと渋い声。
男性の背丈はフーガと同じくらいに見える。比較対象がいないから、おおよそではあるが。
ずかずかと近づいてきた男性は、頭に青い布地に黒の模様が入ったバンダナを巻いていて、サングラスを着用していた。服装はラフな感じで、茶色のベストに白のシャツ。ズボンはデニム生地のような厚手の布地で出来ており、登山靴のようなしっかりとした靴を履いていた。
サングラスのせいか、全く相手の目が見えないし表情も掴み難い。はっきりとは解らないが、二十代前半くらいかな？
私はこの会ったことのない男性に対して、警戒心を抱いた。
「あ、貴方は……」
「バンチョウ！」
彼女が嬉しそうな声で、男性を呼び、歩み寄った。
ばんちょう……？　番長？　いや、聞き間違えかもしれない。
彼女に呼ばれた男が、口角を上げて笑ったような気がした。
「うわっ！」
私の足元でふわふわした何かが、もぞもぞと動いていた。
足元に何が居るのかと見てみると、そこには小型犬くらいのサイズの白い犬のような生き物が居た。その白い犬のようなのは、猫がマーキングをするように私の足元にすりすりと体を擦りつけていた。
「……何？　犬？」
「ん？　何だ、初めて見るのか。そいつは白銀竜だ、珍しいからって盗るなよ」

足元の白い犬のようなのを見ながら呟いた言葉に、男性が答えた。口調は気安い感じがあった。ただし、最後の言葉に相手も警戒してるのかなとか思えた。

ってか、とるなよって盗むなよってことか?!　泥棒とかしたこと無いのに。あるとしたら、母親が夜ご飯作ってるのを盗み食いくらい?

「はくぎんりゅう……?　りゅうってドラゴンの竜?」

「そうだ。そんな形してるが、そいつはドラゴンの竜だ。怒らせると怖いぞ。竜種でも少ない種類だから、初めて見るって奴も多い。どうだ、可愛いだろう」

なんだろう、まるで愛犬自慢する人みたいだ。確かに可愛いけど。よく見ると、犬に良く似ているのに、背中に犬にはありえない翼のような突起物が生えている。だが、ドラゴンという割には角がない。

「竜なのに、角はないの?」

しかし、不思議な生き物だ。可愛いけど。毛並みはふわふわしてそうだし。……撫でてみたいな。

そう思い、私は服の裾が汚い裏路地の地面に着かないように注意しながら屈んだ。屈んだ後も、白銀竜は足に擦り寄ってくる。

その白い犬のような白銀竜に、そっと手を伸ばしてみる。

「あ、危ない!」

そう言ったのは、赤い髪の彼女だった。

何が危ないのか。もしかして、この子噛みグセとかあったりするの……?

でも、私の手はすんなり白い犬のような白銀竜の頭を撫でることが出来た。

凄く触り心地の良い、かなの部屋にあったぬいぐるみを思い出した。あのぬいぐるみをよく撫で回して「気持ちイイー」って言っていた。

白銀竜の頭を撫でる私の手に擦りつけるかのように、白銀竜自体

が手に擦り寄ってくる。
「……初めて見た。バンチョウ意外にあの子が懐いているの」
彼女が驚くような声音で言っていた。私は白銀竜から視線を外し彼女を見ると、彼女は何処かホッとしたような表情をしていた。
危ないって言ったのは、やっぱり噛みグセか何かがあったんだろう。
噛まれなくてよかった……。小さいから油断してたや。今度、何かに触るときは一言断ろう。

「それで、タニア。どうしてお前はこんなところに居るんだ。それと、そこの人は誰なんだ？」
ひとしきり、白い犬のような白銀竜を撫で回し終わった頃、男性が言った。
赤い髪の彼女はタニアと呼ばれた。タニアにバンチョウと呼ばれた男性は、私を見ながら言った。
バンチョウの言った言葉には、先程のような警戒の色はなかった。何故だ？　もしや、動物好きは良い人だとかいう持論の人？
「あ、えっと、私を助けてくれたんです。あの、助けていただいて本当にありがとうございます。私はタニア。タニア・イミルと申します。貴方の名前をお聞きしても？」
「お前を、助けてくれたのか……。そうか。世話になったな。俺はヴァンヴァロール・オージン。ヴァンでいい。タニアを助けてくれた礼をさせてくれないか」
二人に畏まって言われて、私は気恥ずかしくなる。
だって、自分勝手に行動した結果なだけで、良い方法だったかと言われるとそうじゃないと思うし。
「えっと、私は高木　明音です。助けたっていうか、成り行きとい

うか……。その、私迷子でここに居ただけですから」
「いいえ！　貴方は私を助けて下さいました。多額のお金を支払ってまで見ず知らずの私を、チンピラたちから助けて下さいました！」
タニアは両手に拳を作って、力説した。私はその迫力に押されて、一歩子後ずさってしまった。
「一つ、聞いてもいいか？　どうして助ける気になったんだ？　タニアは見ての通りだぞ？」
ヴァンがタニアの髪を一房掴みながら、聞いてきた。
なんだか、ヴァンとタニアの二人はとても親しそうに見えるのに、恋人同士のやり取りには見えないのが不思議だった。
「どうしてって言われても……。タニアさんは見ての通り、綺麗だし可愛いし……さっきの人たちに連れて行かれた後の事を思ったら……」
「見捨てては置けなかったのか？」
ヴァンの問に、私は頭を縦に振って答えた。
タニアがあんなチンピラたちに連れていかれたら、どう転んでも素直には帰してくれないだろう。
タニアは綺麗だし可愛いし、服の上からでも女性特有の膨らみや腰のクビレも見て取れる。
そんな相手を追い回していたんだ、チンピラたちがタニアに何もしないで帰すなど考えられない。それが暴力だろうと、性的なものだろうと。
邪推かもしれないが、タニアと会った場面は、そう考えたくもなるような状況だったからだ。
「タニアは赤い髪だぞ？」
ヴァンは先程からタニアの髪を一房握って、これ見よがしに赤い綺麗な髪を見せつけてくる。
「？　そうですね、この世界に来て様々な色の髪を見てきたけど、赤い髪は初めて見たわ。綺麗ですよね。やっぱり自毛ですか？」
その言葉に、ヴァンもタニアもどこか呆然とするように、目を見

開き口を開けて固まってしまった。もっとも、ヴァンはサングラスしてるから目を見開いてるかは解らなかったけど。
「え？　何、私何か悪いことでも言いましたか……？」
二人の様子に私は慌てた。まだ、この世界の常識を習い始めたばかりで、もしかしたら失礼なことを言ったかもしれないから。
「いや、悪いことは言ってない。そうか、綺麗か。……よかったな、タニア」
「……はい」
ヴァンはタニアの背中をぽんと軽く叩いた。その様子は何処か、慰めているような感じに見えた。
「って……なんで泣くの！？」
タニアを見ると、涙ぐんで今にも溢れ落ちそうだった。
「嬉し涙、だよな。タニア」
ヴァンのその言葉に、一筋の涙を流しながらタニアは頷いた。

タニアが落ち着くまで待った後で、ヴァンは握手を求めるように手を出しだして、言った。
「タニアを助けてくれた礼がしたい。俺達のキャラバンまで一緒に来て欲しい」
ヴァンの差し出した手を見て、私は金色の人に悪戯されたことを思い出していた。
じっとヴァンの手を見ている私に、ヴァンは首を傾げた。その後、少し寂しそうな声色で言ってきた。
「握手は……嫌か？」
「あ、いえ。そうじゃなくて、その……タニアさんと会う前に会った人に……握手した後悪戯されたから……その、思い出してて」
ヴァンはサングラスをしているのだが、彼が笑った気がした。タニアも微笑んでいた。

「大丈夫だ。悪戯などしない。一緒に来てくれるか？」
ヴァンから差し出された手を、私は怖ず怖ずと握った。
「あの、それじゃあ連れが見つかるまで……」
そう、私は迷子。
フィンと逸れて迷子で、ここに居ます。
「ん？　連れがいるのか？　まあ、探すのにもここに居るよりかは、俺達のキャラバンのほうが良いだろう。ここだと、変なことに巻き込まれないとも限らないしな」
「それじゃあ、お願いします」
「お願いされます」
ヴァンの目はサングラスで見えないが、口がとても楽しそうに笑顔の形を作っている。
タニアも嬉しそうに笑っている。
私も二人に釣られるようにして、笑っている。

私はヴァンとタニアのキャラバンに、案内されることになった。

ところで、フィンとはいつ会えるのだろうか？
あの金色の人め。フィンと会えなかったら覚えてろよ！

第三十七話（後書き）

新キャラ登場。マスコット的キャラも登場したのですが、全然活躍なんてしてないさ。もっと可愛さをアピールしないとなぁ……。
次も遅くならないように書き上げたいと思います。
文章表現が一定じゃなくて読みにくいかもしれません、申し訳ないです。

第三十八話

ヴァンが先頭に立ち、表通りを目指して歩き始めた。
私とタニアは、ヴァンの後ろに続いて歩いた。

タニアは行き止まりの場所から移動する前に、ヴァンに渡された帽子を被った。
ヴァンが渡した帽子には明るい茶色のつけ毛が付いていた。タニアは赤い綺麗な髪を帽子の中に全て入れた。そうすると、帽子のつけ毛が自毛のように見えた。
どうして髪の毛を全部入れるのか聞くと、目立つからとタニアは笑いながら答えてくれた。
タニアにさっき何がそんなに嬉しかったのか聞こうとしたら、前を歩くヴァンに話しかけられた。

「アキネ。それとも、タカギと呼んだほうがいいか？　こっちほうでは珍しい名前だな。どこから来たんだ？　それと、連れってのはどんな奴なんだ？」
「明音で構いません。高木は苗字……家名なので。連れは……」
説明をしながら、出来る限りフィンのことを思い出す。
フィン……フィンなんだっけ……。名前ははっきりは思い出せないけれど、家名はサティの息子だからラシーヌ。フィンなんとか・ラシーヌ。
髪の毛の色が、サティよりちょっとだけ濃い夏の青空のような青い髪。フーガよりかは淡い色合いだった気がする。肌はサティと同じ、健康そうな小麦色。目は見慣れた黒色だった気がする。
身長は、クラウより高くて今眼の前に居るヴァンと同じくらいかな？　この世界の男性って、身長高い人多いね。というか、周りが低かっただけなのかな？

格好は兵士より随分立派な鎧を着ていたから、騎士とかそんなとこだろうか？　確か、ア……なんとかって将軍の部下。

サティ自慢の息子さん。

人懐っこい笑顔をするけど、多分二十前後じゃないかと思う。

「名前が……フィン。二十前後の青髪の男性で、背丈はヴァンさんと同じくらいかな。騎士なんだと思います。立派そうな鎧を着てたし。……それと、私はフィンさんとお城から来ました」

どこまで言っていいのかよく解らなかったが、まあこれくらいなら大丈夫でしょ。

フィンと合流できなければ城への道を教えてもらって、一人でもなんとか戻れるようにしないと。

もっとも、城下町から城までの道に魔物とか居なければなんだけどね。

「呼び捨てでいい。アキネは城から来たのか。じゃあ、城勤めをしているのか？」

ヴァンの質問に、私は首を横に振った。城勤めをしているわけではないから。

「……連れは騎士だと思う、か。アキネは貴族なのか？」

貴族でもないので、再び首を横に振って否定した。

ヴァンは私が首を振って否定すると、歩くのを止めて考えるように立ち止まって、首を少し傾げた。

前を歩いていたヴァンが止まったので、私もタニアも足を止めることになった。

振り返ったヴァンは、私を見ながら質問を続けた。

「貴族でも、城勤めでもない者がお城から来たと言う。アキネ……あんた一体何者なんだ？」

ヴァンの質問に、今度は私が首を傾げる番となった。

サングラスで目は隠れて見えないが、ヴァンから威圧感のようなものを感じた。

何者かと問われてもどう答えればいいのか、よく解らない。
異世界から来たと言って、信じてもらえるのやら……。
しかし、それ以外に説明の仕様がない。
もしこれが、かなだったら『神銀の乙女』ということで信じてもらえたかもしれない。
でも、私は『神銀の乙女』でもなければ、異世界に来てしまった理由もわからない状態。
それに、「異世界から来ました」なんて勝手に言っても良い事なのだろうか……？
かなも私もこちらの世界に来て、ずっと護衛を付けられている。
護衛を付けるというからには何かしら危険があるということだ。
危険といえば、この世界に来たばかりの時に危害を加えてきた凶暴な生物。魔物。
魔物の驚異からの護衛と考えるならば、城の中でまで護衛を付ける意味が解らない。城を外敵から守るために、兵士達が警護をしているはずだから。だとすると、魔物以外の驚異からの護衛と考えることが出来る。
魔物以外からの驚異。それは人から危害を加えられるかもしれないということなんだろう。
でも、私もかなもこの世界に来たのはつい先日前。そんな短期間で恨みを買ったりした覚えはない。
だとすると過去の事例があるということから、異世界から来たから危険なのか、『神銀の乙女』だから危険なのか。そもそも何故危険なのか、それすらも今はまだ解らない。
もし、異世界から来たから危険ならば私もかなも危険となる。
そして、私はその護衛としての同行者であるフィンと、今は逸れている。

この状況で、今知り合ったばかりの人に私の事情を話しても問題ない事なのか、解らない。
どうするべきか……。
「あの……えっと……その……」
何と言えばいいか解らず、私の視線はヴァンを直視できずにさ迷った。
誤魔化すにしても話題を逸らすにしても、いい言葉が思い浮かばず、「あの」や「その」といった言葉しか私の口からは出てこなかった。
そんな状態の私を見かねたのか、ヴァンが私の肩に手を置いて言ってきた。
「悪かった。知り合ったばかりの相手には、言えないことだってあるよな。この話はこれでお終いだ」
ヴァンはそう言うと、口の端をにっと釣り上げるようにして笑った。
その笑顔に釣られるように、私は安堵した。
答えても良いのかどうかも解らない事を聞かれると、困る。
タニアもだけど、ヴァンも良い人そうだし。
できる事なら、つかなくていい嘘はつきたくはない。

何処をどう行ったのか記憶できないくらい、複雑に入り組んだ裏路地を何度も曲がり、やっとで表通りへと出た。
「よく、道を覚えられますね……」
私は前を歩いているヴァンの後ろ姿に向かって呟いた。
「まあ、何度か来たことあるからな。ここから人が多くなるから、逸れるなよ」

確かにヴァンの言う通り、表通りは裏通りと比べると圧倒的に人が多い。表通りは広く、たくさんの人が行き交っている。
人混みに紛れると逸れてしまいそうな、人の多さだ。
少しだけ私が人の多さに圧倒されていると、横にいるタニアが私の手を握ってきた。
タニアを見ると、慈しむような優しい笑顔で、まるで大丈夫ですよと言っているようだった。

人混みの中を掻き分けるようにヴァンが前を進み、タニアが手を繋いで一緒に歩いていく。
大通りの左右を露店が立ち並び、暫く歩いて行くと広場のような場所に出た。
そこは何かのステージのように、舞台となる段が設けてあった。
広場の左右には、大きめのテントのようなものが数個ほど建っていた。
「ようこそ、俺達のキャラバンへ。アキネ、心より歓迎する。楽しんで行ってくれ」
ヴァンは広場を前に、振り返ると笑顔で言った。

第三十八話（後書き）

難産な上に、進んでない気がする。本当はもう少し先を書きたかったのに……。
しかも、予定より少し遅れての投稿。いかんですね。
次こそは早く更新出来るよう頑張りたい！

ついでに、タニアはノーマルです。

第三十九話

「バンチョウ！　おかえりなさい。準備はほぼ整ってます。後は時間が来るのを待つだけですよ」

木箱のような荷物を両手で抱え、運んでいた中年位の柔和そうな男性が、ヴァンに話しかけた。

「ただいま。忙しい時に悪かったな。ちゃんとタニアを連れて帰ってきた。怪我とかもないようだ」

「そうですか、それは良かった。彼女に何かあれば、今日の予定が大幅に変更になりますからね」

安堵したような笑顔で、男性はタニアに「おかえり」と言った。

タニアも少しだけすまなさそうな表情をした後、笑顔で「ただいま」と返していた。

「ところで、そちらの方は？」

タニアの横に居た私に、男性は首を傾げた。

「あ、あの、こんにちは」

私は頭を軽く下げる会釈をしながら、男性に向かって挨拶をした。

「ああ、彼女はタニアの恩人だ」

「タニアの……。そうですか。タニアを助けていただき、ありがとうございます。キャラバン一同、貴方を歓迎致します。どうぞ、ごゆっくり楽しんでいってください」

男性は少しだけ驚いたような表情をした後、凄く優しそうな笑顔で歓迎すると言ってくれた。

男性は荷物を持ったままだったため、握手などはしなかったが、気持ちはよく伝わってきた気がする。

「あの、宜しくお願いします」

なんだかよく解らない返事をしたと、私は後で思った。

「さて、俺は部屋に戻る。何かあれば呼べ」

「わかりました。タニアは急いで衣装合わせをしてきてくれ」

ヴァンはそう言うと、さっさとテントの方へと歩いて行った。
荷物を持った男性も、タニアに支持を出すと、挨拶をしてどこかへ行ってしまった。

「それじゃあ、私も自分の仕事がありますので。アキネさん。もし、宜しければ私の仕事が終わった後になりますが、食事でもご一緒にいかがでしょうか？」
美女に、ってかタニアに夜の食事のお誘いを受けました！
美女からの食事のお誘い……。もし私が男性なら、小躍りするくらい嬉しいだろうな。でも私は女性、私はノーマル。でも、食事のお誘いは魅力的。
とはいえども、まだ決定できる段階というわけじゃない。
何故なら私は迷子だ！
「あ、えーっと……。その、嬉しいんだけど、はっきりとした返事ができないや。連れを探さないと」
「それなら大丈夫です。ちょっと公私混同してしまいますが、私たちの仕事が役に立ちます。下手に人混みで探すよりも、ここで待ってください。私たちが手伝いますから。どうか少しでも、恩返しをさせて下さい。貴方の力になりたいんです」
こうまで言われては、断るすべもない。好意から言ってくれているようだし。
「その……じゃあ、お願いします」
「はい！　任せてください！」
タニアは女性でも絆されそうな、とても綺麗な笑顔で嬉しそうに返事をした。
別に、私はノーマルなんだけど、ちょっと……頬が、熱くなった気がする。

「でも、アキネさんにも見てもらいたいから、私と一緒に来るとバレちゃうし、他の場所も忙しいだろうし……」
タニアは何かを考えながら、ぶつぶつと呟いていた。
「そうだ！　バンチョウのところで待ってもらえば」
何かを思いついたようだ。少し大きな声で、一人で納得したように言った。
タニアは衣装合わせに行かなければいけないはず。男性に急いでとも、言われてた気がする。行かなくていいのかな……？　タニアさーん……？
「アキネさん。バンチョウのところで、時間になるまで待って頂いても良いですか！」
タニアは迫りながら言ってきた。その迫力は、聞いていながら拒否させない勢いがあった。
迫力に負けました……。
まあ、どうするか決まってないから別にいいのですけど。
「あ、は、はい。わかりました」
「じゃあ、バンチョウの部屋に案内します。こっちです」
そう言いながら、タニアは私の手を引っ張りながら歩き始めた。
タニアに引かれるまま歩いて行くと、広場の隅の方にある三階建ての木造の家に入った。

三階建ての木造の家。ＴＶなどで出てくるログハウスのような建物。広場から見える外見より奥行きがあるのか、中は思ったよりも広かった。
どうやらこの建物は宿屋のようで、一階は酒場兼食堂のようになっていた。
入口の正面に酒場のカウンターがあり、そこには髭を蓄えた五十

くらいのがたいの良い男性が立っていた。男性は仕込みをしているのか、カウンターと奥の厨房を頻繁に行ったり来たりしていた。
男性は宿に入ってきた私たちを見ると、にっこりと笑顔を作った。
「おかえり、タニアさん。時間に間に合ったようで、本当によかったよ」
「ただいま。ご心配をお掛けしました。バンチョウは部屋に？」
にこやかにタニアは、男性と受け答えをする。
なんだろう、今酒場のオヤジと世間話をする。みたいなコマンドを選択した気分だ。いや、ＲＰＧじゃないんだけどね。
酒場のオヤジ、思ったより愛嬌のある笑顔だ。黙ってると厳つい感じがするんだけどねぇ。髭のせい？
「ああ。先程上がっていった。多分まで居るだろう」
「ありがとう」
タニアと話していた男性、もとい酒場のオヤジと私の視線があった。
私と視線があったオヤジは、再度にっこりと笑顔を振りまいた。
「お客さんかい？」
「え……っと、その……」
酒場のオヤジのお客＝泊まり客、ないしは食客。
残念。私はどちらにも今は該当しない。用事もないのに入ってきたのかって、怒られたりしないよね？
「キャラバンのお客様よ。今からバンチョウのところに案内する予定なの。よかったら、何かお勧めの飲み物でも、後で持って行ってくれると助かるんだけど」
美人さん（タニア）に微笑みながら言われたら、男なら誰でも言うことを聞きそうだなぁ。
「そうかい、キャラバンのお客様か。分かった、とっておきのを後で持って行こう。お嬢さん、ゆっくりしていってくれ」
「あ、はい。ありがとうございます」
うーん。オヤジってば、愛嬌のある笑顔だ。

しかし、私ってば……二十超えてるんだけど、お嬢さんって……。
「それじゃあ」
そう言って、タニアは私を連れて三階へと階段を上がって行った。

コンコンッ

「誰だ？」
「タニアです。アキネさんもご一緒です。入っても良いですか？」
丁寧なノックをした後、部屋の中からヴァンの声が聞こえてきた。
部屋の中で歩くような音がした後、ガチャリとヴァンが中からドアを開いた。
「どうしたんだ？　まあ、立ち話もなんだ、入れ」
そう言って、ヴァンはタニアと私を部屋へと招き入れた。

部屋の中は八畳くらいありそうな部屋で、窓から広場を一望できた。また、広場のステージ台がとても良く見える位置だった。
「それで、どうしたんだ？」
ヴァンは部屋の中央にある丸テーブルとセットの椅子に腰をかけ、私とタニアを見た。
丸テーブルの上には事務処理でもしていたのか、書類のような紙が何枚かに羽ペンとインクボトル。ファイルのようなものまで、机の上に置いてあった。
「時間まで、ここでアキネさんに時間を潰して頂こうかと思って。他の人達は忙しいだろうし、私と一緒だったら、何をするか分かっちゃうから。驚いてもらいたくて」
「アキネに見て貰いたい、ということか？」

ヴァンの質問にタニアはとても嬉しそうな笑顔で、「はい」と答えた。

「……わかった。まあ、見ての通り何も無い部屋だが、寛いでくれ」

ヴァンがそう言って、私に笑いかけたような気がする。

気がするというのは、ヴァンが部屋の中なのにまだサングラスをかけているからだ。

サングラスかけたまま、事務処理とかできないでしょうに……。

外したくない理由でもあるのかな？

「それじゃあ、アキネさん。また後で。楽しみにしていて下さいね」

ヴァンと話がついたタニアは私に向き直り、挨拶をすると部屋から出ていってしまった。

衣装合わせがあるんだっけ。

遅くなったって、怒られなければいいんだけど……。

タニアが部屋から出ていって、ヴァンと二人部屋に残された。

気づけば、部屋にヴァンと二人っきりか。

よくよく考えると、男性と部屋に二人っきりって、あまりないシチュエーションです。

私たちの居た世界じゃ、私は男友達とは大体三人ないしは四人などで居て、二人っきりで居るということはなかったし。ましてや、部屋に男性と二人っきりって……何気に私、そんなの初めてじゃない！？

ってか、何話せばいいんだろうか。さっぱりです。

私たちの居た世界じゃ、友達の話やゲームの話、世情の話など色々共通の話題があったけど、私この世界のこと何も知らないから、共通の話題とか思い浮かばないや……。

「……二人っきりだな」

ヴァンが椅子に座ったまま、ポツリと呟いた。

部屋には私とヴァンの二人だけだから、よく聞こえた。

「まあ、座れ。タニアの恩人に何もしやしない。安心しろ」
立ったままで近づかない私に、ヴァンは苦笑いをするかのように言った。
「あ、はい」
私は言われるまま、ヴァンと対面の椅子に腰掛けた。

サングラスをかけたままのヴァン。
手には先程まで見ていただろう書類を持っているが、目を通すような仕草はなく、じっと正面に座った私を見ている。
って、何で私をじっと見るんですか？！
「あの、何か……？」
自分から真正面に座っておきながら、自分はヴァンをジロジロ観察していながら、自分が観察されているようなのは落ち着かない。なんとも理不尽です。私。
落ち着かないので、つい言葉に出しちゃいました。
ヴァンはそれがわかったのか、口の端を少し上げて、笑ったような気がする。
「いや、実は少し楽しみだったんだ」
楽しそうな声音のヴァン。機嫌が良さそうですね。
「何がですか？」
「アキネ、あんたと話をするのがだ」
「……はぁ？　私と話をするのが……ですか？」
「そうだ」
ヴァンの言葉が理解できずに、私は呆けた返事しか返せなかった。
私の呆けたような返事に、ヴァンは楽しそうに答えた。

ヴァンは答えた後、会ってからずっとかけていたサングラスを外した。

第三十九話（後書き）

ヴァンとタニアちゃんが出ずっぱりです。そのくせヒロインだろうかなちゃんがずっと出てません……。主人公はヒーローの予定。多分。

ところで、白い生き物は何処で出てくるんだろう。出てから、あまり目立ってないぜ。

第四十話

サングラスを外したヴァンの目は、最初に会った頃のリディルを思い出した。

なんと言うか、人を観察するような目、とでも言うべきか。冷たいような……？

いや、実際目の前のヴァンは私を観察しているのだろう。

私がヴァンの発言に対して、どのような反応するのか。

「それで、何で楽しみだったんですか？　私はヴァン、貴方と今日お会いしたばかりでしょう？」

ヴァンと会ったのは今日が初めてだし、会話したのも今日が初めてだ。

それに、それほど多くを話したわけではないのに、何故私と話すことが楽しみだったんだろうか？

全く理解出来ない。

「そうだな。アキネ、あんたと会ったのは今日が初めてだし、話したのも初めてだ。でもな、あんたには興味を抱くには十分な要素がある」

ヴァンは楽しそうに目を細めた。ヴァンが笑ったことで観察するような視線が無くなったことに、私は少し安堵した。

ヴァンって笑うと、悪戯を企んでそうな感じに見える。

「聞いてもいいか？　サングラスを外した俺はどうだ？」

……もしかして、自惚れ屋なのか？

まあ、見目はそんなに悪くないと思うけど。十人いたら五人くらいには、格好良いと言ってもらえそうな感じだけど。怖いけど格好良いような、そんな感じ。

サングラスを外したヴァンは、少し切れ長の目に印象的な赤い瞳。バンダナはつけておらず、今まで隠れていた髪の毛が見える。こちらの色も、また赤い色。

タニアの赤い髪は綺麗で、それこそ綺麗な薔薇などのイメージを抱いたが、ヴァンのは違う気がする。
ヴァンの赤い髪は、なんだか血のような生々しいイメージを抱いちゃったわけで。多分本人の容姿にも関係してると思うわけで……。ちょっと怖いし。
でも、観察するように見ていると解ったのだが、ヴァンの瞳の色は綺麗だ。
瞳の赤い色はなんだか、映像でしか見たことないマグマのような、力強さのようなものを感じる。
でも、サングラスを取ったヴァンはちょっと……怖いです。格好良いとは思うが。
「……んー、私的には格好良いと思いますけど？」
男性に面と向かって格好良いと言うのは、ちょっと恥ずかしい。
気恥ずかしさで、少しヴァンから視線を外し、机の上にある書類の上を彷徨く。
雰囲気もおちゃらけたようなものじゃないし、ちょっとした失言などでヴァンが機嫌を損ねないかちょっとばかり、ビクビクしてたりもするし。
少しだけヴァンから外した視線をヴァンに戻すと、吃驚した。
ヴァンが目を見開いてます。少し切れ長の目を、見開いて……驚いてるのかな？
もしかして、私、質問の意図を間違えたのか？
「あ、あの……？」
「……っく、あはははははは」
ヴァンは吹き出した後、爆笑していた。今度は私が吃驚した。
「格好、良いか……くく……。そんなことを言われるとはな」
「……そんなに笑わなくても……。どんな意味で聞いたのよ？」
あんな聞き方じゃ、誤解もするでしょう。それなのに、そんなに笑うなんて。
なんだか、頭に来る。

ヴァンは少しずつ笑うのを止めていき、悪戯っぽい笑顔で言った。
目が、笑っていなかったけど。
「赤い色をどう思う？」
あの、私の質問はスルーですか！？
不機嫌になられても困るので、仕方ないからヴァンの質問の答えを考える。
「赤い色……ですか。んー……質問の意図がよく解らないですけれど、別に嫌いじゃないです」
「そうか」
ヴァンは目を閉じて、何かを考えているように無言になった。

無言だと、間が持たないのになぁ。
ただでさえ、部屋に男性と二人っきりってので緊張しているのに。
訳の解らない質問はされるし……。
もしかして、質問の答えが気に触ったのかな……？
私は正面で目を閉じているヴァンを、観察するように眺めていた。
目を閉じてると、怖いって感じはないんだけどなぁ。
ヴァンの赤い髪も、陽の光を反射してる部分は、タニアの赤い髪みたいに綺麗なんだ……。
じっと観察するように眺めていたら、ヴァンが目を開けた。眺めていた私の視線と、目を開いたヴァンの視線が交差した。
その目は、射ぬくように鋭い気がした。
「一度した質問を、もう一度させてもらう。アキネ、あんた何者だ？」
「……」
またその質問ですか。
答え難いというか、答えて良いか解らない質問は困るんだけどな

ぁ。

答えてから、お縄を頂戴致しますとか言われた日には……多分逃げきれそうにないしなぁ。

困った。

いや、別に悪いことしてないけどさ。

「黙りか。まあ、いい。なあアキネ、あんた本当にこの世界の人間か？」

「……っ！」

ポーカーフェイスとか、自信ない。というか、きっと今顔に出てる。

多分、私驚いたような表情をしてそうだ。どうしよう。答えなくてもバレそうだ。

「もしあんたが『神銀の乙女』ってのなら、話は早いんだがな。でも、あんたは違うようだ。それなのに、赤い色を嫌うでもなし、厭うでもない。寧ろ、赤い髪を綺麗だと言う。格好良いとも言ったな。城勤めの人間に赤い色を纏った奴は居たか？」

ヴァンに言われ思い返してみるが、城で赤い色を纏っている人を見たことがない。

城の調度品も、絨毯なども何もかも、赤い色の単色は見ていない。玉座の間でも、絨毯の色は赤ではなかった。

「見てないだろう。そりゃそうだ。赤い色は忌み色だからだ。この世界に住んでる奴は、小さな頃からそれを教えられながら育つ。赤い色を嫌いじゃないと言う人間なんてのは、異常なんだよ」

ヴァンの視線が痛い。鋭い視線は、警戒の色が濃い。

私の発言は「異常」らしい。そんなこと、リディルも女王もマリーンも教えてくれなかった。

それはきっと、当たり前過ぎることだからだ。

当たり前過ぎて、教え忘れていた事。

赤い髪をしたヴァンが、赤い色は忌み色だと教えてくれる。

「……っ」

異世界から来たと話しても良いことなのか、解らない。
でも、きっとバレている。
ヴァンが確信を持っていないのは、私が『神銀の乙女』じゃないから。
女王が言っていた、『神銀の乙女』以外がこの世界に来たことなど過去に一人も居ないと。
「あんたの行動を見てたら、記憶喪失って感じでもないようだしな。そうなると、この世界の人間じゃないんじゃないか、と思うんだが……。でも、あんたは『神銀の乙女』じゃない。だから、確信が持てない。なあ、アキネ。あんたはこの世界の人間か？」
ヴァンは鋭い視線のまま、再度聞いてきた。
怖い。
ヴァンが怖い。
ヴァンに怒りをぶつけられているようで、凄く心が痛い。
目頭が熱い。気を引き締めないと、泣いてしまいそうになる。
つい、唇を噛み締めてしまった。ちょっと痛い。

「悪い。怯えさせるつもりはなかったんだが……」
前髪を掻き上げながら、ヴァンは窓の外を見るように顔を横に向けた。
ヴァンの怒りを含んだかのような鋭い視線が無くなり、気が緩む。
「あんたが、タニアの髪の色を綺麗だって言ってくれた……。あの言葉、俺も嬉しかったんだ」
ヴァンは立ち上がって、私の方に近づいてきた。
ヴァンが怖い。私のその気持が、椅子に座ったまま逃げるようにヴァンから体を少し離す。
椅子の端のほうまで、私の体が寄る。
私の横まで来たヴァンが、屈んで下から見上げるような状態になった。

こんな風に男性に下から見上げられるのは、初めてかもしれない。
「アキネ、あんたに危害は加えない。誓っても良い。俺は、ただあんたが何者なのか知りたい」
見上げてくる視線は、鋭くはない。
タニアの視線に、似てるような気がする。嬉しそうな笑顔で、私を夜の食事に誘ってくれた時の視線に、似ている気がする。
「……ヴァン……の言う通りよ。私は『神銀の乙女』なんかじゃないし、この世界の人間でもない。……でも、その事を言っても良いのか解らないの。もう、バレてると思うから言うけど」
泣きそうな状態で気が緩んだからか、言い出してから涙が零れ始めた。声も震えてるし。
屈んでいるヴァンが心配そうな表情になる。
「私はかなとこの世界に来たの。かなはこの世界に来て、瞳の色が銀色に変わったわ。かなが『神銀の乙女』だって、周りは言ってるし。女神もかなを呼んだって言ってたわ。……私は何でこの世界に来たのか、女神も解らないって言ってた。……護衛を、つけられているって事を考えたら、違う世界の人間だって言って良い事なのか解らなかったから」
ぐずぐすと鼻を鳴らしながら、横で屈んでいるヴァンに説明をした。ヴァンは心配そうな表情のまま、静かに聞いていた。

私は、この世界に来てからの事をヴァンに話した。
かなとの関係も、女神に教えられたことも。
でも何故か、あの金色の人の話だけはしなかった。しないほうが良いと思ったから。
夜の城の庭園で会ったときの、あの時の声が聞こえるような気がした。
だから、ヴァンには話さなかった。
きっと、誰かに話すにしても、もっとこの世界の事を知った後だ

ろう。

大体を話し終えた頃には、私の涙も止まって、ヴァンも心配そうな表情をすることもなくなった。

「大変……だったんだな。なのに、タニアを助けてくれたんだな」

「だって……あれはっ！」

「アキネ、あんたは優しいな」

ヴァンの宥めるような優しそうな視線に、優しいと言ってくれた言葉に、頬が熱くなる。

あれは見捨てられなかったからだし、成り行きといえばそうなるし……。面と向かって優しいとか言われたら、照れるじゃないか。

「……わ、私は、話しましたよ。今度はヴァン。貴方がどうしてそんなに、私のことを知りたかったのか教えて下さい。私だけ話すなんて不公平だ」

そう言った私の顔を見て、ヴァンは至極楽しそうに、悪戯を思いついたような笑顔で言った。

「アキネ、あんたが気に入ったから……じゃ、答にならないか？」

「気に入った……ですか？　私がタニアを助けたから？」

それ以外、この人に気に入られるような事をした覚えがないし……。

ヴァンは立ち上がって、私の頭をポンポンと軽く叩いた後、ちょっとだけ撫でた。

「まあ、それ以外にもあるさ。この話はまた今度な。そろそろ時間だ」

ヴァンが言い終わると同じくらいのタイミングで、ドアがノックされた。

第四十話（後書き）

やっとで赤色の説明が出来たー。小動物がでないけどね……なかなか。
なかなかヒロインのかなちゃんの元に戻ってくれないです。主人公。
４０話になりました！引き続き頑張っていきます！

第四十一話

「バンチョウ、時間です」
聞き覚えのない中性的な声が、ドアの向こうから聞こえた。
「だ、そうだ。アキネ。あんたも来てくれ。特等席を用意するからそこで見ないか？」
立ち上がったヴァンが、手を差し出しながら言う。
そう言えば、タニアとの会話で「見て貰いたいのか」とか言ってたね。衣装合わせとかも言ってたし、何をするんだろ？　定番で考えると演劇とかかな？　タニア、スタイルも良かったからファッションショーとかも考えられるかな……？
いや、先程のヴァンの説明で赤い色は忌み色だと言っていたことを考えると、ファッションショーはありえないだろう……。
「……大丈夫？」
ヴァンにそれほどの権限があるのか解らないため、聞いてみた。
特等席とか言われると、ＶＩＰ席とかＳ席とかかな？　そうなると、お金とかかかるんじゃないのかな？
いや、でも彼らは主催側だろうから……でもなぁ。
「大丈夫？　何がだ？　何の心配してるかは知らんが、タニアのためにも見てくれ」
タニアのためときたか。そう言われると、断りにくいなぁ。
見て欲しいから席を用意するってことだから、席代とか気にしなくてもいいのかもしれないや。
私は頷いて、用意すると言った特等席に案内されることにした。

ヴァンは部屋から出る前に、ドアの外で待っている誰かに向かって「すぐ行く」と言った後、理解出来ない言語で何かを呟いた。
呟いた後一拍置いて、ヴァンの赤い髪の毛が生え際からサッと暗

い黒色に変わっていった。
「い、今のは　……もしかして、魔法？」
驚いたけど、ドアを開ける前にした行動と考えると、多分他の人には内緒なのかもしれない。私はなんとか驚いたけど、大きな声を出さずに済んだ。
「ん？　ああ、魔法だぞ。初めて見るのか？」
「魔法は……確かあれは攻撃魔術の一種だとか言ってたから、一度は見たと思うけど。でも、そんな見た目が変わるようなものじゃなかったから。光ったりとかもしなかったし……。えっと、魔法の名前知らないけど、犬のリードな魔法」
「……？　よく解らないが、見た目が変わるような魔法は初めて見るんだな」
ヴァンの発言に頷く。それを見たヴァンは切れ長の目を少し細めるようにして笑った。
ってか、確かに犬のリードとかじゃ解らないよなぁ。フィンが私にかけた魔法。もっとこの世界の人に解り易い言い回しは……私が解んないや。かなだと解ってくれそうなんだけど。
「今のは身体魔術の一種で、髪や目の色を一時的に変化させる魔法だ。と言っても、外法とか言われるような部類だから、使用するような奴なんて殆ど居ないな。使える奴もほんの一握りだろう。難しいわけじゃないんだがな……」
ヴァンは悪戯っぽい笑顔を浮かべ「秘密にしといてくれ」と言った。
その笑顔の釣られるように私も笑いながら「解りました」と答えた。
ヴァンに案内された特等席は、広場に設置されたステージの真正

面だった。
ステージ台と観客席との間に柵が設けられ、椅子はどこかの球場のように階段のように並べられていた。この椅子ども確か、私やタニアが広場についたときには無かった気がするが……。
もしかして、あれから一時間位しか経ってないのにその間になのか？
もしそうだとすると、この世界の人は仕事が凄く早い気がする。
まあ、それはさておき、用意された特等席は階段の二段目位の位置で、椅子に座ったときの目線の高さがステージがとても良く見える場所だった。流石特等席。
「アキネさんですか？」
用意された特等席に座っていると、腕章を腕につけたスタッフのような男性が声をかけてきた。
私が肯定して頷くと、男性はほっとしたような表情をした後、何か薄い絵本のような物を差し出してきた。
男性と絵本とを見比べるようにして見ると、男性は少し苦笑するような表情に変化した。
「バンチョウが、君にこれを渡してきて欲しいと。確かに、渡しましたからね」
私はお礼を言って、絵本を受け取る。
男性は絵本を渡し終えると、踵を返して忙しそうに走って行った。
薄い絵本を受け取って、男性が何故苦笑しているのか解った気がする。
子供向けの絵本。タイトルは『女神と赤い髪』。
『女神と赤い髪』ですか……。
こうやって、子供向けの絵本にも出てくる程、悪役的立場なんだね赤い髪の人ってのは。
別に、赤い髪を持ったタニアが悪い人だとは思えないし、ヴァンも悪い人物に感じていない。
でも、ヴァンが私にと男性が渡してきた絵本には、この世界での

『赤い髪』の立場みたいなものが解るようなものなのかもしれない。
ステージで何かが始まるまで、読んでみることにするか。
渡されたんだし、読めって事だろう。

昔々、女神様がまだ人間と仲良く暮らしていた頃のお話です。
女神様が創った人間を、女神様は愛しておられました。
世界には女神様と人間以外にも、暮らしているものが居ました。
それは、人間を虐める魔物と魔物を創った赤い髪の神様でした。
心優しい女神様は、人間が魔物に虐められているのに心を痛め、赤い髪の神様にお願いをしました。
「あなたの創った魔物が、私の愛しい人間たちを虐めています。どうか止めるように言って下さい」
女神様は精一杯お願いをしました。
けれども、赤い髪の神様は女神様の言葉を聞きませんでした。
悲しんだ女神様を見た人間は、女神様に心配をかけないようにと魔物に虐められても必死で生きました。

魔物もまた、必死に生きる人間を虐め続けました。

女神様はもう一度、赤い髪の神様にお願いをしました。

赤い髪の神様は、女神様に言いました。

「私の創った魔物も、女神様の創った人間と仲良くなりたいだけです」

けれども、赤い髪の神様の創った魔物は姿も形も人間と違い、力も言葉も何もかも違いました。

魔物に比べると、人間はか弱く非力で直ぐ死んでしまうような生き物でした。

人間に比べると、魔物は力強く生命力に溢れちょっとやそっとのことじゃ死なない生き物でした。

赤い髪の神様は、魔物は人間を虐めているのではなく、仲良くしようとしていると言いました。

けれども、か弱い人間と力強い魔物とでは仲良くすることは出来ず、女神様はさらに心を痛めました。

女神様は赤い髪の神様に三度目のお願いをしました。

「これが最後のお願いです。どうか、私の創った人間たちを虐めるのを止めて下さい」

赤い髪の神様は、女神様の最後のお願いも聞きませんでした。

悲しんだ女神様は泣く泣く、愛した人間のために、魔物を封じようとしました。

これに、赤い髪の神様は女神様にお願いをしました。

「私の創った魔物の代わりに、私を封じて下さい。どうか、魔物たちは許してやって下さい」

心優しい女神様は、赤い髪の神様のお願いを聞いてあげることにしました。

人間を虐める魔物を創った赤い髪の神様は、魔物の代わりに女神様に封じられました。

けれども、人間を虐める魔物たちはそのままでした。

女神様は人間たちに魔物に負けないようにと、魔法を授けました。

人間たちは女神様に授かった魔法で、魔物にも負けないようになりました。

女神様は人間たちの元を離れ、赤い髪の神様が寂しくないようにと、神代の塔で暮らしはじめました。

これで、お終いですか。
こんな感じの絵本を幼少の頃に、この世界の人は読んで大人に成長していくんだ。
でも、赤い髪の神様が魔物を創ったから、赤い色が良くないってのも極端だなぁ。

私が絵本を読んで、何気なく絵本を撫でていると周りがわっと沸いた。
顔を上げて周りを見回すと、沢山の人が席に座ってステージの方を期待の眼差しで見ていた。
私もステージの方に視線を向けた。
ステージの上には、一人の人が立っていた。

第四十一話（後書き）

主人公が読んでいる絵本の内容を挟みました。
最初、全部平仮名にしようかと思い、途中まで書いてみましたが、読みにくかったので漢字変換もすることにしました。
でも、一応子供向けの絵本なので、小学一年生向けくらいの文字しか使われてないとだけ。

第四十二話

ステージに立っていた人物は、どうやらヴァンのようだった。肩にはあの小さい白銀竜が乗っていた。

……どうみてもあれ、小さい翼のオブジェを背負わせた犬にしか見えない。竜になんて見えない。

燕尾服のようなステージ衣装を着たヴァンの口上から始まって、ステージの上で演劇が始まった。

拍手と共に、ステージの照明が落とされ、辺りも暗くなる。

そういえば、陽も傾きかけてるなぁ。今何時くらいなんだろうか？

演劇の内容は大雑把に言っちゃうと、昼ドラ？

……大雑把に言い過ぎました。

ある銀髪の女性と幼馴染の男性が居ました。

そこに赤い髪の魔女が現れました。

赤い髪の魔女は幼馴染の男性を好きになり、魔女に言い寄られた男性は魔女のことが好きなりました。

幼馴染の男性は、赤い髪の魔女の禍々しいお城に魔女と一緒に住むようになりました。

銀髪の女性は幼馴染の男性の事が好きで、いきなり現れた赤い髪の魔女に幼馴染の男性が拐かされた事に怒りました。

銀髪の女性は赤い髪の魔女が幼馴染の男性を手に入れるため、魔女が男性に魔法を使ったと思いました。

なぜなら、幼馴染の男性は銀髪の女性と昔将来を誓い合った仲だったからです。

銀髪の女性は赤い髪の魔女に見つからないように、魔女の禍々し

い城に忍びこみ、幼馴染の男性を探しました。
程なく、銀髪の女性は幼馴染の男性と会えました。
けれども、銀髪の女性の言葉は幼馴染の男性には届きませんでした。
幼馴染の男性は赤い髪の魔女の魔法によって、銀髪の女性の事が解りませんでした。
魔法は掛けた赤い髪の魔女が解除するか、魔法を掛けた赤い髪の魔女よりも圧倒的な力でしか解くことが出来ません。……それか、魔法を掛けた赤い髪の魔女が死ぬか。
けれども、赤い髪の魔女よりも圧倒的な力を、銀髪の女性は持ってはいませんでした。
銀髪の女性途方に暮れ、涙を流しました。
銀髪の女性は藁にも縋るような思いで、女神に祈りました。
そのころ、赤い髪の魔女は禍々しい城の最上階にある部屋の窓から外を眺めていました。
その時、突風が吹き、赤い髪の魔女はバランスを崩し、窓の外へと落ちてしまいました。
赤い髪の魔女は死んでしまいました。
幼馴染の男性に掛けられていた、赤い髪の魔女の魔法は解けました。
それから、銀髪の女性と幼馴染の男性は結ばれ、末永く幸せに暮らしました。

タニアは赤い髪の魔女を演じていた。子供向けの映画に出てきそうな、いかにも悪い魔女のようなド派手なメイクをしていた。
きっと、観客の人たちはタニアがどれほど綺麗で可愛い女性なのか知らないだろう。

演劇が終わった後の人物紹介で、タニアの時だけ少し拍手が少なかった気がする。
あんな絵本を読んだ後だから、気にし過ぎだったのかもしれないが。
少し寂しい気分になる。
後、知ってる人なんてヴァンくらいだけど、彼はナレーション役でステージの端のほうでずっと立っていた。
演劇は一時間位あったように感じる。
真剣に魅入っていて、正直どのくらいの時間あったのかがよく解らない。
でも、凄く楽しかった。それに、凄く素敵だった。

人物紹介も終わり、ヴァンが締めくくりの言葉をかけるとステージの上の明かりも消え、観客も席を立ち何処かへと帰っていった。
私は演劇が終わる直前に来たスタッフの方に、ヴァンからの言伝で「ここで待つように」と言われたので、特等席に座ったまま、明かりの消えたステージを眺めていた。
何処からか、ゆったりとしたテンポの音楽が聞こえてきた。笛と弦楽器のような音だと思う。
暗く誰も居ないステージ。
人のまばらな客席。
一人でそれを眺めているせいか、酷く物哀しい気分になってきた。
例えるなら、最終学年の文化祭の終わり。
あんな感じかな。

空を見上げると、陽はとうになく、大小の二つの月が出ていた。
ああ、この夜空は嫌いだ。
この世界は、私たちの居た世界じゃないから。

この世界には、父も母も姉も妹も、私の家族は居ないから。
この世界は、嫌い。
救いなのは、私はこの世界に一人で来たわけじゃないという事。
かなが一緒だという事。
もし、私が一人でこの世界に来ていたのなら、この世界で私のことを心配してくれる人なんて、きっと誰も居ないから。
でも、かなと一緒だから、他の誰も心配してくれなくても、かなはきっと私のことを心配してくれるはず。
それだけでも、私は私の居場所を見つけられる。

「！」
空を見上げて居た私の膝の上に、何か重みが増した。
驚いて膝に視線を向けると、そこには先ほどヴァンの肩の上で観客に愛想を振りまいていた白銀竜が乗っていた。白銀竜の視線は私を見上げていて、膝に視線を向けた私の視線とぶつかった。
白いふわふわの毛。毛の長さは柴犬などの短毛種のよう。毛並みはラビットファーとかよりも、肌さわりが良い気がする。
鼻の先が少し尖ってるような気もする。
見上げてくる円な瞳は、綺麗な綺麗なお月様のような金色。
少し首を傾げるような仕草が凄く可愛くて、撫でたくなって白銀竜へと私は手を伸ばす。
白銀竜は撫でられるのが解っているように、目を細め手の方へと頭を摺り寄せてくる。
肌触りよい毛並みを持った白銀竜の頭を、優しく撫でる。
凄く、癒されます。
可愛いなぁ。昔から犬とか猫とか大好きなんだよな。撫でるとなんだか癒されるし。
「お前……名前はなんて言うんだろうね。まだ聞いてなかったね。お前のご主人様は？　一人で私のところに来たの？」

白銀竜は細めていた目を開け、通路を見た。
「そいつはまだ契約をしてないからな、ご主人様ってのはいないんだ。すまんな、遅くなった」
聞いたことのある声の方を向くと、通路にヴァンが歩いてこっちに近づいて来ていた。
「ヴァン。お疲れ様」
ヴァンが迎えに来てくれたので、私は白銀竜を腕に抱いて立ち上がった。
「タニアが待ちわびている。こっちだ、付いて来てくれ」
ヴァンはそう言うと、少しだけ笑って歩き出した。私はそれに付いて行った。

「ああ、そうだ。アキネ、あんたの連れってのも見つかったみたいだぞ」
前を歩くヴァンが、世間話をするように言ってきた。
って、重要なことだよ。最初に言って下さいよ！
「見つかったんですか？」
「連れってのがあいつで合ってるのならな」
「ああ、よかった。これでちゃんとお城に帰れるんだ」
「……そうか」
前を歩くヴァンが急に立ち止まった。
私は直ぐ後ろを歩いていたけど、なんとかぶつからずに止まれた。
ってか、いきなり止まらないで欲しい。
「……どうかしたの？」
白銀竜は私たちが歩き出したら、私の腕の中から降りて自分で地面を歩いている。ちょっとだけ、寂しかった。癒しが逃げた。
でも、ヴァンじゃなく私の足元で歩いているのは、嬉しい。
ヴァンが振り返った。急に立ち止まったヴァンにぶつかりはしなかったけれど、距離が近い気がする。さっきまで、後ろ姿だったか

ら気にしなかったけど、向き直って見下ろされるのには威圧感がある。
「ヴァン？」
見下ろして、尚且つ無言だと威圧感倍増。
少し、怖いですよ、ヴァンさん。
「アキネは……城に帰るのか？」
「え？　そりゃ帰りますよ。城にはかながいるし、宿代だってないし。帰らないとかなに心配かけちゃうから」
私は目線を合わせるため、距離の近いヴァンの顔を見上げる。
これ、長時間すると首が痛くなりそうだな。いっそ、屈んでくれ。
そんな悪態のようなことを思っていると、いきなり視界が真っ暗になった。
心なしか圧迫感がある。
ってそりゃそうか。
何で視界が真っ暗って……。
ヴァン、ふざけてるのだろうか？
何で私、ヴァンに抱きしめられてるの？
ああ、くそぅ。こんな時なんて言えば良いのか……。
なんだよ、このゲームのようなシチュエーション！
恥ずかしい通り越して、頭真っ白だ！
かなちゃん助けてー！！
私はこんなのに耐性ないんじゃー！
こんな状況耐性値０だよ。誰か助けろー！
ってか、まじ。何をどうすればいいの？！
「なあ、アキネ」
あ、頭に吐息がかかるー！？
声が頭の真上からするよー！
お願いだから、悪戯するなら違う悪戯にしてー！
ってか、悪戯なんてしないでくれ！
たーすーけーてーー！

無言で、ヴァンの腕の中でフリーズしている私をよそに、ヴァンは言葉を続けた。
「俺が守ってやる。だから、俺の側に居ないか？」
ヴァンは、私を守ると言った。
でも、今の私は頭の中は耐性値のない状況にフリーズを起こして、把握することが出来ませんでした。

後日、思い出すだけで身震いがするような、恥ずかしい出来事でした。
ヴァンのアホ。

第四十二話（後書き）

セクハラ。魔女の話は入れれたら、注釈を入れたい。いれれたら……。

第四十三話

どのくらい、そうしていたのか私には解らなかった。
一分一秒がとても長く終わりがないように感じるような、そんな体験始めてだったから。

ヴァンはステージ衣装から、会った時と同じラフな格好に着替えていた。
抱き締めている腕は私より少し高い体温で、なんだか頭が沸騰しそう。
白いシャツから伝わるのは、血が脈打つ音。
ドクンドクン、と。
心なしか早い気もするが、自分以外の血が脈打つ音とか聞いたのとか初めてだから、よく解らない。
……この状況はなんだかよく解らないけど、ドクンドクンと血が脈打つ音を聞いてるのは、少し心地が良い。

「……アキネ？」
ヴァンに抱き締められてあんな言葉まで聞かされたのに、何の反応も返さない私を怪訝に思ったのか、伺うようにヴァンは私から少し体を離した。
体を離してくれたおかげで、真っ暗だった視界が色を取り戻す。
視界が色を取り戻し、思考が少しずつ回り始める。
回り始めてから、先程までの状態や、ヴァンが言った事を理解できる状態になってきたら、凄く凄く恥ずかしくなってきた。

恥ずかしさは加速を増し、ヴァンの腕の中に居た時よりも比じゃないくらい、頭が沸騰してきた。
沸騰した頭で何を血迷ったのか、血迷ってないのか。それすらも解らない。
解らないが、沸騰した頭は言葉を勝手に紡いで、体を動かした。
「……ヴァンの、ド変態ー！！」
別に普段口より手が早い訳じゃないわよ。
ただ、今の私の状態がゲームで言うところの混乱状態だったから……と言い訳をしてみる。
私が取った行動は、ヴァンにボディブローでした。
「……っぐ……。せめて……、嫌なら……嫌だと言ってからにしてくれ……」
どうやらクリーンヒットしたらしく、ヴァンは腹を片手で押さえながら怯んだ。
「っう……。だ、だってヴァンが……。ヴァンが悪いんだから！あ、あんな事、他の人にすればいいでしょ！」
ヴァンを殴った自分の手を庇うように、胸の上で握りしめる。
私はヴァンの行動にもだけど、自分の取った行動にも驚いている。
ヴァンはそれだけ言うと、暫く痛みに耐えるように無言だった。
少しだけ落ち着くと、殴ったヴァンが怒ったりしないか不安になってくる。
「……その、ごめん……ね？」
先に暴力に訴えたのは私だから、どちらかといえば私が悪かったと思うので、一応謝ってみた。
ヴァンの様子を伺うように、痛みに俯いているヴァンを覗き込んでみた。
後で思うと、あんな事をされた後だというのに迂闊だった気もする。
覗き込んだ私を気遣うように、ヴァンは少しだけ笑顔を作った。
……痛いところに入っちゃったか。悪かったかなぁ。

ヴァンはまだ痛いんだろう、何処か引きつったような笑顔で、私の頭をぽんぽんと撫でるように叩いて言った。
「悪かったな。……タニアのところに行こう」
ヴァンはそれだけ言うとサッと踵を返して、タニアが待っているという場所へと向かい始めた。
呆気に取られた私は、ヴァンに置いて行かれそうになって慌てて付いて行った。

道中、ヴァンに好きな人や恋人は居るのかという質問には、つい怒ったように「居ませんよ！」って答えた。
図星を指摘されて焦ってたわけじゃない！　と……言いたいけど言えないか。事実だし。
そしたら、ヴァンは楽しそうに笑って「そうか」とだけ言った。

広場についたときタニアに案内された、宿屋のような建物にヴァンは私を案内した。
酒場兼食堂のような一階の入り口の受付カウンターのような場所で、タニアは待っていた。
タニアは私を見ると、小走りで近づいて来て嬉しそうな笑顔で聞いてきた。
「アキネさん、お待ちしてました。如何でしたか、楽しんで頂けました？」
「凄かったよ！　私、感動した！」
タニアの笑顔に、私も笑顔で答える。

私はタニアが魔女役をしていた演劇を思い出していた。その後の事まで思い出してしまい、顔が熱くなってきた。

「アキネさん、なんだか少し顔が赤くないですか……？　風邪でも引きました？」

こんなところ凄かったよ、などと説明をしていた私がいきなり黙ったものだから、タニアは首を傾げながら私の様子を観察していたようだ。

ヴァンの行動を思い出して、恥ずかしくなって赤くなったなんて言えるわけもなく、取り繕うように

「大丈夫！　何でもないから、大丈夫だよ。風邪とかも引いてないし……」

と言っても、タニアは信じる様子はなく、私から視線を外し迎えに行ったヴァンを見ていた。

「……バンチョウ？」

何処から声を出しているのか気になるくらい、低く怖い声をタニアが発した。

タニアと向かい合っていた私からはヴァンの顔は見えなかったが、ヴァンを振り返ってみるほどの勇気は今の私には無かった。

「何だ？」

「……アキネさんは、私の恩人です。失礼のないようにお願いしますよ」

「解っている」

後ろで淡々と聞こえるヴァンの声に心の中で悪態を吐きながら、冷静さを取り戻そうとかなは何をしているかなと思ってみる。

「あ」

そこで思い出した、フィンの事。

大変申し訳ないです。今まで、すっかり忘れてた。

城から城下街に一緒に来てくれた、サティの息子のフィン。

金色の人のせいで、フィンが私に迷子予防の術をかけていたらしいのですが、それが効かなくなって逸れた。色々あって、今タニア

やヴァンたちの協力のおかげで、フィンが見つかったらしい。
いや、見つけてもらったってのが正しいんだろうけど。
「あの、連れが見つかったって聞いたんですけど」
ヴァンが私を呼びに来た理由だったと思う。
「ああ、そうだったな。連れはフィンって名前の騎士でよかったよな？」
私はそれに少しだけ嬉しそうに頷いた。
ヴァンは一瞬むっとしたような表情をした気がした。
多分、気のせいってことで、気にしないことにする。
「その人ならこの先でアキネさんをお待ちしています。行きましょうか」
「はい、お願いします」
タニアに案内され、入口付近から奥へと進む。

タニアに案内された奥にある食堂には、四人がけのテーブルが所々に置いてあった。
そのひとつに、キョロキョロと辺りを見回しながらテーブルに着いている、フィンが居た。
フィンは私の姿を確認すると、椅子から立ち上がって小走りで近づいて来た。
「アキネ様！」
目の前まで来たフィンは私の体を頭から足まで見た後、心配そうな顔で「怪我は？」や「今まで何処に？」とか矢次早に聞いてきた。
もしこれが男性だったら遠慮無く掴んで何処も怪我などしてないか確かめるんだろう、でも私が女性だから触れずに、フィンの手は上げられて何もせずに下げられた。
「だ、大丈夫ですから。フィンさん、落ち着いてください」
フィンは少しバツの悪そうな表情をした後、真顔に戻って頭を深く下げてきた。

「申し訳ありませんでした。術に頼りすぎていた私の不覚でした。本当に申し訳ありませんでした」

食堂は騒がしい私たちに注目が集まって、そんな中で騎士の格好をしたフィンが私に頭を下げているものだから、私は凄く焦った。

「いいです、いいですから、頭を上げてください。こんな人の多い場所で、恥ずかしいですから」

「ですが……」

フィンは渋々だったが頭を上げてくれた。

「ここで立ち話はなんだ、部屋を借りてそこで話そう」

ヴァンはそう言って酒場のオヤジに話をしに、入口付近のカウンターに行った。

五分前後で話がつき、宿の二階にある客間へと案内された。

私はそこで、フィンに逸れた後のことを説明しなければいけなくなった。

なんというか、私ってば二十歳も超えて、社会人としてそれなりに生活してきたのに……。

迷子で人に迷惑をかけるなんて……。

おのれ、異世界。

おのれ、金色の人。

いい年して恥ずかしいです。

穴があったら入りたい。

そんな心境の私なんてさておき、話し始めることになった。

第四十三話（後書き）

大変遅い更新になったことを、お詫び申し上げます。
言い訳になりますが、主人公のあきちゃんがフリーズすると物語の歩みが亀になった。この話は難産でした。
でも、恋愛ものを書いてみたいって気持ちから書き始めたので頑張って行きます！
引き続きお付き合いお願いします！

第四十四話

私とフィン、ヴァンとタニアは四人で八畳ほどありそうな宿の客間を借りた。
太陽は既に落ち、部屋はランプのような備え付けの照明が部屋を明るく照らす。
部屋に入るとき、案内した酒場のオヤジが壁を触って明かりを付けているところを見ると、使い勝手は私たちの居た世界の照明に近いのかもしれない。
照明であるランプには火が灯っているのを見ると、電気ではないようだが。
質素だけどセンスの良い壁飾りなどがあり落ち着いた雰囲気の客間には、良質そうな木製のテーブルがあった。
テーブルには私とフィン、反対側にヴァンとタニアといった感じで席についていた。
「えっと、向かい側の男性がヴァン……。隣がタニア。フィンさんと逸れた後、お世話になってたの」
別に、フルネームが思い出せなかったとかじゃ……。
思い出せなかったので、略称で紹介してしまいました。
「ヴァンヴァロール・オージンです。キャラバンの長を務めています。この度はキャラバンの仲間である、タニア・イミルがアキネに助けて頂いた。感謝として、アキネの手伝いをさせてもらったまでです」
ヴァンは軽く会釈をして話し始めた。ってか、言葉遣いかなり違いませんか？
そういえば、この世界の騎士職ってどの位の地位になるんだろうか？
エリートサラリーマンとかそんな感じなのかな？
聞いてないから、さっぱりだなぁ。

ヴァンが丁寧な言葉遣いってことは、それなりに地位とかありそうだけど。

「タニア・イミルです。私が暴漢に絡まれていたところを、アキネさんに助けて頂きました。こちらこそ本当にお世話になりました。おかげで、今日の公演に遅れたりせずに済みました」

タニアは穏やかそうに微笑みながら言った。

「そうですか。私と逸れてしまった後、色々と大変だったのですね。アキネ様にそのような大変な思いをさせるなど、本当に申し訳ありませんでした。なんと言ってお詫びをすればよいか……」

フィンはまだ謝り続ける。

確かに、フィンは仕事で護衛をしていたんだ。決してボランティアなどではない。

もし、これで何かがあればそれこそ大問題だったんだろう。今回は何もなかったから、よかったけど。

私が罵声を浴びせたりしても、悪いのはしっかりと護衛をしなかったフィンになるんだろう。

だから、フィンが責任を感じて謝るのは変なことじゃないけど……。

けど、別にフィンだけが悪かったわけじゃないし、何も無かったから私的にはもういいんだけどなぁ。

「フィンさん、私こそ勝手に行動してごめんなさい。あんなに人が多いんだもの、勝手な行動したら逸れるのは当たり前なのに……。本当にごめんなさい。そんな訳だから、この話はこれで終わりにしない？」

フィンは少し驚いたように、目を見開いて私を見た。そして、穏やかな笑顔で言った。

「アキネ様がそう仰られるのであれば」

フィンはそう言うと、これ以降逸れたことへの謝罪は言わなくなった。

その後は、宿の食事を頂いて城へ向かう馬車を待つことになった。
今日の街での予定は、夕方の市とか言うのを見た後、パレードを見てご飯を食べて城に戻るって予定だったのに……。よもや、迷子になっている間にそんなに時間が経っていようとは……。
キャラバンの演劇は、パレードの最中に行われていたらしい。
いいのか、その時間帯で。
宿の客間で食事をしながらタニアにも、私が異なる世界からかなと一緒にこの世界に来たことを説明した。もっとも、金色の人の話はしていないが。
もちろん、フィンはそのことを知っていたようだし、ヴァンには二人っきりの時に話していたから、二人は驚いたりはしなかったようだ。タニアは驚いてたけど。
その後からの雑談では、タニアが色々なことを説明しながら話してくれた。
あの国は何が特産でこれが美味しいなど、お勧めの化粧品メーカーや大手の服屋など色々なことを。
だから、私はキャラバンが何なのか、タニアに聞いてみた。

街から街へと行く間、魔物や盗賊などに襲われたりしても撃退できるように、商人や商人の雇った護衛で商隊を組んで移動をするキャラバンと、ヴァンたちみたいな、定住せず世界中を旅をしながら芸や商いをして回っている者たちのキャラバンとの、二種類があるとのこと。
一般の人が街から街へ行くときは、このどちらかのキャラバンに引っ付いて移動する馬車に乗るのが一般的とのこと。魔物や盗賊などにあった場合、護衛が優先して守るのはキャラバンではあるが、

護衛の力が及ぶ範囲では助けてくれるらしい。そのため、乗車料は若干割安になっている。

他にも、国が定期便と名づけて時間を決めて、出している護衛付きの馬車があるが、こちらは安全度が高くなる分料金も割高になっている。また、キャラバンに引っ付かずに単独に行く馬車もあるが、これはかなりの危険度が伴うため割安だが、出す人も使う人も少ないらしい。

蛇足だけど、ヴァンがタニアに「バンチョウ」と呼ばれてたのは、ヴァンがキャラバンの長だから、ヴァンと長を合わせて「ヴァン長」だったらしい。

なんだ、番長じゃなかったんだ……ってそりゃそうだ。

馬車の待合所のような場所には、この街に来たときに馬を預けに行った詰所の兵士が、馬を引いて待っていた。フィンは馬を受け取ると、私に聞いてきた。

「その、アキネ様。私と二人乗りと馬車のどちらが宜しいでしょうか？」

「馬車でお願いします」

即答した自分。失礼だな。

でも、無駄に心臓に悪そうな事は回避したい。

というか、暫くの間誰かと体を引っ付いたりするような、近い距離は全力で遠慮したい。

まあ、かなやタニアとか女の子だったら、そんなに気にしないけど。

男性とかは断固拒否したい。

別に、ノーマルですよ。恋愛感情とかも普通のはずよ？

でも、心臓に悪いじゃない。

だからさ……って、誰に言い訳をしているんだか。
兎に角、馬車ならそんな心臓に悪いことはないはずだし！
フィンが馬車の御者と何か話してる間、私はタニアとヴァンと待合所のベンチに座っていた。
「そうだ、ヴァン。あの絵本、ありがとう。ここまで持ってきちゃったけど、返すね」
「いや、いい。貰ってくれ。タニアを助けたから、お土産を買ったりもしてないんだろう？」
「……お土産……わ、忘れてた」
すっかり、今の今まで、忘れてました。
かなちゃんへ、ごめんなさい！
落ち込む私。
肩を揺らしながら笑うヴァン。
タニアは何かを私に差し出してきた。
「……これは？」
「その、お土産にならないかもしれませんが、どうぞ貰って下さい」
差し出されたものは、小さな白い犬のようなぬいぐるみ。背中に羽のような突起物があることから、白銀竜を模した物なんだろう。
携帯電話位小さいのに、とても細かく作ってあった。
「可愛い……手作り？」
「手作り、と言えば手作りですね。錬金魔術で作られてます」
「魔法で作ってあるの？！　凄い……可愛い……」
私はタニアから受け取った、小さな白銀竜のぬいぐるみに魅入った。
「気に入って頂けて、よかった。これは、演劇を見に来てくださった人に配ってるんです。アキネさんも見て下さったんですから、遠慮なく貰ってください」
タニアが笑顔で言ってくれた。
今はヴァンの足元に居る、白銀竜。その子を模して作ったのであろう、小さなぬいぐるみ。

「ありがとう、大事にする！」
「ああ、そうだ。これも貰え」
そう言ってヴァンが押し付けてきたのは、小指ほどのサイズの薄いピンク色をした水晶だった。
「もし、俺たちの力が必要な時があれば、これに魔力を流しこんで壊してくれ。そうすれば、直ぐってのは難しいが、必ず駆けつける。駆け付けて、お前の力になる」
「え？　そ、そんな。今日会ったばかりの私なんかに、そんな事言わなくていいよ」
ヴァンやタニアには失礼だけど、私はさっさと自分たちの居た地球のある世界に帰りたいから。
だから言われた時、ヴァンたちの力が必要になる場面なんてこなければいい、とか思った位だし。
私はヴァンに押し付けられた水晶を返そうとしたが、ヴァンは受け取ろうとはしなかった。
受け取りを拒否しているヴァンは、真剣な表情だった。
「アキネさん、貰ってあげて下さい。ヴァン長、よほどあなたの事が気に入ったんです。それに、私も恩返ししたいですから。お願いします」
タニアにまで言われた。しかも、笑顔で。
「そう……。それじゃあ、使わないと思うけど……。ありがとう、貰っておくね」
私は仕方なく、ヴァンに押し付けられた私の手の中で転がる薄いピンク色の水晶を貰うしかなかった。

そうこうしていると、馬車が出発の時間になったらしく、待合所にいる人に馬車に乗るようにと御者が促した。

第四十四話（後書き）

街に出てきたのに全然街の風景書かずに、城に帰還しそうだ。
に、賑わう街ってことで。城下街だし。
次で久々にかなちゃん登場（予定）です！

第四十五話

思っていたよりかは馬車の中は狭く、椅子が両側にあったのだが一脚に四人ほどしか座れそうになかった。それも結構ぎゅうぎゅうで。もしかして、三人用なのかな？

この馬車の狭さから考えると、人が多い時とかって立って乗るのかな？

天井に棒が出てるし、きっとそれに掴まって揺れるのに耐えるんだろう。

そして、今日はお祭りがあった日。

お城から城下街へと行っていた人も多かったようで、馬車に乗る人は多かった。

御者に呼ばれて直ぐに乗ったので、椅子に座ることが出来た。

けど、問題は四人掛けの狭い椅子に座る。片方が壁になるのはいい。反対側にはフィンが座った。問題はこの四人掛けの椅子というか、馬車自体が狭いということ。

隣に座ったフィンと片側だけだが、密着しないといけなかった。

そうしないと他の乗客が椅子に座れないし、なんだか視線で詰めなさいよと言われてる気がしたし。

隣りに座ったフィンは、少しだけ申し訳なさそうに苦笑した。

「城に着くまでの辛抱です。それとも、二人乗りに致しますか？」

「……我慢します」

脳内で二人乗りで密着と馬車で密着と競り合った結果、馬車が勝ちました。

だって、二人乗りは全体的に密着するんだもん。それに比べて、馬車は密着するのは片側だけだから馬車のほうがましってことで。

まあ、どちらにせよ密着することに代わりはないのですが……。

馬車の窓から外を見ても、暗く何も見えない。進行方向が少し明るいから、きっと馬車のランプか何かが道を照らしているのだろう。

馬車の中には私とフィン、同じ席に老夫婦。反対側の席に、若い夫婦とその子供二人。後は、陽気そうな酔っ払いのおっちゃんが二人ほど、仲良く床に座っている。

「皆、お祭りの帰りなのかな？」

「おそらくそうでしょう。今日のお祭りに出店するような方は、後片付けがありますから。帰りは明日になるでしょうから。この時間帯に帰るような方々はお祭りを楽しんだ帰りかと」

「でも、こんなに少ないの？」

「そうですね。聖帝の祭日と言っても、城に住む者で休みを取れた者は、そう多くはありません。大きな行事の時ほど、警備する場所も増えますので」

「そうですか……。忙しい時に……すみません」

来たくてこの世界に来たわけじゃないけど、城下街のお祭りに行きたいと言ったのは私だし。

私は『神銀の乙女』ではないし何か目的があって呼ばれたわけじゃないが、護衛をしないわけにもいかないのだろう。それで駆り出されたのが、フィン。

「大丈夫です。アキネ様が心配されるようなことは、何も御座いません」

サティ譲りの人懐っこい笑顔で、フィンは模範的な答えを言った。

今頃かなは、城で何をしてるんだろう。

真っ暗な道を馬車が走る。

私はフィンの後ろにある窓から、真っ暗な外を眺めた。

所々に明かりがつき、昼とは全く違う顔の夜の城へと馬車は帰り

ついた。
馬車から降りた人は御者に挨拶をして、城の住居がある方角へと歩いて行った。
城の城壁の中には当然本城があり、他には厩や兵舎。花園や女神を崇める神殿。住み込みで働く使用人の居住区画など様々なものがあり、何処のショッピングモールだって位広かった。いや、それ以上なのかもしれない。兎に角、物凄く広い。
私は馬車から降りて、御者にお礼を述べた後疑問に思ったことを聞いてみた。
「あの、料金とかって……その、失礼ですがどうなっているのでしょうか？」
そう、私は言われるままに馬車に乗って降りたけど、料金のことなど全然説明をされていない。
「料金……？　他国か田舎から来られた方ですか？　えっと、城下街と城を往復するこの馬車はスニクス国営で無料になってるんですよ」
御者の年配のおじさんは、人の良さそうな笑顔を浮かべながら教えてくれた。
「アキネ様、こちらです」
「あ、はい。おじさん、ありがとうございました。お休みなさい」
「お休みなさい。お元気で」
フィンに呼ばれ、私は挨拶をしてその場を立ち去った。

フィンに呼ばれて付いて行った先は、先日から使用させてもらってるお風呂だった。
「メイドに服を用意して貰ってますので、その間にゆっくりとどうぞ。私は外で待機していますので」

「え？　……あ、そう……ですね。解りました。それじゃあ、お言葉に甘えさせて頂きます」

お風呂にどうぞ。は、いい。だが外で待機ってのに、若干引っかかりを覚えたが、彼の今している仕事が私の護衛なのだということを思い出し、改める。

一緒に入るなどと、言われないだけましなんだと。言われたところで、断固拒否するけど。

私はフィンを置いて、風呂へと入る。

誰も居ない脱衣所は広く感じ、物哀しい。

サティが選んでくれた動き易い洋服を脱いで、それっぽく簡単に畳んで浴場へと向かった。

タオルや石鹸などは用意されていたようで、脱衣所の中にある鏡の前の棚に、目に付くように籠に入っていた。それを使わせてもらうことにした。

誰も居ない浴場は広く感じたが、脱衣所のように物哀しい感じはなく、なんだか広いお風呂を独り占めしているような気持ちになった。ちょっと楽しいかも。

今日のお風呂には、網に入った木が湯に浮かべられていた。檜などのような香りの強い木なんだろう。

私はなんだか忙しない一日の疲れを取るように、湯槽に肩までしっかりと浸かった。

露天風呂のような浴場からは、二つの大小の月が良く見えた。

こうやって露天風呂に気持ち良く浸かっていると、自分が日本の何処かに旅行してる程度にしか思えない。話す言葉も通じるし、昼頃からは日本語じゃない文字も読める。

顔の造形が日本人とは全然違う多種多様だし、城や街並みも日本とは全然違うのに、お風呂に浸かっているだけでそんな気がするから不思議だ。

いや、現実逃避したいだけなのかもしれないが。
でも、改めて思う。
お風呂っていいなぁ。
お湯は程よい温度で、ゆっくりと浸かっていられるし、露天風呂だから頭は調度良いくらいに冷える。
本当に……ここが、異世界なんて言うとんでもな世界じゃなく、日本の何処かの観光地だったらいいのに。そんな、何もならないような事を考えながら。

ゆっくりと浸かった後、のぼせる前に上がった。
脱衣所には相変わらず誰も居なかったが、いつ入ってきたのか、脱衣所に簡単に畳んでいた服はなく、新しい洋服が用意されていた。
連日着ている、寝間着のような薄手の上下に、その上から着るような少し厚手の洋服が置いてあった。
新しく用意された洋服に袖を通し、脱衣所から外へと出た。
そこには、直立で待っていたフィンが優しそうな笑顔で聞いてきた。
「ゆっくり出来ましたか？」
「ええ、ありがとうございます」
フィンに案内されるまま、城の中を歩いた。
そういえば、露天風呂に護衛対象を一人にさせても良かったのだろうか？
案内される途中にフィンに聞くと、露天風呂がある場所には結界が張ってあるそうで、もし破られたとしても直ぐに城に警報が鳴るようなシステムが組み込まれてたらしい。
解りやすくシステムと言ったけど、術法がどうのこうのと説明されたが、半分も理解出来なかったのです。別に、頭が悪いわけじゃ

……あまり良くはないな。

そんなこんなで案内されるまま、歩いて行くと与えられた部屋だろう、いつもの部屋に着いた。

第四十五話（後書き）

なんだか進まない。
次回でかなちゃんと再開です。実に十五話ぶり……？　ヒロインなのに！
もう少し、サクサク進みたい。

第四十六話

部屋に案内された私は、かなを待っていた。
フィンはかなが戻ってくるまで外に居ますって言って、部屋の外で待機しているらしい。
護衛って、いつまでするんだろうね？　労働条件とかってどうなってるんだろう。
かなが戻ってくるまで私も起きてることにした。
でも、携帯ゲーム機があるわけでもなく、小説や漫画など本は無かったため、何もすることが無かった。そのため、私に出来る部屋の中での時間つぶしは、窓の外を眺めることだった。
けれども、忍び寄る睡魔に勝てずに窓辺の椅子に座ったまま、いつの間にか寝てしまっていた。

夢を見た。
かなが帰ってくるまでの短いような、長い時間。
夢を見た。

多分、今日読んだこの世界の子供向けの絵本の影響かもしれない。
もしかしたら、ヴァンやタニアに会ったからかもしれない。
もしくは、あんな凄い演劇をみたせいかもしれない。
何処か懐かしく、嬉しいような哀しいような夢を見た。

それは、一言で言うなら赤い人だった。
きっと、あの赤い人は男。
その傍らには、金色の人。
赤い男と向き合うのは、銀色の女。
赤い男の後ろには、かなに似た可愛い少女。
少女は茶色の髪に銀色の瞳をしていた。
赤い男は少女を守るように、銀色の女と対峙していた。
言葉は何も聞こえない。音も何も聞こえない。
背景も、何も、無い。何もない、広い空間。
見えないほど暗くもなく、眩しいほど明るくもない、目に優しい明るさの空間。
ただ、彼らが居る。
私はそれを見ていた。
何を話しているのか聞こえないが、赤い男は身振り手振りで銀色の女に訴えかけていた。
後ろの少女は怯え、銀色の女は赤い男など見ず、後ろの少女ばかり見ていた。
傍らに居る金色の人は、ただただ哀しそうな表情だった。
一度だけ銀色の女は金色の人の視線を向けた後、再び視線を少女へ戻し、片手を上げた。
すると、少女は突如苦しみだし、蹲った。
赤い男は後ろを振り返り叫びながら、少女を抱き起こした。まるで恋人同士のように。
やがて、少女は涙を流しながら赤い男と見つめ合ったまま、事切れた。
赤い男は悔しそうに悲しそうに、涙を流しながら少女の骸を抱きしめた。

銀色の女と傍らに居た金色の人が立ち去ろうとすると、赤い男が何かを言ったのか、銀色の女の足が止まって、振り返り赤い男を睨みつけるように見た。
赤い男も少女の骸を抱いたまま、銀色の女を睨みつけた。
その目には、憎悪と悲哀が混じっていた。
赤い男の口が開き、何かを銀色の女に向かって言っていた。
次第に銀色の女の表情が変化していく。人を見下したような微笑みから、イラついたような表情へと。
銀色の女が片手を上げようとすると、それを隣に居た金色の人が止めようと銀色の女の腕を掴んだが、銀色の女はそれを振り払うようにして、片手を高々と上げた。
赤い男は憎悪と悲哀の混じった目で、銀色の女を見ながら何かを言った。
銀色の女は高々と上げた片手を下ろし立ち去って行った。金色の人もそれを追いかけるように、赤い男と少女の骸を残して立ち去った。
砂時計の零れ落ちる砂のように、赤い男はサラサラと消えた。少女の骸を残して。
少女の骸だけが残った。
私は少女の骸に近づいて、少女の顔を覗き込んだ。
遠目見ただけだった少女の顔は。

「……ん。あきちゃん」
あれは、見たことある顔だった気がする。でも、思い出せない。
誰かが私の肩を揺さぶる。靄がかかったように、意識ははっきりしない。
起きている気がするのに、なんだか寝てる気分。微睡みという感

じ？

「もう、こんなところで寝て……風邪引いちゃうよ」

近くで少し呆れたように言う声を、私は知っている。かなの声。

なんだか、凄く久しぶりに聞いた気がする。

「私が」

誰かがそう言った。声に聞き覚えがあるような、ないような。

「運びます」

頑張れ私。頑張って起きるんだ。

でも、意思に反して体は起きてくれそうにない。だから、せめて喋って意思表示をと思っても、喉から出る声はカラカラに乾いているのか「あー」とか「うー」とか上手く喋れなかった。

起きようとする程、より微睡みは深くなっていく気がする。

まるで沼から抜けだそうと藻掻いたら、より深く沈んだようなそんな感じだ。

起きてくれない体は、誰かに抱えられベッドへと横たえられた。

手数掛けます。

「ありがとうございます」

かなが感謝の礼を述べた。

誰かはこんなことは何でもないです、と言ってお休みなさいと挨拶を済ませて部屋を出て行った。

私が横たえられたベッドの横、かなのベッドにかなは腰掛けて寝てるだろう私に向かって呟く。

それは、相談したいのか独り言なのか判別が付きにくかった。

「あきちゃん……どうしよう……どうしたら、いいのか……解らないよぅ……」

泣き出しそうな、悲しそうなかなの声に、私は微睡みの中で「大丈夫だよ、かな」と言っていた。

私の言いたいことは言葉にはならず、かなには届かない。

それでも、かなは続けて言う。

「好きになっちゃいけないのに、元の世界に戻らないといけないの

に」

ああ、もうそれだけでかなが何を言いたいのか解った気がする。

かなはちょっと惚れっぽい。

元々かなは同姓にも異性にも好かれやすい性格だし、今は『神銀の乙女』だから皆がかなにより好意的になってる気がする。

でも、こんな話はもっと先の事だと思ってたんだけどなぁ……。

「……どうすればいいの、あきちゃん？　帰らないといけないのに、私……」

そう、私は。私とかなは元の世界に、日本に、家族の所に帰らないと。

特に私はこの世界に必要とされてるわけじゃないから、帰ったところで文句も出ないだろうし。出されても困る。

例え、心配するのが親姉妹だけだろうと、私は私の世界に帰りたい。

きっと、かなも同じ。

だから、この世界で好きな人が出来るのは、帰るときに困る。

いざ、元の世界に帰れるようになっても大好きな人が、大切な人がこの世界に居るのならばと、帰るのを躊躇うことになるかもしれない。

でも、きっと好きな気持は勝手に育っていくものだから、だからかなは今どうすれば良いのか解らずに、泣きそうな辛く切ない気持ちになっているんだろう。

私は、そんな胸がキュンとするような恋愛なんかと縁遠かったから解らない。避けていたのかもしれない。人の心は複雑怪奇で、めんどくさそうだから。

浮気だのなんだのと、裏切られたりするのも嫌だし。

私は平々凡々だから、もし好きな人が出来て恋人関係になって、浮気されたらとか考えると、私はきっと怒ったりしても必死になって奪い返すなんて気概は持てないだろう。

ああ、うん。そうなんだ。解った。とか言って、その人を諦めそ

うな気がする。
だから、時々かなが羨ましいと思う時もあった。
素直に誰かが好きだと言える。誰かを好きになれる、かなが羨ましい。
寝ているだろう私に向かって、かなは続ける。
でもごめん、かな。全部聞いてたりする。
若干寝物語になってるけど。
「私……クラウさんのこと、好きになっちゃいそうだよぅ……。帰らないといけないのに、好きになっちゃいけないのに。どうすればいいの……」
かなはそう言った。
かなの言った「クラウさん」きっと、『神銀の騎士』のクラ・ソラス・アガートだろう。かなの大好きなタレントの伊勢君似のクラウ。
お似合いなんだとは思う。
応援したい気もする。
でも、ここは私たちの居た世界ではない。
異世界だから。
だから、私はかなの恋を応援するべきか妨害するべきか、どうするべきか判断がつかなかった。
やがて、私は落ちるように意識が途切れた。

第四十六話（後書き）

久々のかなちゃん登場です。
でも、あんまり会話が出来ないのは、主人公が寝こけたせい。

第四十七話

翌朝、思ったよりも早く起きることが出来た。
まあ、早めに寝たというか寝落ちしたというか。だから、自然と起きるのも早かった。
どうも寝起きで頭が不鮮明なせいか、昨晩自分が何をしていたのか朧げで思い出せない。
かなを待ってて、すること無いから窓のから外の夜空を眺めてて、それから……えっと、何してたっけ？　という状態。
覚えてる状態から考えても、ベッドで寝た記憶はないが、起きたときベッドに居た事を考えると……あまり考えたくないかも。
大体予想はつくし。問題は誰がーとか思うが、詮索する気も起きない。というか、無かった事にしたい。
「……」
そういえば、かなっていつ帰ってきてたんだろ？
私は隣のベッドで安らかそうに眠るかなを見て、思い出そうとしていた。
いつの間にか帰って来ていたかなが私に何かを話しかけていたまでは思い出せたが、その話の内容が霞がかかったように思い出せなかった。一体何を話したんだっけ……？
かなに何か大切な話をされたような、気のせいのような……？

続きの部屋にある、洗面所で顔を洗って寝癖を整えた。
外は朝靄が少し掛かっていて、朝の新鮮な空気という雰囲気はまだ十分にありそうだった。
時間的に考えると、朝の六時あたりかな？　もう少し早いのかな？
この部屋には時計はないし、鐘はまだ鳴ってないと思う。
確かサティに教えて貰った話だと、鐘は朝の八時から夕方八時ま

で一時間毎に鳴らす決まり。
まあ、人が活動する時間の区切りが解りやすくていいかもしれない。
話を聞いていると、この世界にも時計はあるのだけど、ゼンマイ式と魔力による充電式で普段人が居るような場所（お店や事務など）でなければ、直ぐ止まってしまうから客室などには置かないようにしているとのこと。
私とかなに与えられたこの部屋は客室の一部屋らしいので、時計はないとのこと。
特別今は時間に縛られて居るわけじゃないので、時計がこの部屋に無くてもどってことない。
どってことはないけど、することも無い。
朝ご飯の時間にはまだ少し早いだろうし、勝手に出歩いちゃいけないだろうから部屋からも出られない。

そういえば、昨日ヴァンとタニアから貰った絵本と白銀竜のぬいぐるみ。確か部屋に運んでおくって言って、フィンが預かっててくれたはずだけど。何処だろう？
私は明るくなった部屋を見回してみた。入り口の方にある棚の所に、昨日出かけるまでは無かった布袋を見つけた。
開けてみると、中には絵本とぬいぐるみ、それにお財布が中身入りのまま入っていた。
結局お土産は買えなかったくせに、お金は使ってる。しかも、金貨五枚も。
金貨五枚って日本円にして、どのくらいの金額になるんだろうか？
あまり高くても、返金しろって言われたとき困るなぁ……。
貰ったお金の余りは、銀貨一枚か……。やっぱり返した方がいいかな？
お土産になりそうなのは、タニアから貰った白銀竜のぬいぐるみ

かな。
タニアがかなの分まで用意してくれてたよう、ご丁寧に二つ貰った。
錬金魔術で作ったと言っていたけど、こんなのも作れるんだと感心した。
確かにこれほどの出来なら、小遣い稼ぎなども出来そうだ。
錬金魔術、頑張ってみようかな……？
マリーンが錬金魔術とは相性が良いって言ってたし。
でも、頑張ってみる以前にまだ魔法という力が何なのかさっぱりです。
練習しようにも、一人じゃどうすればいいのやら……。
先日したようにしようにも、水晶球はないし。
練習の時、イメージが大事だって言ってたし、水晶球が無くても成せば成るかな？
無謀にもそう思った私は、窓際の椅子に座って練習してみることにした。
後で考えれば、かなり無謀な事をしたと思う。

集中して、目の前に蝋燭程度の火が灯るというイメージを想像する。
一昔前にあった某格闘ゲームの主人公みたいな、そんな感じで。
両手を机の上に広げリラックスした状態で、頭で思い描いたイメージを現実にするために、魔力が流れるように念じる。
強く念じる。
先日の練習では、強く念じたら水晶球に光が灯ったから。
同じように、強く念じる。
頭の中で思い描いていた蝋燭程度の火が、目の前に灯る。

蝋燭はもちろん、媒体となる燃える物などなにもない、空中に火が灯る。

まるで、夏の怪談に出てくる火の玉って感じだ。蝋燭程度の火だけど。

先日と違って、そんなに疲れはなかった。

しばらくの間目の前で揺れる小さな火にを見ていると、悪戯心が湧いた。

蝋燭程度の火の色は、オレンジのような色。

中学の頃の理科の実験で、ガスバーナーの酸素調節で酸素の供給量が増えるとオレンジ色の火はどんどん青い火になっていった。

それに、白や青い火のほうがオレンジ色の火より温度が高いと聞いたこともある。

だから、目の前に揺れている小さな火の色も変化させれるのか、試してみたくなった。

だから念じてみる。

火、青色に変われと。

強く念じてみる。

すると先程は感じなかったが、今度は短距離ダッシュをしたように全身の血が滾った。

色を変えるのは思ったよりも、魔力を消費したようです。

魔力を消費した成果もあって、目の前に揺れる小さな火はオレンジ色から白みがかった青色になっていた。

温度も変わってるのかなと疑問に思ったが、火傷したいわけでもないので確かめようがない。

そんなことをしていると、廊下が騒がしくなってきた。

ドンドンドンッ

部屋のドアが慌ただしく叩かれた。ノックなんてものじゃなく、叩かれた。

ビクッっとするように、ドアを叩く音でかなが起きた。
私も吃驚して、ドアのほうを向いた。
その拍子に集中は途切れ、魔力によって生み出した小さな火は消えた。
「カナエ様！　カナエ様！　大丈夫でしょうか？　ドアを開けて下さい！」
ドアの向こうから、クラウの焦ったような声が聞こえてきた。
呼ばれたかなはというと、起きたけど何事って感じで目を瞬かせていた。
「かな、おはよう」
「……おはよう、あきちゃん？」
私は吃驚しているかなに、朝の挨拶を済ませ、椅子から立ち上がった。
開けてと言われるのでドアを開けようと、私はドアへと歩いて行った。
「今開けます。開けても、大丈夫？」
前者は外の人に向けて。後者はかなに。
女の子ですから、寝起きを見られたくはないはずだし。
でも、声の慌て具合やドアの叩き方でも、何かあった様子だから開けない訳にもいかないだろうし。
かなはえっ！　というような顔をした後、急いで起き上がって続きの部屋に駆けこんでしまった。
私はかなが続きの部屋に入ったのを確認した後で、ドアの鍵を外して開いた。
ドアの外で立っていたのはクラウやリディル、フーガにサティ。
それに兵士が二人。
……朝っぱらから、なんだか物々しい雰囲気ですね。
「アキネさん。カナエ様は？」
ドアの前に立っていたクラウが、開口一番に聞いてきた。
「あ、えっと……今、その起きたばかりだったから、身支度を……」

「では、無事なのですね……。よかった」
クラウは私の説明を聞いて、部屋の奥にある続きの部屋のドアに視線を向けた。
リディルもフーガやサティも、その説明を聞いて安心したように、ため息を吐いた。
「どうかしたんですか？」
何かあったような雰囲気に、私は不安になったので聞いてみた。
サティが前に出てきて、答えてくれた。
「朝早くに申し訳ありません。先程、この部屋に張っていた結界が壊れましたので、急いで皆で駆けつけたのです。何もございませんでしたか？」
なるほど、だからあんなに慌てた様子だったのか。
部屋に結界を施すことで、『神銀の乙女』であるかなを守っていたのだろう。
それが壊れたから、急いで駆けつけてきたのか。
物々しい雰囲気は、何かがあったとき突入して入る時のためだと思われる。
……ってか、結界って何で壊れたの？
嫌な予感しか、しません。
「いいえ、何も……。先程まで、かなもぐっすり寝てましたし……」
「アキネさんは起きていたのですか？」
クラウの後ろに立っているリディルが聞いてきた。
「はい。多分……三十分程度前位になるかと？」
時計がないので、体感だけどね！
もう少し短いかも……。
リディルの視線が、痛い気がします。
確証はないけど、結界が壊れた理由ってのが魔法の練習だった可能性があるわけで。
もし私が魔法の練習してましたーっとか言ったら、凄い攻められそうなんだけど？

そう考えると、後ろめたいわけで。
視線が痛いです。
かなちゃん助けて、プリーズ！
「おはようございます。皆さん」
祈りが通じたのか、奥の続きの部屋からかなが出てきた。
「おはようございます、カナエ様。良くお休みになられましたか？」
「はい。それで、その……何かあったのですか？」
「いいえ、何でもなかったようです。早朝からお騒がせ致しました」
かなの問に、誰よりも早くリディルが答えた。
多分、かなを心配させないためにそう言ったんだろう。
「カナエ様、アキネ様。少々早いですが、朝食でも如何でしょうか？」
サティがフォローするように、提案をしてきた。
「着替えもございますので、終わる頃には調度良い時間かと」
現金な私のお腹は、朝食と聞いただけでお腹が空いた気がしました。
「カナエ様、アキネさん。食事の後で、今後についての会議があります。それまでは私がお二人の護衛させて頂きます」
リディルが丁寧なお辞儀と共に、そう言った。
一緒に兵士の二人もお辞儀をしていたので、彼らも護衛をするのだろう。
「それではカナエ様、アキネさん。後ほど、会議の場で。早朝、失礼致しました」
クラウとフーガは挨拶を済ませ、私たちと別れた。
兵士とサティ、リディルに案内され衣装部屋へと私たちは移動した。

衣装部屋への移動中、リディルから他の人に聞こえない程度の小声で聞かれました。
「アキネさん。もしかして、魔法の練習でもなさったのですか？」
私はバツが悪そうに、小さく頷いて肯定をした。
「練習する時は、私たちの誰かに言って下さい」
リディルにと諫められてしまいました。
「魔法の練習は、失敗致しますと命に関わりますので」
にこやかにリディルは言ってくれました。
もっと早くに教えててください。

そうこう言っていると、衣装部屋へと到着しました。

第四十八話

着替えも朝食も終わり、今後のことを会議する場所へと私たちは移動した。
先日勉強をした部屋と似た、会議室のような部屋へと通された。
部屋には先に来ていたらしい、フーガとクラウが席に着いていた。
先日の部屋と違い、今日の部屋は会議室ように大きな長方形の机が一台に、十脚の椅子があった。
リディルが勧める席に、私とかなは座った。
かなの前にはクラウが。私の前にはフーガが座っていた。
リディルは司会進行係のように、長方形の短い辺側の椅子に居た。
椅子を引いて座る前に、リディルは先日のような大きな地図を机の上に広げた。
先日は読めなかったが、今日は地図に書いてある国名が読める。
これが『女神の祝福』の効果ですね。助かるなぁ。

「さて、今日集まって貰ったのは知っての通り『神銀の乙女』カミタケ　カナエ様に巡礼の旅の目的地を教えて頂き、順路を決めるためです」
リディルは一度言葉を区切り、かなに向かって微笑んで言った。
「カナエ様。ここに行かなければいけないと思う場所にこれを置いて下さい」
何処から取り出してきたのか、リディルは小さなチェスのような黄色い駒をかなに十数個ほど渡した。
かなは受け取った駒とリディルを見比べ、きょとんとしたような表情で聞いた。
可愛い表情だわ。
上目遣いも相まって、きっと男心を擽ってるよ、かな。

「私が思ったところで良いんですか？」
「はい。カナエ様が思った場所に置いて下さい」
……それでいいのか？
なんかこう、先日みたいに女神が現れたりしてご神託でここに行け～とかじゃないのか。
「え、えっと……それじゃあ」
かなはリディルから駒を受け取り、地図をじっと睨みながら置き始めた。
机の上に身を乗り出しながら、必死に駒を地図の上に置くかな。
「ここと……ここかなぁ？」
かなの手により、地図の上に駒が立つ。
駒は地図の上に六個置かれた。その内一つは、最後に行くであろう『神代の塔』のある場所だった。
余った駒はリディルに返却された。

「ふむ……。思っていた以上にバラけていますね。これは全部回るのに半年近くかかりそうだね」
そう言えば、移動系の魔法はないって言ってたから、陸路を徒歩……とかなのかな。
うわぁ、考えたくないなぁ。
リディルの言うとおり、地図に置かれた駒は見事にバラバラに配置されていた。
駒と駒を線で結ぶと歪な五角形が出来そうです。
「半年……ですか……」
かなが苦々しそうに言う。
まあ、世界を巡礼するって聞いてた時点で、結構な時間かかりそうだとは思ってたけど半年とはねぇ。

私も嫌だ。
半年もお風呂もままならなさそうな、旅生活なんて。
半年も経ってると……帰れた頃には、きっと仕事は首になってるだろうな。
ううん、頑張って就職したのに。仕事も覚えてきたのにー。
「そうですね。飛龍に乗れればもう少し時間の短縮が出来るかもしれませんが、人数が人数なのでスニクス国の所有する飛龍では五人はとても運べません。他の……そうですね、グラヘル国になら居そうですが……。遠いのが難点ですね」
リディルが申し訳なさそうな表情で説明をする。
説明をしながら、現在位置であるスニクス国を指した後、名前の上がったグラヘル国を指した。
確かに遠い。
スニクス国が中央の『神代の塔』から北東にあるが、リディルの指したグラヘル国は南端にあった。
駒はグラヘル国と隣の国との境目に、一つあった。
「それじゃあ、南下してグ、グラ……グラなんとかって国で飛龍を借りて回ったら、もっと短い期間で済みますか？」
国名をはっきり言えなかったことを、誰も突っ込む事なかれ。
地図を見ながらの単純な思考で、私は発言してみた。
急がば回れだろうけど、移動速度の速い乗り物は早く手に入れる方が良いと思うし。
もっとも、ゲームとかじゃ最初って基本歩きで、終盤しか飛び回るような乗り物貰えないけど。
「そうですね。『神代の塔』周辺は通れませんが、最初にグラヘル国を目指すのはいいかもしれませんね。丁度グラヘル国の所にも、行かなければいけないようですから」
意見に同意してくれたことに、少しほっとする。
だって素人意見だし、私ってある意味部外者ですからね。
でも早く自分たちの居た世界一一日本に戻りたいのは、かなと同

じです。
だから、半年もかかりそうな旅なんて嫌なんで、少しでも早い方が良いです！
「それでは、後の日程やルート等は私たちで話し合っておきますので、この後はサティと一緒に旅仕度をして下さいね。女性特有の問題もありますので、きちんと聞いて来て下さい」
リディルはそう言うと、私とかなに立ち上がるように促した。
ってか、もう会議終わりですか？
かなが何処に行くかを示しただけで、細かい事とか私たちそっちのけで決めるのか。
もっとも、この世界のことさっぱりですから、「どう思いますか？」とか「どうでしょうか？」とか聞かれても、返答できないと思うけどね。
リディルはサティが居る場所に案内するつもりなのか、部屋の入口で私とかなを待った。
「はい。それじゃあ、後はお願いします」
かなは律儀に挨拶をして、リディルに着いて部屋を退出していく。
「あ、あの、それじゃあ失礼します」
かなとリディルに置いて行かれないために、私も部屋を後にした。
あまりにも早く会議が終わるので、呆気に取られた為、部屋を出るのが遅くなった。
かなとリディルは部屋の外で、私を待っていてくれたから問題はなかったけど。
遅くて、すみません。

私とかなはリディルに案内されるまま、城内を歩いていた。
サティは色々な旅道具などが保管してある場所と、衣裳部屋とを行き来しているらしい。
なので、私たちは衣裳部屋でサティを待ち、旅の説明や旅での女

性特有の問題などを教えてもらうことにした。
女性特有の問題を教えてもらうためにも、男性の護衛より女性の護衛が良いだろうということで、騎士の詰所へと行くことになった。
私はこの騎士の詰所で、聞きたくもない事を聞くはめになった。

第四十八話（後書き）

被害に遭われた方々にお見舞い申し上げます。
亡くなられた方々には心よりお悔やみ申し上げます。
一人でも多くの方が助かりますように、祈っています。

第四十九話

騎士の詰所は城の外にあるらしく（城の城壁内だけど）、外庭のような場所に出た。
厩に行く時の道に似てる気がするので、多分厩の近くなんだろう。
リディルに先導されるまま、城の外を私とかなは歩く。

厩にさしかかると、人の声が聞こえてきた。
それも、聞き覚えのある声。
この声は、昨日聞いた。
慣れない、男性と接近して聞いていた声。
フィンマクヴェル・ラシーヌ。
サティの息子で、昨日城下街に出るときに護衛についてもらった。
昨日のお礼を言いたいなと思い、リディルに少しだけ時間を貰えるか聞いた。
リディルは振り向いて私の話を聞いた後、少し優しそうに微笑んでならば一緒にと言った。
なんだか、恥ずかしくて「一人で行けます」と言って、その場を後にした。
後で思えば、私もかなと同様護衛対象だったんだ。
勝手に行くと困るのはリディルだったのにね。
私はそれをうっかり忘れていた。
後で聞いた話だと、私を追いかけるようにリディルがかなの手を引いて私の後を追ったらしい。

「ここかな……？」
厩の扉が片側だけ開いてたので、そこからを覗くと丁度そこには

昨日お世話になったフィンが居た。
フィンは誰かに話しかけながら、馬の世話をしていた。
フィンと誰か居たのか、私の所からは見えなかった。
「……だよ。笑えたぜ」
「不謹慎じゃないか？」
「そうか？　しかしよ『神銀の乙女』が異世界から来るのは知っているが、あの女はなんなんだ？　『神銀の乙女』でもないのに異世界から来たって。カナエ様を謀ってるわけじゃないよな？」
フィンが誰かと話している内容は、私のことらしい。
盗み聴きをするわけじゃなかったが、出て行きにくい雰囲気なのは確かで、私の足は動かなかった。
「まあ、確かに怪しいよな。以前も『神銀の乙女』を謀って亡き者にしようとする輩も居たらしいからな。何故、救世主である異世界の『神銀の乙女』を殺そうとしたのか」
「さあな。大方、邪神信奉者じゃないのか？　世界の滅亡を企んでとか？」
「ありえねえ。そんなの女神様にバレるだろって」
「そうだよなぁ」
「「　ははははは　」」
「じゃあ、お前。あの女は何だと思う？」
「さあなぁ」
「まあ、怪しいんだよなぁ」
私の足は自然と後退りしていた。
「それで、あの女の監視をしてて、どうだった？」
「監視し難かったぜ。いきなり人混みで走り出すし、人の話は上の空で聞いてないし――――」
私、疑われていたんだ……。
……そうだったんだ。
まあ、考えれば解ったかもしれない事か……。
それに、フィンには迷惑をかけたね……。

でも、護衛じゃなくて、監視か……。
私はあんな会話を聞いた後で、出て行ってお礼を言えるほど人間が出来てない。
私の足は厩から離れて行った。
歩く速度は最初はゆっくりと、でも徐々に走るような速度で厩を離れた。
視線は、どうしても地面を向いてしまった。
だから、前をしっかり見ていなかった。
前を見ずに歩けは何処に着くか、広大な城で迷子になるのが解っていたはずなのに。

「何処に？」
「え？」
腕を掴まれ、声を掛けられた。
声の主は、フーガだった。
落ち着いた感じの低く渋い声。
どちらかと言えば、耳心地の良い声じゃないかと私は思う。
声の好き好きは人それぞれだけど、私はフーガの声は好きだと思う。
かなの声は可愛くて好きだし、サティの声は元気を分けてもらえるように明るくて好きだな。
って、声とかそんな事じゃなし、なんでフーガがここに居るのだろうか？
「あの……腕を……」
「……何処に行こうと？」
あくまで離すつもりはないらしい。
さっきフィンたちが話していた、私の存在が怪しいからなのかな？

そう思うと、なんだか掴まれているのが嫌になる。
「えっと……。何処にって……。あの、ここ何処ですか？」
そういえば、適当に歩いてしまった事実に今気づいた。
お礼を言ったら、直ぐにリディルとかなの所に戻るつもりだったのに。
リディルに怒られそうだな。
相変わらずフーガは無表情に見える。
若干目を開いてるような、気のせいのような？
「その、フィンさんが居たので、昨日のお礼を言おうと思って……その……」
そんなこと思わなければ良かったのに。
そうしたら、自分が疑われているなんて知らずに護衛されていられたのに……。
護衛じゃなく、監視をされていたと知らなくて済んだのに。
護衛対象じゃなく、『神銀の乙女』に危害を加えない人物なのかを監視されていたんだ、私。
だから、フーガが私の腕を離さないのだろう。
まだ、私はきっと監視の対象だから。
そう思うと、自然と俯いてしまった。
なんだか惨めだ、私。
こんな世界に巻き込まれて来て、疑われて、迷惑をかけて。
駄目だなぁ、私ってば。
帰りたいな……。
家に帰りたい……。
つい、そんなことを鬱々と考えてしまた。
フーガは以前私の腕をつかんだままだった。けれども、掴む力は少しだけ緩んだ気がする。
「迷子か？」
厩であったことを素直に言える程、私はまだ彼を信用していないんだと思う。

というか、フーガもきっと私を疑っているんだと思う。
でも……そうだとすると、遠乗りの時の馬上での会話はおかしい気がする。
彼は私がかなと一緒にこの世界に来た、と言うことを信じた前提で話していた気がする。
もっとも、私がそう思いたいだけなのかもしれないけど。
やっぱり人に疑われるのは、寂しい。
それはそうと、現状迷子なのは確かなので、私はフーガの問いに頷いた。
「そうか」
フーガはそれだけ言うと、私の腕を掴んでいた手を離し、今度は手を掴んできた。
いや、握ってきたというべきか？
「……あの……？」
何故、フーガに手を握られているのだろうか？
まあ、察しはつくのですが……。
でも、これは痛いでしょ？
もう二十歳も超えて、そろそろ恋人の一人くらい居ないのとか親に聞かれ始めた年頃ですよ？
そんな大人な年頃で、子供のようにお手て繋いで歩きましょうって……。
恋人同士が好き好き～♪　で手を繋ぐとかじゃなし、迷子予防に手を繋ぐって……痛すぎる。
そして、凄く、もの凄く恥ずかしい。
とてつもなく恥ずかしい。
今直ぐにでも、この手を振り払いたい。
「手……離してもいいでしょうか？　勝手に行動したりしませんから……」
恥ずかしさのあまり、出た声はとても小さかった。
フーガは聞こえなかったのか、何も答えず「こっちだ」とだけ言

って、ぐいぐい引っ張っていった。

なんですかこの、公開処刑のような辱めは！
無視ですか？　私の言ったことは無視ですか？！
手を離してくれーーー！！

口に出してるわけじゃないから、フーガには伝わるはずもなく。
救いなのは、余り人が通らなかったこと。
真面目に、ここはドコなんだろうか？
厩からそう、遠くへ来たつもりはないのだが……？
周りはどうやら庭園のようで、背の高い名前の分からない植物の垣根で囲われているようだった。
垣根は私の身長より少し高く、垣根の向こうに建物があるかないかが良く見えなかった。
垣根の植物には所々に白い花が咲いていた。
豪華すぎず、控えめすぎず。とても好印象を持てるような花。
そんな花の垣根が続く。

フーガはどんどんと奥へと進んでいるような、そんな錯覚に襲われる。
私はフーガに引かれるままに、後を歩いて行く。
「あの……何処へ？」
庭園の外れなのか、少しずつ周りを囲む植物が鬱蒼としてきた気がする。
というか、なんだか先に見えるのは……竹ですか？

竹林に……なってるのかな？
しかし、ここは城壁内のどの部分なんだろうか？
かな、心配してるだろうし、リディルは怒っていそうな気がするから、早く合流したいけどなぁ……。
五分か十分くらいは歩いたよね？
城壁内だとは思うけど、広すぎない？
私、厩からはそんなに歩いてないはずなんだけど……。
フーガは何処に向かっているのだろうか？

竹林を進んだところに、一軒の家屋があった。
……何処の古い昔の日本の家屋ですか？
そんな古びているがしっかりとした、一階建ての茅葺屋根の木造家屋が竹林の拓けた場所に建っていた。
「ここだ」
フーガはそう言って、家屋へと入るよう促した。
私はそれに従い、家屋へと入った。

中は時代劇とかに出てきそうな土間に、囲炉裏のある部屋。
続き奥の部屋には、壁に掛け軸のようなものが飾ってあった。
なんだか、社会科見学の時を思い出す。こんな古い作りの建物も見学したなぁ。
普段ＴＶの中でしか見れない物を、生で見れた事に感動したのを覚えている。

私が建物に夢中になっている間に、フーガは靴を脱がずに上がろうとしていた。
「ちょ、ちょっとフーガさん。　靴を脱いで上がらないと……」

いや、まあ西洋文化に靴を脱いで上がる習慣がないって、聞いたことあるけど。

絶対これ、靴を脱いで上がらないと泥だらけになるから、怒られるでしょ……。

フーガはその言葉を聞くと、上がろうとしていた足の動きをピタリと止めた。

フーガのぎこちない動きに、私は首を傾げ、言っちゃいけないことだったのかと不安になった。

足を土間の土の上へ降ろし、フーガはゆっくりを振り向いた。

「話をしよう」

フーガはそう言うと、床に腰を掛けた。

第四十九話（後書き）

よく迷子になる主人公です。更新大分遅れました、申し訳ないです。

第五十話

まるで昔の日本にタイムスリップしたような家屋の中で、私はフーガと話す事になった。
フーガは靴を脱がずに床に腰掛けているため、私は入り口から少し入ったところに立って話すことになったけど。
「君がカナエ様の親友で異世界の人間だということは、女神が認めている」
フーガは無表情で言った。
少しだけ眉間にシワが増えてる気がしないでもない。
怒っている……のかな？
でも、声が普段と代わりない気がする。
と、言うほどフーガの事を知ってるわけではないが、ピリピリした怒ってる感じの空気は感じないし。
「女神が……認めたの？」
「そうだ」
「それじゃあ……その……それまで、私がかなと同じ異世界の人間だって、信じられてなかったんですか？」
これにも、フーガは「そうだ」と答えた。
疑ってはいたけれども、怪我の治療も施し、かなと同じように大事に扱った。
そして、女神が認めたことで疑いは無くなった。
疑いは無くなったと言ったけれども、フィンの話しぶりだとそれは知らないような感じだった。
まだ、疑いが晴れたことが伝達されていないのかもしれない。
だが、何故今その事を私に伝えなければいけなかったのだろうか？
私にそれを伝える意図が解らない。
伝えたところで、私は私でしかないのに。
「それで、どうしてその事を私に？」

「それは、私が説明しましょうかね？」
後ろから二三日の間に良く聞いた声がした。
家屋の外、入り口の前にリディルが一人で立っていた。
「リディルさん……。かなは一緒じゃないの？」
「カナエ様は詰所でアキネさんをお待ちですよ。ですが、良い機会です。この場で話してしまいましょうかね。会議で決まった貴方の身の振り方を」
身の振り方？
てか、会議って……そりゃあるか。
国のってか世界の一大事でもあるんだし。
「以前、アキネさんはどうして護衛が必要か聞かれましたよね」
確かに聞いた。
あの時は、詳しい理由は教えてもらえなかったけど。
今ならあの時より推測が出来る。
先程、聞いたフィンとその友人の会話にあった「邪神信奉者」。
それがかなに、『神銀の乙女』に危害を加える可能性の高い者たち。
「アキネさんがカナエ様と同じように、異世界から来た人だと分かればそれを利用する者や、アキネさんを利用してカナエ様に害する者が出てくるかもしれません。ですから……」
そこでリディルは一度言葉を区切った。
紳士スマイルが似合いそうなリディルの顔が、すまなさそうに少しだけ歪んだ。
なんとなく、次の言葉が解る気がする。
異世界人だということは黙秘しろとかだろう。
……どうしようか、もう言ってる人が居るんだけど。二人ほど。
昨日迷子になった先であった、ヴァンとタニアに私は話している。
あの二人だから、多分大丈夫だとは思うけど……。
リディルの言葉を聞かずに、私は別のことを考えていた。
「アキネさん。聞いてましたか？」

いえ、別のことを考えて聞いてませんでした。
バツが悪くて、視線を少し外しただけでリディルにはバレバレだったようで、溜め息をつかれました。
「す、すみません……」
「いえ、いいです。もう一度説明しますね」
私はそれに頷き、リディルもそれを見て説明を再開した。

「アキネさんにはカナエ様の従者として、旅に同行という形になります。これはカナエ様、アキネさん両方の安全のためにも必要な措置と決定されました」
決定ってのは会議で決定したって事か。
私らの意見は必要ないって事ですか？
いや、まあ。守ってもらう側だから、余り我侭言うのはいけないとは思うのですがね。
でも、事前に相談くらいはして欲しいなぁ。
「カナエ様とアキネさんには、私たち以外の人の目がある所では、主人と従者という形を取っていただくことになります。慣れるまでは難しいかもしれませんが、私たちも協力しますのでどうかご了承下さいね」
特に文句を言う訳にもいかないのだろうから、私は頷いた。
「その、出来るかは解りませんが……頑張ります。かなが危険な目に合うのは嫌だから……」
かなに危害が及ぶのは嫌だ。
リディルは私とかながと言っていたから、一概にかなだけが危険な訳じゃなさそうだし。
それと、私たち以外の人の目がある所って言ってたから、多分『神銀の騎士』の三人の前だけなら普通にかなに接して良いんだろう。
なら、少し頑張れば良いだけだ。
従者ってことはメイドとか執事とかのことかな？

従者ごっこって考えて愉しめば良いんだ。
前向きに考えないと。
「良かった。反対されたらどうしようかと思ってました。アキネさんが理解のある方で本当に良かったですよ。そう思いませんか、フーガ」
「そうだな」
ずっと黙って座っていたフーガが、リディルの言葉に相づちを打つように答えた。
「話は済みました。カナエ様をお待たせしてますので、そろそろ参りましょうかね」
そう言ってリディルはにっこりと微笑んだ。漫画とかだったら「反論は許しません」って背負ってそうな笑顔だ。
私もフーガもそれに異論はないようで、移動しようと出入口に向かう。

古い日本家屋から外に出た私に、リディルが言ってきた。
「そうそう、アキネさん。勝手な行動は謹んでくださいね。何かあってからじゃ遅いですから」
ええ。そうですね。本当に。
軽くだけど、頭を下げて謝罪の言葉を口にする。
でも、気持ちはいまいち謝ってません。
というか反省してないです、私。
迷惑を掛けたって思うけど、そこまで行動を制限される理由が、説明されてもピンと来ない。
だって、私。一般市民ですから！
でも、迷惑を掛けたのは本当だから謝罪はする。
迷惑を掛けたことに対してです！
「すみません。今後はもっと気をつけます」
「お願いしますね」

……本当に気を付けないと、今度は凄く怒られそうな気がします。
リディルの笑顔が黒い気がします。何故でしょう？
私の後ろにいたフーガの肩が揺れてたのを、前にいる私が見ることは無かった。
ただ、私の前に居たリディルが珍しいものでも観るように、少しだけ驚いたような表情をしていた。
リディルは直ぐに笑顔に戻ったので、私は気にしないことにした。
だって、私は馬鹿にされてると思ったから。深く気にしないことにしたわけですよ。

だから、私はこの時の事を知ることは無かった。
フーガやリディルが私をどう思っているのか。
『神銀の騎士』が居る理由も。

後日知って、どれほどこの時、突っ込んだことを聞かなかったか後悔する事になった。
まあ、後悔だから後にしか立たないわけで。
知ったところで、どうしようもなかったのかも知れないけれども……。

第五十一話

騎士の詰所で待つかなの所に行く道中、従者ってのは何なのかと何をするのかを聞いた。

そしたら、旅のお供をする執事やメイドの事と返された。

執事やメイドの仕事は主人の毎日の日程の管理はもちろん、食事の用意や荷物の整理、その日着る服を用意したりなど雑務が大半らしい。

なんというか、想像していた通りって感じかなぁ？

聞くと行うとではかなり大差があるだろうけど……。

人が多いところでは、慣れるまでリディルたちがフォローをしてくれると言ってくれた。

不安は多いけれども、しないといけないことって割り切ることにしよう。

これは仕事と同じだ！　って思うことにした。

かなと騎士の詰所で合流した後、先程あった「旅の間は主従の関係を形だけでも取る事になった」と説明をした。

もちろん、かなにどうしてかと問われ、それにリディルが私に説明をしたように答えた。

かなが納得いかないって表情をしていたので「これは私に与えられた仕事！　って思うことにした」って話したら、「あきちゃんがいいなら……私も頑張る！」とやる気を出してくれた。

多分だけどかなが多少なりとも態度を使い分けてくれないと、きっと演じるのがきついと思うのですよ。

かなが何時もの態度で私に話しかけてたら、私もいつも通りに返

してしまう可能性が高いから。
そうなると、主従関係じゃないってのはモロバレになるだろうから……。

その後は、女騎士二人とかなとで城内に戻り、旅で注意することなどを説明された。

女騎士の説明はとても解りやすく、時々笑うようなことも交えての説明だったので退屈することもなかった。
説明を聞いて、実践して解ったこととしては、この世界での旅は思ったよりも快適に過ごせそうかなって事だった。
お手洗い事情も簡易式結界印という特殊魔術のかかった魔道具のおかげで問題解決だった。
これが吃驚物でした。
簡易式結界印という形はなんだかブローチのような物に魔力を流して発動させると、自分を中心にトイレの個室くらいのサイズの空間が真っ白な壁に覆われる。
それは内側からも外側からも見えないような作りになっていた。
結界の中は、足元の真ん中だけ水が流れている仕組みになっていて（これは作っているところの企業秘密らしい）何を流しても、詰まったりしないとのこと。
何処からどこに流れていってるのやら……。
後は布なり何なりで拭いて洗って再度使うなり、紙で拭いて流すなり好みらしい。

ただし、紙のほうは布よりも高い金額のため、この世界では布で拭いて再利用するのが一般的らしい。

月のものも錬金魔術で生み出した特殊な布地で作られた下着で事足りるとのこと。

なんとも摩訶不思議だ。

特殊な布地は錬金の材料が公開されているため、錬金魔術が得意な人は自分の分は自分で作ったりもするらしい。

しかも、簡易式結界印も特殊な布地も繰り返し使用可能。

なんてエコですか?!

ちなみに、お風呂用の簡易式結界印なるものも存在するらしい。

お風呂用と言ってますが水浴びだけです。攻撃魔術が得意な人は水浴びの水をお湯に変えて使う人もいるらしい。

ちなみに、お風呂用のはちょっと大きめの風呂場サイズで三人くらいは一緒には入れそうな感じ?

三人はきついかも……。二人が限度かな?　まあ、その位ゆったり大きめサイズ。

他にも色々、女性ならではの視点からの旅の注意点など教えて貰った。

旅をすることに不安な私とかなの心も、少しだけ軽くなったんじゃないかな。

そんなこんなで、今日は旅の説明や用意だけで一日が終わった。
説明などを終えて部屋に戻ると、サティから今日の夜会にキャラバンが芸を披露しに参加すると教えてくれた。
キャラバンっていうと、昨日あったヴァンのところかな？
思い出すと……恥ずかしくて会いたくないと思った自分がいます。
でも、タニアには会ってかなを紹介できたら良いなとか思った。

かなは夜会に必ず出席するようにと、女王からの命令が下っているらしいが、私の方は護衛さえ付けていれば自由に行動して良いと命令が下っていたらしい。
それならば……夜会には出席したくはない！　と思ったのですが、キャラバンが芸を披露しに来ているってのには、かなり心惹かれます。
でも、マナーにお堅そうな夜会などには行きたくないしなぁ。
さあ、どうするかな？
「今日はあきちゃんも一緒に居てくれるよね？」
かなの拒否をしたら拗ねられそうな物言いに、出たくないけど夜会に出ることにしました。
まあ、夜会に出る食事でもマナー違反にならない程度につまむことにしよう。
出来れば隅っこのほうで！

今日は私もかなと一緒に夜会に出る事になった。
と言っても、別々に行動することになってるんですがね。
だって、私の存在を公に発表するわけにはいかないので、騎士見習いってことで参加させてもらうことになったからだ。
メイド見習いだとこき使われる可能性があるから、それはアキネ様に失礼になるかもしれないからと、サティが騎士見習いっていう

のを提案してくれた。
騎士見習いなら、メイドのようにこき使われることもそうそうないだろうと言う事でした。
確かに、夜会に参加するにあたって身分は大事なんでしょう。
きっと、多分！
この世界の身分制度なんて良く解りませんけどね！

そんな訳で、かなは異世界から来た『神銀の乙女』として華々しく愛らしいドレスに身を包み、私は比較的軽量の騎士が身につけている胸当てと肩当に篭手、それから帯剣をすることになった。もちろん、夜会の警護として失礼にあたらない程度の華美さはあるが。
……かなはまあ、パーティードレスで良いのですが、私は何……コスプレですか？
いや、思ったよりもかなり軽い素材なのか鎧を着けていても、ちょっと重い防寒具を着てる程度の重さにしか感じ無いため、息切れなどもしなくて済んだ。
……これってゲームとかだったら、防御とか低いのかな？
しかし、軽くって高性能って可能性も……！
帯剣はちょっと重いけど、バックと思えばイイんだ。多分。
ところで、この剣はなんて名前の種類になるんだろうか？　直刀の諸刃だから……。
とか、ゲーム脳な私の頭はどうでも良いことを考えたわけで。

「それじゃあ、かな。後でね」
「……うん。解った。後でね、あきちゃん。騎士見習いがどんなだったか教えてね」

「解った。かなも……楽しんできてね」
一緒に行って欲しそうな発言をしたってことは、もしかしたら何か嫌なことでもあったのかもしれないと邪推したので、楽しんでと言ってみることにした。
でもまあ、嫌なことはないだろう。
なにせかなは、この世界の救世主と成るべく異世界より呼ばれた『神銀の乙女』とか言うのなんだから。歓迎はされても、邪険にされることはないはずだし。

かなは先日と同じように、クラウのエスコートを受け、夜会の会場へと向かっていった。

私は護衛として（もしかしたら、監視も兼ねてるのかも知れないが）昼間お世話になった女騎士の二人がついてくれた。
女騎士の二人に気を使って貰いながら、私は夜会に参加させてもらうことになった。

第五十一話（後書き）

短い上にいまいち進んでない……。次こそは……。

第五十二話

夜会はとても華やかで、まるで御伽話のようだった。
綺羅びやかなドレスで着飾った貴婦人。
彼女たちをエスコートする紳士な男性達。
見た事もない様な御馳走の並んだテーブル。
そこかしこがとても綺麗で、豪華で、違和感だらけだった。

固定観念に近いかもしれないが、豪華な夜会の開かれる会場には、普通はレッドカーペットなるものがあるはずだが。
この夜会には赤い色が一切無い。
青や黄色、緑に紫。黒、白、ピンク。茶色に橙。
それなのに、赤色は一切無い。
ヴァンが赤色は「忌み色」だと言っていたが、ここに来てそれを実感する。

赤い色の一切使われていない、違和感のある夜会。
その中でかなは何を思ったのだろうか？
私は……ただ、この世界が違う世界なんだという認識を改めた位だった。

「美味しい……けど……。いまいち物足りない」
夜会に出ている料理を少しずつ、バイキングにあるような大きめの皿に盛ってテラスへ出た。

違和感を少なくするためか、護衛の二人も小さな皿に少しだけ取って持って出た。
テラスにある椅子に座って御馳走を頂いているのですが、味気なく感じる。
美味しいんだけど、なんだか美味しく感じない。
まあ、理由は言わずもがな。

かなとは一緒に居ることができず、一緒にいるのは護衛（多分監視も兼ねてるだろう）の女騎士二人。
特別人見知りというわけでもないが、共通の会話も見いだせない相手と長時間一緒にいるのは気疲れする。というか、疲れた。

私が夜会に出た理由なんて、かなのお願いとキャラバンの出し物に釣られたからなんだけど。
肝心のかなと一緒に居ることは出来ないし。
キャラバンの出し物もまだ暫く後らしい。
疲れた。暇。
もう帰ろうかな……。
これ食べたら部屋に帰るか……。
かなは別に怒ったりは……しないだろうし……？

私は味気ない食事を食べながら、ぼんやりとテラスから見える庭を見ていた。
以前迷ってたどり着いた中庭とは違う中庭。
あの時よりも大きく、綺麗に整備された中庭。

ってか、このお城。中庭どんだけあるんだよ！？

その中庭に、かなと……クラウが見えた。

夜だから見間違えかも、と思い視力の悪い目をを凝らして見る。

夜会に出る前に、一緒にかなと着替えをしたからなんとなく覚えている。

かなの着たドレスは、夜会にふさわしい華々しく愛らしいパーティードレス。

かなに良く映える淡い桜色のドレス。

私のいる場所からだと、二つの月に照らされて薄い黄色に見えるドレス。

映画に出てきそうな、詰襟の純白の布地に銀の刺繍の入った騎士の正装。

月の光を受け、クラウの白いマントがキラキラと反射する。

襟足まで伸びた茶色の髪も、光加減で金髪に見える。

かなの結い上げた髪も、クラウと同じように光加減で金色にも銀色にも見える。

月明かりの下、物語に出てくる姫と騎士のような、かなとクラウ。

映画やドラマのような光景。

クラウは小走りで先に行くかなの片手を掴んだ。
それにかなが何かを言って、イヤイヤするように頭を振った。
次の瞬間、これまたドラマのワンシーンのように、クラウがかなを引き寄せ、その腕にしまい込むようにかなを抱きしめた。
暫くして、かなもクラウの背中に腕を回し、二人で月明かりの下、抱き合っていた。

少しして、抱き合っていた二人は口づけを交わした。

……ってか、なんで見えるんだろうか？
月夜で明るく感じるからって、ここからだと校舎からグラウンド位の距離あるんじゃないのか？
それくらい遠かったら、私の視力じゃ解らないはずなんだが……？

そう私が思った瞬間、私の視界は一瞬にしてぼやけた。
ぼやけた、というのは語弊があるかもしれない。視力が元に戻ったと言うべきなのかもしれない。
それと同時に、体中の血が一気に駆け巡る。

意識せずに魔法でも使ってたのでしょうか？
でも、そんな魔法とか使えるわけないし……。
それとも、あんな光景を見て興奮でもしちゃったのでしょうか？

生であんなの見たの初めてだし。

でも、どうしましょうかね。
親友のラブシーンを見ちゃいました。
どんな顔して会えば良いのか……。

しかし、本当にドラマ見てるみたいだ……。

暫く遠くに見える二人の様子を、呆けたように眺めていた私に、護衛の二人が声をかけてきた。
「アキネ、そろそろキャラバンの出し物が始まるけど、どうする？」
一応私は、彼女たちの部下という立場で夜会に参加している。
そのため、彼女たちと私が会話していても不自然じゃないように、言葉遣いは上司と部下としての形式を取っている。
振り返って彼女たちを見ると、一人は夜会の会場を、一人は私の方を見ていた。
テラスに出るときに持って来た、彼女たちの皿の中身は綺麗になくなっていたけど。結構盛ってた気がするんだけど……それがなくなるくらいの時間が経過したのかな？
「あ、はい。見てみたいです。大丈夫でしょうか？」
不自然にならない程度に、背筋を伸ばして受け答えをする。
若干猫背気味なのですが、鎧のおかげでいつもよりかは姿勢は良いと思います。
「大丈夫。だから、その手に持っている料理を食べて行きますよ」
「はい」

私は彼女の言われたとおり、手に持っていた料理を急いで食べることにした。
現金なものです。
あれほど味気なく感じた食事も、目的がはっきりしたら美味しく感じるとは……。

食事に使った皿を使用済み皿置きに持って行き、徐々に人だかりが出来る場所に向かった。
広い会場に椅子が少数だけ並べられた。
彼女たちの話で、あの椅子は王族と『神銀の乙女』の為の椅子らしい。
ってことは他の人達は全員立ち見か。
足が痛くなりそうだけど、我慢出来るでしょ。

彼女たちに案内され、見やすそうな位置を確保した。
メイドの人も何人かは仕事を止め、見学場所を確保している子もいた。
誰も何も言わないところを見ると、これがこの夜会での常識（？）なんだろう。
でも、皆で楽しめるのは良いことだと思う。

並べられた椅子に王族や『神銀の乙女』たちが座ってから、キャラバンの代表者が何処からか出てきた。

椅子にはかなも座っていた。
かなは女王の横の席で、私の位置からではかながどんな表情をしているのかは見えなかった。
見たいような、見たくないような……。
私はかなと違って恋とかしたことはないから、もしかなが沈んでいたらなんと言って声をかけて良いのかさっぱりなのです。
恋愛ゲームなどで擬似恋愛を楽しんだ事とかはあるけれども、実際の恋なんて縁がなかったのです。

それはそうと、キャラバンの代表者として出てきた人は残念ながらヴァン達のキャラバンではなかったようで、見知らぬ人年配の女性が代表者として出てきた。
キャラバンの出し物はヴァン達と同じ演劇で、『神銀の乙女』と赤い忌み色の人の話だった。

この演劇でも、赤を纏った人は悪役として登場した。
赤を纏った人は男で、赤い男は異世界から来た『神銀の乙女』を誑かし、その生命を奪うという話だった。
所々で、女神が出てきて『神銀の乙女』に正気に返るように呼びかけるのだが、恋は盲目といったように、『神銀の乙女』はそれを聞かず、やがては赤い男に生命を奪われた。
そんな事があってから『神銀の乙女』を守るべくして、『神銀の騎士』が誕生したそうだ。

演劇も終わり、夜会が終わるまで、かなはずっとクラウと寄り添って夜会に参加していた。
それは見ただけでも、かながクラウに恋をしていると解りやすかった。
両想いのような二人の姿。

私はそれを見て、とても不安になった。

第五十三話

かなより先に部屋に戻った私は、かなとどんな顔して会えば良いのか解らなかったので、先に寝ることにした。
でも、こんな時に限って上手く寝付けない。
寝たくない時ほど眠いのに、寝ようと思ったら寝付けないとは…。

それでも、ベッドの中で目を瞑りながら今日あったことを思い出してみる。

こっちの世界に来て一日一日が濃密に感じる。
でも、きっとそれは慣れていないから。
その時その時にあることに精一杯で、一日が一週間にも一ヶ月にも感じるほどだ。
でも、まだこの世界に来て五日だ。
いや、もう五日というべきかも知れない。

五日も経つのに、私たちの居た世界に戻る術は一つしか発見していない。
それも、女神に元の世界に戻して貰うこと。
何処まで信用できるか解らないが、金色の人の言葉を信じるなら、女神は私たちを元の世界に戻すことは可能だけど、今まで返還したという事例は無いとのこと。
確実だと言った方法は、行方不明の神を探すこと。
行方不明の神とか、何の事だかさっぱりです。

さっさと私たちの居た元の世界に戻りたい。

だらだらと思案してても、なかなか眠気が訪れてくれません。
そうしている間に、かなが戻ってきた。
夜会が終わっただろう時間から考えると、遅い気もするが時計なんて無いので確認しようがない。
体感で遅く感じても、そんなに時間が経ってないこともあるんだし。

外はあれから曇ったのか、テラスで見た煌々と照っていた二つの月は、部屋を照らしてはいなかった。
薄く、暗い部屋に、かなは戻ってきた。

かなは私が寝てると思ったのか、声をかけることもなくベッドに潜り込んだ。
時折、鼻をすするような音が聞こえる。
声を殺して泣いているんじゃないかと、思うような音だった。

私は、かなに何て声をかけて良いのか解らず、ただその音を聞いていた。

翌朝、私より先に起きたかなは、洗面台で何かしていた。
私は洗面台の水の音で、目が覚めた。
「……おはよう、かな」
欠伸をしながら洗面台に居るだろう、かなに挨拶をした。
「お、おはよう。あきちゃん」
かなは振り返って挨拶を返してくれた。
その顔は水に濡れており、目元が少し腫れていた。
きっと、かなは目の腫れを冷やすために、洗面台に居たのだろう。
「かな……」
なんだか、胸が痛い。
親友と言ってくれたかなの力に、私はなれていない。
そう思うと、自分が情けなくて悔しい。
でも、かなが何に悩んでるのか察することは出来る。
その悩みに、恋愛経験なんてゼロな私じゃ力になることが……出来そうにない。
情け無い。

「ど、どうしたの、あきちゃん？」
精一杯の笑顔を作る、かな。
それがとても痛々しく感じる。
「かな。……あの……。その……な、何かあれば言ってね。私、

かなの力になるから！　何でも、言ってね」
かなが一瞬呆気に取られた表情をした後、私の言った事を理解したのか、頬を染めて微笑を浮かべた。
その微笑に私は見惚れた。
いや、私はノーマルですよ。
でも、見惚れるほど、かなの微笑み方は綺麗だった。
恋する乙女は美しいですね。はい。
「ありがとう、あきちゃん。何かあったら言うから聞いてね。あきちゃんも、何かあったら言ってね」
「うん、解った。……何かあったら言うから、その時は宜しくね」
なんだか漫画や小説なんかでありそうな遣り取り、実践するなんて……すっごい照れくさいな。
いやまあ、かなに頼ってもらえるかもって、かなり嬉しいけど。

『聖帝の祭日』とかいうのは、昨日の夜会で終わったらしい。
昨日と同じように朝食も済ませ、午前中は旅に必要な知識として、この世界の常識を学んだ。
今日はリディルが講師として解りやすく教えてくれた。
教えて貰ったこの世界の常識は、私たちの居た世界の常識とそう大差のない事柄だった。
午後はマリーンの魔法講座。
魔力を扱う上での注意事項などを、細々教えて貰った。
難しいところは、忘れそうな気もするが。

終わりの鐘が鳴る頃、クラウが迎えに来た。
クラウに案内されるまま、女王と謁見した玉座の間へと辿り着いた。

「急な事だとは思いますが、カナエ様たちには明日から、女神イシュタリアの力の欠片を探す旅に出て頂くことになりました。今日でやっと準備などが済みましたので」
私たちへの挨拶も簡潔に済ませた女王は、旅に出ろ宣言をしました。
いや、出ることは決定済みだったけど、本当に急だね。
「それで、旅の安全を図る上で、道中アキネ様にはカナエ様の従者として振舞って頂くことになります。カナエ様もそのおつもりで、アキネ様に接して下さい」
これは今日リディルの講義の終わりに説明された事だ。
だから、かなもすんなり「解りました」と答えた。
まあ、慣れるまでは大変だろうけど頑張っていこう。
「カナエ様、アキネ様。異世界人である貴方がたにとっては、迷惑でしか無い事かもしれませんが、どうかこの世界を宜しくお願い致します」
女王は人目を憚る事無く、玉座から降り私たちの前まで来て、私たちに対して騎士の礼を取った。
跪き頭を垂れ、私たちに「お願い」をしてきた。
これにかなは少しだけ狼狽した後、意を決して女王の「お願い」を聞き入れた。
「解りました。出来る限り頑張ります」
女王はかなの言葉を聞くと、頭をあげ、跪いたまま、笑顔を浮かべた。

そして、女王はまだ答えていなかった私の方を笑顔のまま見た。
はい、笑顔が怖いです女王様。
内心冷や汗をかきながら、私もかなと同じように頷いた。
「ありがとうございます。カナエ様、アキネ様」
微笑みながら言って下さった女王様、後ろに何か黒いものが見えそうです。

女王からの諸注意などを受けた後、夜ご飯となった。
夜は昨日とは違い、個室で気兼ねなく食事ができるようにと、配膳するメイドもサティだけだった。

夜ご飯が終わり、お風呂に入り、私とかなは明日の出発に備え寝ることになった。
良くも悪くもこの世界での時間が進んでいる。

特にかなから話があるわけでもなく、金色の人が現れるでもなく、陰口を聞くわけでもなく。スニクス国の王城での最後の夜を過ごした。

第五十三話（後書き）

遅くなりました。しかも内容少ない。

第五十四話

何か夢をみた気がするが、起きたときには覚えていない。
こちらの世界に来て、毎日のように夢を見ている気がする。
慣れない生活で精神は疲弊してると思うのだが、熟睡出来てないのだろう。
だから夢をみる。
夢と言うには、あまりにも現実味があるような夢を。

起きる時、そんなことを思いながら、目を開けた。

この世界に来て、一週間目のこの日。
女神の力の欠片集めの旅に出る日。
スニクス国を離れる日。

「あきちゃん、おはよう」
私が起きたのに気づいたかなが挨拶をくれた。
「おはよう、かな。昨日は良く眠れた？」

昨日の朝のかなは、泣き腫らした目を冷やしてたからね。
「うん。昨日はぐっすり眠れたよ」
「そう。良かった。今日は大変だと思うけど、頑張ろうね」
「うん！」
かなはこっちまで元気になりそうな笑顔で返事をくれた。
やっぱりかなには笑顔が似合う。

支度が終わった頃、ドアがノックされ迎えの『神銀の騎士』の三人が来た。
「おはようございます、カナエ様。アキネさん。朝食の後、陛下とお会いしたのち出発になります」
リディルが二人の前に立ち、私たちを促した。

リディルに案内されるまま、個室で朝食をとった後、衣装部屋へと向かった。
衣装部屋の前にサティが居て、今日着る服を用意していてくれた。
用意されていた服は二つあった。
一つは女王との謁見用の服。
もう一つは、謁見の後。旅の時用の動きやすく丈夫な服だった。

女王との謁見は何事もなく、ＲＰＧとかでお決まりのような「旅

立つ勇者へ贈る言葉」だった。
いや、確かに格式的に要るのかもしれないけど……。
それが終わって、また着替えて出発となった。

「カナエ様、アキネ様。短い間でしたが、お仕えすることが出来て本当に嬉しかったです。どうか道中お気をつけて下さい」
見送りは少人数だけだった。
この世界に来て、スニクス国で関わった人たちだけ。
大々的にしないのには、過去に異世界から来た『神銀の乙女』が襲われたことが起因している。
見送りに来てくれてる人は、サティと娘のマリーン。それと王子のエル。『神銀の乙女』の一人（私は話したこと無いので名前も知りませんけど）。
その四人だけだった。
サティの息子のフィンは来ていなかった。

正直、フィンが来ていなくてホッとした。
どんな顔して会えば良いのか解らない。というか、会いたくない。

「こちらこそ、短い間でしたがお世話になりました。皆さんも、体に気をつけて」
私が先日の嫌な事を思い出している間に、かなが見送りに来てく

れた人達に挨拶をしていた。
かなが頭を下げているのに気づいて、私も慌てて頭を下げる。
「ありがとうございました」
つい出た言葉は、これだった。
お世話になったことなど諸々含めて、感謝の念を。
もっとも、この世界に来てしまった事を感謝することはきっと無いけれど。

頭を上げたかなは、何かに躊躇った後、言葉に出した。
「それじゃあ、皆さん。さようなら」
かなは「行って来ます」なんて言葉じゃなく、「さようなら」と言った。
私はそれに少し嬉しさを感じた。
かながなんだか立派に見えます。
私の精神年齢が子供なだけかしら？
かなもこの世界と「さようなら」して、早く元の世界に戻りたいと思っていてくれると、そう思うとやっぱり独りじゃないって気がして嬉しかった。
少し不安だった。
かなとクラウの関係が進んだら、かながこの世界に残るとか言うんじゃないかと。
まだ、それはないって思うと、安心した。
「……カナエ様、アキネ様。お気をつけて、いってらっしゃいませ。……さようなら」
サティが代表で返事をしてくれた。
かなが言った言葉を無視すること無く、同じように「さようなら」と返してくれた。
ただ、サティは「さようなら」と言う時、少しだけ寂しそうではあったが。

かなも、私も頭を下げ、移動に使う馬車に乗り込んだ。
旅に必要な荷物などは、サティたちが考えて決めて用意してくれたものが馬車に乗せてあった。

先日乗った乗合馬車とは、また違った形の馬車だった。
馬車は幌付きの荷馬車のようだった。
馬が二頭立ての四輪馬車。意外としっかりした作りの様子。とても頑丈そうです。
荷台の中にはクッションのようなものが敷き詰めてあり、片側に旅に必要な道具などが入った木箱や布袋などが置かれてあった。荷物は転がったりしないように、紐で荷台にくくりつけられていた。
荷台の中は荷物が多く、一畳ほどの広さがあった。
「馬車って、こんな風になってるんだね。私初めて乗る」
先に乗ったかなが、クッションの上に座りながら楽しそうに言った。
私もかなに続いて、荷台の後ろから上り馬車に乗った。
足元がクッションで覆われているため、私もかなも荷台に上がってすぐに靴を脱いだ。
安定感はないけれど、緩衝材にはよさそうだった。
「私は先日城下町の帰りに乗合馬車に乗ったよ。これとは違って左右に椅子があって座れるのだったけど。……思った以上にお尻が痛くなりましたよ。筋肉痛だったのに」
「あらら……大丈夫？」
かなが心配そうに聞いてきた。
「うん、もう大丈夫。筋肉痛も治ってるし、全然問題無いよ」

「そっか、良かった」
私が軽快に笑うと、かなも安心したのかにっこりと微笑んだ。

「それでは出発します。少し揺れますので気をつけて下さい」
馬車の外から幌を捲ってリディルが話しかけてきた。
「はい」
かなが返事をして、私は頷くだけだった。
リディルの言うとおり、少しして馬車は歩き出した。
御者にリディル。フーガとクラウは各々愛馬に跨り、クラウが馬車の前を、フーガが馬車の後ろといった隊列だった。
リディルの愛馬は馬車に繋がれて引かれていく。
どうやらルー（リディルの愛馬）は軍馬なので馬車を引くことはしないらしい。それか、リディルが嫌がったのかどっちかでしょう。

ガラガラガラガラ。
慣れてくると耳に心地よい音に感じる、車輪の音。
まるでそう、電車のあの揺れみたいに。
意外と振動もクッションで心地よい揺れだし、眠くなりそうです。
まだ出発したばかりなので、馬車が通っている道は舗装されている道だから良いが、舗装されていない道になるとどうなることか、少し不安ですね。
舗装されてない道だと音も振動も、もっと酷い事になるだろうからね。

先日行った城下町の方向とは違う方向に進んでいるから、違う街に行くんだと思う。
ってそりゃそうか。
私がこの世界で行ったことがある場所なんて、片手で数える程度だしね。
田舎の方は上下水とか舗装とかどうなってるんだろう、とか考えたくもない気がします。
好奇心半分、恐ろしさ半分ですね。
……肥溜めとかあるのかな？

「あきちゃん、大丈夫？」
「へ？何が？」
リディルが出発して少しして、幌を中ほどまで上げて外の景色を見えるようにしてくれた。
私とかなは馬車から見える、ゆっくり流れる景色を見ながら揺られていた。
「なんだか、眠そう……？」
「う……。まあ、眠くないと言ったら嘘になるかなぁ……。だって、心地よい揺れだし」
私がそう答えると、かなも揺れを味わうように少しの間黙った。
「……うん、確かに眠くなるような揺れだね」
そして、懐かしむような笑顔で答えた。

出発してから二時間位して、休憩がてらの昼食を入れることになった。
流石に私もかなも、することのない馬車の中が飽き飽きしてきたとこなので嬉しかった。
現代だと本や携帯、携帯ゲーム機、音楽プレイヤーなど時間を潰す道具は溢れるほどある。
そんな生活に慣れた私とかなは、すること無く座っているのが結構大変で、かといって心地よい揺れだったが眠れた訳でもなかった。
元々、私もかなもお喋りをすると言っても、長時間ずっとだらだらと喋るのは苦手で、二人でいる時沈黙の時間も多かったりした。
出発して三十分位はあれはどうだとか会話が続いたが、話題が無くなると自然と口数は少なくなっていった。
後は流れる風景を見ることしか無くて、暇でした。
休憩はありがたかたです！
ついでにお腹も少し減っていたので嬉しいです。

「カナエ様、アキネさん。馬車での旅はお暇のようですから一つ私から提案があります」
軽い食事とお茶を飲んでいた私とかなに、リディルが話しかけてきた。
「道中、この世界の事や魔法の勉強するのは如何でしょうか？」
「馬車の中で勉強ですか？」
リディルの提案にかなが質問する。
確かに、あの程度の揺れなら口頭での勉強ならいけるかもしれないね。
「ええ、そうです。馬車の中なので文字などを見ていたら乗り物酔いをするかもしれませんので、口頭での説明になりますが、解りに

くいところは休憩の時や宿についた時に追って説明する感じで行こうと思います」

って、リディルの説明だと勉強する事前提になってませんか？！

「どうでしょうか？」

にこやかに笑顔で聞いてくるリディルですが、その笑顔なんだか「断る事は許しませんよ」って言ってる気がします。

私はかなの方を向いて、かなの表情を伺おうとした。

かなも私の方を向いていた。

かなも私と同じように「どうする？」って思ったらしい。

確かに馬車での移動、何もすること無いのは暇で仕方ないし、この世界の事はまだ触り程度にしか教えてもらえてないと思うので、勉強は必要だと思う。

それに、魔法の勉強はしたい。とても。

だから、私が頷くとかなは解ってくれたのか、かなも頷き返してくれた。

「解りました。リディルさんお願い致します」

「宜しくお願いします」

かなと私はリディルに頭を下げた。

リディルは嬉しそうな、子供を慈しむような笑顔で言った。

「はい、宜しくお願いします。解らない事はちゃんと聞いてくださいね」

といった感じに、私とかなの馬車の旅は勉強をしなくてはいけなくなりました。

「後二時間ほどで今日泊まる街に着きます。勉強は明日からということで、今日はゆっくり馬車に揺られて下さい」

リディルがそう言い終えて、さっさと馬車の整備に行ってしまった。

私とかなの食事が終わって、また馬車での移動となった。

後二時間で、街につくらしい。
どんな街か結構気になります。
日はまだ高いから、おやつ時くらいに街に着くのだろう。
だったら、街を散策したりすることも可能かもしれない。
楽しみですね。
なんか、可愛いのとか面白いのとか見るのは好きです。

そんな風に私は今日泊まる街に思いを馳せながら、ゆっくりと馬車に揺られていた。
二時間程でリディルの言った通り、馬車は街へと着いた。

第五十四話（後書き）

物凄く更新が遅くなりました。申し訳ありません。
そして主人公たちがやっと旅に出ました。これからも宜しくお願いします。

第五十五話

「城下街並に大きい街ね」
今日私達が泊まる街に着いて、街を見た私の感想。
街は先日行った城下街のように大きく、活気にあふれていた。
城下街と違うのは、城下街ほど舗装された道は広くはなく、舗装された道に面した建物はどれもお店のようだった。奥にも建物は見えるので、多分それが居住なのだろう。
「城下街もこんな風に大きな街だったの？」
かなも着いて辺りを見回した後、私に聞いてきた。
「ええ、そうです。この街はスニクス国で二番目に大きな街です。そして、城下街が一番大きな街です。ですから逸れたりしないように、その……」
クラウが横から会話に入ってきて、解説をしてくれた。
最後の方は、真っ赤になりながら言おうかどうしようか迷ってる感じだった。
なんとなく何を言いたいのか解ったけど、助け舟は出す気はない。
だって私は、かなとクラウが仲良くなって、かながこの世界に残るなど言い出したりしないか、不安だったりする訳で。
「かな、手、繋がない？　私この間、城下街で一緒に行ってくれた人と逸れちゃってさぁ」
かなは少し驚いた後、楽しそうな笑顔で「いいよ」って言って手を繋いでくれた。
なんだか、クラウに勝ち誇った気分です。
でも、それに水をさされました。
「アキネさん、申し訳ないがそれはクラウに譲ってくれないかな？君は今カナエ様とは主従関係にあるって設定になるから、主人と従者が手を繋いで歩くのは変だからね」
おのれ、リディルめ！

悔しいじゃないか……。
しょんぼりです。
でも、大人しく指示に従い、かなの手を離します。
レズとかじゃないから、かなに触れていたいとかそういうのは無いし。

しょげる私とは対照的に、クラウは顔を真赤にしながら心なしか嬉しそうに、かなの手を取った。
かなは俯きがちになり、頬を染めながらクラウの手を握った。
私はそれに、二人に気付かれないように溜息を吐くばかりでしたっと。

「アキネさんは……クラウがお嫌いなのですか？」
今日泊まる宿で、寝間着と明日着る服を探していたら、後ろからリディルに声をかけられた。
男女一緒の部屋は良くないだろうって事で、男性用と女性用の二部屋借りることになった。
もっとも、彼らの仕事はかなの護衛があるのでちょくちょく出入りするのだろうけど……。
居座られるよりかは良いと思おう。
リディルの問いはスルーすることにする。
答える義理はないだろうし。

というか、好きか嫌いかのどちらかしか選べないなら、嫌いを選ぶからね、私。

ところで、リディル入ってくる時ノックしたっけ？

一応ドアは閉めてた気がするんだけど？

「……リディルさん、ここ女部屋ですよ？」

「出かける用意が整ったので、呼びに来たんですよ」

「出かける……何処にですか？」

仕方がなかったので、服探しを中断して無様にならない程度にさっと片付けることにした。

用意が整ったということは、皆を待たせているという事だから。

部屋を施錠して、大事なものだけ宿に預けるつもりで持って、リディルについて行った。

「今からカナエ様とクラウ、それと私で神殿に行って参ります。その間にアキネさんにはフーガと一緒に買物をしてきて欲しいのです」

「私は、神殿には一緒に行かなくても良いのですか？」

今日泊まる宿は木造の二階建て。その二階の部屋を割り当てられた。

年代物なのか、廊下を歩くたびにギィギィと鳴くので少しだけ床が抜けないか怖かったりする。

ギィギィ鳴く廊下をリディルと二人で歩く。

少し前を歩くリディルが私の方を向き、少し苦笑して言った。

「神殿自体はアキネさんも行けるのですが、用事がある場所が『神銀の乙女』や『神銀の騎士』しか入れない場所なので、一緒についてきても一般の方々が入れる場所までしかアキネさんは入れないの

ですよ」
「なるほど。それで買い物を任せることにしたんですね。私は……」
一人で行けますと言いかけて、止めた。
監視の必要性は無くなったとは思うけど、護衛しないといけないのは変わらないはずだから。
多分、一人で行けるとか言っても、一人で行かせてもらえないのが予想できる。
あーだこーだと言って、結局言い含められて一人では行かせてもらえない、きっと。
「……いえ、フーガさんは神殿には行かなくても良いのですか？」
「フーガは……神殿嫌いなので。ですから、アキネさんと買い物に行かせる方が都合が良いのです」
『神銀の騎士』なのに神殿嫌いなの？
それで務まるの？
ってか何で嫌いなんだろうか？
「えっと……？」
「まあ、その先の事情は本人に聞いて下さい。私が勝手に喋って良いことでもないでしょうから」
確かにリディルの言うとおりだろう。
気になるからと言って、根掘り葉掘り聞いていいものでもないだろうし。
フーガと二人になって聞く機会があって、尚且つ覚えていたら聞いて見ることにしますかね。
「では、これをお願いしますね」
そう言って、リディルはポケットから紙切れを取り出した。
取り出した紙切れを渡され、それを見た。

「それじゃあ、かな……え様。お気をつけていってらっしゃいませ？」

公衆の面前なので、かなと主従関係という設定を忘れかけて、いつも通りの言葉遣いをしそうでした。

気づけたのは、かなの後ろに立っていたリディルが文句を言いたそうに冷たい視線をしていたからだ。

どうせ、忘れてましたよ……。

「え、えっと……行って来ます。あき……ね……も気をつけて」

かなも察してくれたのか、しどろもどろながら応えてくれた。

「参りましょうか、カナエ様」

そう言って、クラウはかなの手を取り、外へと向かう。

リディルが先に外に出て、ドアを開けて待っていた。

かなたちを見送って、私達も頼まれた物を買いに行くことにした。

残されたフーガを見上げながら、気付かれない程度の小さな溜息が出た。

「私達も行きますか。書かれている物は……」

言いながら、私はリディルに渡されたメモを確認する。

そこに書かれていたものは、この世界で言うところの大学ノート

のようなものだった。
筆記用具のようなものに、これはなんだろうか……？
名前が聞いた事がないような物が書いてある。
「あの、これ何か教えて下さい」
フーガにメモを見せながら、名前が解らないのを指して、これが解らないのだと教える。
「これは……酔い止め、だろう」
「酔い止め……ですか。ああ、そうか馬車の中で勉強する予定だから、馬車酔いしないようにか」
「そうだろうな」
確かに、自動車の中などで文字を読んだりしてたら気分が悪くなったりするからね。
「フーガさん、何処に売ってあるか解りますか？」
「おそらく」
「まあ、解らなくなったら人に聞きましょう。行きましょう」
「ああ」
なんだか、一人で喋ってる気分になります。
返事はしっかりしてくれるのですが、単語です。
まあ、仕方ないか。
返事がないよりは良いと思おう。

フーガに案内されるまま、一軒の店の前にたどり着いた。
店のショーウィンドウには○○が一割引とか書いてある黒板しかなく、何の店かショーウィンドウではいまいち判断がつきにくかった。
店の中からは何か口論でもしているのか、あーだこーだと聞こえてきます。
どうやら何の店か解りませんが、お客さんがいるようです。
「ここですか？」
「ああ」
そう言って、フーガはさっさとお店のドアを開けて入ってしまった。
花やらリボンやらで可愛らしく装飾された看板が堂々と店の前に飾ってあった。
もし現代の男性とかだったら入るのに躊躇するじゃないかって位、ファンシーな看板です。
でも、そんなのお構いなしにフーガは店にさっさと入っちゃいましたよ！
もしかして、この世界でこんな看板って当たり前……なわけないか。
城下街じゃあまり見かけなかった気がするし。
本当にここ、何の店なんだろうか？

それはそうと、置いてけぼりも困るので私も店に入ることにした。
幸い、フーガがドアを開いたままにしてくれていたから。
ってか、フーガに入らないのかって目で見られてました。
「すいません」
「……？」
お待たせしました的に謝罪の言葉を口にするものの、フーガには全く伝わってなかったみたいです。

なんだろう、日本人特有の感覚なんだろうか？
それとも私だけなんでしょうか？

店の中は看板からは想像できないほど整然としていて、名札のついた引き出しが沢山並んでいた。
看板についていたような可愛らしい装飾は一切無く、引き出しの上には鉛筆のような物や文鎮のような物が並べてあった。
どうやら此処は文房具店のようなものらしい。
なのにあんなファンシーな看板。
理解し難いです。

店の外にまで聞こえていた声から、先にお客さんが居るの解ってました。
口論でもしていたのでしょうけど、私達が店に入ってから全然声が聞こえないので、話を中断させたのかもしれませんね。
なんだか、お邪魔して悪い気もしますが、私達もお客なのだから、いいかな。
店をキョロキョロと見回していた私の目に、その客人の姿と店主だろう人の姿が入りました。

店主は愛想よく「いらっしゃい」って言ってくれました。
でも、その店主の前に居た客人が話は終わったのか出入り口に近づいて来てます。
私は今、ドアのところに居ます。
邪魔になるだろうと横に避けようと、店の中に入ってドアから少し離れたところに避難しましたが、目の前に客人が居ました。
どうやら、私の勘違いらしい。

客人が用があったのは、出入り口ではなく私だったらしい。
客人の方が背が高く、男性で、上から見下ろしている切れ長の黒目が印象的で……？
私、なんだか睨みつけられてませんか？

切れ長の目が、睨みつけるように私を見ていました。

……逃げても良いでしょうか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6383j/

おまけのおまけ

2011年12月13日01時59分発行